

—茨城県土浦市—

下坂田塙台遺跡 坂田塙台古墳群

— 県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型） —

坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書



2013

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi

—茨城県土浦市—

下坂田塙台遺跡 坂田塙台古墳群

— 県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）

坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi

序

土浦市は、霞ヶ浦や桜川など豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には、集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの重要な任務であり、また、郷土の発展のために大切なことであります。

この度、上坂田地区と下坂田地区において大規模な畑地帯総合整備事業が計画され、昨年度は下坂田塙台遺跡と坂田塙台古墳群の記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

土浦市教育委員会
教育長 井坂 隆

例 言

1. 本書は茨城県土浦市下坂田1050番地ほかに位置する下坂田埜台遺跡・坂田埜台古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi（以下、勾玉工房と表記）が実施した。
3. 発掘調査面積は1,800 m²である。
4. 発掘調査は平成23年12月13日から平成24年2月28日まで実施した。また、出土遺物の整理作業及び報告書の作成は、平成24年10月5日から開始し、平成25年3月8日まで実施した。
5. 発掘調査は大越直樹（勾玉工房 調査研究員）が担当し、整理作業及び報告書作成は、大越のほか、大賀 健・大賀さつき・鈴木 徹が担当した。
6. 発掘調査の参加者は次のとおりである。（敬称略）
露久保三郎 岡田 春 沼田久雄 鈴木利勝 柿崎 昇 豊崎利司 滝田一徳 森永典昭 植木昭子
高畑仁子 糸賀文子 佐賀 実 小池一司 岡田正光 桂木郁夫 草野敏男 濱田 明 福田範幸
小林和代 青木敏雄
7. 整理作業は勾玉工房において行い、参加者は次のとおりである。
遺物基礎整理作業 根本時子 篠原みよ子 石津弘子 佐藤政代
遺物実測作業 大賀さつき 大越直樹 阿天坊弥生 小川美山紀 森 優里絵 高橋歩美
デジタル編集 森 優里絵 高橋歩美 齋庭紀子 岩崎美奈子
事務・経理 石橋明子
8. 本書に用いた遺構写真は、大越が、遺物写真は、大越・高橋が撮影した。
9. 本書は比毛君男・大越・大賀 健・大賀さつき・鈴木が次のとおり分担執筆した。編集は土浦市教育委員会の指導のもと、大越・鈴木・森が行った。
第1章……………比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場 学芸員）
第2・3章・第4章遺構……………大越直樹（勾玉工房 調査研究員）
第4章 第2・3節遺物・遺物観察表（埴輪以外）……………大賀 健（勾玉工房 代表取締役）
第5章 第3節……………大賀 健・大賀さつき（勾玉工房 取締役）
第4章 第1・4～7節遺物・遺物観察表（埴輪）・第5章 第1・2節……………鈴木 徹（勾玉工房 調査研究員）
10. 本調査に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場（土浦市立考古資料館）が保管している。
11. 発掘調査から報告書の作成に当たり、次の方々にご協力いただいた。また、出土人骨の鑑定は、国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授に依頼した。ご芳名を記して感謝の意を表します。（敬称略）
秋元陽光 石橋 充 大木 努 小澤重雄 折原洋一 忽那敬三 斉藤 新 田中 裕 長井正欣
萩原恭一 土生朗治 日高 慎 古谷 毅 本田信之 松田政基 茨城県教育庁文化課
茨城県県南農林事務所 土浦市産業部耕地課 坂田地区県営畑地帯総合土地改良事業実施協議会
豊藤建設株式会社 戸田測量

凡 例

1. 第1図は国土地理院発行5万分の1地形図「上浦」、第2図は同2万5千分の1地形図「常陸藤沢」を用いた。
2. 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を使用している。全体図・遺構図の方位は座標北を示す。
3. 本書における方位の記述は、便宜的に調査区1・3区は南北、2・4区は東西に調査区長軸を向けた状態で行っている。
4. 堆積土層及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産省農林水産技術会協議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）を用いた。
5. 標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
6. 掲載した図面は以下の縮尺で表した。

調査区全体図	1/500	各地区全体図	1/250
遺構図	住居跡・掘立柱建物跡・		遺物図	縄文・弥生土器・	
	土坑・ピット・溝跡	土製品・石製品	1/3
	カマド	土師器・須恵器・埴輪・		
	溝跡のうち SD03・04・11	灰釉陶器・土師質土器	1/4
	8号墳	石器・鉄製品	1/2

なお、変則的な縮尺を用いた場合には、個別にその倍率を示した。

7. 遺物図における拓本の配置は、縄文・弥生土器が左から外面（・断面）・内面、土師器・須恵器・埴輪が左から外面・内面（・断面）の順である。
8. 遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。
9. 掲載図中のスクリーンパターン及び記号は、以下に示すとおりである。

遺構図	 火床面	 焼土	 炭化材	 貝層	
	 カマド袖	 硬化面範囲			
遺物図	 縄文土器断面	 須恵器断面	 黒色処理	 赤彩	
遺物出土状況図	 ○…土器	 ☆…土製品	 □…石器・石製品	 △…鉄製品	 ●…未掲載遺物

10. 遺物の注記に用いた略号は以下のとおりである。
 遺跡名：SSH 住居跡：SI 掘立柱建物跡：SB 掘立柱壁・槽跡：SA 土坑：SK ピット：P 溝跡：SD
 攪乱：K トレンチ：Tr
11. 遺構番号について次に掲げるもの土坑とピットは、本書における表記を次のとおり振り替えた後に欠番とした。
 SK01 → SI04、SK09 → SB01-P1、SK10 → SB01-P2、SK11 → SB01-P3、SK12 → SB01-P4、SK18 → SB03-P1、
 SK19 → SB02-P7、SK20 → SB02-P8、SK21 → SB02-P6、SK22 → SB02-P3、SK23 → SB03-P4、SK27・28 → 風倒木、
 P01 → SB03-P3、P02 → SB03-P2
12. 遺物観察表の法量単位は cm、重量単位は g である。法量値に付した（ ）は復元値、〈 〉は残存値を示す。
13. 出土遺物の修復にはセメダイン C 及び樹脂材のエポキシレジン 6113 を用いた。

本文目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の位置と環境	2
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	4
第3章	調査の方法と標準堆積土層	7
第1節	調査方法	7
第2節	標準堆積土層	8
第4章	検出された遺構と遺物	9
第1節	調査成果の概要	9
第2節	縄文時代	16
第1項	住居跡	17
第2項	土坑（貝層含む）	18
第3項	遺構外出土遺物	20
第3節	弥生時代	24
第1項	住居跡	25
第2項	遺構外出土遺物	26
第4節	古墳時代	28
第1項	住居跡	29
第2項	ピット	40
第3項	溝跡	41
第4項	古墳	45
第5項	遺構外出土遺物	66
第5節	平安時代	73
第1項	住居跡	74
第2項	掘立柱建物跡	90
第3項	土坑	94
第4項	ピット	96
第5項	溝跡	96
第6項	遺構外出土遺物	100
第6節	中・近世	101
第1項	方形堅穴遺構	102
第2項	掘立柱建物跡	103
第3項	柵・掘立柱跡	104
第4項	土坑	105
第5項	ピット	106
第6項	溝跡	107
第7項	サク状遺構（畑跡）	108
第8項	遺構外出土遺物	108
第7節	時期不明の遺構	109
第1項	土坑	109
第5章	まとめ	111
第1節	下坂田埧台遺跡の変遷と歴史的位置	111
第2節	坂田埧台8号墳出土埧輪について	114
第3節	叩き手法を用いる「常総型甕」についての一考察	121

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺図	2	第 38 図	ST18	39
第 2 図	周辺の遺跡	3	第 39 図	P16	40
第 3 図	標準堆積上層	8	第 40 図	P16 出土遺物	40
第 4 図	試掘確認調査出土遺物	10	第 41 図	SD05	41
第 5 図	調査区全体図	(折図 1)	第 42 図	SD05 出土遺物	41
第 6 図	1 区全体図	11	第 43 図	SD06	42
第 7 図	2 区全体図	13	第 44 図	SD06 出土遺物	42
第 8 図	3 区全体図	14	第 45 図	SD07・08	43
第 9 図	4 区全体図	15	第 46 図	SD07 出土遺物	43
第 10 図	縄文時代遺構分布図	16	第 47 図	SD14	44
第 11 図	SI04	17	第 48 図	SD14 出土遺物	44
第 12 図	SI04 出土遺物	18	第 49 図	坂田塚台 8 号墳 (SD01・02)	(折図 2)
第 13 図	SK02	19	第 50 図	8 号墳調査区小グリッド	
第 14 図	SK02 出土遺物	19		及び埴輪出土分布図	15
第 15 図	SK02 貝類組成	20	第 51 図	8 号墳出土埴輪 A 類 (1)	48
第 16 図	遺構外出土遺物 (縄文・土器)	22	第 52 図	8 号墳出土埴輪 A 類 (2)	49
第 17 図	遺構外出土遺物 (縄文・土器・土製品)	23	第 53 図	8 号墳出土埴輪 B 類	51
第 18 図	遺構外出土遺物 (縄文・石器)	23	第 54 図	8 号墳出土埴輪 C 類	53
第 19 図	弥生時代遺構分布図	24	第 55 図	8 号墳出土埴輪 D 類 (1)	55
第 20 図	SI01	25	第 56 図	8 号墳出土埴輪 D 類 (2)	56
第 21 図	SI01 出土遺物	25	第 57 図	8 号墳出土埴輪 E 類 (1)	58
第 22 図	SI16 出土遺物	26	第 58 図	8 号墳出土埴輪 E 類 (2)・F 類	59
第 23 図	遺構外出土遺物 (弥生)	27	第 59 図	8 号墳出土埴輪 G 類	61
第 24 図	古墳時代遺構分布図	28	第 60 図	8 号墳出土遺物	61
第 25 図	SI03	29	第 61 図	14 号墳	62
第 26 図	SI03 出土遺物	30	第 62 図	14 号墳出土遺物	63
第 27 図	SI05	31	第 63 図	15 号墳	64
第 28 図	SI05 出土遺物	32	第 64 図	15 号墳出土遺物	65
第 29 図	SI06	33	第 65 図	遺構外出土遺物 (古墳 1)	66
第 30 図	SI06 カマド	34	第 66 図	遺構外出土遺物 (古墳 2)	67
第 31 図	SI06 出土遺物	34	第 67 図	平安時代遺構分布図	73
第 32 図	SI11	36	第 68 図	SI02	74
第 33 図	SI11 出土遺物	36	第 69 図	SI02 出土遺物 (1)	75
第 34 図	SI14	37	第 70 図	SI02 出土遺物 (2)	76
第 35 図	SI14 出土遺物	38	第 71 図	SI07	77
第 36 図	SI15	38	第 72 図	SI07 カマド	77
第 37 図	SI15 出土遺物	39	第 73 図	SI07 出土遺物	78

第74図	SI08	79	第113図	SK37	106
第75図	SI08 出土遺物 (1)	80	第114図	SD03・SD04・サク状遺構 (南半部)	107
第76図	SI08 出土遺物 (2)	81	第115図	SD12	108
第77図	SI09・SI13	83	第116図	遺構外出土遺物 (中・近世)	108
第78図	SI09 カマド	83	第117図	SK06	109
第79図	SI09 出土遺物	84	第118図	SK07	109
第80図	SI10	85	第119図	SK25	109
第81図	SI10 カマド	86	第120図	SK29	109
第82図	SI10 出土遺物	86	第121図	SK30	110
第83図	SI12	87	第122図	SK33	110
第84図	SI12 カマド	88	第123図	SK34	110
第85図	SI12 出土遺物	88	第124図	SK39	110
第86図	SI13 出土遺物	88	第125図	坂田塚台古墳群	112
第87図	SI17	89	第126図	坂田塚台8号墳 円筒埴輪	
第88図	SI17 出土遺物	89		同工品各類型の器形	115
第89図	SB01	90	第127図	霞ヶ浦北西部のIV群系埴輪	117
第90図	SB01 出土遺物	90	第128図	「有文埴輪」の類例	119
第91図	SB02	91	第129図	下坂田塚台遺跡出土の	
第92図	SB03 出土遺物	92		「常総型甕」と供伴遺物	123
第93図	SB03	93	第130図	叩き手法を用いる「常総型甕」(1)	125
第94図	SK03・04	94	第131図	叩き手法を用いる「常総型甕」(2)	126
第95図	SK08	94	第132図	叩き手法を用いる「常総型甕」(3)	127
第96図	SK13	94	第133図	叩き手法を用いる「常総型甕」(4)	128
第97図	SK14	95			
第98図	SK14 出土遺物	95			
第99図	ピット	96			
第100図	SD08 出土遺物	97			
第101図	SD11	98			
第102図	SD11 出土遺物	99			
第103図	遺構外出土遺物 (平安)	100			
第104図	中・近世遺構分布図	101			
第105図	SI19	102			
第106図	SI19 出土遺物	102			
第107図	SB04	103			
第108図	SA01・02	104			
第109図	SK31	105			
第110図	SK32	105			
第111図	SK35・36	106			
第112図	SK37 出土遺物	106			

表 目 次

第 1 表 周辺の遺跡……………3	第 25 表 埴輪属性表 (遺構外)……………72
第 2 表 SK02 貝類組成……………20	第 26 表 SI02 出土遺物観察表……………76
第 3 表 ST03 出土遺物観察表……………30	第 27 表 SI07 出土遺物観察表 (1)……………77
第 4 表 ST05 出土遺物観察表 (1)……………32	第 28 表 SI07 出土遺物観察表 (2)……………78
第 5 表 ST05 出土遺物観察表 (2)……………33	第 29 表 SI08 出土遺物観察表 (1)……………82
第 6 表 SI06 出土遺物観察表……………35	第 30 表 SI08 出土遺物観察表 (2)……………83
第 7 表 SI11 出土遺物観察表……………36	第 31 表 SI09 出土遺物観察表……………85
第 8 表 SI14 出土遺物観察表……………38	第 32 表 SI10 出土遺物観察表……………87
第 9 表 SI15 出土遺物観察表……………39	第 33 表 SI12 出土遺物観察表……………88
第 10 表 P16 出土遺物……………40	第 34 表 SI13 出土遺物観察表……………89
第 11 表 SD05 出土遺物観察表……………42	第 35 表 SI17 出土遺物観察表……………89
第 12 表 SD06 出土遺物観察表……………42	第 36 表 SB01 出土遺物……………90
第 13 表 SD07 出土遺物観察表……………44	第 37 表 SB03 出土遺物観察表 (1)……………92
第 14 表 SD14 出土遺物観察表……………44	第 38 表 SB03 出土遺物観察表 (2)……………93
第 15 表 8 号墳出土遺物観察表……………61	第 39 表 SK14 出土遺物観察表……………95
第 16 表 遺構外出土遺物観察表 (古墳)……………66	第 40 表 SD08 出土遺物観察表……………97
第 17 表 埴輪属性表 (試掘確認調査)……………68	第 41 表 SD11 出土遺物観察表……………99
第 18 表 埴輪属性表 (SD05)……………68	第 42 表 遺構外出土遺物観察表 (平安)……………100
第 19 表 埴輪属性表 (8 号墳)……………68	第 43 表 SI19 出土遺物観察表……………102
第 20 表 埴輪属性表 (8 号墳)……………69	第 44 表 遺構外出土遺物観察表……………106
第 21 表 埴輪属性表 (8 号墳)……………70	第 45 表 遺構外出土遺物 (中・近世)……………108
第 22 表 埴輪属性表 (8 号墳)……………71	第 46 表 坂田瑞台古墳群出土円筒埴輪の 類型別属性表……………114
第 23 表 埴輪属性表 (14 号墳)……………71	
第 24 表 埴輪属性表 (15 号墳)……………72	第 47 表 ビット計測表……………132

図版目次

図版 1

- 1 武者塚古墳から坂田瑞台 8 号墳を望む
- 2 1 区調査前状況 南から

図版 2

- 1 2 区調査前状況 西から
- 2 4 区調査前状況 東から

図版 3

- 1 1 区北側全景 北から
- 2 1 区南側全景 南から

図版 4

- 1 2 区西側全景 西から
- 2 2 区東側全景 東から

図版 5

- 1 3 区北側全景 北から
- 2 3 区南側全景 南から

図版 6

- 1 4 区西側全景 西から
- 2 4 区東側全景 東から

図版 7

- 1 1 区標準堆積土層 東から
- 2 2 区標準堆積土層 南から
- 3 3 区標準堆積土層 東から
- 4 4 区標準堆積土層 南から
- 5 S104 東から
- 6 SK02 北から
- 7 SK02 南から

図版 8

- 1 S101 南から
- 2 S116 東から

図版 9

- 1 S103 西から
- 2 S103 焼土・炭化物検出状況 南から
- 3 S103 が 南から
- 4 S105 遺物出土状況 西から
- 5 S105・SD07・08 南から

図版 10

- 1 ST05・SD08 東から
- 2 ST06 (中央)・07 (左) 南から

図版 11

- 1 ST06 遺物出土状況 南から
- 2 S106 カマド 南から
- 3 S107 遺物出土状況 南から
- 4 S107 カマド 西から
- 5 ST11 西から
- 6 S114 東から
- 7 S114 遺物出土状況 東から
- 8 S114 炉 南から

図版 12

- 1 S115 西から
- 2 S115 掘方 西から
- 3 S118 北から
- 4 P16 遺物出土状況 東から
- 5 SD05 北から
- 6 SD06 東から
- 7 SD07 東から
- 8 SD14 西から

図版 13

- 1 8 号墳 北から
- 2 8 号墳 SD01 Dセクション (西側) 北から
- 3 8 号墳 SD01 Dセクション (東側) 北から
- 4 8 号墳 SD01 遺物出土状況 北から
- 5 8 号墳 SD02 西から

図版 14

- 1 14 号墳 SD13 北から
- 2 15 号墳 SD09 (手前)・SD10 (奥) 東から

図版 15

- 1 S102 南から
- 2 S102 遺物出土状況 西から
- 3 S102 カマド 南から
- 4 ST08 遺物出土状況 南から

図版 16

- 1 S108 東から
- 2 S108 カマド 南から
- 3 ST09 遺物出土状況 南から
- 4 S109 Bセクション 東から
- 5 S109 (左)・13 (右) 西から

図版 17

- 1 SI09 カマド 西から
- 2 SI10 カマド 南から
- 3 SI10 南から
- 4 SI12 カマド遺物出土状況 東から
- 5 SI12 カマド 南から

図版 18

- 1 SI12 (手前)・SK05 (奥) 東から
- 2 SI17 東から

図版 19

- 1 SB01 西から
- 2 SB01-P1 セクション 南から
- 3 SB01-P2 セクション 東から
- 4 SB01-P3 セクション 東から
- 5 SB01-P4 セクション 東から

図版 20

- 1 SB02 南から
- 2 SB02-P3 セクション 南から
- 3 SB02-P6 セクション 南から
- 4 SB02-P7 セクション 北から
- 5 SB02-P8 セクション 東から

図版 21

- 1 SB03 東から
- 2 SB03-P1 セクション 東から
- 3 SB03-P2 セクション 東から
- 4 SB03-P3 セクション 東から
- 5 SB03 P4 セクション 東から

図版 22

- 1 SB03-P5 セクション 南から
- 2 SB03-P6 セクション 東から
- 3 SK03 (右)・04 (左) 東から
- 4 SK05 北から
- 5 SK08 東から
- 6 SK13 南から
- 7 SK14 南から
- 8 SK15 南から

図版 23

- 1 SK16 北から
- 2 SK17 北から

3 SK26 北から

- 4 P03 セクション 南から
- 5 P04 セクション 南から
- 6 P05 セクション 南から
- 7 P06 セクション 東から
- 8 P07 セクション 東から

図版 24

- 1 P08 セクション 東から
- 2 P10 セクション 南から
- 3 P11 セクション 北から
- 4 P12 セクション 東から
- 5 P13 セクション 南から
- 6 P14 セクション 東から
- 7 P15 セクション 南から
- 8 P33 セクション 南から

図版 25

- 1 SD11 西から
- 2 SI19 (中央)・SK34 (右奥)・37 (右手前) 北から

図版 26

- 1 SB04 北から
- 2 SA01 (右)・02 (左) 東から

図版 27

- 1 SK31 北から
- 2 SK32 北から
- 3 SK35 (左)・36 (右) 東から
- 4 SD03 南から
- 5 SD04 南から
- 6 SD12 南から
- 7 SK06 南から
- 8 SK07 東から

図版 28

- 1 SK24 南から
- 2 SK25 南から
- 3 SK29 西から
- 4 SK30 東から
- 5 SK33 北から
- 6 SK39 北から
- 7 8号墳小グリッド設置状況 東から
- 8 8号墳調査風景 東から

図版 29

試掘確認調査

SI04 出土遺物

SK02 出土遺物

遺構外出土遺物（縄文・土器）

図版 30

遺構外出土遺物（縄文・土器・土製品）

遺構外出土遺物（縄文・石器）

図版 31

SI01 出土遺物

SI16 出土遺物

遺構外出土遺物（弥生）

図版 32

SI03 出土遺物

SI05 出土遺物

図版 33

SI06 出土遺物

図版 34

SI11 出土遺物

SI14 出土遺物

SI15 出土遺物

P16 出土遺物

SD05 出土遺物

図版 35

SD06 出土遺物

SD07 出土遺物

SD14 出土遺物

8号墳出土遺物・A類

図版 36

8号墳出土遺物・A類

8号墳出土遺物・B類

8号墳出土遺物・C類

図版 37

8号墳出土遺物・C類

8号墳出土遺物・D類

図版 38

8号墳出土遺物・D類

8号墳出土遺物・E類

図版 39

8号墳出土遺物・E類

8号墳出土遺物・F類

8号墳出土遺物・G類

図版 40

8号墳出土遺物

14号墳出土遺物

15号墳出土遺物

遺構外出土遺物（古墳）

図版 41

SI02 出土遺物

図版 42

SI07 出土遺物

SI08 出土遺物

図版 43

SI08 出土遺物

図版 44

SI09 出土遺物

SI10 出土遺物

図版 45

SI12 出土遺物

SI13 出土遺物

SI17 出土遺物

SB01 出土遺物

SB03 出土遺物

SK14 出土遺物

SD08 出土遺物

SD11 出土遺物

図版 46

遺構外出土遺物（平安）

SI19 出土遺物

SK37 出土遺物

遺構外出土遺物（中・近世）

図版 47

SK02 出土具類

図版 48

SK31 出土人骨

第1章 調査に至る経緯

1995（平成7）年2月、新治村（当時）教育委員会教育長宛に茨城県土浦土地改良事務所から、下坂田・上坂田の台地上縁辺部にかけて県営畑地帯総合土地改良事業を計画しており、その予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が提出された。新治村教育委員会が現地踏査を行ったところ、包蔵地・貝塚・古墳群の存在が確認されたため、試掘確認調査が必要である旨を回答した。

更に2002（平成14）年8月、茨城県土浦土地改良事務所から新治村教育委員会に対して埋蔵文化財の有無と遺跡が存在した場合の取扱についての照会が提出された。それを受けて新治村教育委員会は、同年11月に赤弥堂遺跡の北側に部分的に試掘確認調査を実施した。調査の結果、今回の調査対象範囲内では埋蔵文化財は確認されなかった。

2006（平成18）年2月に新治村が土浦市と合併すると、当事業は計画が具体化し、同年6月に土浦市教育委員会は全域の現地踏査を行った。2007（平成19）年2月には直近で工事予定区画となる赤弥堂遺跡の東側に、遺跡の範囲や密度、性格を把握するための確認調査を行った。翌2008（平成20）年3月には、赤弥堂遺跡の西側から事業区域西端の坂田峯の古墳群にかけて、事業区域内全体に試掘確認調査を行った。

これら試掘確認調査の結果をもとに、土浦市教育委員会は茨城県土浦土地改良事務所・土浦市産業部耕地面と協議を継続し、道路建設対象箇所に対して記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。2008（平成20）年3月25日、茨城県知事と土浦市長との間で坂田地区の埋蔵文化財取扱全般に関する覚書を締結し、同年7月茨城県知事と土浦市長で赤弥堂遺跡（東地区）の発掘調査に関する協定書を締結した。

以後、2008（平成20）年度に赤弥堂遺跡（東地区と中央地区）、2009（平成21）年度に赤弥堂遺跡（西地区）の発掘調査を実施した。2011（平成23）年度は、事業地のほぼ中央にあたる下坂田中台遺跡・下坂田貝塚・坂田台山古墳群と、事業地の東端にあたる下坂田壩台遺跡・坂田壩台古墳群の2地点の発掘調査を実施しており、当報告書は後者分に当たっている。

今回の調査に関する文化財保護法関連の手続きは、2008（平成20）年6月17日付けで茨城県土浦土地改良事務所長（呼称は当時）より当事業全体に関する埋蔵文化財の発掘の通知（文化財保護法第94条）が土浦市教育委員会に提出され、6月27日付けで茨城県教育長宛に送達した。

発掘調査は有限会社勾玉工房 Mogi が実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査の届出（文化財保護法第92条）を、9月30日付けで茨城県教育委員会教育長宛に送達した。11月10日付けで茨城県教育長より埋蔵文化財発掘調査の通知を受けている。

なお、平成24年3月27日付けで発掘調査の終了確認依頼の送達を行い、同年3月30日付けで茨城県教育委員会教育長より終了確認の通知を受けた。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

下坂田塚台遺跡・坂田塚台古墳群は茨城県土浦市下坂田 1050 番地ほかに所在する。土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置している。市域北部から東部にかけては かすみがうら市、西部は つくば市、南部は牛久市及び稲敷郡阿見町と隣接している。遺跡周辺の坂田地区は、常磐自動車道の西側、国道 125 号の南側に立地し、一帯は花卉や梨といった園芸・果樹栽培が行われている。西と東に分かれ、本遺跡の中央（本調査の 3 K）に字境が通る。西が上坂田で、東が下坂田である。

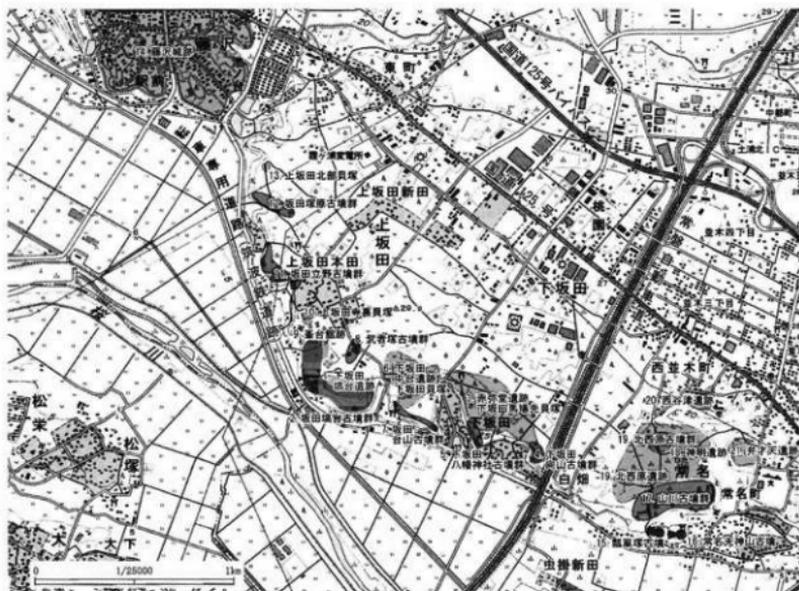
市域の地勢は、新治台地、桜川低地、土浦の入り、稲敷台地で形成されている。新治台地は北部にあり、筑波山塊から南東に伸びている。桜川低地は中央部を南東に流れる桜川の流域である。土浦の入りは東部にあり、霞ヶ浦西端に当る。稲敷台地は南部にある。

新治台地は成田層を基盤に、関東ローム層を載せている。成田層は、古東京湾が存在した 13 万年前から 14 万年前の第四紀リス・ウラム間氷期に高海水準下に形成されたものである。関東ローム層は、台地が隆起して陸化してから、富士・箱根などの火山灰が堆積したものである。新治台地の南側に存在するのが桜川低地で、2 万年前まで古鬼怒川が流れ、台地を開析したものである。坂田地区は台地の縁辺となり、低地との境は比高 20 m に達する崖を形成している。

遺跡はこの桜川左岸の台地縁辺に占地し、周辺の標高は 29 ~ 30 m を測る。現存する古墳群は台地縁辺に沿って雑木林の中に分布し、下坂田塚台遺跡は古墳群の東（南）側と範囲を重複して広がっている。



第1図 遺跡周辺図



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代							備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	
1	下坂田塚台遺跡		○	○		○	○	○	H23年度調査、本書
2	坂田塚台古墳群				○	○			H23年度調査、本書
3	赤赤堂遺跡・下坂田馬場先貝塚		○			○	○	○	H20・22年度調査、旧下坂田鹿島前貝塚
4	下坂田向山古墳群				○				H20年度調査、旧石橋古墳
5	下坂田八幡神社古墳群				○				旧 駅跡久保古墳群
6	下坂田中台遺跡・下坂田貝塚	○	○		○			○	S17年重文圖文種(市指定有形文化財)出土、H2・23年調査
7	坂田向山古墳群				○				H23年度調査
8	武者塚古墳群				○				S58年調査、市指定史跡・県指定有形文化財
9	塚台館跡							○	
10	上坂田寺裏貝塚		○						
11	坂田立野古墳群				○				
12	坂田塚原古墳群				○				
13	上坂田北部貝塚		○						S56～57年調査
14	藤沢城跡							○	
15	籠草塚古墳				○				源誠
16	常名天神山古墳				○				H2年測量調査、市指定史跡
17	山川古墳群	○	○	○					H7・15年調査
18	神明遺跡	○	○					○	H9・13～15年調査
19	北西原遺跡・北西原古墳群				○				H5～7・14年調査
20	西谷津遺跡				○	○			H14年調査
21	弁才天遺跡				○	○			H8年調査、源誠

第2節 歴史的環境

遺跡の所在する坂田地区とその東隣である常名地区は、桜川左岸の新治台地縁辺に立地し、旧石器時代から中世に至る遺跡が確認されている。以下、時代順にその概要を列挙する。

旧石器時代 山川古墳群(17)第2次調査、神明遺跡(18)第4次調査が挙げられる。前者では、層位の異なる石器集中地点が3か所ある。最下層の石器集中地点からは、台形様石器や楔形石器が出土している。この集中地点の周囲からは、炭素C14年代測定により、約3万2千年前の構築と判明した炉跡が検出されている。

縄文時代 下坂田塙台遺跡(1)、赤弥堂遺跡・下坂田馬場先貝塚(3)、下坂田中台遺跡・下坂田貝塚(6)、上坂田寺裏貝塚(10)、上坂田北部貝塚(13)、神名遺跡が挙げられる。

下坂田塙台遺跡では、今回の調査で早期未葉～前期中葉の地点貝塚と中期の住居跡1軒が確認された。

赤弥堂遺跡(下坂田馬場先貝塚)は東・中央・西地区に分けて調査されている。住居跡に関しては、早期から後期にかけてのものが確認されている。早期は東地区において炉穴3基が検出され、条痕文系土器が出土している。前期は中央地区で住居跡2軒、東地区で5軒が検出されている関山式期の集落跡である。全ての住居跡において貝層が確認されている。中期は、阿玉台式期から加曾利E式期の集落跡である。西地区で住居跡13軒が検出されている。阿玉台式期6軒、加曾利E式期は13軒である。中央地区では14軒が検出され、阿玉台式期4軒、加曾利E式期7軒、その他1軒である。後期は、中央地区の三十稲場式期が1軒である。遺物では、西地区から検出された前期の琥珀大珠、中期の線刻画が施された台形土器と土偶が特筆される。

中台遺跡・下坂田貝塚は、地点貝塚が環状に巡っている。ヤマトシジミを主体とした貝層からは、後期・加曾利B式期の遺物が検出されている。塙台遺跡の調査と並行して平成23年度に発掘調査が行われている。

上坂田北部貝塚は前期・関山式期の住居跡が存在する。覆土中からハイガイの貝層が検出されている。神明遺跡は中期・加曾利E式期の集落跡が存在する。また、同時期の土坑からサルボウやハマグリを主体とする地点貝塚が検出されている。上坂田寺裏貝塚は前期関山式期の地点貝塚とされ、ハイガイを主体としている。

弥生時代 今回の下坂田塙台遺跡(1)の調査で、本遺跡に後期の住居跡2軒が検出されたが、周辺では集落跡の確認事例が極めて少ない。本事業の試掘確認調査で赤弥堂遺跡(3)においてわずかな弥生土器片が採集されたが、本調査では遺構は確認されていない。他に山川古墳群(17)の第3次調査で住居跡2軒が調査されているのみである。

古墳時代 古墳(群)及び集落跡が広範に分布する。坂田地区と常名地区の古墳は、北方の坂田塚原古墳群から東方の山川古墳群に至るまで、台地縁辺に切れ目なく分布している。

坂田地区においては、坂田塙台古墳群(2)、下坂田向山古墳群(4)、下坂田八幡神社古墳群(5)、坂田台山古墳群(7)、武者塚古墳群(8)、坂田山野古墳群(11)、坂田塚原古墳群(12)が存在する。

坂田塙台古墳群は、本調査における新規発見の2基を合わせて15基の古墳で構成される。2号墳は武器八幡古墳で、安政元年(1854年)に鉄製武器類が出土し、当時の代官あての発見届である古文書とともに地元・発見者宅に保管されている。11号墳は全長約30mの前方後円墳である。平成20年に筑波大学先史学・考古学研究室によって測量調査がされている。今回の調査においては、8号墳の周溝が検出され、墳丘径30m、高さ約5m、二重周溝を有する円墳であったことが判明し、出土した円筒埴輪から5世紀末葉の築造と推定された。新規発見の2基(14・15号墳)はいずれも6世紀代の円筒埴輪を有する円墳である。

本古墳群と谷津を挟んで東隣する台山古墳群は3基の古墳からなり、1号墳(塚山古墳)は昭和39年に國學院大學と県立土浦第二高等学校によって発掘調査が実施された。谷津を挟んでさらに東側の赤弥堂遺跡の調査では、墳丘が削平された円墳2基及び方形周溝墓1基が東地区から検出されている。前者は石橋古墳とともに下坂

田向山古墳群を構成するもので、埴輪は出土していない。方形周溝墓では古式土師器が出土している。塚台古墳群の北側、台地内部・奥には武者塚古墳群があり、2基の古墳が確認されている。武者塚1号墳は、昭和58年に筑波大学によって調査され、特異な形態の石室を持つ終末期古墳であることが判明した。出土品には銀製帯状金具や飾大刀、そして「みずら」がある。台地縁辺沿いの北側には坂田立野古墳群(4基)、坂田塚原古墳群(2基)が展開する。

常名地区には、瓢箪塚古墳(15)、常名天神山古墳(16)、山川古墳群(17)、北西原古墳群(19)が存在する。瓢箪塚古墳と天神山古墳は東西に並んで築造された大型の前方後円墳で、前者は現在消滅している。天神山古墳は全長90mの前方後円墳で、4世紀末から5世紀初めごろの古墳と想定されている。山川古墳群は前期から終末期に至る33基の古墳で構成され、このうち20基が前期の方墳である。北西原古墳群は、終末期の方墳4基で構成される。

集落跡は、下坂田塚台遺跡(1)、赤弥堂遺跡(3)、下坂田中台遺跡(6)、神明遺跡(18)、北西原遺跡(19)、西谷津遺跡(20)、弁才天遺跡(21)で確認されている。

今回の塚台遺跡の調査では、前期の住居跡6軒、溝跡3条、後期の住居跡1軒等が確認された。北西原遺跡及び周辺の神明遺跡では前期の集落跡の存在が周知となっている。赤弥堂遺跡で検出された住居跡は、中央地区で前期7軒、中期5軒、後期4軒。西地区は前期6軒、細別不明2軒。東地区は前期6軒が検出されている。

奈良・平安時代 下坂田塚台遺跡(1)、赤弥堂遺跡(3)、西谷津遺跡(20)、弁才天遺跡(21)が存在する。

今回の塚台遺跡の調査では、9世紀代の住居跡8軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条等が確認され、溝跡は一連の区画溝になる可能性がある。赤弥堂遺跡の中央地区では住居跡7軒が検出されている。時期が特定できるのは、9世紀中葉から後葉にかけて構築された3軒、9世紀代が1軒である。西谷津遺跡は、8世紀前半から9世紀中葉に至る集落跡である。弁才天遺跡は、8世紀前半から9世紀後半までの堅穴住居跡60軒以上で構成される集落跡である。掘立柱建物跡がまとめて検出されている。

中・近世 中世の遺構が検出された遺跡には、坂田地区と常名地区で次の遺跡が挙げられる。坂田地区では、下坂田塚台遺跡(1)、赤弥堂遺跡(3)、下坂田中台遺跡(6)、塚台遺跡(9)、藤沢城跡(14)が存在する。今回の塚台遺跡の調査では、方形堅穴遺構1基等が確認された。赤弥堂遺跡からは中世の道路状遺構が検出されている。中台遺跡からは、試掘確認調査において溝跡・掘り込みが確認され、内耳上器などが出土している。塚台館跡は台地縁辺部を区切るように土塁が明瞭に巡り、その中に存在する坂田塚台11号墳も土塁の一部として利用されている。坂田地区の台地北西端と谷を挟んだ対岸には、旧新治村の中心市街地全体を覆うかたちで藤沢城跡が広がる。

常名地区では、山川古墳群(17)、神明遺跡(18)が存在する。山川古墳群の第2・3次調査や神明遺跡の第1・3・4次調査で、東西125m、南北103mの溝で囲まれた方形館跡と考えられる遺構が確認されている。方形の区画内には掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、堅穴状遺構などが検出され、遺物は少ないものの、鎌倉時代の土師質土器小皿や龍泉窯系青磁の白花文碗や常滑産陶器片、銭貨が出土している。

近世の遺構が検出された遺跡には、下坂田塚台遺跡(1)、赤弥堂遺跡(3)、神明遺跡(19)があり、溝跡や竈跡が検出されている。

【周辺の遺跡調査報告書(番号は第1表に対応)】

- 2 武者塚古墳調査団編 1986『武者塚古墳』武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査 新治村教育委員会
小野塚祐造 2010「茨城県土浦市所在坂田町11号墳の高量調査報告」『筑波大学 先史学・考古学研究』第21号 筑波大学人文社会科学研究所歴史・人類学専攻
 - 3 有限会社勾玉工房Mogi編 2009・10・11『赤赤堂遺跡(東・中央・西地区)』一宮宮地帯総合整備事業(新しい手塚型)坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書一 土浦市教育委員会
 - 4 有限会社勾玉工房Mogi編 2009『赤赤堂遺跡(東地区)』(前掲)
 - 6 岩崎卓也 1986『遺跡の環境—山ノ山出土の銅鏡』武者塚古墳調査団編『武者塚古墳』(前掲)
 - 9 武者塚古墳調査団編 1986『武者塚古墳』(前掲)
 - 13 前田 潮 1981『調査成果の概要—上坂田北部貝塚』増田信一編『筑波古代地域史の研究』昭和54～56年度文部省特定研究経費による調査研究概要 筑波大学
 - 17 西谷津遺跡調査会編 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡(第6次調査) 神明遺跡(第4次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編 2004『北西原遺跡(第3次・第4次調査) 山川古墳群(第1次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 土浦市教育委員会
山川古墳群第二次調査会編 2004『山川古墳群(第2次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 土浦市教育委員会
山川古墳群第三次調査会編 2004『山川古墳群(第3次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 土浦市教育委員会
 - 18 土浦市遺跡調査会編 1998『神明遺跡(第1次・第2次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 土浦市教育委員会
常名台遺跡調査会編 2002『常名台遺跡群確認調査 神明遺跡(第3次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 土浦市教育委員会
西谷津遺跡調査会編 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡(第6次調査) 神明遺跡(第4次調査)』(前掲)
神明遺跡第五次調査会編 2005『神明遺跡(第5次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 土浦市教育委員会
 - 19 西谷津遺跡調査会編 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡(第6次調査) 神明遺跡(第4次調査)』(前掲)
土浦市遺跡調査会編 2004『北西原遺跡(第1次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編 2004『北西原遺跡(第3次・第4次調査) 山川古墳群(第1次調査)』(前掲)
土浦市遺跡調査会編 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡(第5次調査)』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 土浦市教育委員会
 - 20 西谷津遺跡調査会編 2003『山川古墳群確認調査 西谷津遺跡 北西原遺跡(第6次調査) 神明遺跡(第4次調査)』(前掲)
 - 21 土浦市遺跡調査会編 2006『弁才天遺跡 北西原遺跡(第5次調査)』(前掲)
- ・新治村史編纂委員会編 1986『図説 新治村史』新治村教育委員会
 - ・熊田 麗編 1991『古蹟々浦漢』沿岸貝塚の研究』昭和63年度～平成2年度文部省特定研究経費による調査研究概要 筑波大学
 - ・茨城県教育庁文化課編 2001『茨城県遺跡地区』地図編・地名表編 茨城県教育委員会
 - ・塩谷 修 2010『土浦市域の古墳群。佐々木憲一・田中 裕編『常陸の古墳群』六一書房

第3章 調査の方法と標準堆積土層

第1節 調査方法

試掘確認調査により、縄文時代から平安時代に至る遺構の存在が確認されていた。本調査の結果、周知となっている坂田台8号墳の周溝が3・4区端部をまたいだところにあること、また2区には、周知されていない古墳の周溝が遺存していることが判明し、同14・15号墳とした。

調査範囲は、幅員4～6mで延びて、3つのクランクを持ち、全体としてW字状をなしている。作業効率のため調査区を、北東より1～4区に分割することになった。各区の全長は、1区は南北65m、2区は東西145m、3区は南北40m、4区は東西60mを測った。

各区の表土上面から遺構確認面に至る深度は、30から150cmを測り、最も深い3区は安全のため階段掘りにした。表土の掘削は重機を使用し、遺構確認及び覆土掘り下げは人力で行った。遺構覆土掘り下げの際、各遺構には、堆積状況の観察用ベルトを設けて行った。

各グリッド杭は、4分割した調査区の中央に、それぞれ任意で10m間隔の直線状に打設し、光波による世界測地系方眼網にはめ込んだ。調査区ごとのグリッドの呼称は、長軸方向をアラビア数字、短軸方向をアルファベットで付し、例えば「A-1G、A-2G」となるように表記した。各地区のグリッド杭の基点は北もしくは西とした。1・3区は調査区北端を、2・4区は西端を、任意グリッド方眼網の各基点とした。また、遺物量が多い4区の8号墳周溝（SD01・02）調査に当たっては、上記範囲に被る10m方眼網を小グリッド2m方眼網で細分して覆うことにした。これに関しては、10mグリッドと異なり南西側を基点にしている。

写真は遺構調査の各段階で適宜撮影することにした。35mmモノクロネガ及びカラーポジフィルムカメラを用い、補助として600万画素のデジタルカメラを併用した。

実測は主に平板により遺構図を作成し、縮尺は1/10、1/20、1/40、1/60、1/100とした。

調査の経過（日誌抄）

平成23年

- 12月13日 器材及び Tent・トイレの搬入を行うとともに、重機を用いて表土搬上を開始する。作業は当初4・3・2・1区の順に行う予定で4・3区の順で行っていた。ところが14日の3区表土搬上終了時点で、1・2区に隣接する集落業者の受粉作業の関係により、工事着工車が1区から優先して行うことになった。冬季につき霜害が予想されるため、遺構確認終了箇所から調査範囲全面をシートで養生した。
- 14日 1区表土搬上に着手するとともに、4区から表土搬上終了箇所を迫って、人力による遺構確認作業を開始する。
- 19日 3区・1区の順に基準杭打設を行う。
- 22日 2区西端を除いた調査区全域の表土搬上を、26日までに同範囲の遺構確認を終了する。
- 26日 3区の遺構掘り下げ作業を開始する。3区は、現状で広範囲な擾乱を受けている。調査区壁際における土層堆積状況と出土遺物の内容から、近世以降の遺構しか存在しないことが判明する。
- 27日 土浦市教育委員会比毛氏立会いのもと3区の終了確認を行い、同区の調査が終了する。年末・年初の休工につき、危険箇所・シート養生箇所点検など環境整備作業を行って仕事納めとする。

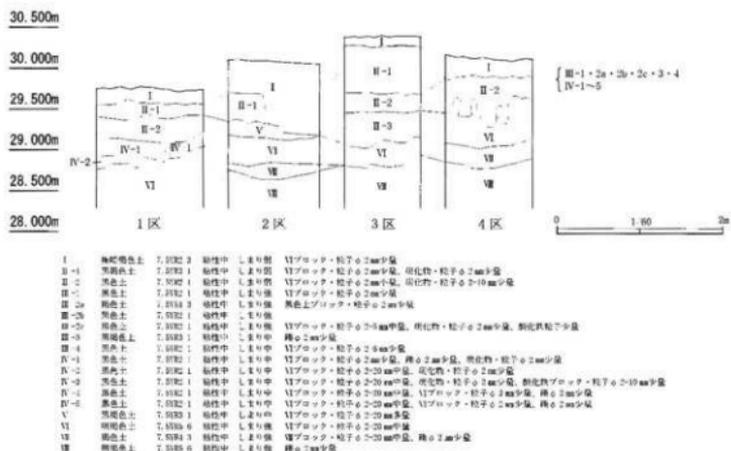
平成24年

- 1月5日 仕事始めとなり、遺跡調査を再開し、縄文時代から平安時代に至る集落域となっている1区北端から遺構の掘り下げを行う。
- 19日 1区調査を終了し2区調査を開始する。2区は、古墳時代の古墳と集落、平安時代の集落を主体としているところで、土量が多い平安時代のSD11から遺構掘り下げに着手した。
- 2月4日 2区西端部の表土搬上及び遺構確認を行う。住居跡など、古墳時代、平安時代、中・近世の集落に伴うと考えられる遺構群が確認される。
- 10日 土浦市教育委員会黒澤氏立会いのもと2区の終了確認を行い、同区の調査が終了する。4区の調査を開始する。同区は坂田台8号墳や丘に隣接し、調査範囲に周溝がかかっている。また、同区は古墳時代住居跡、及び中・近世土坑墓が存在している。調査は土量が多い8号墳周溝から着手した。
- 28日 土浦市教育委員会黒澤氏立会いのもと4区の終了確認を行い、現地における全ての調査工程を終了する。以降は、施設と器材の撤収準備・各種の記録整備・書類作成からなる残務が作業の主体となる。
- 3月2日 Tent及びトイレ、器材撤収を行う。

第2節 標準堆積土層

調査区の標準堆積土層は、4地区全てにおいて観測した。下図に示すとおり、表上（現耕作上）層（第1層）の下に旧耕作土層（第II層）となり、この下に近世（第III層）及び古墳～平安時代（第IV層）の包含層が確認される。さらに、ローム漸移層（第V層）、ソフトローム層（第VI層）と続き、ハードローム層は主に色調の違いから第VII層と第VIII層に分けられた。

第III層と第IV層は地区によって存否が異なり、第III層は3区にのみ確認され、近世以降の道跡や耕作跡の覆土となる。第IV層は平安時代の遺構が掘り込まれ、主に1区で確認された。2・4区では耕作による削平・攪乱が著しく、第II層直下に第V層及び第VI層が現れ、その上部にも掘削が及んでいた。そのため、遺構確認は第V層または第VI層上面で行った。



第3図 標準堆積土層

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要

今回の発掘調査では、縄文時代から近世に至る遺構と遺物が検出されている。遺構種別で見ると、住居跡18軒、方形竪穴遺構1基、掘立柱建物跡4棟、槽・掘立柱塀跡2基、土坑25基、ピット40基、溝9条、古墳3基、サク状遺構（烟跡）1か所が検出されている（注1）。

遺 構 縄文時代の遺構は住居跡1軒、土坑1基がある。調査区北東部・1区の中期のSI04、及び早期末葉～前期中葉の地点貝塚・SK02である。

弥生時代の遺構は住居跡2軒である。いずれも後期で、1区のSI04と2区のSI16である。

古墳時代の遺構は前期（～中期）と後期に分けられる。前期（～中期）では住居跡6軒（1区SI03・05、2区SI11・14・15、4区SI18）、ピット1基（2区P16）、溝跡3条（1区SD06・07、2区SD14）があり、後期では住居跡1軒（1区SI06）及び古墳3基（2区14・15号墳、4区8号墳）があり、時期が明瞭ではないが、溝跡・1区SD05が検出された。前期の溝跡は古墳周溝の可能性も窺われるが、限られた調査範囲内では断定する根拠も得られず、今回は古墳として扱うことを避けた。後期の古墳のうち、坂田塚台）8号墳は周知のもので、14・15号墳が新規に発見された古墳である。

平安時代の遺構は住居跡8軒（1区SI02・07、2区SI08～10・12・13・17）、掘立柱建物跡3棟（2区SB01～03）、土坑10基（1区SK03・04、2区SK05・08・13～17・26）、ピット15基（2区P03～15、4区33・38）、溝2条（1区SD08、2区SD11）である。ピットは、遺物を出土しないものもあるが、覆土の状態から当該期の遺構と判断した。住居跡は9世紀前半と後半のものがあり、掘立柱建物跡のうちSB02は住居跡に切られていることから、住居に先行するものと並行するものがあると考えられる。2区中央を斜行するSD11の東の延長上には1区SD08がある。ともに2段に掘り込まれ、一連の遺構の可能性がある。SI02・17は溝の北側にあるが、他の住居跡・建物跡は南側で検出されており、これらの遺構群を台地南端の崖線とともに囲む区画溝と推察される。

中・近世の遺構は、2区東端から3区を挟んで4区に至る範囲にまとまっている。方形竪穴遺構1基（4区SI19）、掘立柱建物跡1棟（2区SB04）、槽・掘立柱塀跡2基（2区SA01・02）、土坑（4区SK31・32・35～37）、ピット23基（P1・2・17～32・34～37・39）、溝跡3条（3区SD03・04、2区SD12）、サク状遺構1か所（烟跡、3区）がある。これらのうち、中世のものはSI19・SK32・SK37、近世のものはSK31であり、他は時期が限定できない。土坑については、SK31・32は人骨の検出から竊塚であり、4区を中心として付近にある比較的類似した形態をとる土坑群は土坑墓の可能性もある。また、近隣住民の話では、8号墳南の台地崖下には（中世）五輪塔の部材が複数転落しているとのことであり、4区周辺が当時の墓域であった可能性が考えられる。一方、3区の位置は調査手前まで使用されていた道路であり、地表から1m下にも硬化面が確認された。さらに下層には近世のサク状遺構（烟跡）と溝跡2条（SD03・04）が検出された。

遺 物 出土遺物の総量は、遺物整理箱（37リットル相当）35箱、重量176,437.3gを量り、縄文土器13,222.1g、弥生土器3,884.2g、土師器65,688.5g、須恵器33,211.8g、灰輪陶器227.8g、埴輪34,245.2g、近世陶器438.1g、磁器15.0g、近世瓦370.2g、石器327.6g、鉄滓92.1g等がある。検出遺構の主体をなす、古墳・平安時代の住居・建物跡に伴う土師器と須恵器、周溝が確認された坂田塚台8号墳に伴う埴輪が、全体の75%を占めている。

これらのうち、調査区一括及び表面採集のおもな遺物を種別・地区別に見ると、縄文土器：1区823.3g、2区595.9g、3区51.7g、4区352.7g、弥生土器：1区65.8g、2区152.5g、4区81.5g、土師器：1区592.3g、2区2,674.1g、3区71.0g、4区1,620.0g、須恵器：1区51.0g、2区1,974.6g、3区80.3g、4区969.0gとなる。3区は近世以

降の地形改変が大きいことから、検出遺物も極少量にとどまっている。縄文土器は調査区全体に分布し、東側、特に1区が多い。また、弥生土器は2区に多い。ともに遺構の分布と同調している。土師器は古墳時代各期と平安時代の細別が十分ではない。須恵器はほぼ平安時代のもので、やはり、遺構密度の高い2区に集中している。一方で、1区は極少量で、周辺での遺構分布の薄さを反映しているようであり、前述のSD08・11を区画溝とし、南側が区画内との想定を支持する状況とも考えられる。また、4区では明確な遺構を把握できなかったが、一定量の須恵器の出土から、周辺における遺構の存在が推定される。

試掘確認調査の遺物 試掘確認調査では、縄文土器372.9g、弥生土器30.7g、土師器1,006.8g、須恵器180.0g、埴輪2,175.2g、陶器19.0g、瀬571.6gが採取された。縄文土器は調査対象範囲全域にわたって見られ、早期条痕文系・前期羽状文系・後期安行式などがある。弥生土器は縄文施文の後期のもので、15・17・28トレンチで出土している。土師器は若干の古式土師器を含むものの、ほとんどが平安時代のもので、須恵器も同時期のものである。調査対象範囲全域にわたるが、8割が22～28トレンチから出土したもので占められている。埴輪は、本調査によって明らかとなった、8号墳(17トレンチ)と14号墳(23トレンチSD-1)に該当する箇所から出土しているほか、11・13・28トレンチからも検出されている。特に、28トレンチでは228.1gとまとまった出土量があり、古墳の存在が推察される。陶器は1トレンチの常滑産焼締陶器の小片1点である。

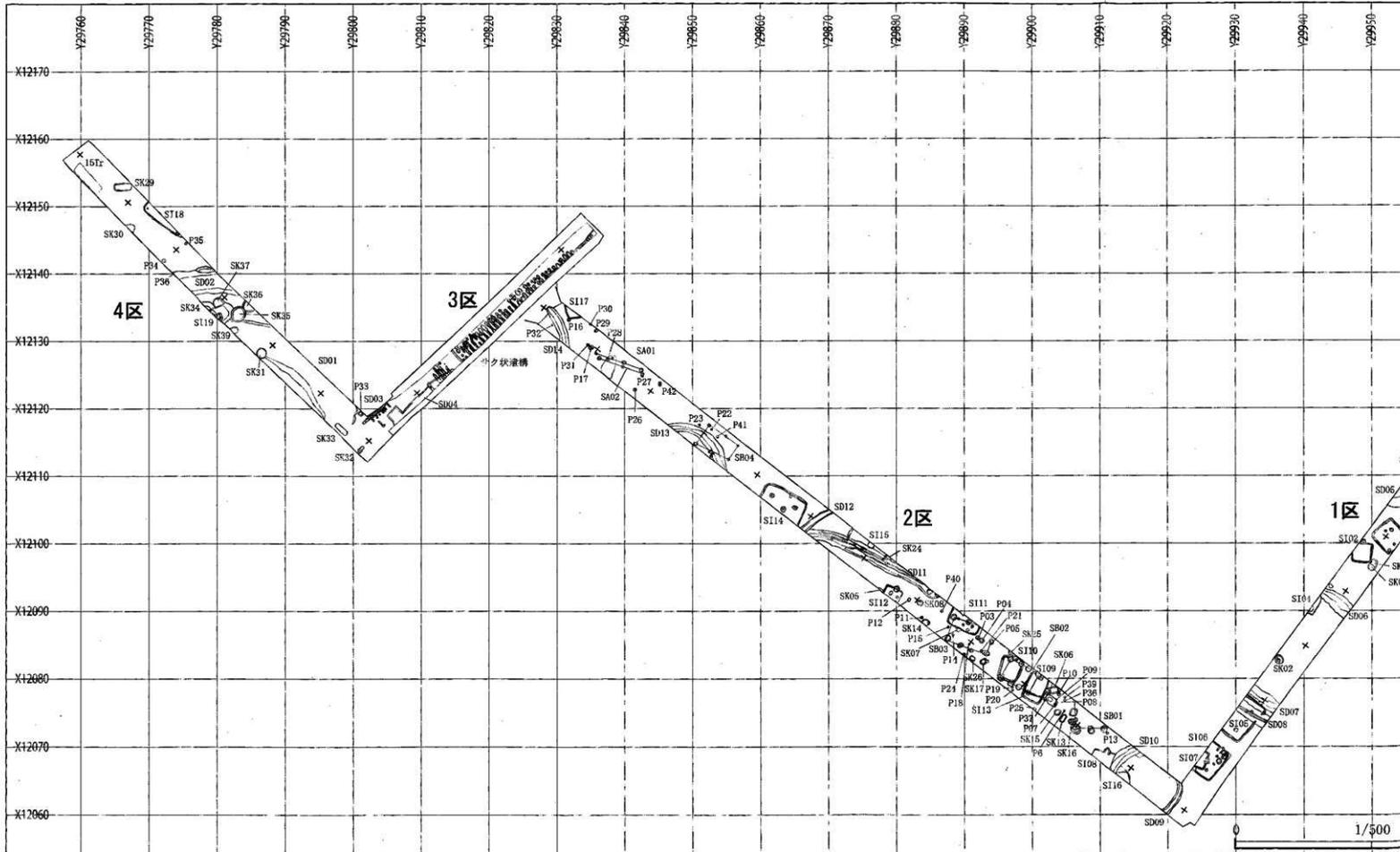
これらの遺物は、本調査で検出されたものと同様であるので、以下には、本調査の区域外となった28トレンチの埴輪から3点を図示した(第4図・第17表)。1と2は同一のハケメを施すもので、2区所在の14号墳の同工品I類とも一致する。粘土紐の積み上げ間隔が1～1.5cmと狭い。突帯は上稜が高く、下面のナデ付けが甘い。3は両者と異なるハケメを持ち、底面には繊維状圧痕を残す。やや軟質の焼成を示している。28トレンチでは溝状遺構が確認されているので、これらの埴輪を伴う古墳の周溝である可能性がある。

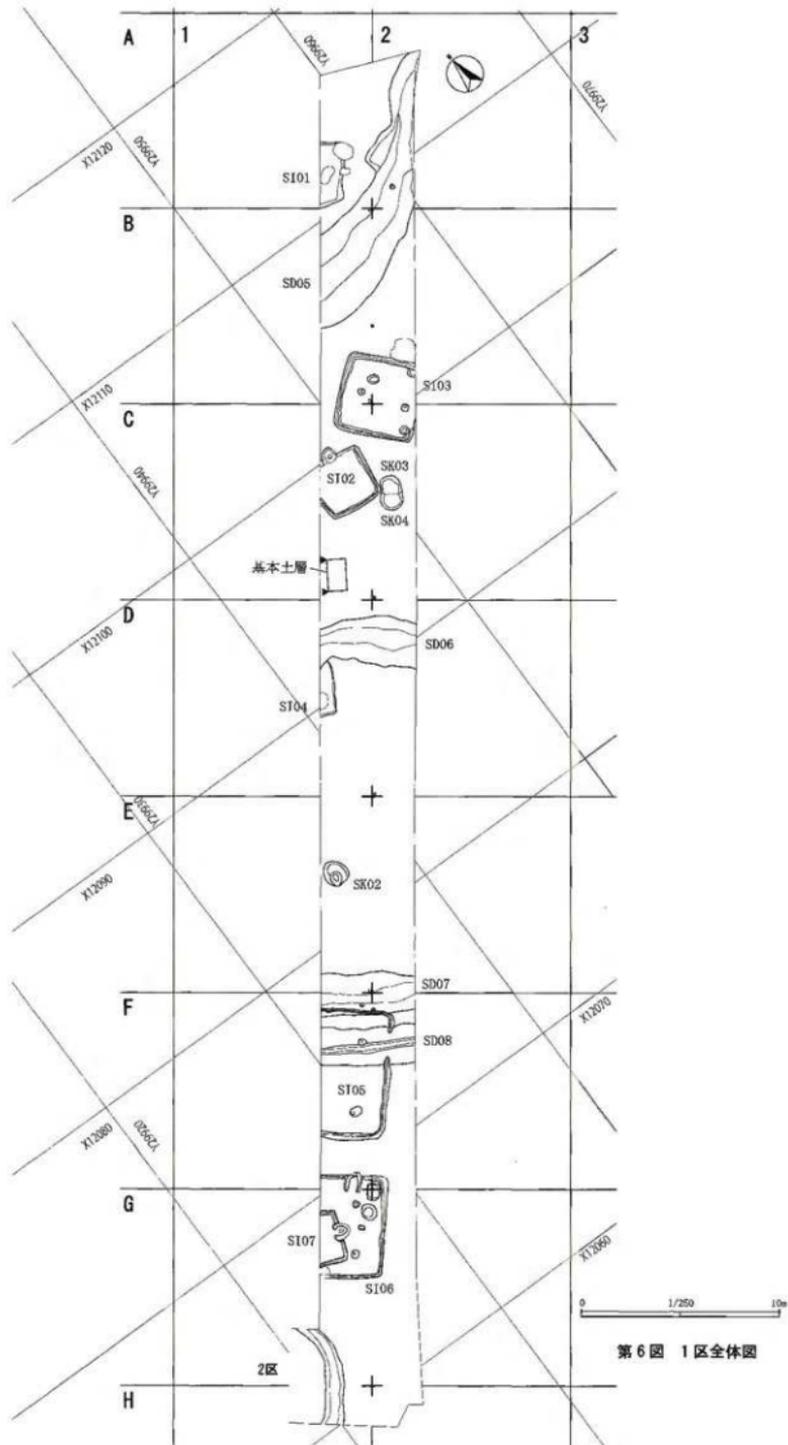


第4図 試掘確認調査出土遺物

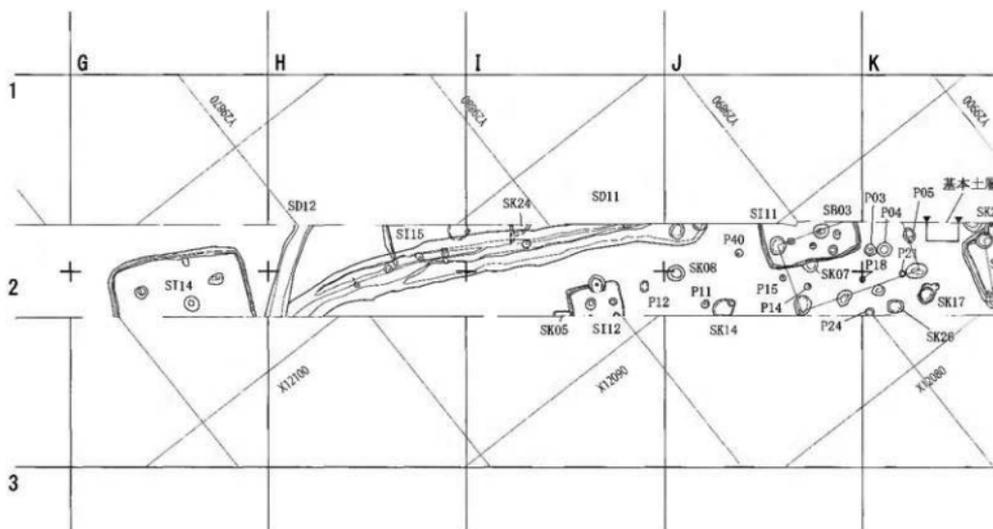
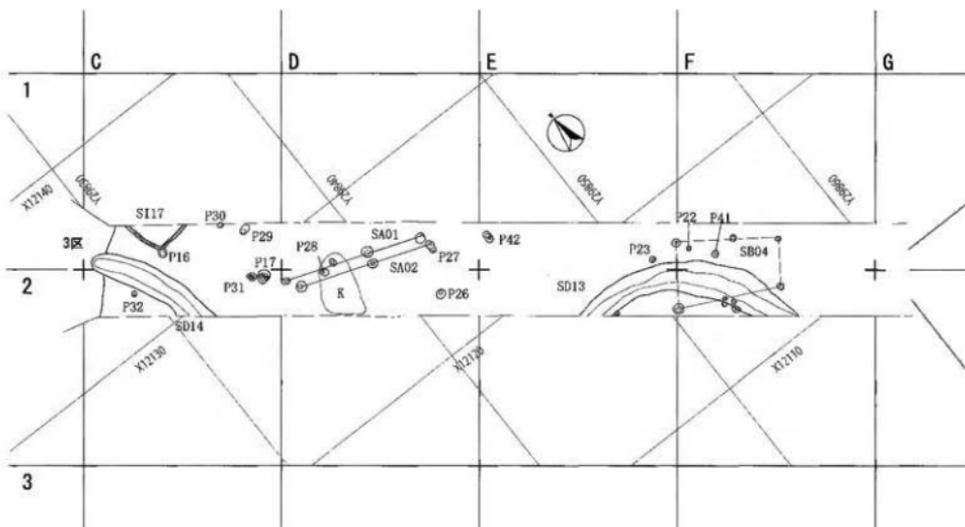
【注】

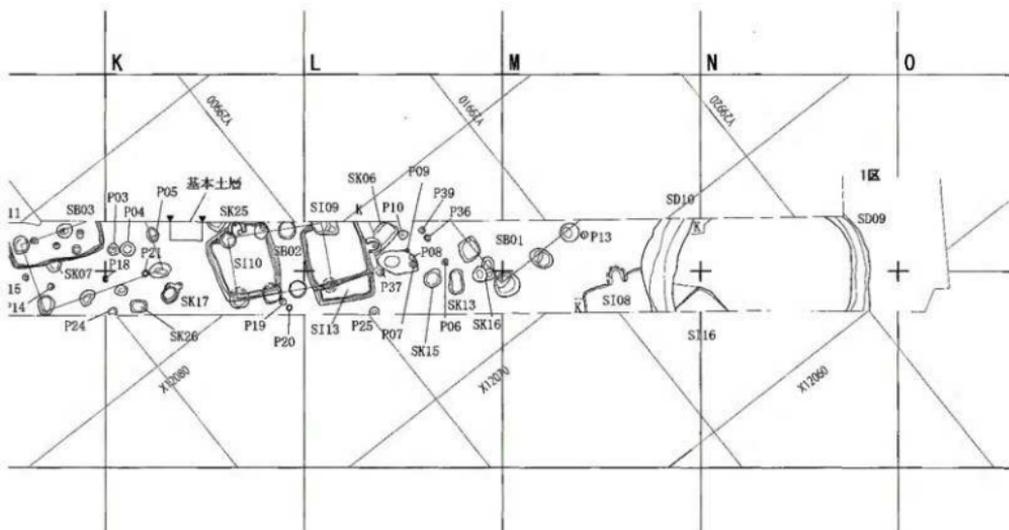
1 調査した土坑のうち、1区SK01はSI04の覆土と判断。2区SK09～12はSB01、同SK18・23はSB03、同SK19～22はSB02の柱穴に振り替えた(凡例参照)。2区SK27・28は風倒木と判断。4区SK38は同SK37の覆土上層にあり、別遺構と判断したが、平面プランが確認できなかった。以上、14遺構は欠番となっている。



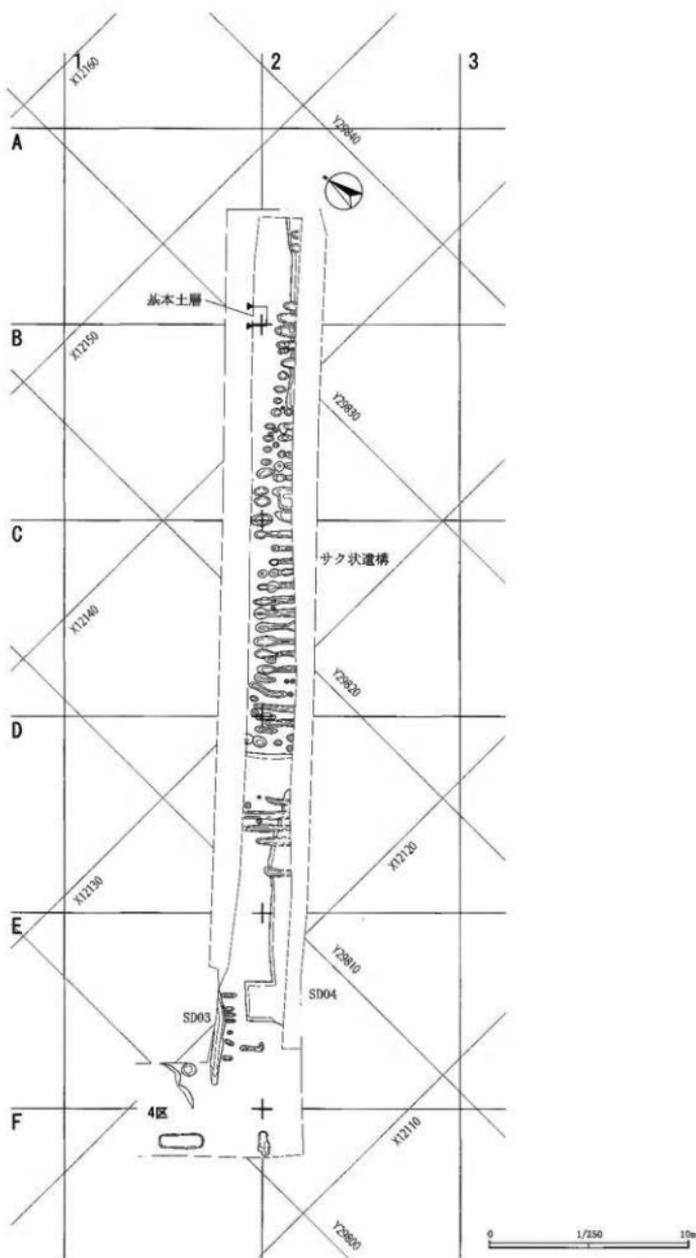


第6图 1区全体图

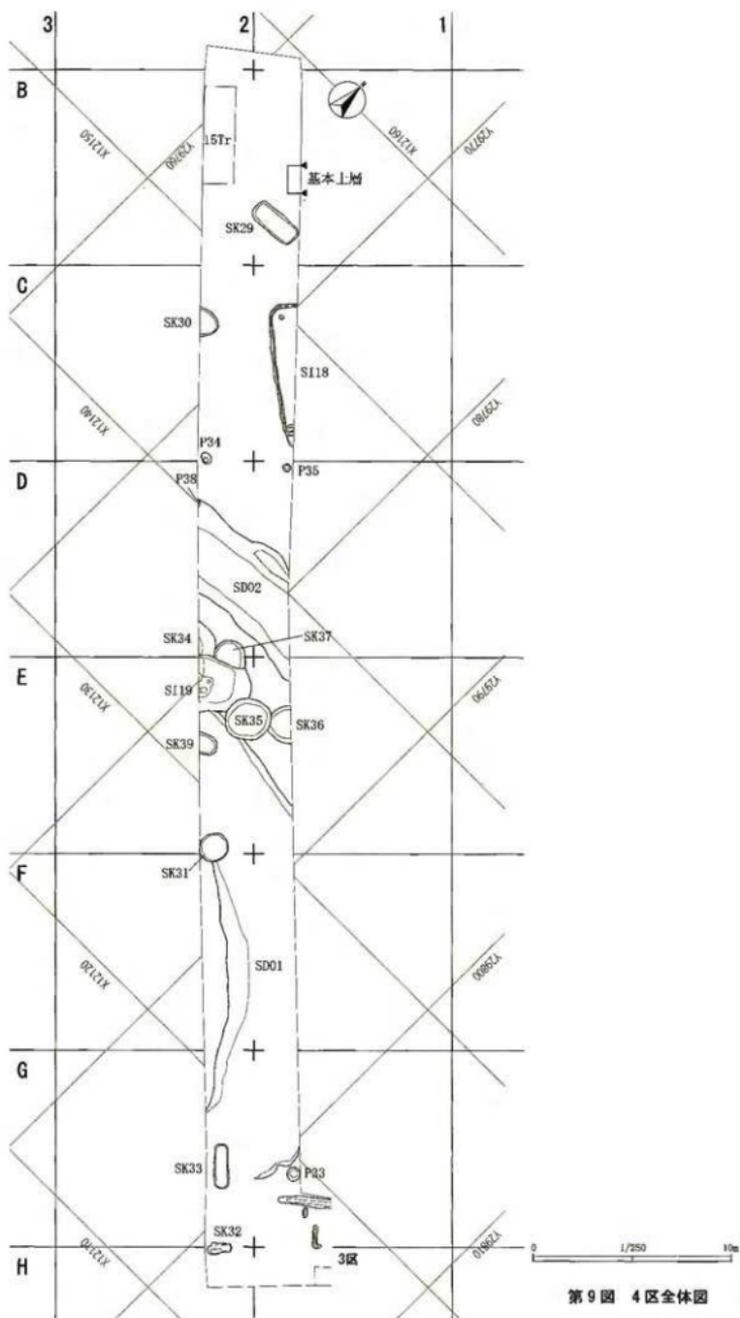




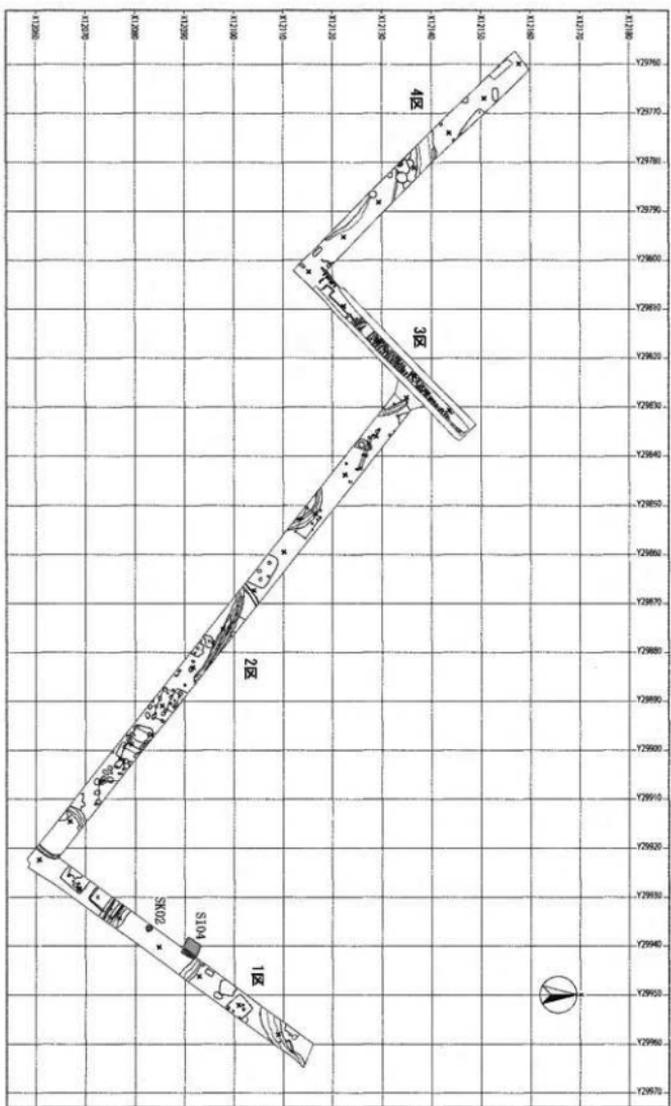
第7图 2区全体图



第8図 3区全体図



第9图 4区全体图



第10図 縄文時代遺構分布図

第1項 住居跡

S104 (第11・12図・図版7・29)

1区D-1Gに位置し、遺構の東壁際付近が検出され、南壁に寄った調査区壁際付近にある木根原因の横乱と、遺構北壁を東西に走行するSD06が切っている。南北3.50m、東西現状0.75mの平面推定長方形で、深さは32cmとなっている。調査区内で炉は検出されていないので、北方向を主軸方向として扱うことにした。主軸方向N-29°-E。覆土は自然堆積で遺構中央部の床面付近に炭化材1点が存在する。床面は地山を直接削平したもので、全体に硬い。壁周溝や炉は検出されていない。

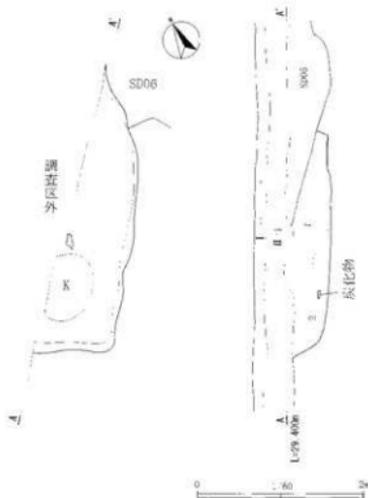
遺物は、覆土中から縄文土器1,655.3g、弥生土器51.0g、土師器17.2g、陶器6.0g、礫120.3gが出土した。縄文土器は早期から後期にわたるが、ほとんどは中期・阿玉台式である。01・02は大型深鉢の同一個体の口縁部及び胴部破片である。口縁は丸みを帯び緩やかに開く。口縁直下には1条の沈線が走り、以下、地文は縦方向の粗い集合沈線が1本ずつ引かれる。胎土中には長石・石英・雲母を多量に含み肌理が粗い。器色は外面暗黒褐色、内面は褐色。03は薄手の土器で、器面には細かな集合沈線により斜格子文様が描かれる。内外面共に灰褐色を呈し、胎土中には石英・長石を多く含む。04は口縁部の細片である。斜行する沈線が描かれる。胎土は03に似ている。05は縦方向磨消帯を設け、区画内には細かな平行沈線が斜方向に充填される。胎土・焼成は04・05と類似している。早期・三戸式段附と判断した。

06～10は同一個体の破片である。06では胴部に断面蒲鉾型の隆帯があがり、胴部下半との境を画する。上半部には沈線による文様が描かれる。下半は無文。07は突起部分の破片である。三角形に突出するもので、06の隆帯上に貼り付けられるものの可能性が高い。やはり上部には、沈線による文様が描かれる。08・09は格子目状に沈線が描かれる胴部上半の破片である。10は縦方向の条線を地文にし、細い沈線による格子目文様が描か

れる。いずれも胎土中に砂粒を多く含み、雲母の混入が目立つ。色調は外面淡褐色、内面は灰褐色を呈する。中期・阿玉台式と判断される。

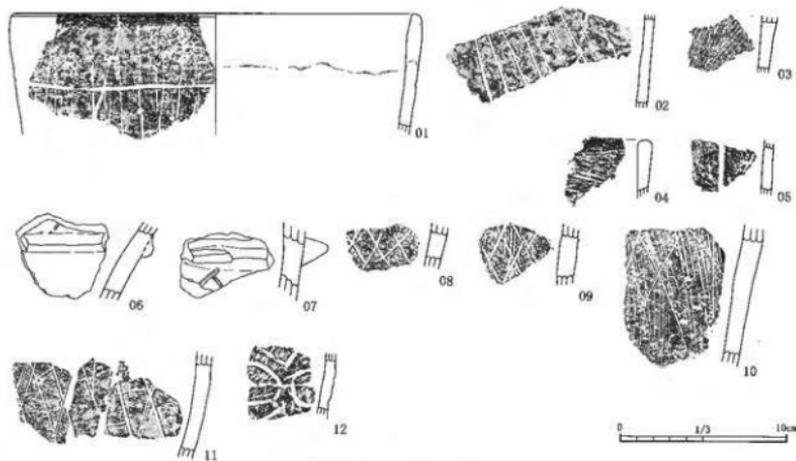
11は細い半截竹管により格子目状の文様が描かれる胴部辺である。器面は淡い褐色を呈するが、破断面は黒色で、焼成によるものであろう。後期・堀之内式か。

12は胴部の破片で沈線による4弁の花弁状の区画が設けられ、内面に網文が充填される。器色は外面暗褐色、内面は暗灰褐色。後期か、型式不明。



第11図 S104

1194
 1 黒色土 1.312g 4000 1.5x1.8 17.2g 17.2g 2000g
 2 赤褐色土 1.012g 4000 1.5x1.8 17.2g 17.2g 2000g
 3 灰褐色土 1.012g 4000 1.5x1.8 17.2g 17.2g 2000g



第12図 S104出土遺物

第2項 土坑（貝層含む）

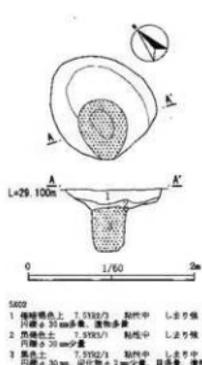
SK02（第13～15図・第2表・図版7・29・47）

1区E-1Gに位置する地点貝塚である。長軸方向N-1°-W。長径128cm、短径115cmの平面円形をなしたテラスが深さ25cmとなったところで、長径75cm、短径58cm、深さ75cmの平面円形、断面は柱状の掘り込みとなる。極暗褐色土から黒色土に至る3層からなり、第3層（黒色土）において、貝殻が充填されたような形状で出土している。

出土遺物には縄文土器1013.7g、弥生土器133.4g、土師器371.4g、礫614.9gがある。覆土中、特に第1・2層から多く出土している。

01は深鉢の胴部上半の破片であろう。外面には浅い条痕が施文され、上端部に絡糸体圧痕が施される。内面は横方向の条痕。胎土中には繊維を混入するが、全体に焼きは堅い。白色粒子の混入が目立つ。02は内外面共に条痕文が斜め方向に施文されるもので、胎土中の繊維混入量は多く、やや薄手で脆い。03は胎土中に繊維を混入する深鉢胴部の破片で、器面にはRLの縄文が縦方向に回転施文される。01～03は広義の早期・茅山式土器であり、01の条痕文土器に絡糸体圧痕が施文されること、並びに縄文の施文が見られる点から、茅山最終末段階と判断した。子母口式の可能性もあるが、縄文を比較的多用することから、前者と判断している。内面は浅い条痕が。

04・05は同一個体の破片である。胎土中には多量の繊維を混入するも、やや硬質である。内面に条痕の施文は観察されない。04の器面には、RLの縄文による施文方向を変えて羽状の構成を行う。上端部には降帯を貼付、降帯上には刺突列による刻みが施される。器色は外面暗褐色、内面は灰褐色。05は貼り付け帯部分の細片である。06は厚手で04・05に類似するが、やや節が細かいRLの縄文が縦方向に施文される。色調は外面暗褐色、内面は灰褐色を呈する。礫の混入は少ない。07は繊維を多量に混入するも硬質。やや薄手でLRの縄文が施文される。8は外面に浅い条痕が施文された後に、縄文が部分的に施文される胴部下半の資料である。繊維を多量に混入し、やや脆い。器色は外面橙色、内面は暗灰褐色。これらの資料は茅山式上層最終末段階から前期・花積下層式段階にわたる資料と判断した。



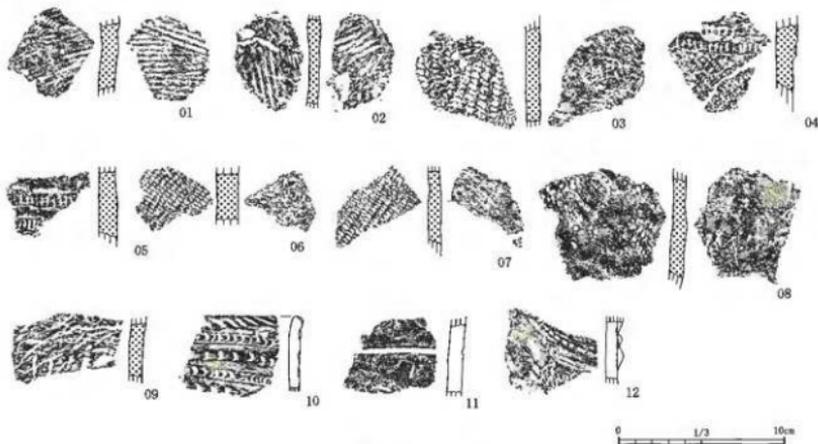
第13図 SK02

09は胎土中に繊維を混入する土器で、器面に網目状の捺糸文が観察される。胎土は内外面共に淡褐色を呈し、断面は中心部が黒く、サンドイッチ状を呈している。

10は波状を呈する口縁部の被底部の破片である。口唇部には刻目を有し、口辺部にはC字とD字の爪形文列が交互に施文される。胎土中には細かな砂をやや多く含み、外面灰褐色、内面は淡褐色を呈する。前期・浮島1式、もしくは諸磯b式と判断される。

11は胴部に横位の沈線が1条引かれる。胎土中に砂礫を多量に含むもので、内外面共に淡褐色を呈する。SI04の01～05と同一個体の可能性がある。

12は断面薄針状の隆帯による窓枠状の区画帯部を作り、内部に隆帯に沿って2条の角押文が施文される。中期・阿天台II式。



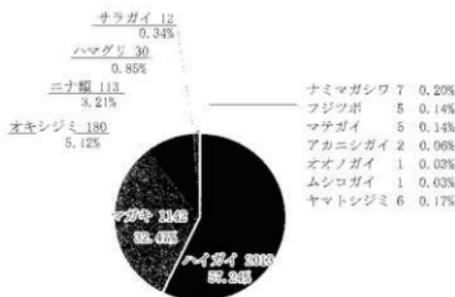
第14図 SK02出土遺物

貝類 分類ではハイガイが最も多く、次いでマガキ、オキシジミがまとめて出土しており、少量ではあるがサラガイ、マテガイ、ムシロガイ、オオノガイ、アカニシが出土している。サルボウ、アサリは検出されていない。これらの組成から判断される該期の自然環境は、比較的鹹水域に近い状況にあり、ハマグリは適量出土からも汽水域にはやや離れると判断される。しかしながら、マガキやオキシジミの生息域から見ても、内湾地域の貝組成と判断できる。

これらの状況は、本遺跡の東側に近接する赤苮堂遺跡東地区（大賀ほか2009）並びに西地区（同2011）で検出された前期関山式期の地点貝塚の組成とほぼ一致しており、本遺構は出土遺物及び貝組成からやや幅を持たせて、海進期の縄文時代早期末葉～前期中葉と判断される。出土土器のうち、前期末葉～中期の資料は上層の混在資料と判断するべきであろう。

第2表 SK02 貝類組成

	N	数	最少標本数
ハイガイ	3813	1893	2013
ハマグリ	30	30	30
オキシジミ	174	180	150
サソガイ	17	21	12
マガキ	1122	109	112
ヤマトシジミ	6	1	6
ナミマガシワ	—	—	1
マデガイ	—	—	5
ムシロガイ	—	—	113
フジツボ	—	—	8
オオノガイ	1	1	1
アカシシガイ	—	—	2



第15図 SK02 貝類組成

第3項 遺構外出土遺物

土器 (第16・17図・図版29・30)

早期 01は川縁が内湾気味に立ち、口唇直下に段を有す。内外面共によく磨かれ無文である。惣糸文系土器の最終木～無文系土器群の東山式の可能性がある。02～05は砂礫を多く含む土器で、細い集合沈線による格子目文様が描かれる。3戸式と判断した。06・07は胎土中に繊維を混入する土器で、内外面に条痕が施文される広義の茅山式土器である。08・09は茅山式最終木～下宮井式段階の遺物である。08には縄文が施文された上に筋条体疔痕が施文される。09は内面に条痕が施文され、外面にはRLとLRの縄文が羽状に施文される。いずれにも繊維の混入が顕著である。10は広義の茅山式土器の底部資料である。尖底に近い底部であるが先端部に小形の平坦部が見られるもので、鶴ヶ島台式土器と判断される。

前期 11～17は胎土中に繊維を混入する黒浜式土器の一群である。11は直前段反摺の縄文が施文され、円管の刺突列が垂下する。12は波状の平行沈線が横方向に施文される川縁部の破片である。植房式の可能性がある。13は羽状の縄文が施文される。14は直前段反摺の縄文が羽状を構成する。15は単節RLの縄文施文。16・17は同一個体であろうか、無節の縄文Rが施文される。18・19は口唇直下にC字の爪形列が巡るもので、浮島I式若しくは緒織a式土器であろう。20は平截竹管による刺突列が横方向に密に巡るもので、浮線状の貼付文の上には刻みが施される。13番掘式と判断した。

中期 21は隆帯により窓枠状の区画を設け、内部に細い角押列を斜方向に充填する。阿玉台I b式。22は区画帯に沿って細かな角押列が巡り、内部に同様の角押列が斜方向に施文される。やはり阿玉台I b式である。22に比べ薄手で別個体。23は胴部下半の破片。断面三角形の隆帯が弧状に巡る。阿玉台I b式。24は、断面三角形の隆帯による窓枠状の区画帯に沿って2条の角押文が施文される。阿玉台I b～II式。25は細い隆帯により弧状の文様が描かれ、内部に平行沈線、外面には有節沈線が巡る。阿玉台I b～II式。26は断面が丸みを帯びた隆帯がY字状に垂下し、隆帯に沿って幅広のキャタピラ状角押文が施文される。扇板式でも扉内3段階であろう。27は口縁部に渦巻状の隆帯が付される。加曾利E III式古段階。28は幅広の磨消懸垂文が垂下する。加曾利E III式。

後期 29・30・31は沈線による曲線状の区画帯の中に刺突列を加えるもので、称名寺2式。32は太い沈線による弧状の平行線が描かれる。地文は単節RL。後期前半の資料であろう。33は大型の深鉢川縁部である。

口縁はやや直線的に開く。器面には細く尖った条線が斜方向に描かれる。胎土は砂粒を多量に含んでおり、内面の磨きが顕著である。34は33同様の器形で、口縁直下にやや太い沈線により幾何学文が描かれる。内面の磨きは施されていない。33・34は後期初頭のものとして判断した。35・36・37は細い沈線による格子目文が描かれる。焼成が甘く、器面は淡褐色を呈するものの、破断面は黒褐色を呈する。33～37は壺之内式と判断した。38は紐線文土器である。口唇直下に紐線の貼付が施され、紐線中には指により押さえが施される。外面は縄文地文に横方向の沈線が描かれ、内面には口唇直下に沈線が1条巡る。加曾利B式と判断した。39も紐線文土器である。38に比べ薄手である。口唇直下に細い紐線の貼付が施され、紐線中には指により押さえが施される。外面はLRの縄文地文に斜方向の沈線が描かれる。内面には口唇直下に沈線が1条巡る。やはり加曾利B式と判断した。40は小形の精製土器である。横位に巡る4本の沈線がノの字形の文様によって切られる。加曾利B2式。41・42は薄手で内面がよく研磨される深鉢胴部の破片である。41では縄文Rのみ。42では縄文の地文に斜行沈線が施文される。いずれも加曾利B式土器と判断される。

土製品 (第17図・図版30)

43～46は土器片鏝である。43は胴部破片を横長の楕円形に整形し、長軸側の両端部にV字の紐掛の刻みが施される。器面にはわずかに縄目が観察されるものの、形式は不明である。44は43同様、楕円形を呈し、長軸側に刻みが施される。器面は剥落している。45はやや円形に近い小形の上唇片鏝である。器面は無文。阿正台式土器に見られる小形のものであろうか。46は楕円形を呈する。深鉢の胴部破片で、やや薄手である。刻みは長軸両端部と短軸側の片側のみに分られるもので、3方向に紐掛を有する特異な形状である。渡辺 誠氏の分類(渡辺1984)では該当するものはない。

47は土製円盤である。薄手の上唇片を素材として、周辺を打ち欠いて円形に整形するが、紐掛の刻みは施されない。器面には平行沈線が施文されるものであり、後期の資料であろうか。

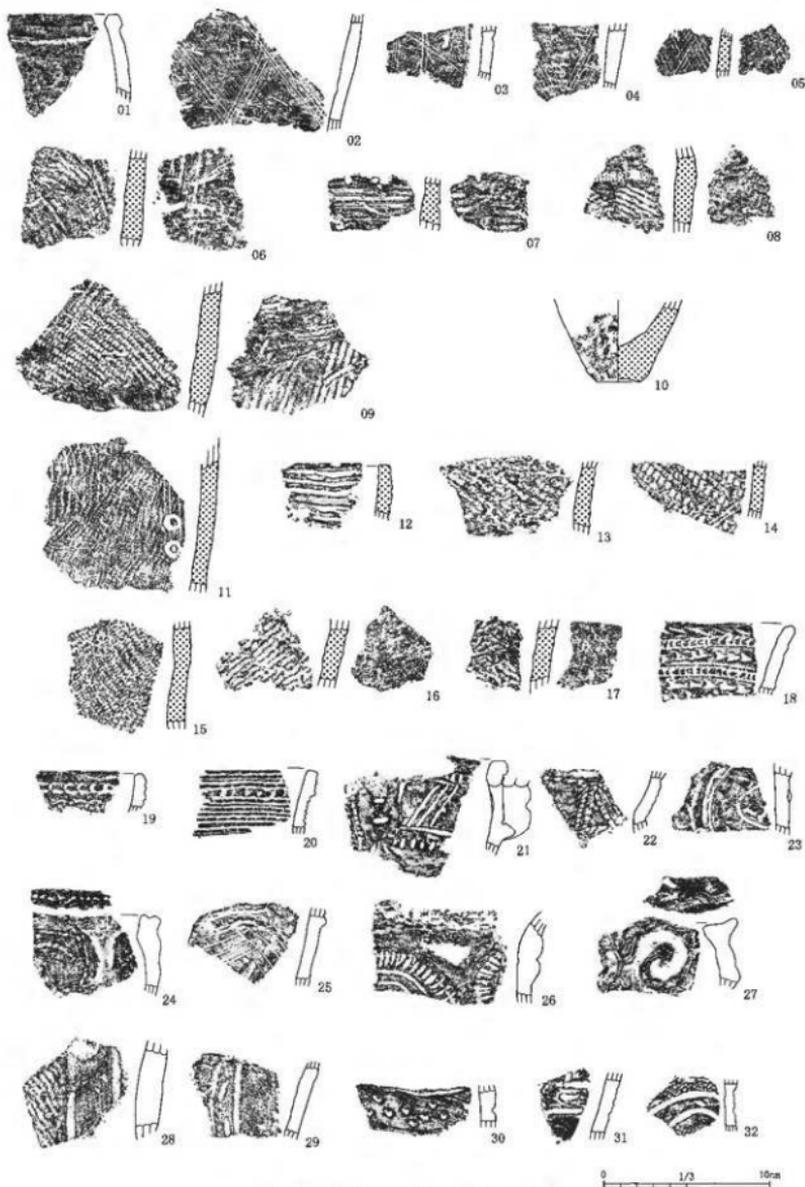
石器 (第18図・図版30)

01は方形の剥片である。腹面には節理に沿った剥離が見られる。素材は黒色緻密ガラス質安山岩。02はやや縦長の剥片である。腹面には一部表皮を残し、他方からの剥離面が残され、ポイントフレイク状を呈する。材質は珪質頁岩である。03は横長の薄片で、左側端部は折損している。また、剥離時に節理面からの剥落が観察される。材質はチャート。04は縦長の石刃。右側縁に表皮を残す。左側縁に細かな使用痕が残されている。材質は珪質頁岩。

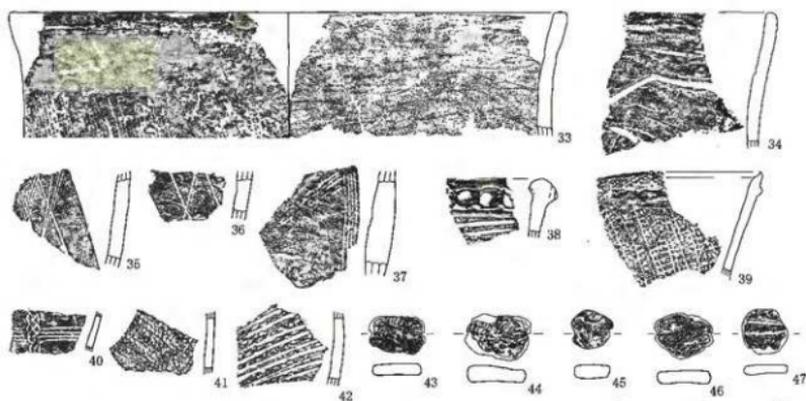
05は打製石斧である。扁平で三角形の自然礫の周縁に剥離を加え、小形の打製石斧に作り出している。両面ともに表皮を残す。材質は凝灰岩。

06は楕円形の自然礫の端部に、一方から剥離を加えて刃部を作り出す礫器である。基部側が欠損したためか剥離は周縁には及ばず、使用痕も見られない。材質は凝灰岩。

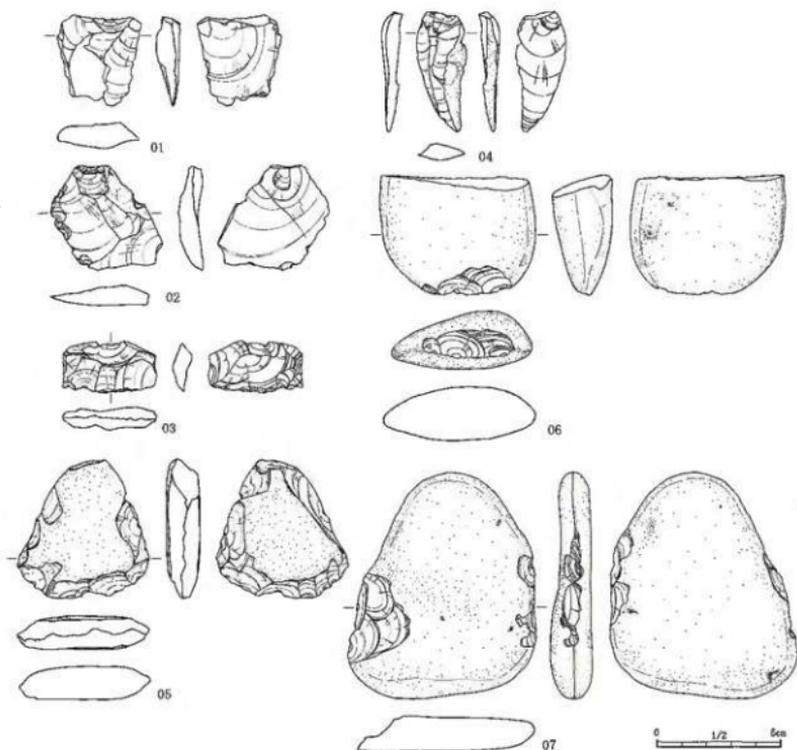
07は丸みを帯びた三角形の扁平な自然礫を利用するもので、両側縁部に打撃によるノッチを加えている。石鏝の可能性もある。材質は凝灰岩。



第16回 遺構外出土遺物（縄文・土器）

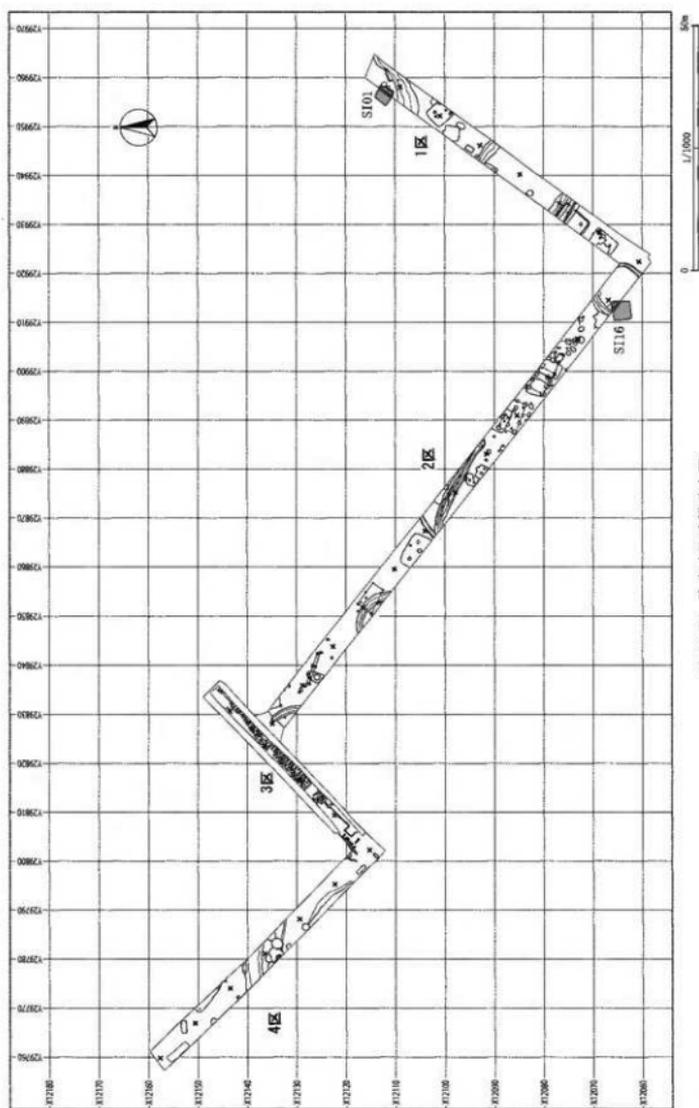


第17圖 遺構外出土遺物（縄文・土器・土製品）



第18圖 遺構外出土遺物（縄文・石器）

第3節 弥生時代



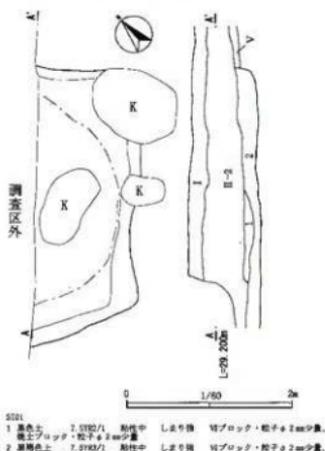
第19圖 弥生時代遺構分布圖

第1項 住居跡

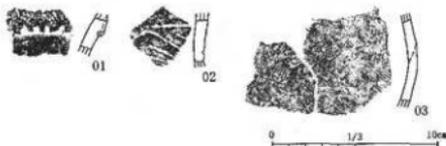
S101 (第20・21図・図版8・31)

1区A-16に位置する。調査区からは、遺構の東壁際付近が検出され、西側の大半が調査区外になっている。3つの木柱が遺構を壊している。規模は南北3.45m、東西現状1.20mの推定長方形で、深さは20cmである。調査範囲内では炉が検出されておらず北を主軸方向として扱う。主軸方向N-44°-E。覆土は黒色土・黒褐色土の2層からなるが著しい攪乱を受けているため明瞭ではなく、残存状況からレンズ状堆積と考えられる。硬化面の範囲は縁辺を除いた床面全体を覆っている。調査範囲内から柱穴・周溝・炉は検出されなかった。

遺物は弥生土器123.4gが出土した。01は壺の口縁部、折り返し部の破片である。口唇部は欠損する。折り返し部にはRLの縄文が施文される。また、同下端には円管状の刺突列が並ぶ。十王台1式直前の資料と判断される。02は壺の胴部破片。沈線による三角形を意識した幾何学文様が描かれる。胴上半部の破片であろう。胎土中には細かな砂が多く含まれ、焼成は普通。中期の土器であろうか。03は壺の胴下半部の破片。上半部との接合部分で、やや下膨れの形状を呈するものであろう。外面は全体に細かなハケメが施される。内面はナデ。胎土は砂粒を多く含み、薄手。弥生時代最終末から古墳時代前期の土器と判断される。



第20図 S101



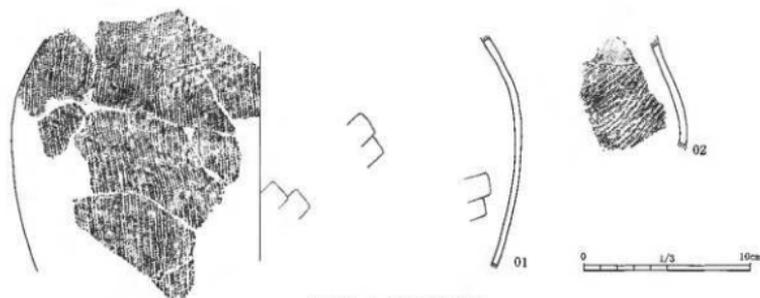
第21図 S101出土遺物

S116 (第22・74図・図版8・31)

2区M-N-26に位置し、調査区内においては北東隅部のみが検出され、遺構の大半は南側の調査区外となっている。15号墳に切られている。東西1.75m、南北1.65mの推定長方形で深さ26cmとなる。覆土は黒色土1層からなっている。炉が検出されていないため北方向を主軸とした。主軸方向N-4°-W。床は地山を直接掘削し構築したものである。

遺物は図示した弥生土器2点、123.9gのみで、床面上で検出された。01・02とともに壺の胴部破片である。01は胴上半でやや強く屈曲する。外面には付加条第1種の縄文が全面に施文する。02も胴上半のやや強く屈曲する破片。外面には、やはり付加条第1種の縄文が施文される。

出土遺物から、本遺構は後期前半と判断した。



第22図 S116出土遺物

第2項 遺構外出土遺物

土器 (第23図・図版31)

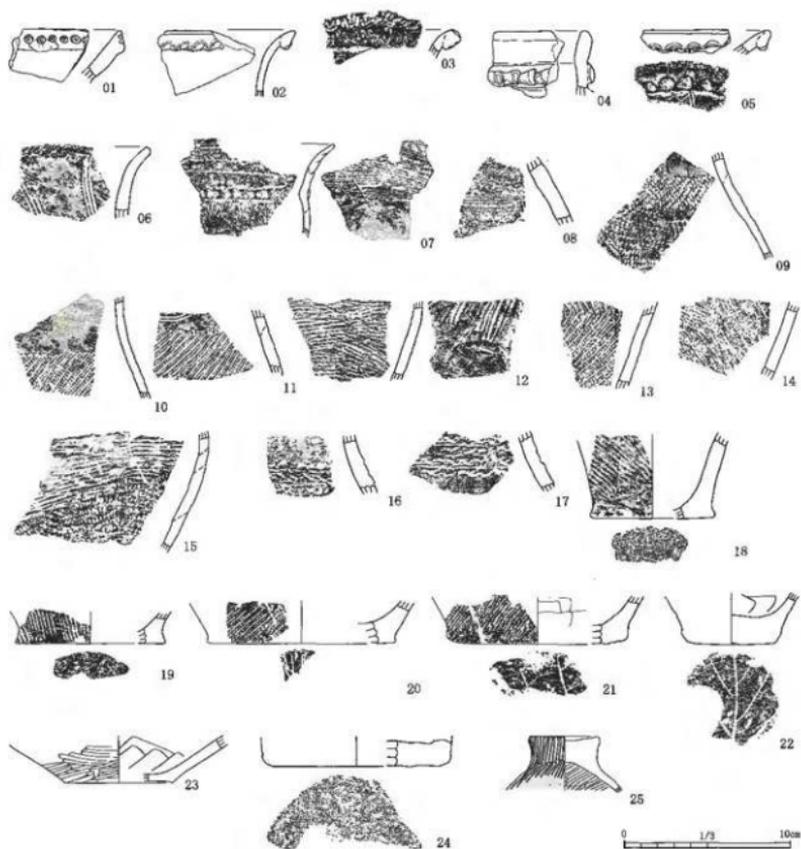
01～06は口縁部の破片である。01は外反して開く口唇部に円管の刺突列が並ぶ。02は外反する口縁で口縁部は折り返され、折り返し部には太い刻みが施される。03は02同様口縁部が折り返されるもので、口縁には細かな竹串状の工具による刺突が施される。また、口唇部にはLRの細縄文が施される。04は直立気味になる口縁部の破片。口縁や下位に隆帯が巡り、隆帯上には刻みが施される。05は口縁部で折り返される。口縁部には刻みが施され、直下に2本1単位の縦位平行沈線区画と斜格子文によるスリット状のヘラ描き文様が描かれる。06は緩やかに外反する口縁で、口縁から胴部にかけて3条1単位の沈線が描かれる。口唇部には細縄文が施文される。07は頸部付近の破片。薄手で焼成も良く、口縁部には輪積痕が意図的に残され、屈曲部には指による連続刺突が施される。外面胴部下半及び内面口縁部付近にはハケマが観察される。08は蓋の胴部上半の破片である。上から、横線文・波状文・横線文・波状文の櫛描き文が確認できる。

09～17は胴部の破片である。09では胴部上半にLRの縄文が施文され、頸部は無文。沈線は描かれない。10は09と同様。11は09・10と同様であるが縄文は付加条第1種となる。12は不完全な撚り戻しによる縄文を乱雑に施文する。13は付加条第1種の縄文を2種類用いて羽状縄文を施文する。14は器面の剥落が激しく不明瞭であるが、付加条第1種の縄文が施文される。15は上半で太いハケ、下半は付加条第1種の縄文が施文され、内面は磨きが観察される。16・17は胴部から頸部の括れ部分の破片で、Z字状の結節縄文が複数段横方向に施文される。

18～22は底部の破片である。下端部がやや突出する。18は外面に付加条第1種の縄文が施文される。底部には布目圧痕がある。19も同様であるが、付加条縄文はやや縦方向に施文される。底部は無文。20は斜め方向の付加条第1種が施文され、底部には木葉痕。21は20と同様で、やや径が大きい。底部は木葉痕。22は無文で底部に木葉痕。23は薄手の底部で、胴部は大きく球形に開く。内・外ともに無文。24は径の大きな底部。胴部下端は無文。底部には布目圧痕がある。

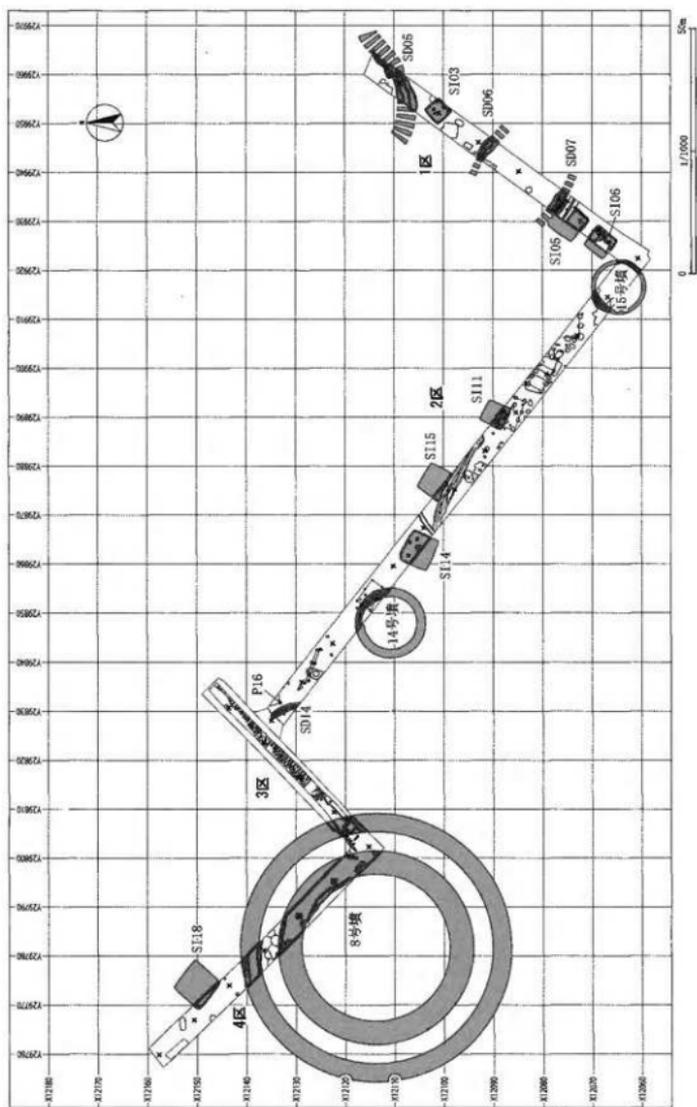
25は蓋の摘み部分である。蓋の底部を伏せたような形状で上部は緩やかに窪む。頂部は円筒状にやや高さを持った後、体部は緩やかに内湾して開く。内外面共にナデで、赤彩が施される。

これら、遺構外出土の弥生土器は、11が大崎台式直前の中期末葉、05・06は大崎台1式で後期初頭、07・08は後期末葉の十土台1式に比定されるもので、古式土器器型に供伴する可能性がある。付加条第1種の縄文を施文する土器は後期全般に見られ、明確に分類できない。東中横式に見られる突起部を有する資料は見られない。全体に、十土台式と判断できる土器が見られないことから、後期の古い段階にその中心があるものと判断される。



第23圖 遺構外出土遺物(弥生)

第4節 古墳時代



第24図 古墳時代遺構分布図

第1項 住居跡

S103 (第25・26図・第3表・図版9・32)

I区B-1-2、C-1-26に位置し、調査区外となっている東壁付近を除いて、遺構の大半が検出された。南北を長軸とする擾乱に北壁が壊されている。南北4.05m、東西4.10mの平面正方形で、深さは南壁際で47cmを測る。主軸方向N37°-W。北壁際を除いた床面全体に焼土及び炭化材が分布しており、このうち焼土は中央部に、炭化材はその周辺にまとまっている。覆土は4層に分層され、炭化材層が第3層、焼土が第4層である。焼土の厚みは5cm前後で床面直上に堆積している。施土家屋と考えられる。加溝は、幅18~36cm、深さ5cm前後を測り、調査区内においては壁際をほぼ全周している。北西隅に寄った床面には、長軸60cm、短軸43cmの平面楕円形で深さ11cmをした地床炉があり、覆土は単層で焼土を充填していた。

遺構西半分の床面が硬化し、床下には、幅30~50cm、深さ15cm前後をした掘方溝が断続的に壁際を巡っていた。ピットはP1~4の平面円形ピット4基が検出されているのだが、半柱穴は検出されなかった。P1は東側が調査区外であるが、長径現状45cm、短径38cmの推定楕円形で深さ34cmを測る。P2は長径40cm、短径35cmの推定円形で深さ61cm、P3は長径45cm、短径42cmの平面円形で深さ11cm、P4は長径35cm、短径32cmの平面円形で深さ38cmを測る。このうちP2の底面は硬化していた。

遺物は縄文土器1,091.1g、弥生土器375.9g、土師器(古墳時代前期)1,379.5g、鉄製品40.7g、纒(被熱破砕)465.0g、炭化物232.0gを検出した。1の土師器甕は床面上で検出、他は覆土中からの出土である。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。鉄製品のうち09~12は長頸鎌で、6世紀以降の所産と判断されることから、北東部の擾乱(あるいは土坑か)に由来するものと考えられる。



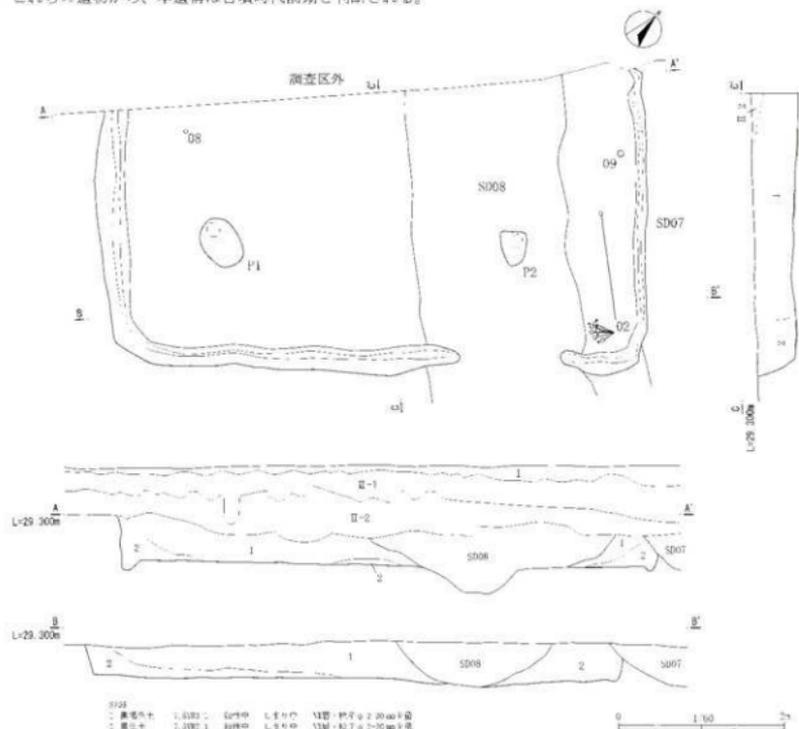
第25図 S103

S105 (第27・28図・第4・5表・図版9・10・32)

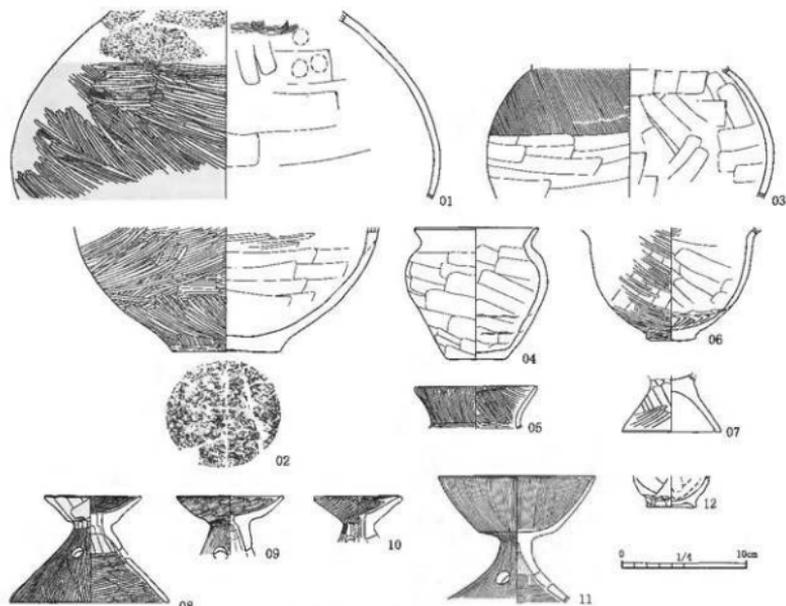
1区F 1・2Gに位置し、遺構の東側半分が検出され、西側は調査区外になっている。遺構の北壁付近を東西に走行するSD07・08によって切られている。南北6.55m、東西現状3.47mの平面推定長方形で、深さ50cmである。炉・カマドが検出されていないので主軸方向を北にあると仮定した。主軸方向N-45°-E。層上は黒色土から黒褐色に至るレンズ状をなした2層に分層される。床面は板ね地山を直接掘削して構築され、全体に硬化している。壁際に幅13～40cm、深さ5cm前後の周溝が壁際を巡っており、現況から全周していたものと判断される。P1は長径62cm、短径45cmの楕円形で深さ64cm、P2は長径40cm、短径30cmの楕円形で深さ53cmとなり、土柱穴となるものと判断される。

遺物は縄文土器818.7g、弥生土器620.3g、土師器(古墳時代前期)5,279.1g、土製品(縄文土器片鏢)12.2g、埴輪92.7g、礎(被熱破砕含む)2,360.0g、炭化物31.6gを検出した。土師器の出土量が多く、破片も大型のものが目立つ。主に覆土中からの出土であるが、02の土師器壺は北東隅、08の器台(ほぼ宍形)は西側、09の器台は北東壁際のともに床面上で検出された。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。



第27図 S105

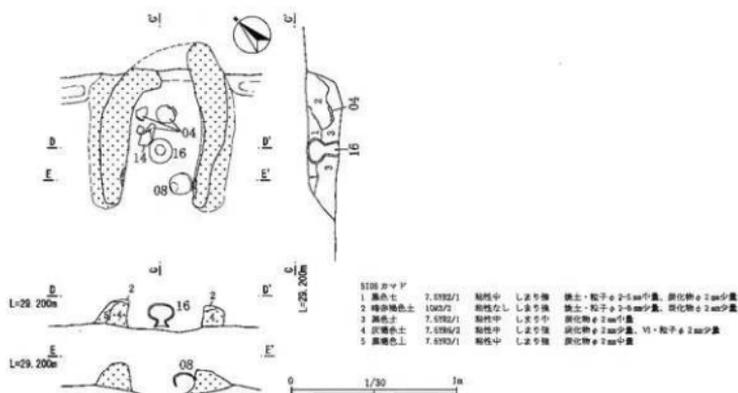


第28図 S105出土遺物

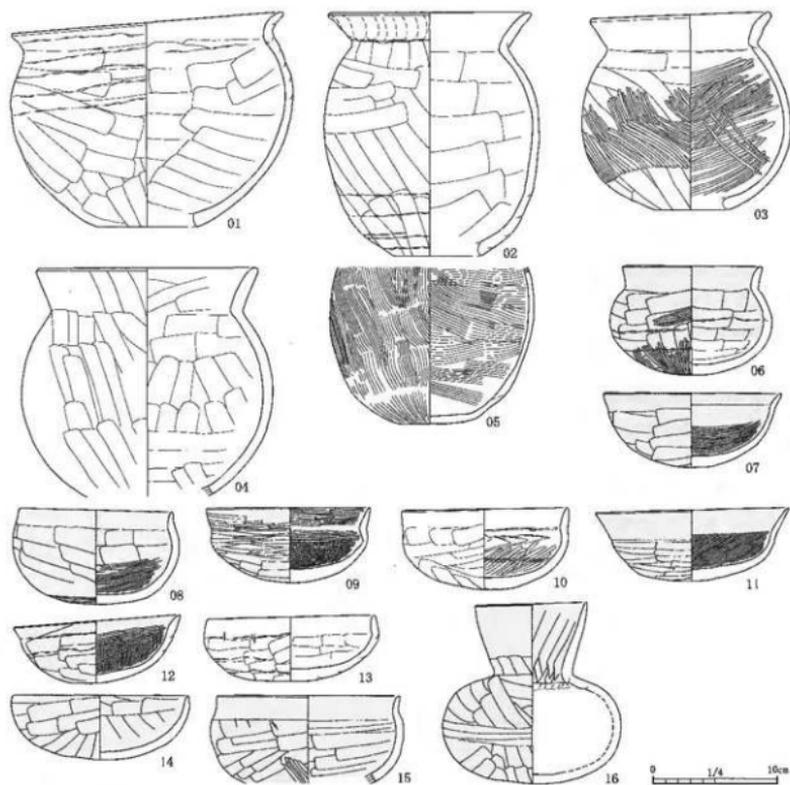
第4表 S105出土遺物観察表(1)

番号	注記	形状	種類	重量	口径	高さ	底径	形状の特徴	装飾の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	S105 No. 3-5-6 6・7・9・ 10・12 出土	土師鉢	浅	342.2	—	118.40	—	胴部中央から上半部にかけての裏側、胴部がやや内湾する。底部は平坦でやや内湾する。底部は平坦でやや内湾する。	外面胴部上半部には付知集第2巻の図で中世文から、半世は「下」ヘタによる彫刻の後、全周彫刻。底部が彫刻される。内面はヘタが打られるが、胴部の一部はヘタが打られる。	白色粘土多量	内面 100% 7/4 に近い 高焼 内面 100% 7/2 に近い 高焼	良好	胴部1/5 残存	胴部1/5 残存
02	S105 No. 3-5-6 6・7・9・ 10・12 出土	土師鉢	浅	550.5	—	118.00	8.7	胴部下半から胴部にかけての裏側、底部は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	上半部の裏面に磨きを付す。外面は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	白色粘土多量	内面 100% 7/2 程度 内面 100% 5/1 程度 高焼	良好 2次焼成	胴部1/5 残存	胴部1/5 残存
03	S105	土師鉢	浅	164.4	—	118.00	—	胴部を呈する胴部上半の裏側。	上半部に腹方向のヘタ彫刻を行った。胴部は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	自然土 多量、白 色粘土多 量、黒 色粘土多 量	内面 100% 7/4 に近い 高焼 内面 100% 7/2 に近い 高焼	良好 2次焼成	胴部1/5 残存	胴部1/5 残存
04	S105 No. 1 S105	土師鉢	小形深	330.8	8.8	118.00	5.6	底部は平坦。胴部は上半部から胴部にかけての裏側、口縁部で外反して丸く開く。	外面はヘタが打られる。内面はヘタが打られる。内面はヘタが打られる。	内面・白色 粘土多量 黒色粘土 多量	内面 100% 7/4 程度 内面 100% 7/4 程度 高焼	良好	胴部1/5 残存	胴部1/5 残存
05	S105	土師鉢	浅	17.8	(8.9)	118.00	—	胴部は底で重かたに上げ足が全長。口縁部で外反して丸く開く。	内面は底で重かたに上げ足が全長。口縁部で外反して丸く開く。	白色粘土多 量、黒色 粘土多量	内面 100% 7/4 に近い 高焼 内面 100% 5/1 に近い 高焼	良好	口縁部1/4	口縁部1/4
06	S105	土師鉢	浅	118.7	—	118.00	4.0	底部は平坦でやや内湾する。胴部は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	外面胴部はヘタが打られる。内面はヘタが打られる。内面はヘタが打られる。	白色粘土多 量、黒色 粘土多量	内面 100% 7/4 程度 内面 100% 7/4 程度 高焼	良好	胴部1/5 残存	胴部1/5 残存
07	S105	土師鉢	台付浅	78.4	—	118.00	7.9	胴部は底で重かたに上げ足が全長。口縁部で外反して丸く開く。	内面は底で重かたに上げ足が全長。口縁部で外反して丸く開く。	白色粘土多 量、黒色 粘土多量	内面 100% 7/4 に近い 高焼 内面 100% 7/4 に近い 高焼	良好 2次焼成	胴部1/5 残存	胴部1/5 残存
08	S105 No. 1 出土	土師鉢	筒内	213.2	7.8	118.00	8.48	受け部は下縁に磨きを付す。胴部は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	受け部は下縁に磨きを付す。胴部は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	黒色・白色 粘土多量 黒色粘土 多量	内面 100% 7/4 程度 内面 100% 7/4 程度 高焼	良好 2次焼成	胴部1/5 残存	胴部1/5 残存
09	S105 No. 2	土師鉢	筒内	75.6	(8.4)	118.00	—	受け部は下縁に磨きを付す。胴部は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	受け部は下縁に磨きを付す。胴部は底で重かたに上げ足が全長。胴部は底で重かたに上げ足が全長。	黒色・白色 粘土多量 黒色粘土 多量	内面 100% 7/4 程度 内面 100% 7/4 程度 高焼	良好	口縁部1/4 残存	口縁部1/4 残存

第4章 検出された遺構と遺物
第4節 古墳時代



第30図 S106カマド

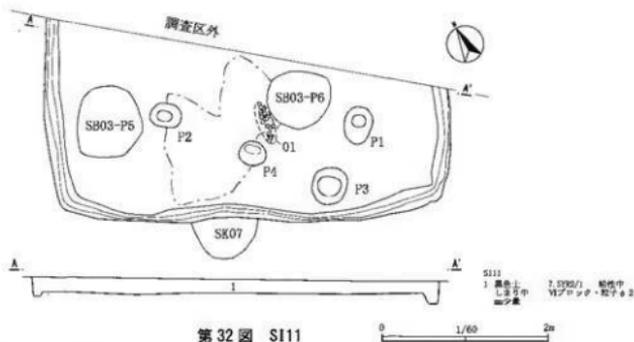


第31図 S106出土遺物

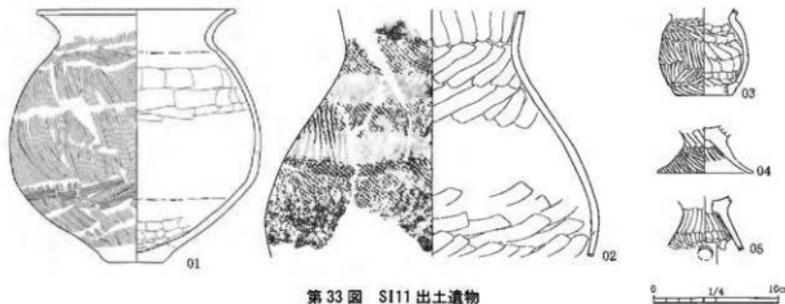
炉は検出されなかった。

遺物は縄文土器 357.3g、弥生土器 709.9g、土師器（古墳時代前期）1,511.9g、須恵器（平安時代）377.6g、埴輪 56.3g、礫（被熱破砕）65.0gを検出した。須恵器は9世紀前半のもので、重複するSB03関連の混在と判断される。01の上師器甕はほぼ完形で、中央部床面上で潰れた状態で出土。一部、SB03の柱穴P6に壊されている。他は覆土中から床面にかけて検出された。

これらの遺物から、木遺構は古墳時代前期と判断される。



第32図 S111



第33図 S111出土遺物

第7表 S111出土遺物観察表

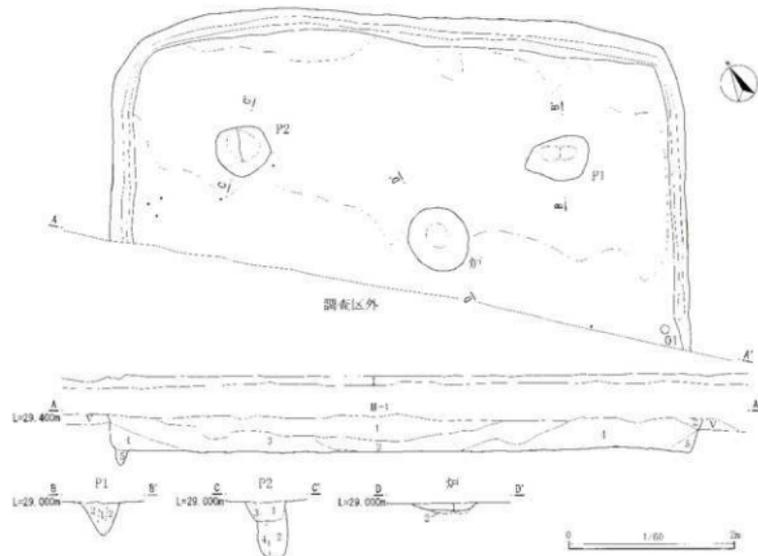
番号	形状	種類	材質	重量	口径	高さ	底径	器底の形状	器口の形状	胎土	色調	造法	残存	備考
1	No.01・03・04・05・06・07・08・09・10・11・12・14・15・16・17・18・19・22一断	土師器	黄	955.9	15.4	20.6	4.8	器底は内壁状にやや突出する平底。器口は縁部を以て傾斜した「く」の字に角張し、口縁部はやや曲がりあがる。	外周縁部はヘタナジ。器口はハナシ型。口縁部は内外共にヘタナジ。内面はヘタナジが行方。縁部下部に集合泡が観察される。	白色粘土少 量。赤目 7.5992	内外面 1/19 6/6 6.5 厚	二条破砕刀	無欠損	
2	一断	弥生	黄	528.3	—	(20.1)	—	器底は縁部でやや下曲る。器口は大きく角張して深く、口縁部は縁部を以て傾斜している。	外周縁部は3段に亘り垂直に縁部を覆った文が認められる。縁部地文の裏は磨かれる。内面はヘタナジが行方。胎土の観察が乏しい。	白色粘土多 量。赤目 1/19 6/6 6.5 厚	内面 2/19 1/19 厚縁部 外周 2/19 6.5 厚	良好	縁部一断部 上層	
3	一断	土師器	黄	56.0	—	(7.1)	(4.4)	器底は平底でやや下曲る。器口は中々ヘタナジ型を呈し、口縁部は縁部を以て傾斜して深く、口縁部は欠損する。器形は不明。	外周はミゴキ。内面はヘタナジ。	黄褐色少 量。赤目 1/19 6/6 6.5 厚	内面 2/19 1/19 厚縁部 外周 2/19 6.5 厚	良好	縁部 1/2	
4	一断	土師器	黄	81.8	—	(3.7)	7.7	器底は深く、器口は角張して深く、口縁部は縁部を以て傾斜している。胎土の観察が乏しい。	外周はミゴキ。内面は磨かれずは正装している。	白色粘土中 多量。赤目 1/19 6/6 6.5 厚	内面 2/19 1/19 厚縁部 外周 2/19 6.5 厚	良好	縁部一断 欠損	
5	一断	土師器	黄	80.3	—	(4.0)	—	器底は直線的に深く、器口は角張して深く、口縁部は縁部を以て傾斜している。胎土の観察が乏しい。器形は不明。	内面はミゴキ。内面はヘタナジ。	白色粘土中 多量。赤目 1/19 6/6 6.5 厚	内外面 2/19 5/6 厚縁部	良好	縁部上層部	

SI14 (第34・35図・第8表・図版11・34)

2区G-1・2Gに位置し、遺構の北半分が検出され、南半分は調査区外になっている。南北現状3.60m、東西6.85mの推定長方形で、深さは25～42cmを測る。主軸方向N-30°-E。覆土は暗褐色土から極暗褐色土に至る5層のレンズ状堆積である。床面は貼土を施し、炉付近から北壁際にかけて硬化している。調査区内では幅19～40cmの周溝が遺構の壁際を巡っていることから、調査区外でも続いて全周しているものと判断される。主柱穴はP1・2の2基が存在する。P1は長径70cm、短径40cmの平面楕円形で深さ63cm。覆土は黒色土を基調に2層が存在し、第1層が柱根となり、柱径8cmを測る。P2は長径65cm、短径59cmの平面円形で深さ67cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る4層となっており、第1・2層が柱根となり柱径は25cmを測る。炉は主柱穴P1・2の中間からやや住居中央に寄ったところに位置している。規模と形状は長径80cm、短径69cm、深さ11cmを測り、覆土は第1層の黒色土で、第2層は被熱したために明赤褐色土となった地山VI層と判断される。

遺物は縄文土器136.9g、弥生土器35.6g、土師器(古墳時代前期)1,166.5g、埴輪39.9g、礫(被熱破砕)25.7gを検出した。01の土師器塊は南側壁際の床面上で検出したが、第5層の三角堆積に含まれる。他は覆土中から山上した。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。



第34図 SI14

SI14		SI14-P1	
1 暗褐色土	7.010.4	柱根中	しまり層
2 黒色土	7.010.2	柱根中	しまり層
3 暗褐色土	7.010.1	柱根中	しまり層
4 黒色土	7.010.1	柱根中	しまり層
5 暗褐色土	7.010.2	柱根中	しまり層

SI14-P2	
1 黒色土	7.010.1
2 暗褐色土	7.010.2
3 暗褐色土	7.010.2
4 黒色土	7.010.1

SI14-P2	
1 黒色土	7.010.1
2 暗褐色土	7.010.2
3 暗褐色土	7.010.2
4 黒色土	7.010.1

SI14-P2	
1 黒色土	7.010.1
2 暗褐色土	7.010.2
3 暗褐色土	7.010.2
4 黒色土	7.010.1



第35図 S114 出土遺物

第8表 S114 出土遺物観察表

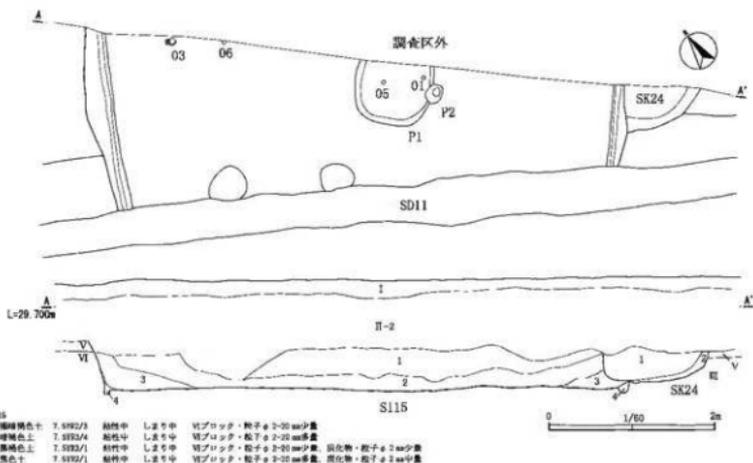
番号	比率	種類	形状	高さ	口径	底径	直径	形状の特徴	彫刻の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No. 05	土師器	碗	116.7	10.5	4.60	2.2	蓋部は小型の平底で、体物は縁や口の内側に立つ。	外縁部にはヘラツブシを行った筋。下部を磨し上半部はハケ磨きを行う。口唇部はツブナグ。内面はツブナグ。口唇部はツブナグによって上げ底状になる。	白色胎土、小礫や多量	白色胎土、2.5% 左右の赤い焼	良野	ほぼ完全	
02	一部	土師器	盤	26.0	(14.0)	(3.90)	—	縁部は欠損する。底面で「く」の字に類似した痕跡はやや残存。口唇部は磨き不足で、明確な金糸を伴わない。	内外面共にハケ磨き。縁部はツブナグは認められない。	白色胎土多量、小礫少量	内外面共に2.5% 程度の赤い焼	良野	口縁部破片	
03	一部	土師器	碗	63.7	—	(2.5)	0.2	底面は平底。縁部は大きく残存せず。上半から口縁部は欠損。	内外面共にハケ磨き。底面にもツブナグあり。外縁部には多少のツブナグによりハケが認められる。	白色胎土やや多量、小礫少量	内外面共に2.5% 程度の赤い焼	良野	縁部へ底面1/2	

S115 (第36・37図・第9表・図版12・34)

2区H-1・2, I-2Gに位置し、遺構の南側が検出されているが、調査区壁際でSK24に、また遺構の南壁をSD11に切られている。南北現状2.15m、東西6.10mの推定長方形で深さ45cmを測る。調査区内で炉・カマドが検出されなかったため、主軸方向を北として扱うことにした。主軸方向N-33°-E。土層は極暗褐色土から黒色土に至る4層からなるレンズ状堆積である。床面は全体に硬化しており、貼床が存在する。周溝は遺存している東西の壁際で検出され、幅14~34cm、深さ5cm前後を測る。調査区壁際の床下から土坑とピットが1基ずつ検出されている。P1(土坑)は、遺構の北側が調査区外となっているが、長径現状97cm、短径77cmの推定楕円形と判断される。P2は長径25cm、短径20cm、深さ10cmでP1を切っている。

遺物は縄文土器94.9g、土師器(古墳時代前期)1,371.4g、須恵器(平安時代)1点・9.2g、礫(被熱破砕)5.6gを検出した。須恵器は9世紀前半の無台坏で、SD11由来のものと判断できる。03の土師器甕と06の同器台は調査区壁際の床面上で検出、甕01と高坏05はP1覆土から出土したものである。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。



第36図 S115

第4章 検出された遺構と遺物
第4節 古墳時代

遺物は弥生上器29.3g、土師器(古墳時代前期)42.3gを検出した。確認面からの深さが浅く、トレンチャーによって半分ほどが切られているので、遺物も細片が少量出土したに過ぎない。弥生上器としたものは十王台式上器で、肩部に下向きの連弧文(2本1単位)、櫛掻き状文の下部に無文部分があるもの、極めて薄手のものなどが見られる。土師器には口縁端部が丸い甕が認められる。

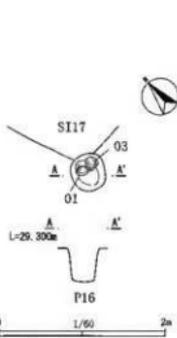
これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。

第2項 ビット

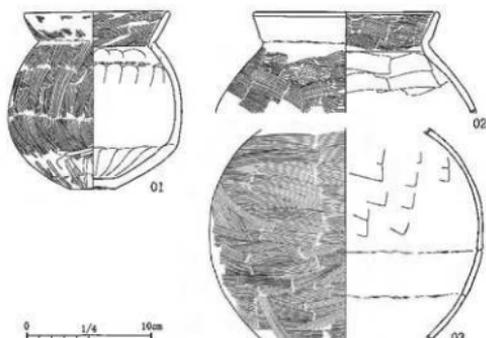
P16 (第39・40図・第10表・図版12・34)

2区C-1Gに位置し、SI17に切られる。直径42cm、深さ42cmの平面円形で、断面は筒形の柱穴状を呈する。覆土は黒色土を基調とする。中には土師器の壺01～03が埋まっていた。01は無傷の完形品で、口縁の上にやや傾いた状態で、覆土のほぼ中に位置する。02・03は成整形・ハケメ・状態から同一個体と見られる。確認面直下、01の上に位置し、03の胴部大破片は横倒しの状態であるが、覆土中の状態や破片の検出状況を見ると、埋設時から破片状態であったものと考えられる。これらの土器は古墳時代前期に位置づけられるものである。

南側にはほぼ同時期の溝SD14が存在するが、具体的な関連を指摘することは難しい。



第39図 P16



第40図 P16出土遺物

第10表 P16出土遺物

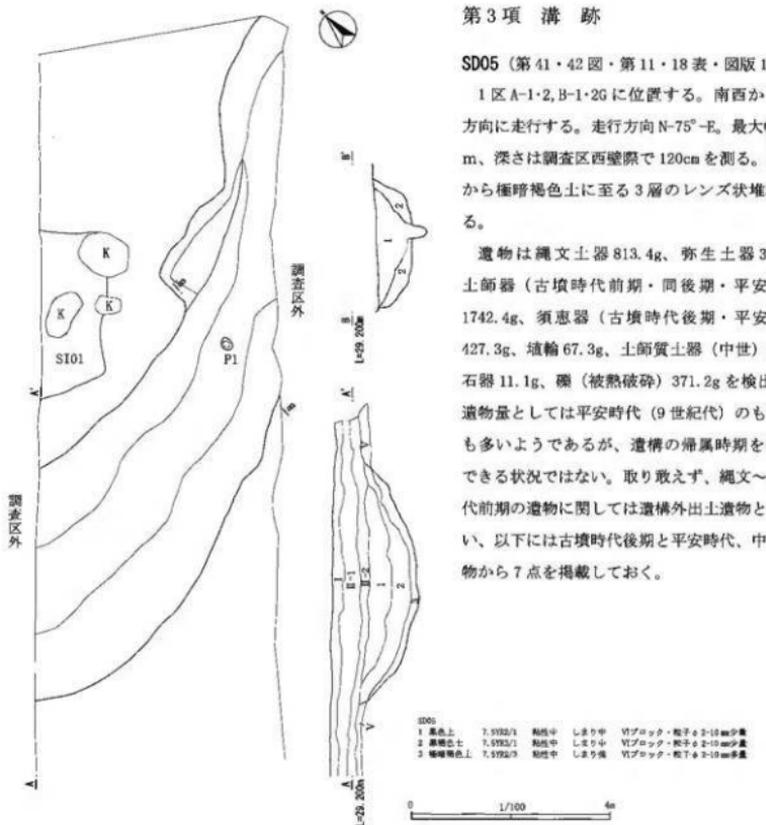
番号	住区	種類	形状	高さ	口径	器高	直径	器形の特色	器質の特色	胎土	色調	焼成	形状	備考
01	No. 01	土師器	壺	394.8	39.8	14.2	3.7	透眼は僅かながら輪が手に付く。胴部は下で大きく湾した後、1段で直線して1/2は直線になる。頸部は1/2のみに直線してやや受け突縁に開く。	外周胴部はツツ彫刻。下縁部は上げキギ行われ、ハケ彫は部分的に施される。口縁部は内外共にハケ彫の跡が少く、外周胴部はツツ彫、口縁部の内面には膠合痕がみられ、胎土の上部より下部では内面の彫物が残っている。	内面: 赤土 外周: 赤土 口縁部: 赤土	良野	完形		
02	一破	土師器	壺	155.8	(14.0)	(8.0)	—	ほぼ器形の複製。口縁及び胴部は欠損している。	外周は全面に横方向の細かなハケ彫。内面はヘラツグ。胴部中心と下部に膠合痕を有す。	赤土少量 白色粘土 少量多い	内面: 575 外周: 575 口縁部: 575	良野	口縁部一破 胴部欠損	02と同一 胴部と見ら れる。
03	No. 02 一破	土師器	壺	390.3	—	(17.0)	—	胴部は破損。頸部は直線して1/2のみに直線して直線。口縁部はツツ彫。内面口縁部はハケ。胴部はツツ彫。	外周胴部は横方向のハケ彫。口縁部はツツ彫。内面口縁部はハケ。胴部はツツ彫。	赤土少量 白色粘土 少量多い	内面: 575 外周: 575 口縁部: 575	良野	胴部一破 胴部欠損	02と同一 胴部と見ら れる。

第3項 溝跡

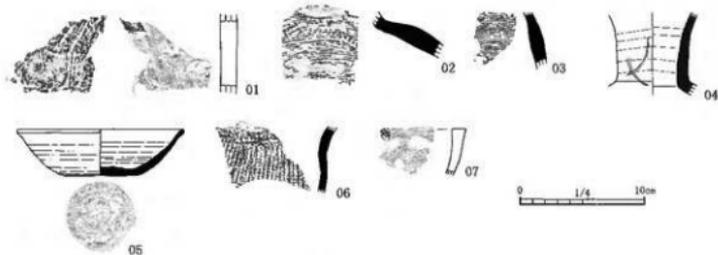
SD05 (第41・42図・第11・18表・図版12・34)

1区A-1・2, B-1・2Gに位置する。南西から北東方向に走行する。走行方向N-75°-E。最大幅3.35m、深さは調査区西壁際で120cmを測る。黒色土から極暗褐色土に至る3層のレンズ状堆積である。

遺物は縄文土器813.4g、弥生土器334.4g、土師器(古墳時代前期・同後期・平安時代)1742.4g、須恵器(古墳時代後期・平安時代)427.3g、埴輪67.3g、土師質土器(中世)19.1g、石器11.1g、礫(被熱破砕)371.2gを検出した。遺物量としては平安時代(9世紀代)のものが最も多いようであるが、遺構の層属時期を明確にできる状況ではない。取り敢えず、縄文~古墳時代前期の遺物に関しては遺構外出土遺物として扱い、以下には古墳時代後期と平安時代、中世の遺物から7点を掲載しておく。



第41図 SD05



第42図 SD05出土遺物

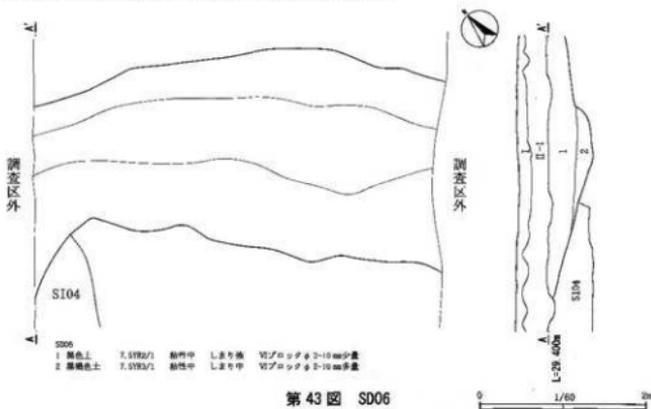
第11表 SD05 出土遺物観察表

番号	柱状	種類	形状	重量	口径	底径	高さ	器身の形状	器底の形状	胎土	色調	地質	保存	備考
02	1層	須恵器	短瓶	25.4	—	—	—	胴部は内湾し、頸部で湾が立ち上がる。	同心円状の溝き目。	白色胎子少量。	内径 2.57 5/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	体割破片	
03	1層	須恵器	短瓶	38.1	—	—	—	内湾する胴部破片。	同心円状の溝き目。	白色胎子少量。	内径 2.57 5/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	体割破片	
04	1層	須恵器	短瓶	92.6	—	08.50	—	胴部は「C」の字に屈曲して頸部に立ち、口縁部は横平か外反する片断は欠損している。	内径面は口部膨れ、胴部内面は線状の溝き目。	白色胎子や多量。	内径 2.57 5/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	口縁部・胴部欠損	内湾部は「C」の字に屈曲して頸部に立ち、口縁部は横平か外反する片断は欠損している。
05	1層	須恵器	甕台外	78.8	(13.2)	08.50	5.8	胴部は平直。体部は下縁部で丸みを帯び、中央部が膨らみ、口縁部は平直に内反する。	胴部は口縁部へ向かって膨らみ、口縁部は平直に内反する。	白色胎子・小量や多量。	内径 1.07 8/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	体割破片	
06	1層	須恵器	壺	24.9	—	—	—	胴部付近の破片。胴部は内湾し、頸部でやや外反する。	内径には線状の溝き目あり、内面は口縁部付近は内湾し、口縁部は平直に内反する。	胎土多い、白色胎子少量。	内径 2.57 5/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	体割破片	
07	1層	土師製土器	短瓶	19.1	—	—	—	胴部は口縁部破片である。口縁部は平直に内反する。胴部は平直に内湾する。	内外面共にナブ彫刻を行う。内面は線状の溝き目。	胎土多い。	内径 1.07 8/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	口縁部破片	

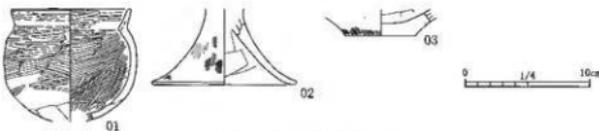
SD06 (第43・44図・第12表・図版12・35)

1区D-1-26に位置し、SI04を切り、東西に走行する。走行方向N-49°-W。最大幅は調査区東壁際付近で2.40m、深さは調査区西壁際で54cmを測る。黒色土・黒褐色土の2層からなる弱いレンズ状堆積である。

遺物は縄文土器354.7g、土師器(古墳時代前期)613.9g、須恵器(平安時代)1点・64.4g、襷(被熱破砕)82.7gを検出した。須恵器は9世紀代の甕胴部破片で、混入物と考えられる。後述のSD07と襷は類似しており、これらの遺物から、本遺構は古墳時代前～中期と判断される。



第43図 SD06



第44図 SD06 出土遺物

第12表 SD06 出土遺物観察表

番号	柱状	種類	形状	重量	口径	底径	高さ	器身の形状	器底の形状	胎土	色調	地質	保存	備考
01	1層	土師器	小形甕	69.8	9.5	09.10	—	胴部は平直な円筒。器底の形状より片持の可能性があり、胴部は厚形を呈し、口縁部は鋭角して「C」の字に内湾し、外反する。	外周縁部より口縁部にかけては「Z」字。外周縁部付近に縦方向の溝き目あり。内面は口縁部付近に溝き目あり。大口縁部あり。胴部下縁部は膨らみ、内面はへうたが、内面はへうたが。	胎土多い、白色胎子・小量や多量。	内径 2.57 5/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	口縁部1/8～体割1/5	
02	1層	土師器	甕片	84.2	—	06.0	11.6	胴部のみで上縁部は欠損する。胴部は鋭角に内湾し、外反する。	胴部は口縁部付近に膨らみ、内面はへうたが、内面はへうたが。	胎土多い、白色胎子・小量や多量。	内径 1.07 8/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	胴部1/4	
03	1層	土師器	壺	75.5	—	02.10	5.8	胴部は平直で胴部は大きく膨らみ立ち、口縁部は鋭角に内湾し、外反する。	胴部は平直で胴部は大きく膨らみ立ち、口縁部は鋭角に内湾し、外反する。	白色胎子や多量、小量や多量。	内径 1.07 8/16 高さ 1.92 2/3 1/16 裏戻	良好	保存下縁部	

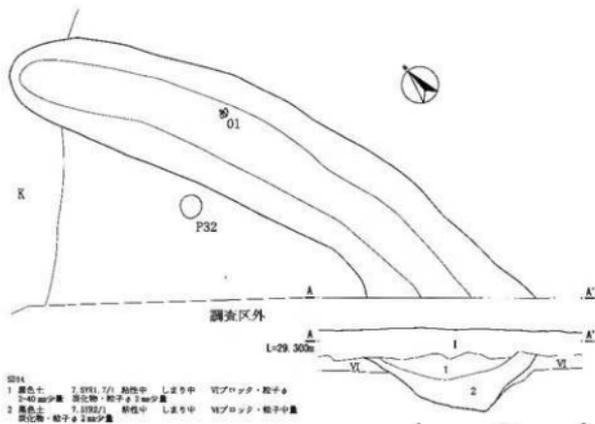
第13表 SD07 出土遺物観察表

番号	土器	種類	器種	数量	口径	底径	高さ	器底の形状	器底の形状	胎土	色調	形状	備考
01	一	土師器	甕	54.8	〔17.0〕	〔7.0〕	—	内底は深凹。腹壁で「く」の字に凹凸し、口縁部中央に片溝して置く。	外底部は緩いへつ形。口縁部は内外面にヨコナデ。内底部は緩い内底のへつ形の浅コゴゴガ。	赤土	内外面 10R 7/4 に近い黄褐色	片形	口縁部一枚 器上段 1/6
02	一	土師器	甕	35.2	〔16.0〕	〔5.1〕	—	腹壁は深凹。腹壁で「く」の字に凹凸し、口縁部中央に片溝して置く。	外底部は緩いへつ形。口縁部は内外面にヨコナデ。内底部は緩い内底のへつ形の浅コゴゴガ。	赤土	内面 2 10R 7/3 黄褐色 内面 10R 6/4 に近い黄褐色	片形	口縁部 1/6
03	一	土師器	甕	17.8	〔15.3〕	〔3.1〕	—	腹壁の腹りが強い。腹壁で「く」の字に凹凸し、口縁部中央に片溝して置く。	口縁部は内外面にヨコナデ。内底部は緩い内底のへつ形の浅コゴゴガ。	赤土	内面 10R 6/4 に近い黄褐色 内面 10R 6/3 に近い黄褐色	片形	口縁部断片
04	一	土師器	甕	10.8	〔15.0〕	〔3.0〕	—	腹壁は内側して大きく開き、口縁部は深凹して片溝する。	内底面中央にミガキ。口縁部は深凹して片溝して片溝する。	赤土	内面 10R 8/4 に近い黄褐色 内面 10R 5/3 に近い黄褐色	片形	口縁部一体 断片
05	一	土師器	甕	42.4	—	〔2.0〕	〔5.5〕	底面は平直。腹壁は大きく開き、器底中央に片溝の横溝部がある。	外底部は緩いへつ形の浅コゴゴガ。一部はへつ形が認められる。内面はへつ形の浅コゴゴガ。	赤土	内面 10R 6/4 に近い黄褐色	片形	腹壁下縁一枚 器上段 1/4
06	一	土師器	甕	35.4	—	〔1.0〕	〔5.4〕	器底は平直。腹壁は大きく開き、器底中央に片溝の横溝部がある。	外底へつ形。内面へつ形の浅コゴゴガ。	赤土	内面 10R 8/2 黄褐色 内面 10R 5/4 に近い黄褐色	片形	器底 1/3
07	一	土師器	甕	298.9	—	〔3.0〕	7.8	厚手・尖形の器底。腹壁は内側して大きく開き、器底中央に片溝の横溝部がある。	外底部は緩いへつ形の浅コゴゴガ。内底部はへつ形の浅コゴゴガ。	赤土	内面 10R 6/4 黄褐色	片形	器底断片

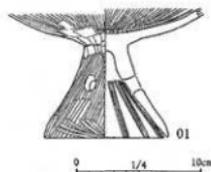
SD14 (第47・48図・第14表・図版12・35)

2区C-2Gに位置する。北端は擾乱により削平され、南端は調査区外となっている。走行方向N-22°-W。幅1.23～1.32m、深さ45～50cmで南北に走行する。覆土は黒色土2層からなるレンズ状地積である。

遺物は弥生土器12.4g、土師器(古墳時代前期)304.5g、埴輪33.4gを検出した。01は溝底からやや浮いた位置で検出されている。本遺構は古墳時代前期と判断される。



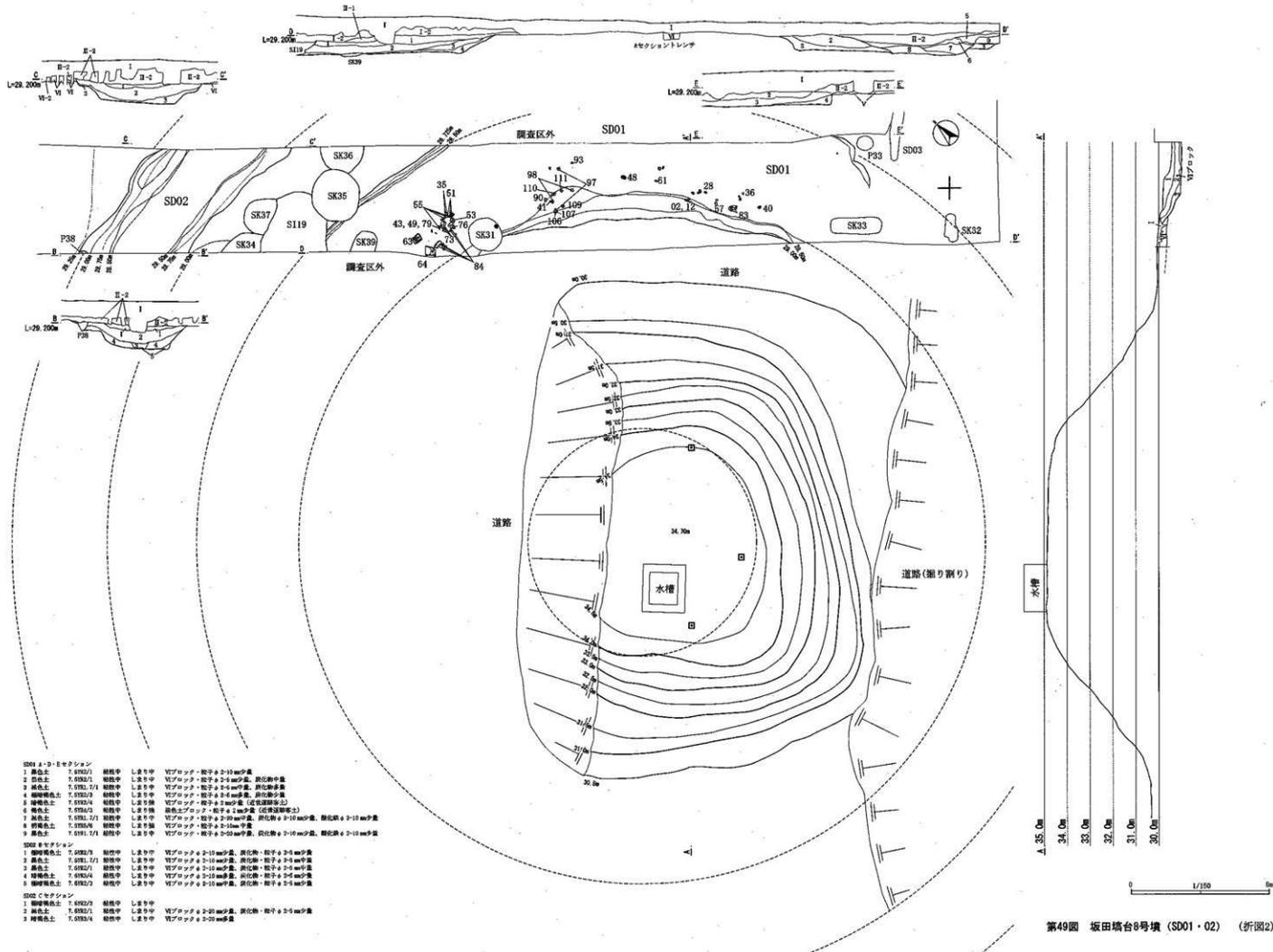
第47図 SD14



第48図 SD14 出土遺物

第14表 SD14 出土遺物観察表

番号	土器	種類	器種	数量	口径	底径	高さ	器底の形状	器底の形状	胎土	色調	形状	備考
01	一	土師器	埴輪	264.7	—	10.2	10.0	上端は大きく内側して開き、器底は平直で「く」の字に凹凸し、器底中央に片溝して置く。また、器底中央に片溝の横溝部がある。内底は緩い内底のへつ形の浅コゴゴガ。	器底は平直で「く」の字に凹凸し、器底中央に片溝して置く。また、器底中央に片溝の横溝部がある。内底は緩い内底のへつ形の浅コゴゴガ。	赤土	内外面 3/4 灰	片形	埴輪下縁一枚 器上段 1/2



- SD01 A-3-ドモーション**
- | | | | | | |
|---|------|-----------|-----|---------|--|
| 1 | 原状土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2-10 mm少量 |
| 2 | 原状土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2-10 mm少量, 腐化時中量 |
| 3 | 原状土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2-4 mm少量, 腐化時少量 |
| 4 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2-10 mm少量, 腐化時少量 |
| 5 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2 mm少量 (近置埋戻り土) |
| 6 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | 埋戻り土 - 掘削φ 2-10 mm少量, 腐化時φ 2-10 mm少量 |
| 7 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2-10 mm少量, 腐化時φ 2-10 mm少量 |
| 8 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2-10 mm少量, 腐化時φ 2-10 mm少量 |
| 9 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップ - 掘削φ 2-10 mm少量, 腐化時φ 2-10 mm少量 |
- SD02 C-ドモーション**
- | | | | | | |
|---|------|-----------|-----|---------|---------------------------------------|
| 1 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |
| 2 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |
| 3 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |
| 4 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |
| 5 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |
- SD03 C-ドモーション**
- | | | | | | |
|---|------|-----------|-----|---------|---------------------------------------|
| 1 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |
| 2 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |
| 3 | 埋戻り土 | T. 6192/3 | 掘削中 | L. 5000 | VFアロップφ 2-10 mm少量, 腐化時 - 掘削φ 2-4 mm少量 |

第49図 坂田城台8号墳 (SD01・02) (折図2)

第4項 古墳

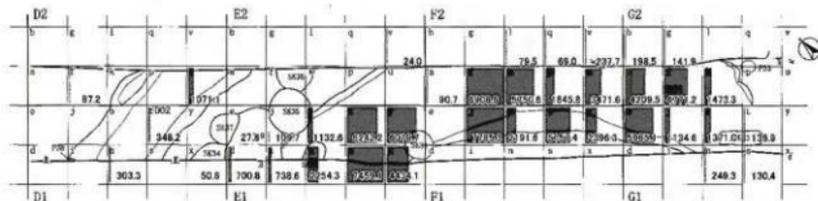
8号墳 (SD01・02) (第49～60図・第15・19～21表・図版13・35～40)

周知の古墳(坂田塚台8号墳、旧坂田8号墳〔岩崎1986〕・上坂田3号墳)である。調査区(4区)は墳丘北東側をかすめる形で位置し、遺構の大半は調査区外で、南側に隣接したところに墳丘が遺存している。墳丘側面の傾斜部は全体に土砂を削り取られた跡があり、墳丘は本来の形状からかなり規模を狭め、特に西側の消失が著しい。墳丘の平面形態は、調査区内で確認された墳丘裾部と周溝の形状と周辺の状況から川墳と考えられるが、調査区外(西～南側)に削平された前方部あるいは造出し部が埋没している可能性は排除できない。現時点では円墳としておく。ちなみに地権者によると、墳丘部が削られたのは大正時代の筑波鉄道の路線建設に伴う土砂採取によるもので、その際、石棺構築材と考えられる石材が多数掘り起こされたという証言があった。

第49図で見ると、表面を山砂で覆われた残存墳丘頂部の直径は現状で8.5mであった。調査区内では墳丘裾部と二重の周溝が確認された。内側周溝(SD01)は幅4.5m、深さ0.6m、中堤幅3.9m、外側周溝(SD02)は幅4.1m、深さ1.2mを測る。これによって、墳丘直径(周溝下端)30m、内側周溝の外径39m、外側周溝の外径55mの規模となる。また、周溝底部から残存墳丘部までの比高は6.2mとなる。墳丘の構築法は、裾部は地山削り出し(掘り込み)であるが、ほとんどは盛土(残存墳丘)と理解される。調査区内では墳丘構築前の旧表土や盛土部分は確認できなかった。裾部の斜面傾斜角は32°ほどであるが、墳丘構造が無段築であるか有段築成であるのかは、土取りの改変が著しくて現状の外観からは窺い知ることができない。また、確認し得た裾部上面や中堤上面も削平されているものと考えられ、埴輪埋設の掘方は確認されていない。

確認した遺構は、調査区内においては4区E・F・G-1-2Gに位置している。重複は周溝内外でSI19及びSK31～37、サク状遺構に切られており、SK39を切る。内・外側周溝ともに東側は攪乱(旧耕作と道)を受けて不明瞭となっている。周溝の覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなるレンズ状堆積である。

遺物はSD01とSD02の覆土中から検出されたものである。SD01からは縄文土器276.4g、弥生土器305.4g、古墳時代土器1,883.9g、同須恵器34.5g、埴輪106,573.4g、奈良・平安時代土器599.5g、同須恵器224.2g、近世土器33.0g、現代陶器50.6g、現代瓦212.2g、石器6.7g、絹雲母片岩406.0g、礫3,379.2gが出土、SD02からは縄文土器305.5g、弥生土器109.1g、古墳時代土器656.3g、同須恵器119.4g、埴輪7,155.9g、奈良・平安時代土器130.7g、同須恵器78.8g、近世陶器20.4g、現代陶器9.6g、石器0.5g、絹雲母片岩105.4g、礫705.4gが出土している。墳丘を含めて削平を受けているので、厳密な埋没時期は判断できないが、長期間にわたる出土遺物は、古墳の周溝として開口していた遺構の特性を示しているよう。土器・須恵器は細片ばかりで、主体となる時期や古墳に伴うものを判断することが困難な状況である。比較的大型の破片は図示した須恵器甕や、遺構外出土遺物に掲載した第65図01・02の古墳時代前期の土師器壺である。また、赤彩の土師器破片もあり、



*小グリッドは1辺2m。

*ゴシック体数字は各小グリッドごとの発掘出土量(単位g)。

*網かけは各出土量を相対的にグラフ化して表現したもの。

第50図 8号墳調査区小グリッド及び埴輪出土分布図

土師器は古墳時代前期から後期初頭にわたるものが認められる。

本古墳に伴う遺物の主体は多量の埴輪である。出土状況(第50図)は、SD01では墳丘寄りに偏り、溝底からかなり高い位置で検出されている。ほとんどが第1層に含まれ、第2層の堆積後に墳丘側から崩落したものと考えられる。平面的な分布は、北西から南東までの墳丘寄りに、多少の濃淡を見せながらほぼ方遍なく広がっており、本来の円筒埴輪の設置箇所(墳丘テラス)からの自然崩落・堆積と判断できる。一方、SD01の外側は分布が薄いか皆無であり、北西側(E1-d・i・j・n・o)の分布は後世の遺構分布と重なり、これらの構築によって移動したものと見なせる。さらに、SD02では内側(墳丘側)に偏っており、SD01外側の分布状況と合わせて、中堤の外側に埴輪列があったものと考えたい。出土量から、墳丘上に比べてかなり疎らな配列であったと想定される。また、口縁部・底部破片の出土量が少なく、自然崩壊による原位置での口縁部落下、底部の残存(その後、墳丘もろとも削平・移動)の状況を表していると考えられ、63・64の様な大破片から2、3cm大の細片までさまざまであるが、そこに意図的な抜き取りや破砕行為を想定する積極的な根拠は見出せない。

埴輪 円筒埴輪のみで総重量113,729.3g(SD01とSD02の合計)、形象埴輪は1片も検出されていない。これらには、いわゆる普通円筒埴輪のほか朝顔形埴輪が含まれる。後者の識別は、口縁部～肩部形状の確認以外は前者との判別が容易ではない。したがって、明らかなもの以外は円筒埴輪として記述をする。また、すべてが破片資料で、底部から口縁部まで接合・復元できた個体はない。したがって、出土状況や接合結果による個体識別は困難な資料状況であり、図示したものは同一個体の破片を含んでいる可能性が十分にある。

資料から認識される製作法(注1)は一様ではなく、各属性の組み合わせをもとにA～G類の7つの同用品を認定した。認定(分類)作業に当たっては、製作者の癖が如実に反映されている「突帯の成・整形手法と形状」を第一の手掛かりとして、これに対応する「外面調整手法」「ハケメ」「内面調整(成形)手法」の組み合わせを確認して各類型を設定した。突帯部分が残らない口縁部・底部などの他の部位については、後者の調整手法とハケメが一致するものを同一類型とした。結果、突帯間隔設定技法を用いたA～F類と、いわゆる「断続ナデ」による突帯貼付を行ったG類に大別でき、前者を「I群」、後者を「II群」とした。両者の出土量はI群112,153.1g(全体の98.6%)、II群1,576.2g(同1.4%)である。胎土は全類型とも基本的に同じで、白雲母の細片を多量に含有する。これの由来と考えられる絹雲母片岩(筑波石)の破片も認められる。他の含有鉱物には長石・石英があり、その他、赤色粒子(スコリア)が目立つ。個体によって、若干の違いが認められるのは黄褐色粒子の含有量である。この含有物は鉱物でも岩石でもなく、不純物を含み、「土器状」である。周辺の胎土と同等の硬度を持っている。

成形についても、全類型とも粘土積み上げ(紐づくり)によって祖形成形をしている。確認できたものでは、基部は粘土帯を用いており、底部から粘土積み上げのものはない。

また、焼成・発色(色調)に関しても類型による違いはなく、相対的に軟質の焼き上がりのものとやや硬質のものがあり、前者が大半を占めている。前者は暗めの発色(赤褐色)を呈するものが多い。後者は明るい発色(橙色、明褐色)で、断面に還元色を呈する。黒斑は確認できず、窯害による酸化雰囲気での焼成である。

個別の資料は実測図と観察表を参照されたい。以下には各類型の属性をまとめていく。なお、提示した実測図はすべて反転実測によるものである。

(1) I群

A類 (1～36)

成形・器面調整 基部粘土帯は幅(高さ)5～6cm、粘土帯成形時の作業台(板口)圧痕を残すものがある(35)。粘土紐積み上げ間隔は2～3cm、胴部器壁厚は10～15mmを測る。資料の残存状態が悪く、乾燥単位の把握は不明瞭である。しかし、外面調整が上下段で連続しないことや、断面・破損面の観察から、乾燥単位は一段ごとであり、乾燥単位面は概ね突帯付近に想定できる。

外面調整(注2)はタテハケ(1次)であるが、2次ヨコハケを加えるものがある(24～26)。このヨコハケは連続的なもので、「B種ヨコハケ」に分類される。25から段間(ややト寄り)を1周で充足するもので、器面の凹凸によって若干波打つものの、比較的安定した水平走行を示している。25には2か所(間隔約6cm)、26には1か所の静止痕が認められ、右に15°程傾いている。これらの特徴は、一瀬和夫分類(一瀬1988)の「Bd種」に該当する。タテハケは上下の段で連続しないので、一段ごとに施し、突帯調整のヨコナデに切られる。ただし、第4段と朝顔形の肩部・口縁下半部のタテハケは下位の突帯のヨコナデを切るかたちで、ハケメの開始点の当たりが観察される。したがって、成形・調整・突帯貼付の手順は、一段ごとに粘土紐の積み上げ・成形・外面タテハケ調整→第4段まで成形→第3段タテハケ調整・第3突帯貼付→第4段タテハケ調整と考えられる。第1・2突帯の貼り付けは各段の調整後か、複数突帯が同時に行われるのかは不明瞭であるが、突帯の剥落するもの存在と、調整・突帯貼付の手順を考えると、3条の突帯は同時に貼り付け行為をしたものと見ておきたい。

突帯の貼り付けに際しては、突帯間隔の設定、つまり割り付けを行う。突帯の剥離面には、いずれもタテハケを切る凹線(幅3mm、断面方形、2条一組)が確認でき、また、突帯の上面や上方の器表面に断面L字形の工具の擦痕が観察できるものがある(25・27・33)。この凹線は突帯間隔設定技法の器面痕跡(鎌方1997・辻川2003)と判断できるもので、走行はやや蛇行する部分もあるが、突帯の上縁の高さに位置している。後者の擦痕もやはり、同技法に伴う痕跡と思われる。ただ、すべての突帯の上面に確認できる訳ではなく、確認できないものはヨコナデによって消されたためと考えたい。これらの痕跡は、鎌方止樹氏が想定する工具を用いた行為によるものと同じで、凹線と擦痕は対となる痕跡と判断される。上記の凹線の蛇行も、下位の突帯の蛇行に対応するものと考えることができる。また、同様の凹線が口縁端部の0.5～1.5cm下に周回する個体がかかりあり、口縁部調整のヨコナデが被ることから不明瞭なものもある。断面方形の形状から同じ工具で付けられたものと思われるが、凹線はほぼ1条で、第3突帯や第4段外面に上記の擦痕が確認できるものがない。これを、口縁部高を揃えるための印と指摘する意見もあるが、口縁部資料が不十分なために判断できない。

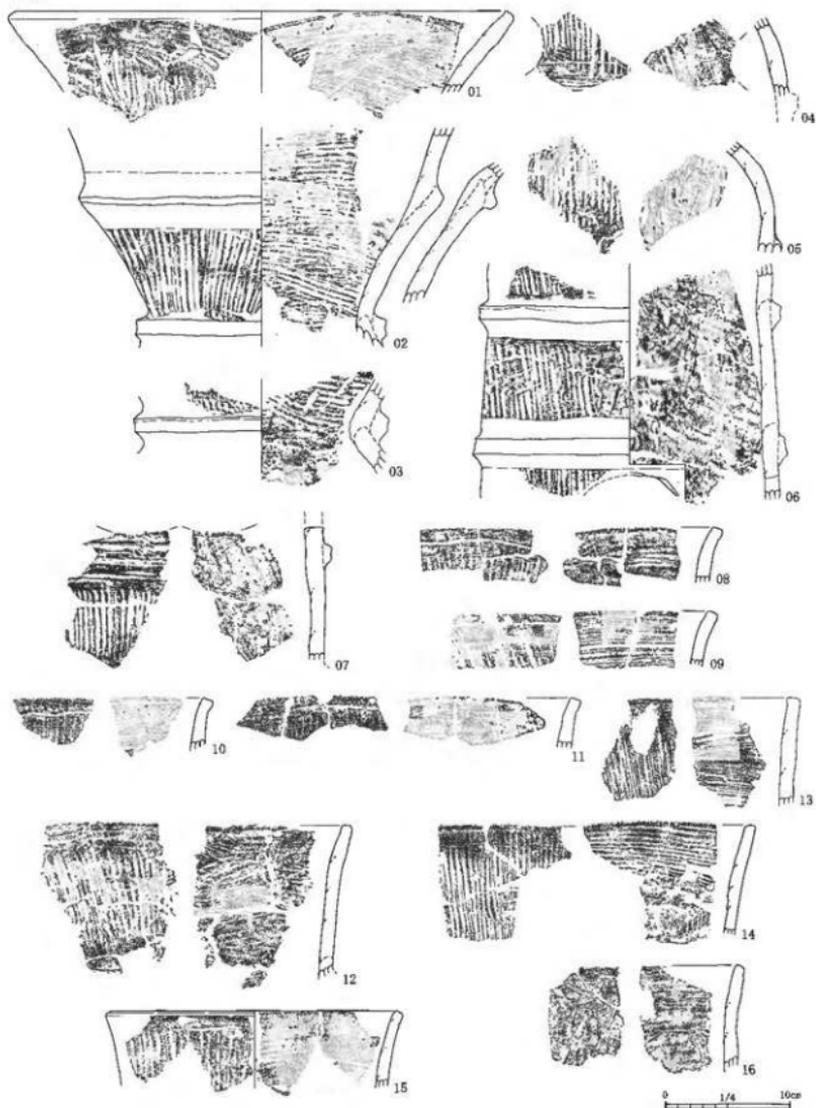
内面は左上がりの指ナデ成形ののち、口縁部(第4段または同段上半部)にのみ手動のヨコハケ調整を施す。底部は自重による歪みをそのまま残している。底面には断面円形の棒状圧痕が認められるが、作業台・敷物等の具体的な状況を把握するには至っていない。

朝顔形埴輪についても基本的に同様な製作手順を踏むものと考えられる。口縁部の成形に際しては、頸部と口縁下半部に乾燥単位面があり、02は下半部の擬口縁をそのまま突帯状の外形に成形している部分と、突帯を改めて貼付している部分が共存している。外面はタテハケ、口縁端部付近に左上がりのハケを施し、口縁部内面には手動のヨコハケを施している。頸部の突帯剥離面には凹線は認められない。

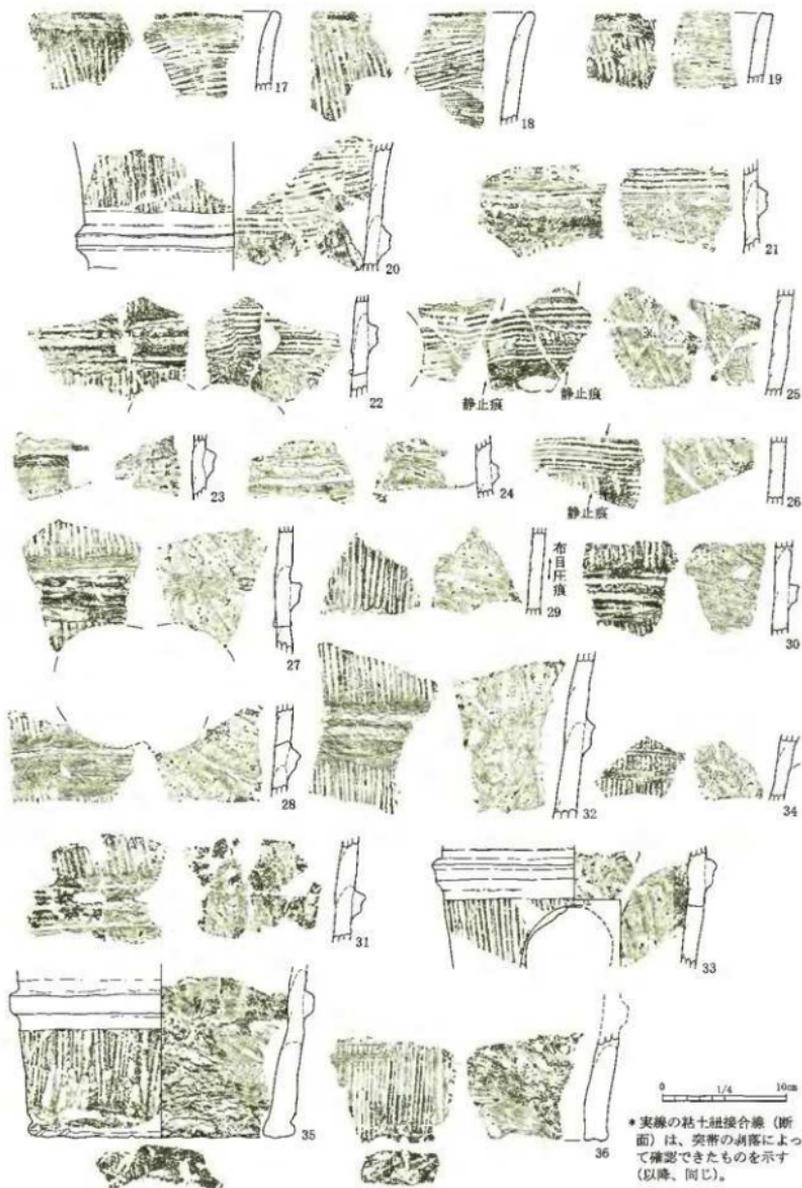
形態・法量 全体形が判明する個体はないが、他の類型との比較から、3突帯4段構成と見てよいだろう。大小の規格差はなく、口径22.3cm(平均)、底径21.4cmを測り、底部から口縁部まで直線的に開く逆台形に復元される。各段の高さ(注3)は、底部(第1段、35)11.1cm、胴部(段不明、06)10.5cmであり、口縁部(第4段)は11～12.0cmと推定される。

朝顔形埴輪の胴部は内傾し、裾広がり形態を示す。小美玉市の玉里権現山古墳例(小林輔2000)と同様である。

A類



第51図 8号墳出土土埴輪A類(1)



第52図 8号墳出土土織帛A類(2)

胴径は24.2cm。肩部には緩やかな丸味を持ち、口縁部は大きく滑らかに外湾する。

口縁部形状 すべて直線的に外傾する。端部調整のヨコナデはそれほど入念ではなく、ナデ幅は2～3cmと比較的広い。内面がやや窪むものの、端部は面を作るものと丸くなるものがあり、形状は不安定である。19はナデ幅が狭く、端部が窪み、木型型ではないかも知れない。朝顔形埴輪の1も同様で、端部形状は直線的で丸く納めている。

突帯形状 幅約2.5cm、高さ約1cmの重厚感のある大きさで、断面M字形に近い形状を示す。上面と下面のヨコナデが最終的に加えられ、上下の稜は丸味を帯びて端面に粘上が被る、独特な形状を呈している。前述のとおり、貼り付けに当っては、突帯間隔の設定が行われる。

透かし孔 確認できたものは、すべて円形と推定されるものである。切り抜きはすべて右回りで、無調整である。第2・3段に互い違いに配置するものと推定される。また、朝顔形埴輪の肩部にも穿孔する(04)。

ヘア記号 19の口縁部外面に2本線の斜線が記されている。「X」字を呈するものであろうか。

B類 (37～49)

本類型に分類し得た資料数が少なく、属性の把握が1分ではない。朝顔形埴輪は認識できなかった。

成形・器面調整 基部粘上帯は幅約6.5cm、49には内面に、粘土板成形時の掌紋圧痕が確認できる。粘土組織み上げ間隔は約3cm。胴部器壁厚は9～13mmと薄手であり、本類型の特徴である。乾燥単位は、外面調整が上下段で連続しないことから、A類と同じく一段ごとと考えられる。

外面調整はタテハケのみ。タテハケは突帯ヨコナデに切れられ、A類に認められた第4段のタテハケと突帯ヨコナデの前後関係については確認できない。また、現状で突帯の剥落は確認できない。ヨコナデが強く丁寧で、低い形状が原因であると思われる。ただ、破損面に間隔設定の凹線がわずかに確認できるものがあり(未掲載)、突帯上面の痕痕を残すものがある(44・45)ので、木型型も突帯間隔の設定が行われているものと見てよい。

内面は、ヨコナデあるいはヨコハケのちにタテナデを強く施す特徴的なもので、板状の工具(ハケメを表すものあり)を用いたと考えられる資料もある。口縁部のヨコハケはない。底部は内面下端に手動的なヨコケズリが加えられている。木型型とF類のみ見られる。右下がり方向で、これに伴う粘土のはみ出しが底面側に観察されるので、倒立して行ったものと解釈される。外面下端と底面は無調整で、底面には棒状物あるいは植物の茎・繊維状の圧痕が認められる。

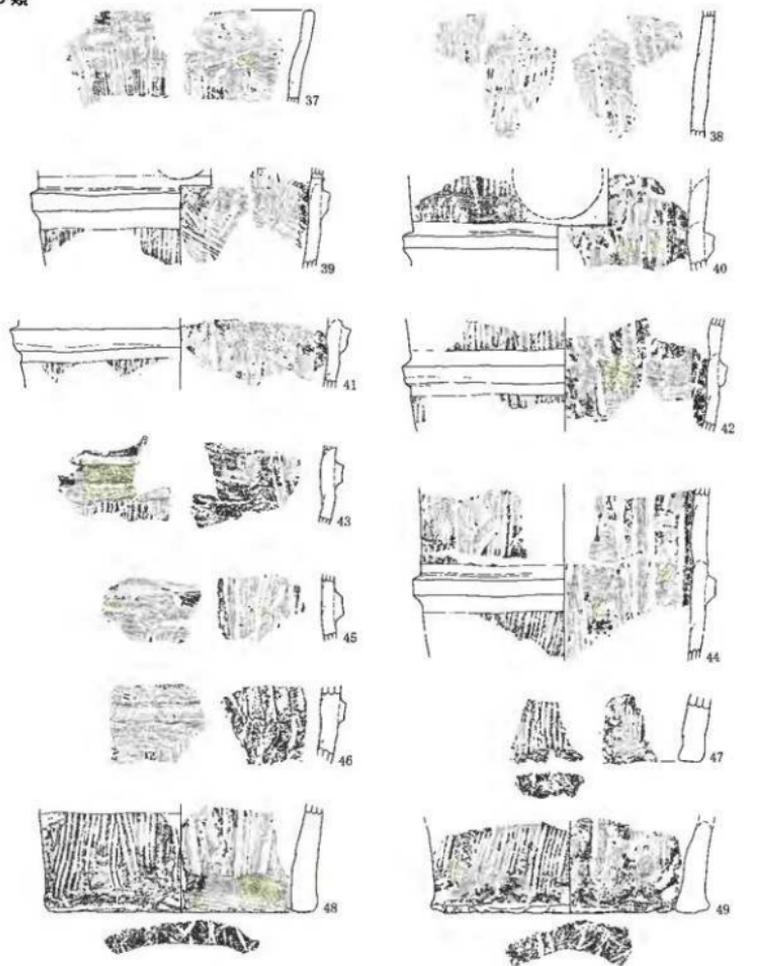
形態・法量 全形どころか、突帯間隔も把握できない。また、内外面の調整も、底部から口縁部に至るまで同一であるので、底部を除いて各破片の位置すらも明確にし得ない。かろうじて、48の上端に突帯のヨコナデが掛っているので、底部高が10cmほどになることがわかる。また、胴径23.6cm(平均)、底径22.0cmを測ることからも、A類と同じ規格であろうことが推定され、やはり、3突帯4段構成と想像される。

口縁部形状 直線的に外傾するものと見られ、A類同様、端部調整は甘く、形状も不安定である。ナデの方向も水平ではなく、斜行しており、幅4～5cmと広い。突帯整形の入念さと比べると対照的である。37の端部形状は断面矩形を志向し、内面は窪まない。

突帯形状 幅約2cm、高さ約0.5cmと扁平で、断面方形・台形を呈し、端面がやや窪む。上下面と端面を同時に最終的なナデを施すものと見られ、上下の稜は基本的にはつきりしている。

透かし孔 確認できるものが少ないが、円形で、右回りに切り抜き、無調整である。

B類



第53圖 8号墳出土埴輪B類

C類 (50～62)

成形・器面調整 基部粘土帯は幅5～7cm。粘土紐積み上げ間隔は2～3cm。胴部器壁厚は10～12mm。4段分が確認できる51を見ても、乾燥単位は明瞭ではない。ただ、外面のタテハケは複数段に及ぶものではなく、やはり一段ごとに乾燥を行いつつ、外面調整を施したものと考えられる。

外面調整はタテハケのみ。58・59では突帯ヨコナデを上位段のタテハケが切っており、59の上段は透かし孔が伴い、下段の器壁厚から中間段(2・3段)であることがわかる。すると、第2突帯の貼付段階が外面調整(積み上げ)の間に行われており、各突帯の貼り付けが一度ではないことになる。突帯の剥落がほとんど認められないことも、この手順を裏付けるだろうか。しかし、59の内傾する形状から、この破片上段が朝顔形埴輪の肩部に当たる可能性もある。わずかな破損資料に、間隔設定の回線を推定できるものもある(未掲載)が、突帯上面の擦痕は明確にできない。他類型と比べて精美な突帯形状・走行と51の突帯間隔を見れば、割り付けは行われたものと考えられる。

内面は粘土紐積み上げののちにタテ指ナデを施したのみである。51の観察から、ナデのストロークは複数段にまたがるものではない。第1段や第4段は積み上げ痕跡が明瞭に残り、このナデがいわゆる「調整用」のナデではなく、「整形用」のもの(赤塚1979)であることは明白である。口縁部(第4段)にはヨコハケを加えるようである。

底部外面下端にはヨコ板ナデが加えられる。ただ、62のナデは部分的で痕跡も不安定であり、51には認められないので、突帯間隔設定工具の擦痕である可能性もある。底面には棒状・繊維状の圧痕が残る、無調整である。赤彩の可能性を示すもの(50)がある。

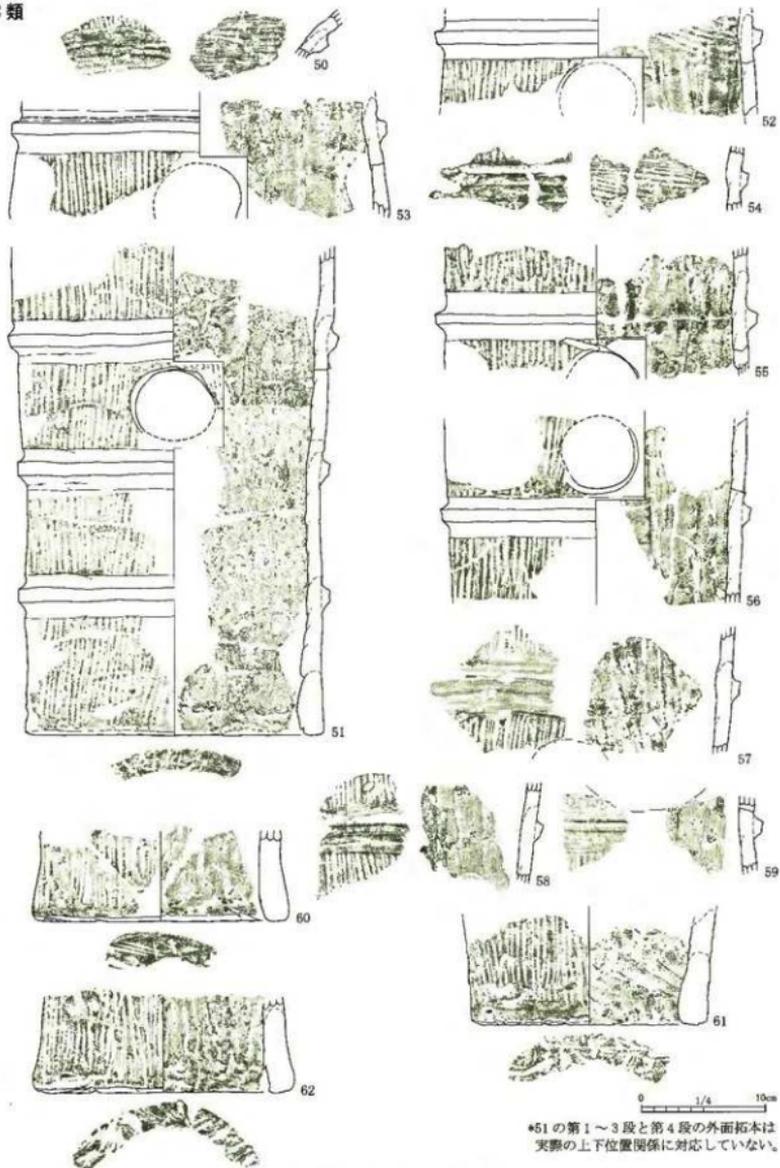
形態・量量 51は口縁部を欠くものの、全体的な形態が確認できる。わずかに外傾する寸胴形、3突帯4段構成と考えられる。胴径26.0cm(平均)、底径21.0cm(平均)。52は下段が内傾するので、出筒部内傾の朝顔形埴輪の可能性もある。51から、各段の高さは、底部11.8cm、第2・3段とも10.0cmであり、底部は突帯間隔よりも高く設定されていたことになる。

口縁部形状 本類型資料が見出せず、不明。

突帯形状 幅約2cm、端面幅1cm未満、高さ約0.8cmの細身。下稜がやや低く、端面が上寄りの断面台形を呈し、全体的に形状・走行は安定している。最終的に上下面を強くなでることによって、上下のナデ面は深めで、上下は際立っている。

透かし孔 円形。切り抜きは右回り、無調整である。第2・3段に互い違いに配置するものと見てよい。

C類



第54図 8号墳出土土埴輪C類

D類 (63～82)

成形・器面調整 基部粘土帯は幅約6.5cm、粘土帯成形時の作業台(板目)圧痕を残すものがある(81)。粘土紐積み上げ間隔は1.5～2cmと他類型と比べて狭い(粘土紐が細い)。胴部器壁厚は10～12mm。乾燥単位面は各突帯位置のやや上位の3か所確認でき、外面のタテハケも対応する。概ね、一段ごとに乾燥・外面調整を反復したものと思われる。

外面調整はタテハケのみ。64では第3突帯のヨコナデを第4段のタテハケが切っており、ハケメの開始点の当たりが観察される。A類と同様の手順で成形～器面調整を行っているものと考えられる。第1・2突帯とタテハケの関係は、上位段のハケメ開始点の上に突帯が貼付されているものと判断できること、突帯の剥落が確認できること、一段ごとの調整・突帯貼付とすると第2・3突帯の貼付が同時になるという手順の不均衡が生じることを考え合わせると、やはり、3条の突帯は同時に貼り付けられたものと思われる。突帯の剥離面には間隔設定の凹線(断面方形)がもれなく確認できる。ほとんどは2条一組であり、2条のうち上位の凹線がみられるものがあることから、表面上、1条しか見えないものも同一の工具で行っているものと考えよう。突帯の上面に設定工具の痕跡が確認できるものはない。80の底部外端から0.5cm上に、幅4mm程度の横方向の痕跡があり、同工具の擦痕の可能性がある。

内面はヨコナデ成形で、ナデ痕跡は平坦であることから、板(ヘラ)状工具を用いたものと思われる。ただ、積み上げ痕を多く残す個体が多い。第4段はそのうち手動的なヨコハケ調整を施す。底部は自重による歪みによるまま残している。底面には棒状・縦線状の圧痕が残る、無調整である。82には鐮の圧痕が見られる。

形態・量量 63・64は今回出土土埴輪の内でも最も残りが良いが、第1段(底部)を欠く。3突帯4段構成と見てよいだろう。口径36.1cm(平均)、底径22.9cm、底部から口縁部まで直線的に開く逆台形で、第4段(口縁部)上半は緩やかに外湾している。各段の高さは、底部(第1段、80)12.8cm、第2段(64)11.0cm、第3段は63で9.5cm、64で10.0cm、口縁部(第4段)は63で13.5cm、64で13.0cmを測る。各段とも一致しないが、第2・3段は10cm前後で近似しており、底部と口縁部は13cm前後と高くなっている。

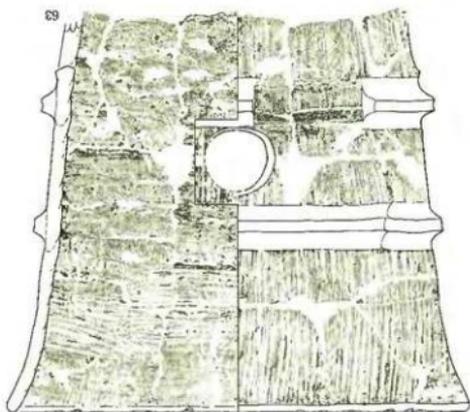
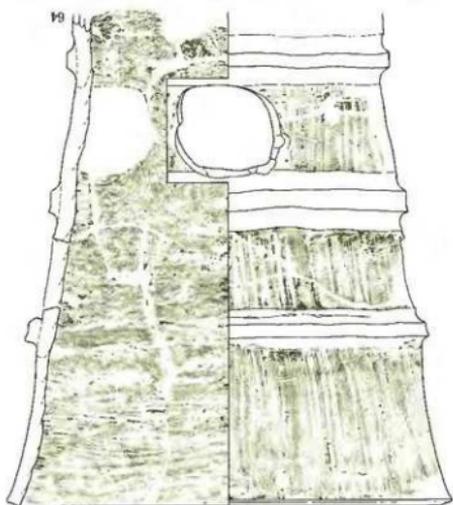
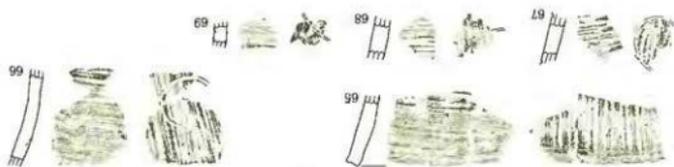
口縁部形状 直線的に外傾する。端部調整は基本的に仕かず、ヨコナデの幅や口縁部形状も個体によってバラツキが大きい。65は内外面のナデが比較的強く、端部が窪むなど、整った形状を見せているが、64はナデが弱く、端面形状は不安定である。63は丸くなっている。内面のヨコナデの幅は広く、5～7cm、64ではヘラ状工具の当たり痕が認められることから、内面には工具を用いていると思われる。

突帯形状 幅約2.5cm、高さ約1cm、端面がやや窪む、比較的整った台形を示す部分がある一方で、下面のナデ付けがあいまいで、形状も不安定な部分が共存している(64)。端部の整形が安定しない状況は、口縁部の状況と同調している。

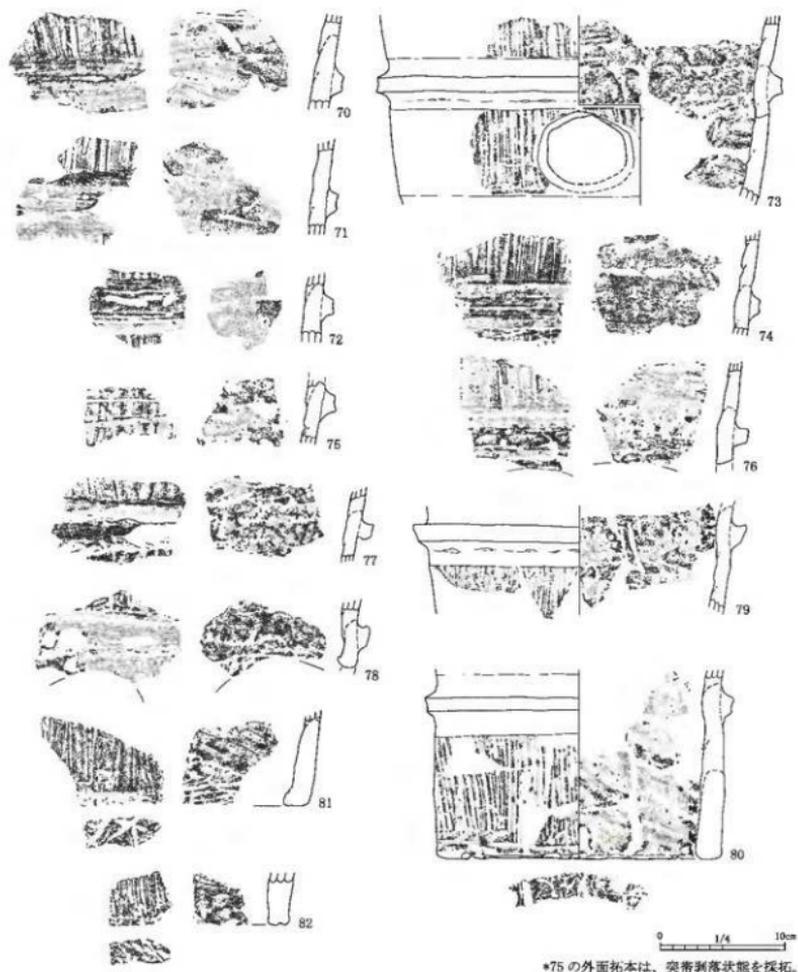
透かし孔 円形。切り抜きはすべて右回りで、無調整である。第2・3段に互い違いに配置する。78の透かし孔上部は歪みが著しく、持ち運びの際の指掛けの痕跡を示している。

ヘラ記号 口縁部外面に「左上開きのC」字形の線刻が認められる。右利き、上から右回りで記されたものと考えられる。

第55圖 8号墳出土埴輪D類 (1)



D類



第56図 8号墳出土埴輪D類(2)

E類 (83～99)

成形・器面調整 基部粘土帯は幅約7cm、粘土紐積み上げ間隔は3～4cmと広く、D類の倍（粘土紐が幅広）である。胴部器壁厚は10～12mm、乾燥単位面は突帯付近であるが、84は第4段（口縁部）の中位に認められる。口縁部（第4段）高が16cmと高いことに起因するものであろう。外面のハケメは各段で連続せず、乾燥単位に対応している。突帯は乾燥後の積み上げに伴う粘土の盛り上がり（突帯上面の直上辺り）と、上位段のハケメの上に貼付し、剥落はほとんど認められない。また、ハケメはいずれの段においても突帯のヨコナデに切られている。このことから、成形・調整→乾燥→上位段成形・調整→突帯貼付→乾燥→上位段成形・調整の工程を反復するものと想定できる。突帯の剥離面には間隔設定の凹線（断面方形）が確認できる（2条か）。また、上面の付け根が直角に折れるものがあるが、擦過痕跡が確認できないので、設定工具の擦痕ではなく、突帯整形過程の形状を示すものと思われる。

外面調整は左上がりのナメハケを基本とする。いわゆる1次調整である。第1段はタテハケで、上位段ほど左方向の傾斜が大きくなる。第4段（口縁部）の上半部（84・85）や、朝顔形埴輪の口縁部の一部（83）に、第1～3段とは異なった細かいハケメが施されているが、同一ハケ工具の表裏（両端）が使用されたものと思われる。底部下端は幅1～1.5cmのヨコナデが施されている。

内面は底部（第1段）から第4段に至るまで左上がりの指ナデ成形である。積み上げ痕跡を多く残している。口縁部（第4段）は下端を残して手動的なヨコハケを施す。底部下端と底面は無調整で、底面には丸棒状・繊維状の土痕が見られる。

朝顔形埴輪については口縁部の上段しか判明していない。下段と上段の間で乾燥単位面があり、下段の上端はやや内湾してヨコナデによって上端面がやや窪む。いわゆる擬口縁状となっている。器壁の厚さ、内外面調整の手順の違い・境界が上段の中位にあり、破損状況からも乾燥単位面が存在する可能性がある。

また、口縁部外面に赤彩の痕跡を残すものがある。

形態・法量 底部から第3段にかけて直線的にわずかに開き、口縁部が緩やかに開く形態が想定できる。3突帯4段構成と考えられる。口径36.9cm（平均）、底径19.8cm（平均）を測る。各段の高さは、底部（第1段、98）12.6cm、第2段10.0cm（97）、口縁部（第4段）13.0cm（85）、16.0cm（84）で、D類とほぼ同じ値を示しており、第2・3段の中間段はそれぞれ約10cm、底部と口縁部は高く作られている。朝顔形埴輪の口縁部上段は大きく外湾し、深い形態を呈している。

口縁部形状 端部調整の前に、内面には幅5～6cmほどのヨコナデが加えられる。端部調整のヨコナデは1.5～2cm幅で強く施され、端部の上・内外面が窪むもの（84・86）と、上・外端部が丸くなるもの（84の一部・85）がある。両者は84で共存するが、全体としては前者の形状を志向するものと思われる。朝顔形埴輪も強いヨコナデによって端部は窪み、外端部は折り返し状に拡張する。外面のヨコナデは幅が一定で、境界が明瞭であることから、板状の工具を使用している可能性がある。

突帯形状 幅2～2.5cm、高さ1～1.2cmで、上稜が突出し、端面が窪むM字状を呈する。上下・端面を同時にナデ付け、特に端面のナデは強い。これによって、上下稜は際立っている。

透かし孔 全形を確認できるものはないが、90と97から横長の楕円形と推定される。他の破片の形状も、この推定を支持するものと見られる。口縁端部・突帯などの細部調整の精度から考えて、意図的な形状と判断される。また、切り抜き面は外傾・内傾の2面構成で、ナデが施されている。

ヘラ記号 口縁部外面に「×」形のヘラ描きが確認できる。

F類 (100～106)

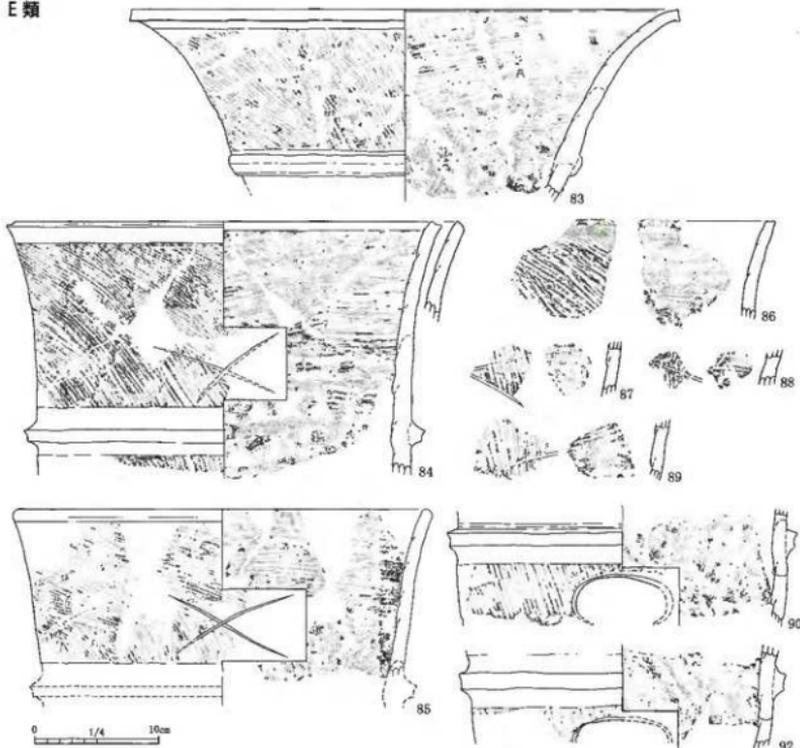
外面ナデ調整のものである。8点・707.2gを確認できたに過ぎないので、以下に示す属性も限定的なものとなる。

成形・器面調整 基部粘土帯は104から、幅6cmほどであろうか。粘土紐積み上げ間隔は2～3cm。胴部器壁厚は10～13mm、乾燥単位は明確ではない。外面調整は平坦な単位が明瞭に確認でき、1mm以下の間隔の細密な条線を伴う、タテ方向の調整痕跡を示す。いわゆる「タテ板ナデ」と表現されるものである。行為的には工具を用いた器面調整としてハケ調整と同じである。100を見る限り、上下段では連続しないようである。突帯のヨコナデに切られる。内面はタテ指ナデ成形で、積み上げ痕跡も比較的丁寧にナデ消されている。内面底部下端には、タテ指ナデを切って、幅1.5～4cmの手動的なヨコケズリ（右→左方向）が加えられている。外面・底面は無調整である。底面には丸棒・繊維状の圧痕が認められる。

形態・法量 全形は把握できないが、直線的に外傾し、胴径23.2cmを測る。他類と同様の形態をとるものと思われる。

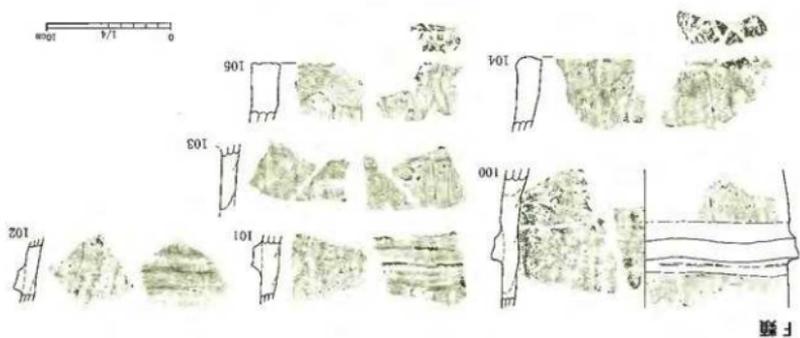
突帯形状 幅2～2.5cm、高さ0.8～1cm、上縁がやや突出する断面台形を呈する。最終的に上下面のヨコナデを施すために、上下縁は際立つ形状を示している。

E類

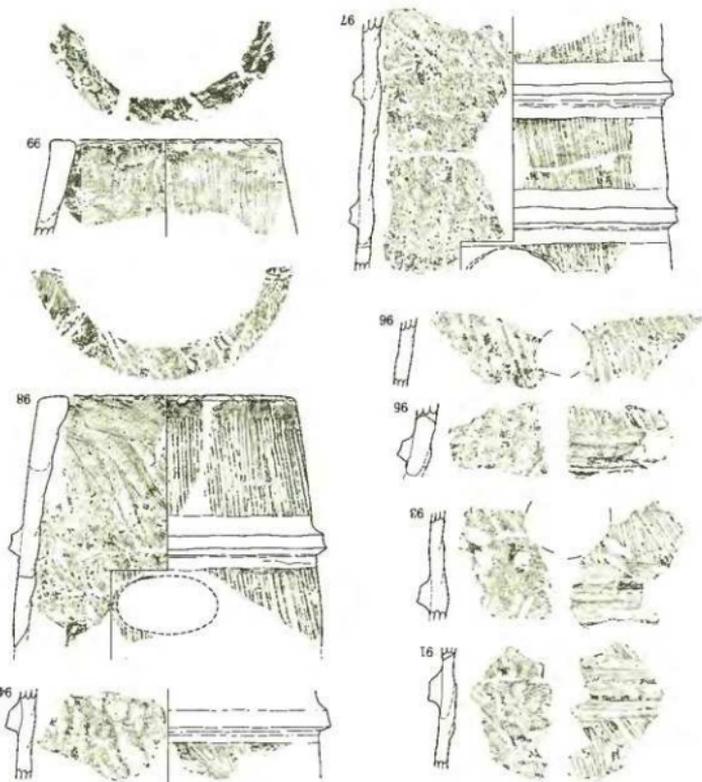


第57図 8号墳出土埴輪E類(1)

第58圖 8号墳出土埴輪E類(2)・F類



F類



(2) II群

G類 (106～113)

成形・器面調整 底部資料が確認できないため、基部成形は不明。粘土締積み上げ間隔は3～3.5cmとやや広い。胴部器壁厚は10～14mm。乾燥単位面は突帯付近にある。外面のハケ調整は一段ごとで、突帯の上位に開始の当たりが確認でき、上位の突帯のヨコナデに切られている。突帯の剥落は確認できない。

外面調整は左上がりのナメハケ(1次)である。口縁(第4段)下半部には幅約0.8cmのヨコ方向の工具擦過痕が認められる。109を見ると、波状を意図しているようであるが、その行為は106を見ても不明瞭な部分もあり、確実性に欠けている。痕跡は2条以上の条線を伴っているためハケメ状であるが、これも不鮮明である。ともかく、器面調整ではないので、文様の意図を有するものの可能性がある。かすみがうら市の富士見塚1号墳(杉山ほか2006)を始めとして、霞ヶ浦北西部・高浜入り地域に特有の波状文を施す円筒埴輪(伝田2001、本田2002)と同類のものと考えられる。

内面はタテ指ナデ成形のもの、左上がりのハケ調整。第3段以下はまばらで、第4段は密に施されている。積み上げ痕跡は残るものの、他類に比べ指ナデが「窄」である。

形態・法量 他類と同様、3突帯4段構成と想定しているが、第2段以下は確認できていない。口径26.3cm、胴径22.5cm(平均)を測る。直線的に開く形態で、口縁部の外反は認められない。突帯貼付部分は内湾しており、貼付行為によるゆがみと考えられる。各段の高さは、第3段(111)10.0cm、口縁部(第4段、106)12.0cm。今形は不明であるが、D・E類と同様の間隔を示している。

口縁部形状 いわゆる直向口縁で、屈曲は見られない。端部調整は幅1cm前後と狭く、内面には折り返し状に粘土が絞る。端部にはしっかりとした平坦面が作られている。

突帯形状 幅2～2.5cm、高さ0.5～0.8cmの扁平な断面方形を呈する。下面には規則的な凹凸があり、いわゆる「断続ナデ」によって貼り付けられたもの(中島1992)と見られる。ヨコナデ調整が丁寧にも関わらず、「整形」が十分でないためか、あるいは省略しているために、下面が器面から浮いている部分が散見される。112は4区一括取り上げで、断面三角形に近いが、ハケメパターンが一致するので本類型に含めた。

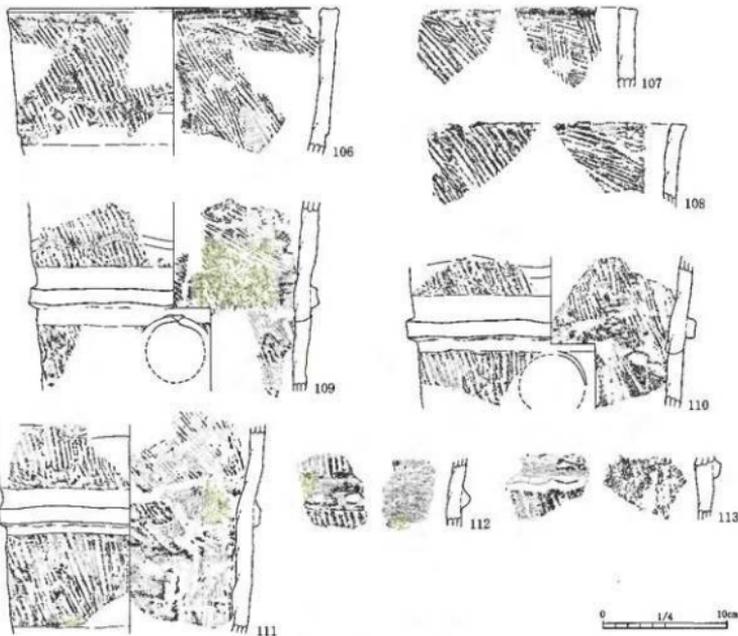
透かし孔 円形を呈する。切り抜きは右回りで無調整。残存状況から、小さめの円孔あるいは縦長の形状と思われる。

須恵器 古墳時代の埴の破片を図示した。114・118・119の埴胴部破片は、外面擬格子叩きのうち間隔の開いたヨコナデが施される。内面は浅い当て具痕で、不十分ではあるがナデ消しが行われているものである。

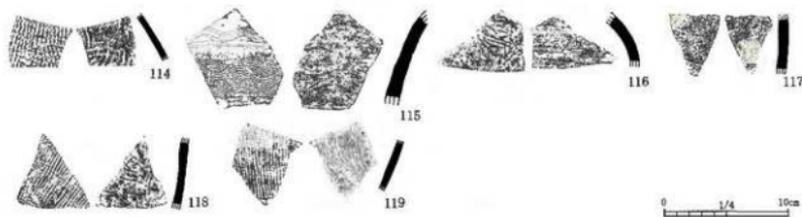
網罟母片岩 いずれも板状を呈する14～16cm大の小破片である(写真図版40-120～124)。石質には、硬質で砂っぽいものと軟質で肌理が細かいものの二者がある。前者は筑波地域寄りの産出、後者は石岡地域寄りの産出と見られる。

前記の地元の伝承と、8号墳との関連を積極的に評価すれば、これらの石材は埋葬施設(石棺等)の構築材の可能性が指摘できる。

G類



第59図 8号墳出土土輪軸G類



第60図 8号墳出土遺物

第15表 8号墳出土遺物観察表

番号	遺物名	自記	種類	材質	重量	口径	底径	高さ	備考	形状の特徴	彫刻の特徴	胎土	色調	焼成	焼付	備考
114	8号墳	S001-1	磁器類	瓷	15.3	-	-	-	-	外面は磨き子付。自然焼成。内面は車輪状具痕。	外面は磨き子付。自然焼成。内面は車輪状具痕。	緑色。白色胎土	内径 7.03 7/16 尺 外径 7.51 4/1 尺	良刹	磁器類	東海産。
115	8号墳	S002	磁器類	瓷	19.4	-	-	-	-	磨削の破片。磨削は磨き子付。自然焼成。内面は車輪状具痕。外縁は丸みを帯びている。	外面は磨削による凹凸を付いた後、2面に車輪状具痕が施されている。車輪は丸みを帯びている。内面はヒソコナツ。	白色胎土多量。	内径 7.01 6/1 尺 外径 7.57 4/1 尺	良刹	磁器類	東海産。
116	8号墳	S0021-1	磁器類	横	25.4	-	-	-	-	外面の磨削は自然焼成により磨削できない。内面は車輪状具痕の付いた。外縁は丸みを帯びている。	緑色。白色胎土多量。	内径 7.01 4/1 尺 外径 7.62 2/1 尺	良刹	磁器類	東海産。	
117	8号墳	S0021-2	磁器類	瓷	15.2	-	-	-	-	磨削の内面する磨削破片。磨削は磨き子付。自然焼成。内面は車輪状具痕の付いた。	緑色。白色胎土多量。	内径 7.01 4/1 尺 外径 7.57 4/1 尺	良刹	磁器類	東海産。	
118	8号墳	S002	磁器類	瓷	22.6	-	-	-	-	磨削平位以下の破片。磨削は磨き子付。自然焼成。内面は車輪状具痕の付いた。	緑色。白色胎土多量。	内径 7.01 4/1 尺 外径 7.57 4/1 尺	良刹	磁器類	東海産。	
119	8号墳	S002	磁器類	瓷	21.4	-	-	-	-	磨削の破片。磨削は磨き子付。自然焼成。内面は車輪状具痕の付いた。	緑色。白色胎土多量。	内径 7.01 4/1 尺 外径 7.57 4/1 尺	良刹	磁器類	東海産。	
120-122	S001	G1	石製	-	-	-	-	-	-	扁平な片。縁が磨き子付。長さ 14.34cm・高さ 32.1.5gと同 6.72cm・同 6.72cm・同 6.72cmの3片。大断面の上面が自然焼成している。	-	-	-	-	-	磨削片。自然焼成。縁が磨き子付。
122-123	S001	G2	石製	-	-	-	-	-	-	扁平な片。縁が磨き子付。長さ 6.96cm・高さ 106.1gと同 8.17cm・同 7.72cmの2片。	-	-	-	-	-	磨削片。自然焼成。縁が磨き子付。
124	S002	800	石製	-	-	-	-	-	-	扁平な片。縁が磨き子付。長さ 8.20cm・高さ 105.4g。	-	-	-	-	-	磨削片。自然焼成。縁が磨き子付。

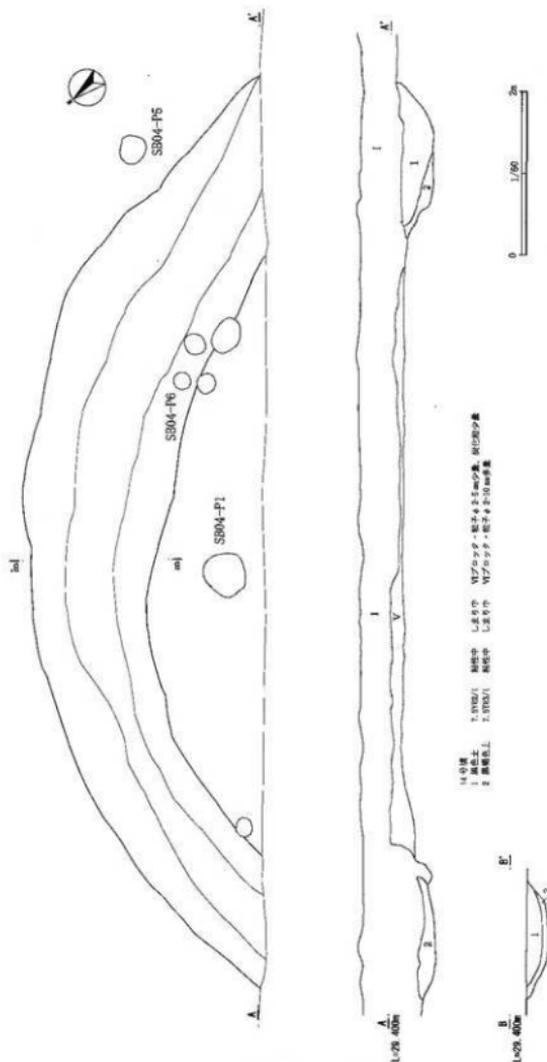
14号墳 (SD13) (第61・62図・第23表・図版14・40)

2区E-1・2, F-1・2Gに位置している円墳で、調査区内では削平された墳丘・周溝の北側が検出されている。遺構の大部分を占める南側は調査区外となる。SB04に切られている。古墳の規模は残存部から推定して、墳丘外縁までの直径約10m、周溝外縁までの直径約13m。周溝の幅は13.5～1.90m、深さ30～60cmで概ね40cm

前後を測る。覆上は黒色土・黒褐色土の2層からなるレンズ状堆積である。

遺物は縄文土器174.6g、弥生土器7.8g、土師器(古墳時代前期主体)508.3g、須恵器(平安時代)20.2g、埴輪129.0g、薬12.4gを検出した。また、本古墳の周溝SD13に該当する試掘確認調査23トレンチのSD-1からは、埴輪が1,823.8g検出されている。古墳時代中・後期の土師器は、赤彩の坏小片が3点確認できるのみである。

埴輪 同工品H類とI類の2類型が確認できた。I類は試掘調査28トレンチにおいても検出されている。胎土は白雲母を多量に含む、8号墳と類似するものと考えられる。



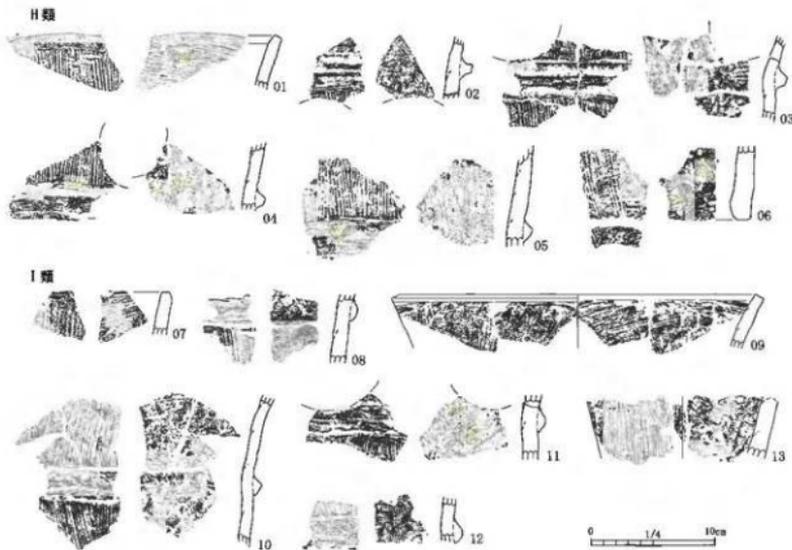
第61図 14号墳

H類 (01～06)

粘土紐積み上げ成形。基部粘上帯は幅5.5cm、積み上げ間隔は2cm前後。胴部器壁厚は8～13mmを測る。乾燥単位は不明。外面はタテハケ調整。内面は丁寧なタテ指ナデが施され、積み上げ痕跡はほとんど見られない。口縁部内面は左上がりのハケメを施す。底面には明瞭な爪痕はなく、形状の歪みもない。明確な底部調整は認められないが、整った形状を示している。口縁部は単純に外傾する形状で、端部には丁寧なヨコナデが加えられるが、匙面(凹面)を形成するほどではない。突帯は幅2cm、高さ1cmの細身で、上稜が高い断面台形を呈している。形状・走行ともに安定している。05は丸味のある断面三角形を呈し、ハケメパターンは一致するものの、凹凸がやや異なる。透かし孔は円形、右回り切り抜き後、ナデを加えている。全体の形態は、底部から直線的に外傾してやや開く、胴部径20cm前後の円筒形と見られる。

I類 (07～13)

粘土紐積み上げ成形。基部不明、積み上げ間隔は約3cm。胴部器壁厚は10～14mmを測る。乾燥単位不明。外面タテハケ調整で、口縁部は右上がりのハケとなる。内面は右上がりの指ナデ(積み上げ痕跡ほとんど残らない)で、口縁部は右上がりのハケメが施される。後述の突帯のナデ付けも左から右へ行われていることから、本類型は「左利き」の製作者によるものと判断できる。口縁部は単純に外傾し、端部調整はナデ幅が狭く、基本的に端面を形成するものの安定しない。突帯は幅1.7～2cm、高さ0.8cm、下稜が不明瞭で下面のナデ付けが甘い断面三角形を呈する。下面には規則的な凹凸が認められ、突帯下の器表面には右下がりの爪痕が並ぶ。「断続ナデ」による貼り付けを示し、左手の人差し指と親指で挟んで左から右へ行われ、爪痕は左手人差し指のものである。透かし孔は円形、切り取り方向は不明瞭、無調整である。全形はやはり、底部から直線的に外傾してやや開く、口径30cm、底径12cm程の円筒形と見られる。



第62図 14号墳出土遺物

埴輪 確認できる部位、資料数の少なから、十分に同工品を設定するには至らないが、ハケメを手掛かりに分類を行う。14号墳のH類とハケメパターンが一致するJ類、K類とL類のほか、8号墳のA類とハケメが正逆の関係にある06・07(A'類)の4類型が確認された。06・07はハケメと、黄色粒子(粘土状)を含む胎土の特徴、内面調整の左上指ナデが同類と一致することから、8号墳の埴輪と見てよい。何らかの理由で本古墳の周溝に埋没したのであろう。すると、本古墳に伴うのは、J・K・L類の3類型となる。K類は1・4区(遺構外)、L類は2区(同)でも検出されている。

J類 (01・02)

外面タテハケ、内面タテ指ナデで、口縁部内面にはヨコハケを施す。粘土紐積み上げ間隔は1.5cm程度か。積み上げ痕跡を少し残している。突帯は幅2cm、高さ1cm、最終的に上・端面をナデで上縁が高い台形を呈する。下面には規則的な凹凸が残り、「断続ナデ」貼付であることがわかる。01の口縁部内面には右上がりのヘラ記号がある。

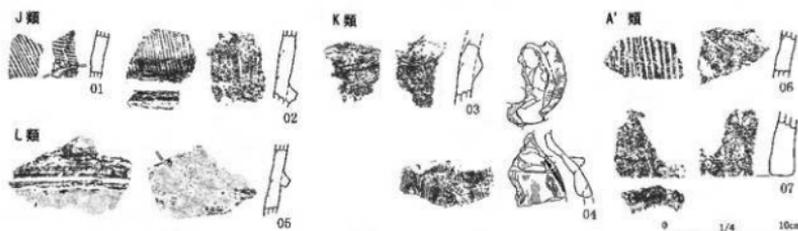
K類 (03・04)

外面タテハケ、内面タテ指ナデ。突帯は幅2cm、高さ0.7cm、丸味を帯びた断面三角形を呈する。透かし孔は遺構外1区09を参考にすれば円形、切り取り面は無調整である。粘土紐の積み上げ間隔は2cm程度か。

04はハケメが一致することから、本類型に含めた。袋状の形状から、人物埴輪の頭部である可能性が高い。頂部が弾まる特徴的な形状を示し、上部に突帯状の貼り付け、側面に円弧状の貼り付け痕跡と見られるものがある。突帯状の貼り付けは、外面ナデ調整であることから被り物の表現、円弧状の痕跡は顔面作出表現などが想定される。頭頂部が丸くならず、弾まるものとして、「細長い頭部」を特徴とする「市之台型」人物埴輪(稲村1999)がある。当類型は胎土に雲母片を含む「筑波山系の埴輪」に括られる(石橋2004)。しかし、本例を具体的に復元できる類例を見出すことはできていない。外面(突帯状の貼り付け前)タテハケ調整、内面は無調整で粘土紐積み上げ痕跡が明瞭である。還元・硬質焼成である。

L類 (05)

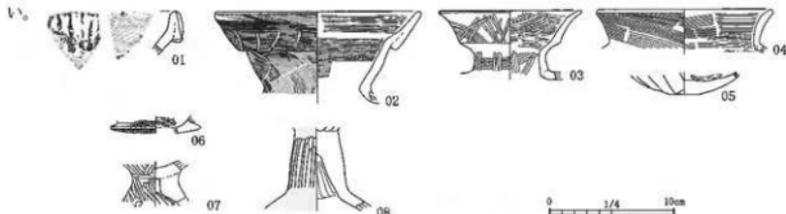
外面タテ板ナデ調整、硬質焼成を特徴とする。胎土には他類型と同様に白雲母片を多量に含んでいる。粘土紐の積み上げ間隔は2cm程度か。内面は丁寧な左上指ナデが施されている。突帯は幅1.2~1.7cm、高さ0.8cm、上縁が高い断面台形を呈する。最終的に上・端面をナデで整形、端面は強く窪んでいる。下面のナデ付けは甘く、規則的な凹凸が残り、「断続ナデ」による貼り付けであることがわかる。口縁部内面には左上がりのヘラ記号がある。遺構外2区14を参考にすると、透かし孔の切り取り面は無調整である。



第64図 15号墳出土遺物

第5項 遺構外出土遺物

古墳時代前～中期の土師器と後期の埴輪が確認できる。土師器については、個別の詳細は観察表を参照された



第65図 遺構外出土遺物(古墳1)

第16表 遺構外出土遺物観察表(古墳)

番号	地区名	所在	種類	形状	高さ	口径	器高	底径	器口の形状	器底の形状	胎土	色別	破損	残存	備考
01	4区	5001+CP*	土師器	壺	13.5	—	0.0	—	折り出し口縁。口縁部には縁起の跡が認められる。	口縁はリノナデの形に縁起が付く。内面は穴縁による矢羽状の文様が認められる。	黄褐色胎土。白色のナデ。	内外面 9YR 6/4	良好	口縁部破片	4世紀
02	4区	5001-01-1	土師器	壺	112.0	0.6 0.0	0.7 0.0	—	縦筋で「C」の字に形が直した状態は裏面に残る。口縁は縁起で折り出し、折り面は上に向く。	縦筋が「C」の字に形が直した状態は裏面に残る。口縁は縁起で折り出し、折り面は上に向く。	白色粘土・少量の赤土。黄褐色胎土。	内外面 10YR 7/4 に近い黄褐色	良好	口縁部 1/4～全体土層	4世紀
03	1区	5005	土師器	壺	30.2	(1.5)	0.5 0.0	—	口縁は「C」の字に形が直した状態は裏面に残る。口縁は縁起で折り出し、折り面は上に向く。口縁部は外側裏面に残る。口縁は縁起をなした状態に形が直して縁起が認められる。	内外面共にナデ。	白色粘土・少量の赤土。黄褐色胎土。	内面 10YR 5/4 に近い黄褐色 外面 10YR 5/4 同	良好	口縁部一帯 破片のみ	4世紀
04	1区	5003	土師器	壺	14.9	(1.5)	0.3 0.0	—	口縁は「C」の字に形が直して縁起が認められる。口縁部は外側裏面に残る。口縁は縁起をなした状態に形が直して縁起が認められる。	外面はハケの痕下段はリノナデ。その他は内外面にハケの痕が認められる。	白色粘土・少量の赤土。黄褐色胎土。	内面 10YR 7/4 に近い黄褐色 外面 10YR 5/4 同	良好	口縁部破片	4世紀
05	1区	5005	土師器	壺	55.6	—	0.1 0.0	3.4	口縁は小さな中や上げ痕を残す。口縁部は縁起で折り出し、折り面は上に向く。口縁部は外側裏面に残る。口縁は縁起をなした状態に形が直して縁起が認められる。	内面ナデ。外面ハケの痕が認められる。	白色粘土・少量の赤土。黄褐色胎土。	内面 10YR 5/4 に近い黄褐色 外面 10YR 5/4 同	良好	底面一帯 破片のみ	5世紀
06	1区	5102	土師器	壺	7.1	—	0.1 0.0	—	受け付け下部はほぼ水平に縁起が認められる。口縁部は縁起で折り出し、折り面は上に向く。口縁部は外側裏面に残る。口縁は縁起をなした状態に形が直して縁起が認められる。	内外面共に縁起の下のリノナデ。	白色粘土・少量の赤土。黄褐色胎土。	内面 9YR 6/4 に近い黄褐色 外面 10YR 5/4 同	良好	受け付け破片	4世紀
07	1区	5005	土師器	壺	66.1	—	0.3 0.0	—	受け付け下部はほぼ水平に縁起が認められる。口縁部は縁起で折り出し、折り面は上に向く。口縁部は外側裏面に残る。口縁は縁起をなした状態に形が直して縁起が認められる。	外面は縁起の下のリノナデ。内面はハケの痕が認められる。	白色粘土・少量の赤土。黄褐色胎土。	内面 10YR 5/4 に近い黄褐色 外面 10YR 5/4 同	良好	縁起のみ	5世紀
08	1区	5005-01	土師器	壺	140.3	—	0.5 0.0	—	受け付け下部はほぼ水平に縁起が認められる。口縁部は縁起で折り出し、折り面は上に向く。口縁部は外側裏面に残る。口縁は縁起をなした状態に形が直して縁起が認められる。	外面は縁起の下のリノナデ。内面はハケの痕が認められる。	白色粘土・少量の赤土。黄褐色胎土。	内面 10YR 5/3 に近い黄褐色 外面 10YR 5/4 同	良好	縁起のみ	5世紀 土層に埋没

埴輪 (第66図・第25表・図版40)

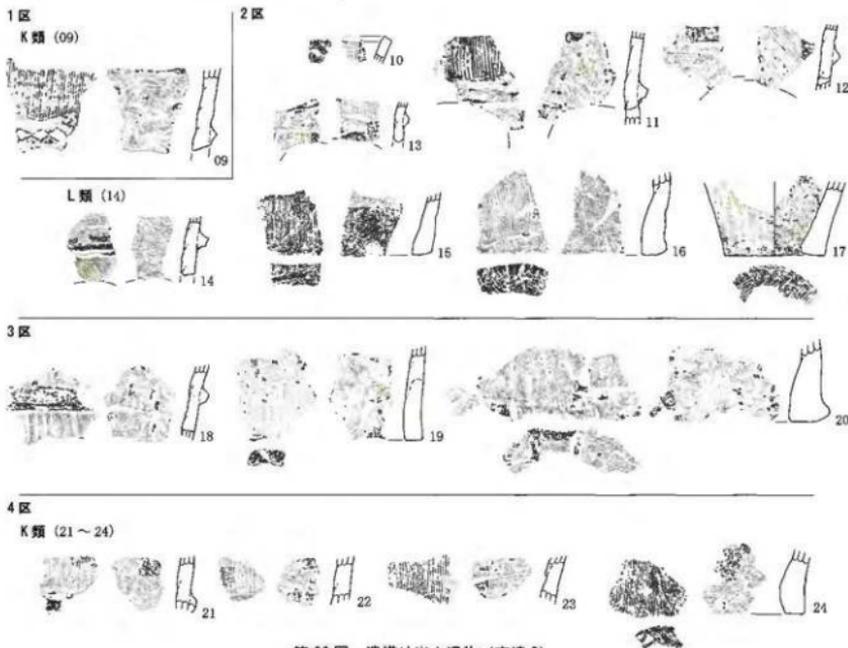
1区 09は15号墳の同工具K類。15号墳の項を参照。

2区 14が15号墳の同工具L類であるほか、異なるハケメ・属性を有するものである。10～13・15・16はすべて外面タテハケ調整である。10は、口縁端面をしっかりと作るもので、端部内面には匙面が形成される。11は、断面台形、幅1.7cm、高さ0.8cmと華奢な突起を持つ胴部で、最終的に上・端面をナデで上縁が高い形状を示す。ナデ付けは丁寧である。破片左側の突起の歪みは、製品の移動の際に透かし孔に手を掛けたことによるものである。胴部器壁厚は9～12mmと薄手で、粘土粒の積み上げ間隔は1.5～2cmと狭い。内面の指ナデは積み上げ痕を残すものの、比較的丁寧である。透かし孔の切り取り面は無調整。麻痺が著しいが、11とSD05-01は同一のハケメの可能性が高い。12は、突起下面に凹凸があることから「断続ナデ」貼付によるもので、上下面の丁寧なヨコナデによって断面三角形に仕上げられる。内面にナメハケが見られることから、上段は口縁部と考えられる。透かし孔の切り取り面はナデである。13は、胴部器壁厚0.7～0.8mmと薄いのが特徴で、突起は幅1.3cm、高さ0.5cmと小さい断面台形(上縁高い)を示す。損耗が著しく、その他の属性は不明瞭である。15は、器壁厚11～16mmの底部で、基部粘土帯幅5cmを測る。底面に繊維状圧痕が残る。16は器壁厚8～20mmのやや厚手の底部で、基部粘土帯幅6cmを測る。底面に繊維状圧痕を示す。17は形状・量量から形象埴輪と考えられ、四足動物の脚部の可能性がある。胎土は白色の長石と海綿骨針を含み、今回の調査で出土した埴輪の中で、唯一、白雲母片を含まないものである。外傾する細い円筒形を呈し、底面には板目圧痕を残す。内外面下端

にはナデ付けなどの痕跡はなく、別の部材が貼り付けられていた状況ではない。外面は板状工具によるタテナデである。

3区 20が器表面の磨滅のためにやや判然としないものの、ハケメは互いに一致しない。18は、間隔の広い追柱目のハケメを示す。突帯は下面のナデ付けが甘く、やや凹凸があるので「断続ナデ」による貼り付けの可能性がある。上縁が高い断面台形を呈する。粘土組織み上げ間隔は2cmほどで、内面にはやや積み上げ痕跡を残している。19は、復元径14cm程の底部破片。器壁厚11～15mm、薄手の作り。基部粘土帯は幅4cm程、粘土組織み上げ間隔は2cm。やや積み上げ痕を残す。外面のハケ調整は丁寧である。20は、器壁厚16～33mmを測る肉厚な底部破片で、基部粘土帯幅6.5cm、底面には丸棒状の圧痕が残る。3点とも白雲母を多量に含む、8号墳の埴輪と類似する胎土であるが、製作手法は異なり、また三者三様である。それぞれ同工品は確認できず、8・14・15号墳や他に想定されるものとは異なる古墳の存在が推定される。

4区 4点とも15号墳の同工品K類とハケメが一致する。器壁厚11～14mm、粘土組織み上げ間隔は1.5～2cmと狭い。残存する底面は平滑であるが、基本的に底部調整は行われていない。突帯は上縁が高く、下縁が丸味を帯びた幅狭の形状と見られる。

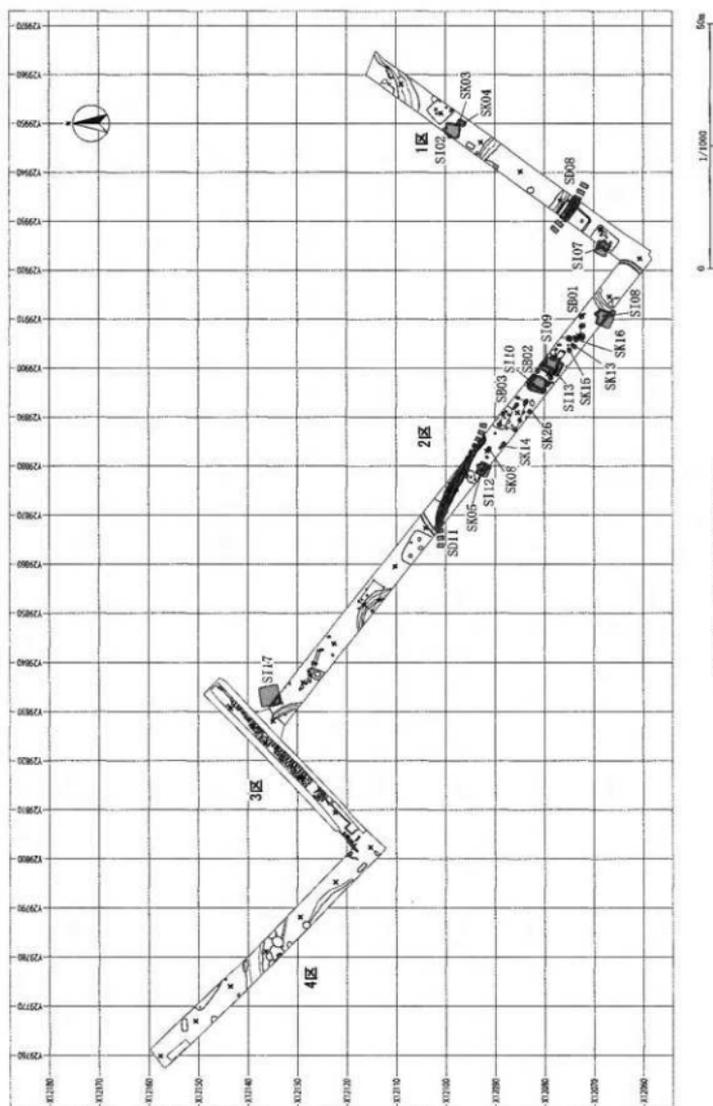


第66図 遺構外出土遺物（古墳2）

【注】

- 1 本書で取り扱う円筒埴輪の製作法については、次の文献を基礎とする。赤塚 1979、川西 1978・1988、大木 1996、埋蔵文化財研究会 2003。
- 2 器面調整の「1次」「2次」は、川西定幸氏が規定する（川西 1978）突帯の貼り付け前後による区分ではなく、単なる「下地」「仕上げ」に換言できるものとする。赤塚次郎氏の言う（赤塚 1979）、製作行為全体に位置づけた「整形用」「調整用」との対応については、十分に検討できていない。したがって、本書で用いる「調整」は、両者を含めた概念となる。
- 3 本古墳出土埴輪の各段の高さの計測は、辻川哲朗氏の定義（辻川 2003）に従って設定された突帯間隔を反映させるため、田輪の位置が概ね対応する各突帯の上縁と、工具の下端が接する各突帯の上面付け根を計測ラインとする。したがって、第1段（底部）は此外端部から第1突帯上縁まで、第2・3段は下位突帯上面から上位突帯上縁まで、第4段（口縁部）は第3突帯上面から口縁外端部とする。

第5節 平安時代



第 67 図 平安時代遺構分布図

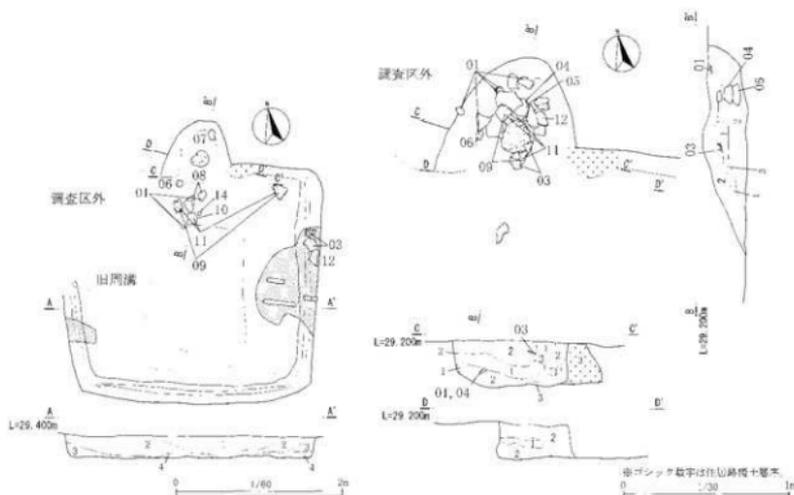
第1項 住居跡

S102 (第68～70頁・第26表・図版15・41)

1区C-1・26に位置し、遺構の大半が検出され、北西隅部が調査区外になっている。南北2.92m、東西3.05mの平面正方形で深さは28cmである。主軸方向N-15°-E。覆上は4層に分層されレンズ状堆積となっており、第4層は焼上層である。東西の壁跡付近では、床面上に焼上及び炭化材が局部的に0.4～1mの範囲で堆積している。硬化面は床面の中央部から南壁際にかけて存在する。壁際には幅20～25cm、深さ5～12cmの周溝が北壁を除いて巡る。この周溝の下には切られている古い周溝が存在し、15cmほどやや内側に巡っている。カマドは北壁中央部を45cm掘り込んで設置されており、両袖部は壊されていた。火床痕が燃焼部に存在する。カマド内の中央には、底面からやや浮いた位置に土師器有台壇(05)が伏せて置かれ、その上に山砂を挟んで土師器小形甕の底部(04)が伏せて重ねられていた。支脚として用いられたものと見られる。

遺物は縄文土器384.0g、弥生土器94.6g、土師器3,488.4g、須恵器2,016.2g、土製品(土器片・土器片)14.2g、石器(縄文・剥片)6.0g、石製品(台石)1,908.2g、鉄製品16.3g、炭1,478.5g、陶105.2gを検出した。カマド及びその周辺と、東壁際にまとまる。カマド付近の上器はすべて破片で、炭化材とともに、カマドの破壊・埋没(カマド覆土第1層・焼土、犬井部カ)後に堆積した住居覆土第2層に含まれる。東壁際のもは焼土の上に乗り、須恵器裏の底部大破片(12)と、土師器裏(03)が盗位でつぶれて壁に寄り掛かった状態で検出された。鉄鎌(14)の刃部破片はカマド前の遺物群の中で検出されている。

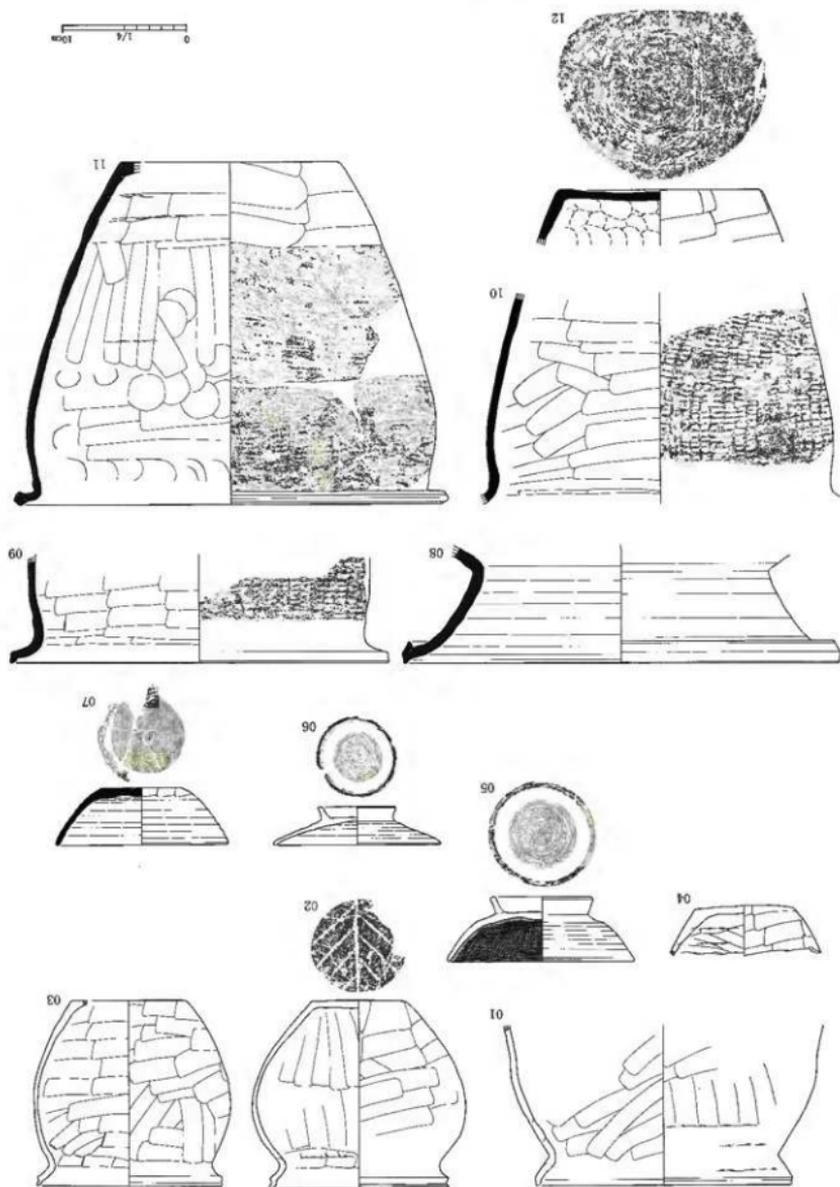
これらの遺物から、本遺構は平安時代(9世紀後半)と判断される。



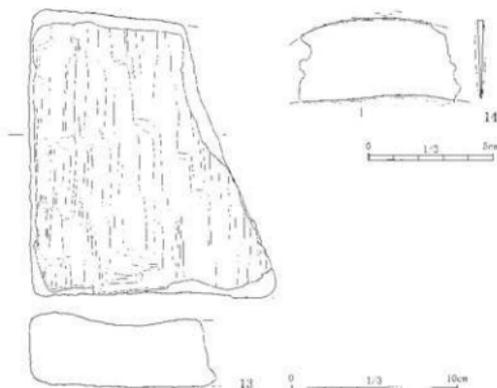
第68図 S102

S102		S102		S102	
1 埋土	7.000	1 埋土	7.000	1 埋土	7.000
2 埋土	7.000	2 埋土	7.000	2 埋土	7.000
3 埋土	7.000	3 埋土	7.000	3 埋土	7.000
4 埋土	7.000	4 埋土	7.000	4 埋土	7.000
5 埋土	7.000	5 埋土	7.000	5 埋土	7.000
6 埋土	7.000	6 埋土	7.000	6 埋土	7.000
7 埋土	7.000	7 埋土	7.000	7 埋土	7.000
8 埋土	7.000	8 埋土	7.000	8 埋土	7.000
9 埋土	7.000	9 埋土	7.000	9 埋土	7.000
10 埋土	7.000	10 埋土	7.000	10 埋土	7.000
11 埋土	7.000	11 埋土	7.000	11 埋土	7.000
12 埋土	7.000	12 埋土	7.000	12 埋土	7.000
13 埋土	7.000	13 埋土	7.000	13 埋土	7.000
14 埋土	7.000	14 埋土	7.000	14 埋土	7.000

第 69 图 S102 出土器物 (1)



第4章 検出された遺構と遺物
第5節 平安時代



第70図 SI02出土遺物(2)

第26表 SI02出土遺物観察表

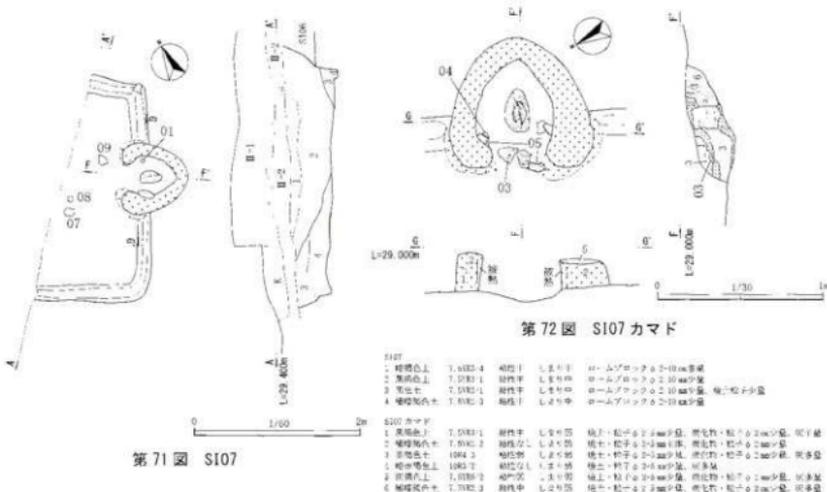
番号	品名	種類	形種	長さ	幅	厚	重量	用途	原料の種類	製造	発見	出土	備考
91	No. 07・08・10・17・18・19	土師器	甕	210.4	(20.3)	13.2	—	胴部は中位の腹径から上方に「上」の字に似た、ほぼ正方形の凹みがある。	一透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	甕付・内口 4.3に凹み あり 全長 210.4 口径 20.3 高さ 13.2	甕付	山崎区 1・4 —区 1・2	竈跡遺構
92	甕	土師器	甕	218.0	14.3	1.8	1.5	底辺は正方形、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	二透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	甕付・内口 4.3に凹み あり 全長 218.0 口径 14.3 高さ 1.8	甕付	1・3	竈跡遺構 竈跡不明
93	No. 05・04	土師器	甕	144.9	14.9	15.1	0.2	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 14.9 高さ 15.1	甕付	山崎区 2	竈跡遺構
94	No. 03	土師器	甕	180.1	—	12.0	11.0	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 14.9 高さ 15.1	甕付	山崎区 1	竈跡遺構
95	No. 24	土師器	甕	237.0	11.9	2.3	7.7	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 11.9 高さ 2.3	甕付	山崎区 1	竈跡遺構
96	No. 07・02	土師器	甕	50.5	13.2	3.1	0.1	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 13.2 高さ 3.1	甕付	山崎区 1・3	竈跡遺構
97	甕	土師器	甕	113.3	(13.7)	4.7	0.3	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 13.7 高さ 4.7	甕付	山崎区 1・4	竈跡遺構
98	No. 11・12	土師器	甕	422.0	(24.7)	15.0	—	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 24.7 高さ 15.0	甕付	山崎区 1・4	竈跡遺構
99	No. 02・06	土師器	甕	126.9	126.0	16.0	—	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 126.0 高さ 16.0	甕付	山崎区 1・4	竈跡遺構
100	No. 13	土師器	甕	212.3	—	17.0	—	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 212.3 高さ 17.0	甕付	山崎区 1	竈跡遺構
101	No. 01・09・10	土師器	甕	533.3	(24.0)	(25.0)	(17.0)	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 24.0 高さ 25.0	甕付	山崎区 1	竈跡遺構
102	No. 01	土師器	甕	324.2	—	14.0	16.2	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 14.0 高さ 16.2	甕付	山崎区 1	竈跡遺構
103	甕	土師器	甕	1500.2	22.0	16.0	16.0	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 22.0 高さ 16.0	甕付	山崎区 1	竈跡遺構
104	No. 0	土師器	甕	16.2	16.2	0.2	0.2	底辺は正方形の凹みがあり、胴部は腹径より上方に凹みがあり、凹みの幅はほぼ正方形の幅と等しい。	内透孔の土師器。胴部はヘラツクテ、内面にヘラツク。	内口 100.0 口径 16.2 高さ 0.2	甕付	山崎区 1	竈跡遺構

S107 (第71～73図・第27・28表・図版10・11・42)

1区F-1・2, G-1・2Gに位置し、カマドのある遺構東壁付近が検出され、西側の大半が調査区外である。S106を切っている。南北2.70m、東西1.30mの推定長方形で、深さは調査区壁面において55cmを測る。主軸方向N-65°-E。覆土は4層からなり、第1・2層が第3・4層を切った形状をしていることから、ゴミ捨て目的の上坑として転用した可能性が考えられる。床面は地山を直接掘削しており、全体に硬化していた。周溝は、幅20～22cmで深さ3～7cmを測り、調査区内で壁際を巡っていることから、調査区外も続いて全周しているものと判断される。カマドは東壁中央部に45cm削り込んで付設されている。袖部は短く、壁からわずかに突出した形状をしている。著しく被熱した燃焼部、その中央底部(地山)に火床部が残存している。火床部の上に焼土を上台として、土師器焼の脚部大破片2片を立てている。この破片は被熱も著しく、内外面には粘土・焼土が全面に付着している。2片は同一個体と見られるが互いに接合せず、また他に接合する破片も検出されていない。19×14cm大の破片を素材に、支脚として据え付けたものと考えられる。焚口には土師器及び須恵器の焼の大破片が横たわるが、住居及びカマド覆土中で接合する破片が検出されるなど、焚口の構築材として懸架されたものではなく、カマドの埋設とともに堆積したものであろう。

遺物は縄文土器8.4g、弥生土器3.5g、土師器1,930.8g、須恵器2,275.2g、焼75.8gを検出した。カマド内の他に、カマド前面に完形またはほぼ完形の須恵器の坏・皿(07～09)が検出されている。

これらの遺物から、本遺構は平安時代(9世紀前半)と判断される。

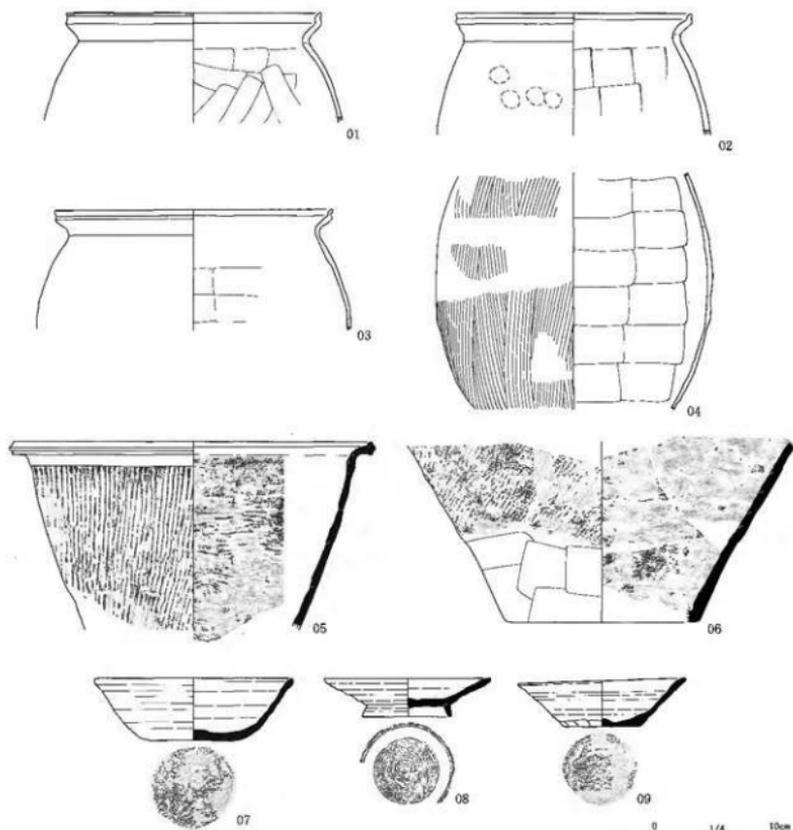


第71図 S107

第72図 S107カマド

第27表 S107出土遺物観察表(1)

番号	品名	種類	形状	重量	口径	高さ	底径	説明	器形の概要	胎土	表面	焼色	焼痕	備考
01	丸底カマド	土師焼	実	289.0	20.6	55.0	—	壁面に硬ヤコウ土層が認められ、その上に覆土が施されている。内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。
02	カマド	土師焼	実	143.7	3.8	5.7	—	壁面に硬ヤコウ土層が認められ、その上に覆土が施されている。内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。
03	カマド内カマド	土師焼	実	327.3	22.4	55.6	—	壁面に硬ヤコウ土層が認められ、その上に覆土が施されている。内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。	内面及び外壁の内面には、土師器の破片が認められる。白磁土の層が認められる。白磁土の層が認められる。



第73図 S107出土遺物

第28表 S107出土遺物観察表(2)

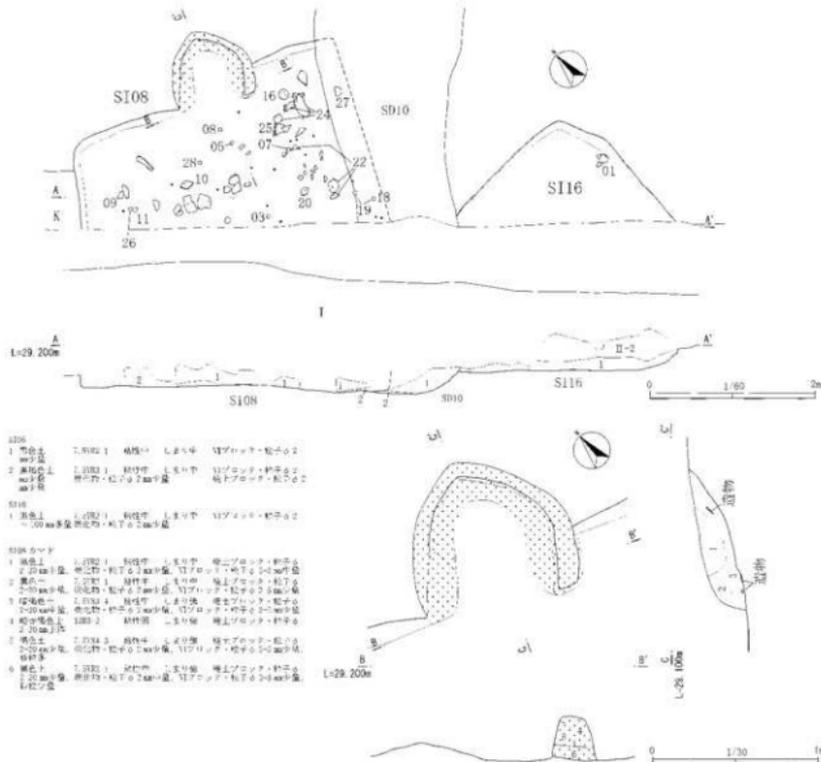
番号	目録	種別	種名	長さ	口径	胴高	底径	器形の特徴	器胎の特徴	胎土	色相	構成	形状	備考
04	ホヤド ホヤド08	土師器	甕	318.7	—	118.33	—	胴部破片、やや厚胴形状になり、内腐して立つ。	外面は膠土面の粗いゴザキが施される。内面はヘンダツキされるが厚肉底の厚みが観察される。	黄白色、白色系下黄褐色、2/3 黄褐色	土師	片断大破片	宮城型甕	
05	S106 S107 ホヤド ホヤド 06-07	土師器	甕	332.6	37.2	115.00	—	胴部は底まで内腐しながらもかなり底辺まで大きく開く。口縁部は鉛筆型で水平に開いた形状を有し、口縁部は溝み上げられる。	外面は膠土面の平行線、口縁部は内外両面にゴザキ。内面は胴部は平行線を有する。胴縁部が明確に形成される。	内面 土師 3/2 黄褐色 外面 土師 2/3 黄褐色	土師	口縁部 1/5		
06	S106	土師器	甕	218.2	—	114.33	15.6	底部は平底。胴部は大きく外反実縁に開く。	外面胴部は平行線、口縁部外面はゴザキ。内面胴部は平行線の可具傷痕が観察される。	黄白色、白色系下黄褐色、2/3 黄褐色 外面 土師 1/2 黄褐色 外面 土師 1/3 黄褐色	土師	片断大破片		
07	No. 05	土師器	舞台坪	190.3	15.8	6.0	8.2	底部は平底。胴部は口縁内に内腐し口辺で僅かに外反実縁する。	内外両面にゴザキ。底部は平輪をへんダツキ。	黄白色、白色系下黄褐色、2/3 黄褐色 内面 土師 1/2 黄褐色 外面 土師 1/3 黄褐色	土師	口縁部 1/4 次層		
08	No. 06 ホヤド	土師器	有台皿	126.7	13.4	3.0	7.0	高台は「ハ」の字に開く。胴部は直線的に開く。	底部は底縁へ平行線が施される。高台は底縁高台で、取付口は直線的に底縁から高台の部に接される。胴部は内外非平行線。	黄白色、白色系下黄褐色、2/3 黄褐色 内面 土師 1/2 黄褐色 外面 土師 1/3 黄褐色	土師	口縁部 1/3 次層		
09	No.04 ホヤド	土師器	舞台坪	137.6	13.4	3.5	6.0	底部は平底。胴部は底まで外反実縁に大きく開く。	胴部は内外両面にゴザキ。胴部下縁及び底部は平行線ヘンダツキ。	黄白色、白色系下黄褐色、2/3 黄褐色 内面 土師 1/2 黄褐色 外面 土師 1/3 黄褐色	土師	口縁部 1/4 次層	舞台坪	

S108 (第74～76図・第29・30表・図版15・16・42・43)

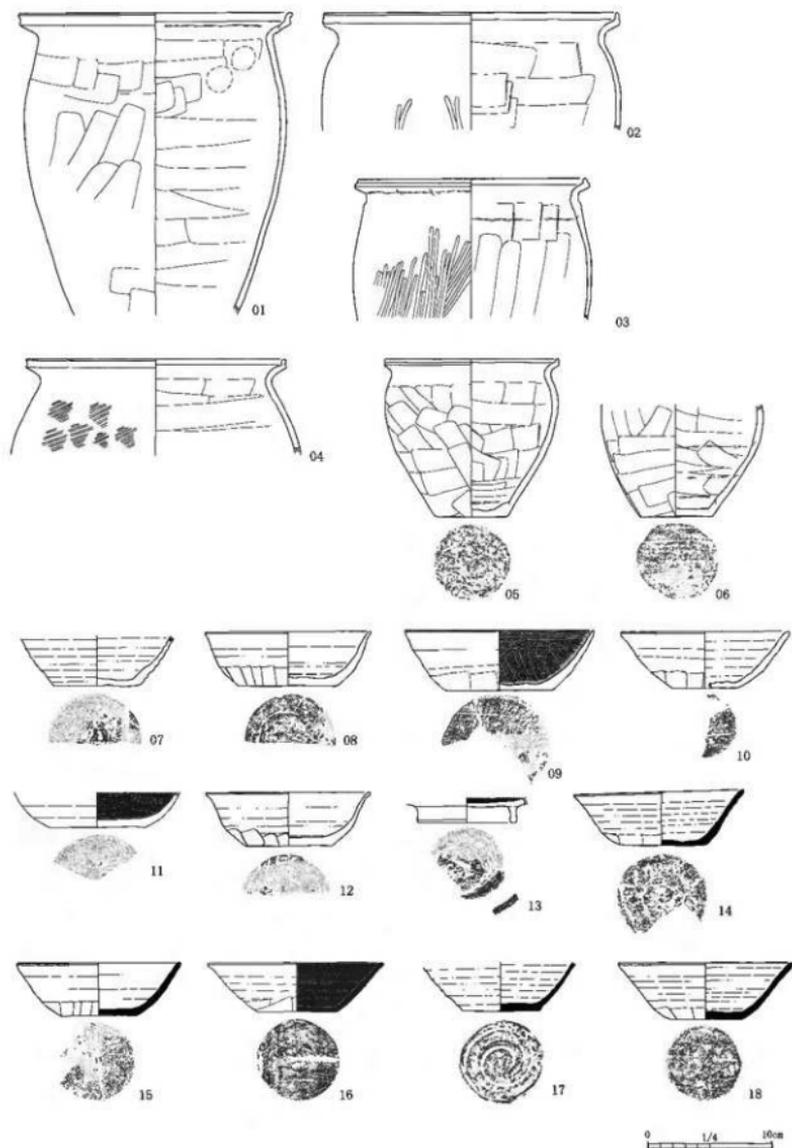
2区M-2Gに位置し、カマドのある遺構の北側が検出され、南側は調査区外となっている。15号墳の西側の周溝にあたるSD10を切っている。南北現状2.20m、東西推定3.70mの推定長方形で、深さ24cmである。主軸方向N-23°-E。覆土は黒色土から黒褐色土の2層からなっている。床面は地山を直接掘削している。カマドは北壁中央部に付設され、長軸方向98cm、直交軸方向100cmを測る。燃焼部が83cm掘り込まれ、暗赤褐色土から黒色土で構築された右袖部が遺存している。

遺物は縄文土器152.0g、弥生土器50.2g、土師器7,528.2g、須恵器9,395.0g、灰釉陶器7.9g、近・現代陶器71.3g、土製品(30・軸羽目)481.2g、埴輪275.8g、近世瓦24.9g、礫443.2g、炭0.5gを検出した。多量の土師器・須恵器は覆土全体にわたって出土しており、遺物収納用コンテナ2箱分に及ぶ。ほとんどが破片で、完形またはほぼ完形のものは16の須恵器坏と20の同皿があるに過ぎない。いずれも床面から5～10cm以上浮いた覆土中に散在し、本住居が廃絶した後に投棄されたと判断される。埴輪は、本住居が切る15号墳(SD10)由来のものと考えてよい。

これらの遺物は9世紀前半に位置づけられるもので、出土状況からも一時に投棄されたものと判断される。本来、本住居に伴うものではないが、本遺構の時期も平安時代(9世紀前半)に考えておきたい。

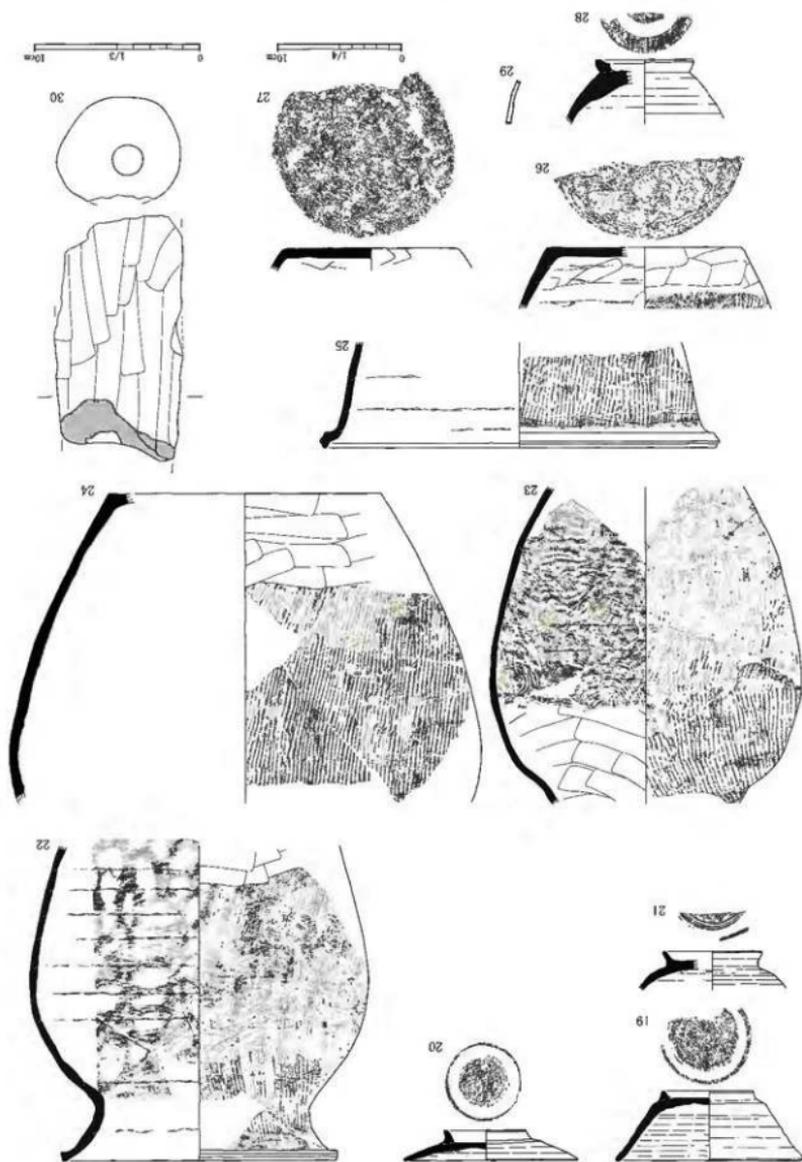


第74図 S108

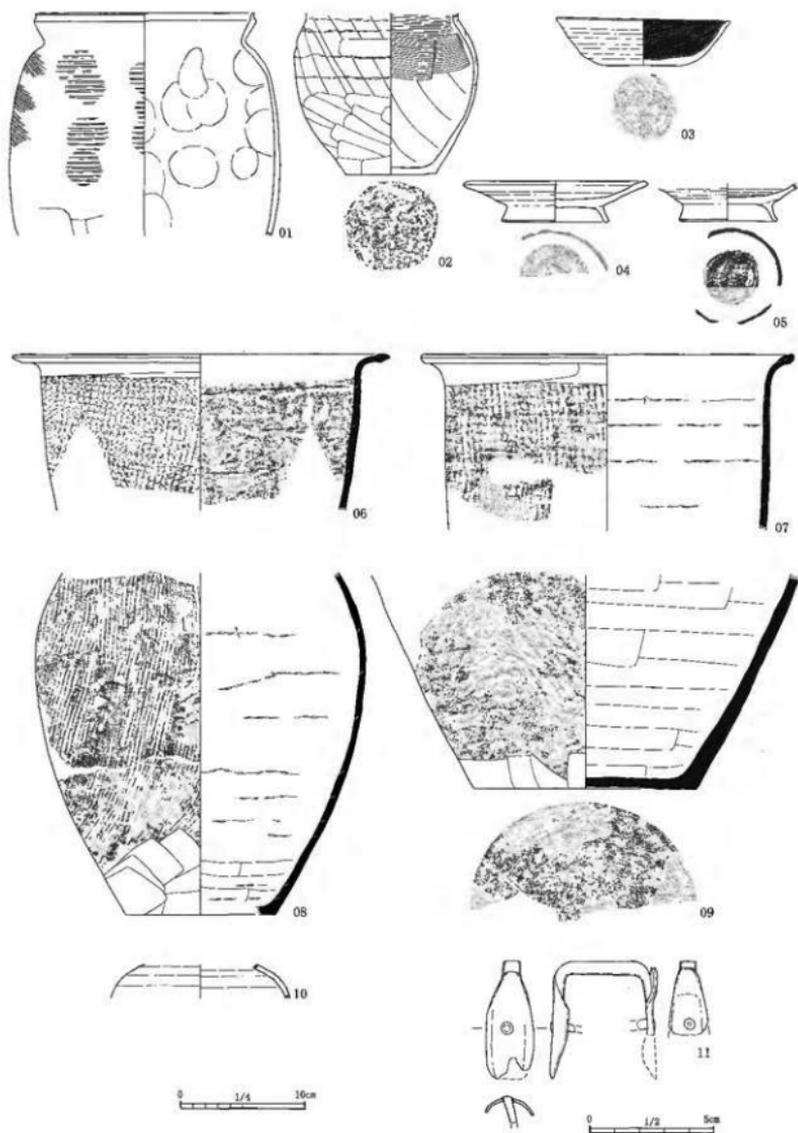


第75図 S108出土遺物(1)

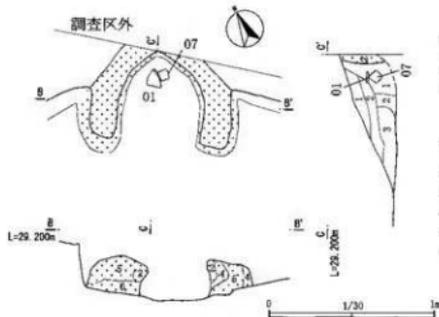
第76圖 S108出土遺物(2)



第4章 検出された遺構と遺物
第5節 平安時代



第79図 S109 出土遺物



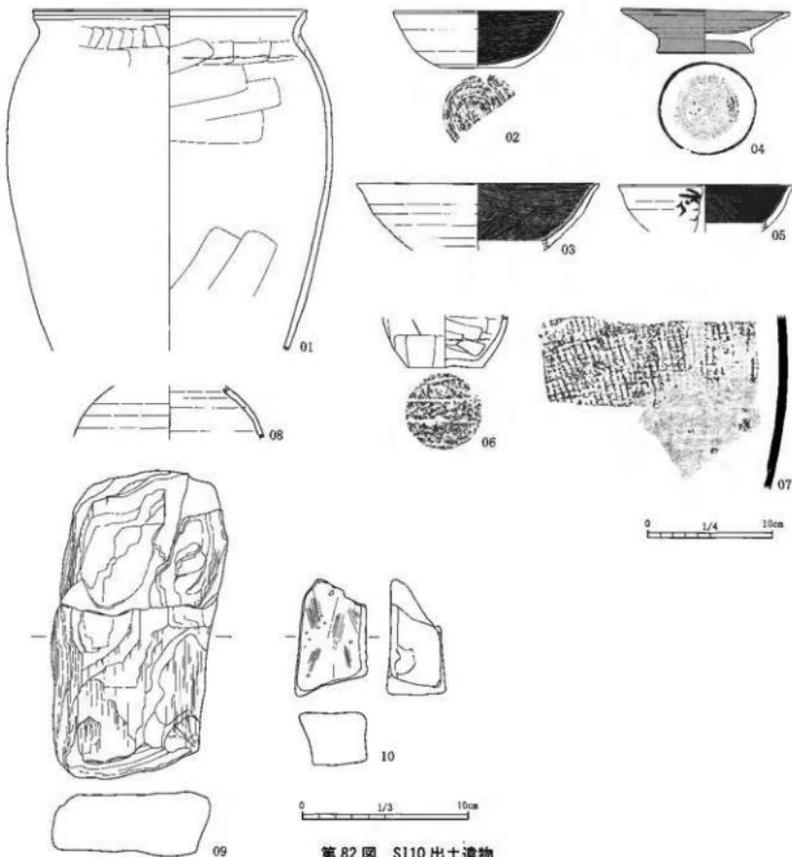
SI10

- 1 黒色土 7.592/1 粘り中 しまり中 VIブロック・粘土 ϕ 2-3mm少量
- 2 灰褐色土 7.593/4 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-3mm
- 3 黒色土 7.592/1 粘り中 しまり中 VIブロック・粘土 ϕ 2-3mm少量

SI10 カマド

- 1 黒褐色土 7.592/2 粘り中 しまり中 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量
- 2 黒褐色土 7.592/2 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量
- 3 黒色土 7.592/1 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量
- 4 黒色土 7.592/1 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量
- 5 黒褐色土 7.592/1 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量
- 6 黒褐色土 7.592/2 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量
- 7 黒褐色土 7.592/2 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量
- 8 黒褐色土 7.592/2 粘り中 しまり強 VIブロック・粘土 ϕ 2-10mm少量

第81図 SI10カマド



第82図 SI10出土遺物

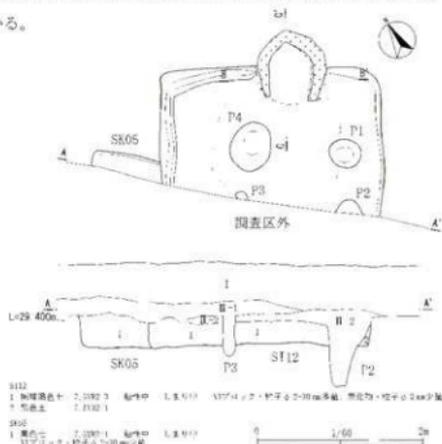
第32表 SI10 出土遺物観察表

番号	品名	種類	材質	長さ	幅	厚さ	重量	観察の概要	製作の概要	紐	内面	外面	位置
81	No. 04 土師器・土師器 No. 01 カマド	土師器	焼	132.0	122.0	12.0	—	断面は長方形で、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は長方形で、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
82	— 土師	土師器	土師器	74.0	113.0	4.0	0.1	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
83	— 土師	土師器	土師器	53.0	145.0	6.0	—	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
84	No. 11	土師器	土師器	102.0	12.0	3.0	2.7	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
85	— 土師	土師器	土師器	11.0	112.0	12.0	—	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
86	No. 10	土師器	土師器	103.0	—	16.0	6.0	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
87	No. 09 カマド、土師器 — 土師	土師器	土師器	204.0	—	—	—	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
88	No. 08 土師	土師器	土師器	34.0	—	4.0	—	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
89	ホムナシキヤク	土師器	土師器	270.0	9.0	9.0	0.2	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外
90	— 土師	土師器	土師器	126.0	9.0	9.0	0.2	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	断面は円形、口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。口縁部は厚く、底は薄く、中央部に穴がある。	—	内面は土師器の土で、外面は土師器の土で、中央部に穴がある。	—	調査区外

SI12 (第83～85図・第33表・図版17・18・45)

2区1-2Gに位置し、カマドのある遺構の北側が検出され、南側は調査区外となっている。SK05を切っている。南北が現状で1.80m、東西が2.66mの推定長方形、深さ34cmである。主軸方向N 29°-E。床面はカマド前から中央部にかけて硬化している。ピットはP1～4の4基が検出された。P1は長径45cm、短径35cmで深さ36cm、P2は残存部で長径34cm、短径16cmで深さ47cm、P3は残存部で長径13cm、短径8cmで深さ14cm、P4は長径63cm、短径52cmで深さ18cmである。土層から判断して、P1・P2は住居跡が埋没した後、穿たれた中・近世のものと判断される。周溝は幅15～25cmで、5cm前後の深さを保ち、カマドの左側である北壁際から西壁際まで穿たれている。カマドは主軸方向83cm、直交軸方向84cmを測る。北壁を50cm掘り込んで燃焼部になっている。褐色土から黒褐色土で構築した両袖部が遺存している。

遺物は、覆土中から縄文土器48.9g、土師器1.435.9g、須恵器887.3g、隴30.6gを検出した。カマド内では完形の土師器環(01)とはほぼ完形に復元された同環(02)、須恵器小形甕(03)が検出された。環02は体部破片2点のみがカマド内、他は住居覆土中から検出されている。この環破片2点と小形甕(破片化、破片はすべてカマド内から検出)はカマド覆土第4層(焼土)に伴う形で埋没していた。完形の環01は同第2・4層の上に正位で載っている。明らかにカマド廃絶(破滅)に伴う遺棄遺物である。環02は内外面黒色処理であるが、カマド内出土の体部2破片は赤変し、内面は火爆ぜ・剥離している。環01の下位で検

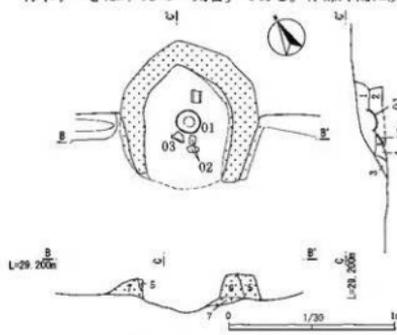


第83図 SI12

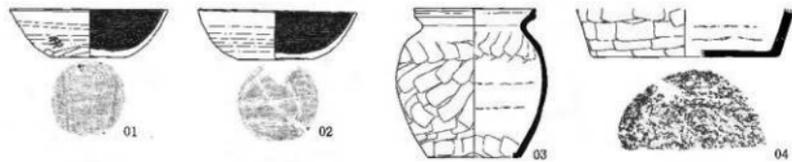
出された小形硬破片(03)は赤変(酸化)している。坏01の外外面には被熱した粘土と煤が付着している。焼土の存在と合わせて、カマド廃絶に際して火を用いた行為がなされたことが想像される。

特筆すべきは坏01の「刻書」である。体部外面に焼成後の刻書がなされている。正位で「主」の字と判断したが「九字切り」の「四蔵五横」の略である可能性もあるか。また、坏01は口縁部や見込み、底部外面が良く摩耗しており、日常、使用済みの什器であつたと思われる。

これらの遺物から、本遺構は平安時代(9世紀前半)と判断される。



第84図 S112 カマド



第85図 S112 出土遺物

第33表 S112 出土遺物観察表

番号	表記	種類	形状	長さ	口径	高さ	用途	器身の形状	胎土	色調	焼成	保存	備考	
01	カマドNo.01	上縁部	無紋部	102.1	13.3	3.96	6.8	底面は平直。各面は縁や中に内突して立ち、口縁部で風かき外反し起層する。	底面及び体部1層は平軸のクワズリ。外周部はロケロク。内面は磨かぬ。	黄赤色ない、白色胎土	内面 7.5SR 3/1 高温 内面 10YR 6/3 高温 外面にぶら黄変	良好 二次焼成 71	表裏	内面黒色 底面 縁部黄変 「上」
02	カマドNo.02	上縁部	無紋部	136.6	13.4	4.0	6.5	底面は平直。各面は縁や中に内突して立ち、口縁部で風かき外反し起層する。	底面及び体部1層は平軸のクワズリ。外周部はロケロク。内面は磨かぬ。	黄赤色ない、白色胎土	内面 7.5SR 3/1 高温 内面 10YR 6/3 高温 外面にぶら黄変	良好	1/4欠損	内面黒色 底面
03	カマドNo.03・カマドNo.04	底面部	小破片	216.2	16.3	112.13	0(0)	底面は平直でやや傾がたい。胎土は縁部で胎土上に敷天を穿す。口縁部は中に内突して起層で風かき外反し起層する。	外周部はヘラケツズリ。口縁は内外両面にロケロク。内面は縁部付近にシラカクが少量。内周部中央付近に少量の焼痕を残す。	黄赤色ない、白色胎土	内面 10YR 10/1 低温 内面 10YR 4/1 低温	良好	口縁部1/4欠損 底面黄変	1/4欠損
04	一板	底面部	片	130.7	—	43.49	16(4)	底面はヘラケツズリ。縁部は底面に立つ。	胎土下層はヘラケツズリ。底面は赤変。	黄赤色ない、白色胎土	内面 10YR 3/1 低温 内面 10YR 4/1 低温	良好	洋磁器類へ 品別 1/4	

S113 (第77・86図・第34表・図版16・45)

2区L-2Gに位置し、調査区内に遺構全体が収まってはいるが、SB02を切りつつも、北側の大半をS109に切られて消滅している。東・西方向にカマドの痕跡が認められないので、北カマドと推定される。主軸方向N-30°-E。南北現状1.20m東西3.00mの平面長方形で深さ22~29cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土の2層からなるレンズ状堆積である。床面全面に浅い貼床を施している。周溝は、幅20~32cm、深さ10cm前後を測り、遺存している壁際を巡っている。

遺物は土師器6.1g、須志器61.9g、縄31.9gを検出した。いずれも小破片で、覆土中から検出されたものである。01の須志器甕の口縁部は9世紀前半に位置づけられる。

これらの遺物から、本遺構は平安時代(9世紀前半)と判断される。



第86図 S113 出土遺物

第34表 S113出土遺物観察表

番号	形状	種類	規格	重量	口径	高さ	底径	調査の概要	発掘の概要	出土	数量	単位	保存	備考
01	一辺	須恵器	壺	6.6	—	—	—	口縁部は外反し白帯部は積み上げられる。	口縁部は内外帯部にコップ。	甕が多い。白色粘土少量。	内面 101R 6/3 に近い須恵器 外面 101R 6/2 須恵器	壺土不貞	口縁部破片	
02	瓶	須恵器	壺	30.1	—	—	—	内面は平行的に削り、内帯は凸凹。	外面は平行的に削り、内帯は凸凹。	甕が多い。白色粘土少量。	内内面 101R 6/3 須恵器	良好	須恵器破片	

S117 (第87・88図・第35表・図版18・45)

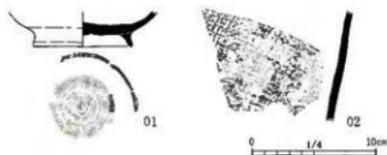
2区C-1Gに位置し、南東隅のみが検出され、P16に切られている。南北1.70m、東西2.25mの推定長方形で深さ20cmを測る。主軸方向N-31°-E。覆土は黒色土・黒褐色土の2層からなり、中央部で大きく攪乱を受ける。床面は地山を直接掘削し全体に硬化している。周溝は、幅16~20cm、深さ5cm前後を測り、隅部である壁際に

周溝が巡り、調査区外に続いている。

遺物は縄文土器16.3g、弥生土器14.9g、土師器187.6g、須恵器274.4g、埴輪64.8g、礫15.1gを検出した。いずれも小破片で、覆土中から検出されたものである。土師器は古墳時代前期11点、平安時代4点であり、前者は重複するP16由来のものである。図示した土師器境、須恵器甕などから、本遺構は平安時代(9世紀後半)に位置づけられるだろうか。



第87図 S117



第88図 S117出土遺物

第35表 S117出土遺物観察表

番号	形状	種類	規格	重量	口径	高さ	底径	調査の概要	発掘の概要	出土	数量	単位	保存	備考
01	一辺	須恵器	右内縁	37.8	—	—	—	表(注1)の子に繋ぎ接合した内帯で成る。裏面部分を含め、外面にシロテ彫刻が施されている。	底縁は短弧→平直の接合が認められる。裏面部分を含め、外面にシロテ彫刻が施されている。	白色粘土多量。	内面 241R 6/6 須恵器 外面 101R 7/4 須恵器	良好	須恵器破片	
02	一辺	須恵器	壺	53.6	—	—	—	胴部下半の破片。直線的に削り成る。	外面は上帯で斜面的に削り、下帯は直線的に削り成る。内帯は凸凹。	甕が多い。内内面 101R 6/4 に近い須恵器	良好	須恵器破片		

第2項 掘立柱建物跡

SB01 (第89・90図・第36表・図版19・45)

2区L-1-2、M-1-2Gに位置し、遺構の南側が検出され、北側は調査区外である。調査区内においては柱穴4基を検出した。桁行方向をほぼ東西、N-88°-Wに置く側柱建物と考えられる。梁行一間=8尺(2.40m)、桁行一間=端間7尺(2.10m)、中間=6.5尺(1.95m)(注1)。各柱穴は円形を基調とするP1~3、方形を基調とするP4が認められ、次の様相を示す。P1は長径95cm、短径93cm、深さ70cm。覆土は暗褐色土から暗褐色土に至る4層からなり、暗褐色土の第1層が柱痕跡で柱幅32cmを測る。掘方埋め土は下から、黒色土・ローム・暗褐色土の水平堆積を示す。P2は長径124cm、短径90cm、深さ62cm。覆土は底部の薄い暗褐色土の他はほぼ単一のロームブロック・炭化物混じりの黒色土である。P3は長径130cm、短径122cm、深さ64cm。覆土は黒色土から暗褐色土の4層からなる。第2層は柱痕跡。上に載る第1層はP2の黒色土と類似する。第3・4層は構築時の掘方埋め土と思われる水平堆積である。P4は長径132cm、短径114cm、深さ44cmを測る。覆土はP2と類似する。

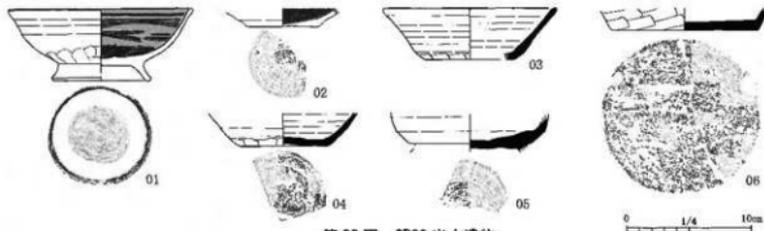
第1層が柱痕跡で、柱幅は24cmを測る。第2～5層が互層状の水平堆積を示す掘方埋め土。P8は長径104cm、短径101cm、深さ51cm。覆土は黒色土から黒褐色土の4層からなる。第1層が柱痕跡で、柱幅は14cmを測る。第2～4層が互層状の水平堆積を示す掘方埋め土。

遺物は、P3とP6の覆土から検出している。P3では縄文土器26.2g、弥生土器8.4g、土師器63.1g、須恵器4.0g、礫5.9g、P6では縄文土器33.0g、弥生土器19.4g、土師器59.5g、礫42.1gがある。土師器には、く字甕の口縁破片（P6出土）がある他は細片である。須恵器は体部下端・底面ケズリの小破片1点（P3出土）のみである。9世紀を前後する時期であろうとしか言及できない。SI09・10・13に切られることから、本遺構の帰属時期は9世紀前半を下限とする。

SB03（第92・93図・第37・38表・図版21・22・45）

2区J-2, K-1・20に位置し、北東部分は調査区外である。古墳時代前期の住居跡SI11を切る。梁行1間、桁行3間の側柱建物である。桁行方向N-69°-W。梁行3.60m・12尺、桁行6.30m・21尺・1間＝端間8尺、中央間5.5尺。桁行の柱穴配置は広い端間と狭い中央間の構成で、SB02に類似している。しかし、各柱穴の平面形は円形を基調としながらも、歪なものが自立つ。また、全体として柱筋の通りが悪い。P1は長径111cm、短径76cm、深さ52cm。覆土は極暗褐色土から黒色土に至る3層の水平堆積である。P2は長径65cm、短径56cm、深さ32cm、柱幅は23cmを測る。P3は長径88cm、短径58cm、深さ30cm。覆土は黒色土から暗褐色土に至る3層からなり、第1層は柱痕跡で、柱幅は17cm。第2・3層が水平堆積をなす掘方埋め土。P4は長径100cm、短径85cm、深さ62cm。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る5層からなる。第1層が柱痕跡で、柱幅18cmを測る。第2～4層が互層状の水平堆積を示す掘方埋め土。P5は長径96cm、短径84cm、深さ48cm。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなる。第1層が柱痕跡で、柱幅28cmを測る。P6は長径78cm、短径72cm、深さ44cm。覆土は黒色土と極暗褐色土の2層からなる。さらに、梁行中央には東西ともに、南側柱列から北へ6.5尺の位置に柱痕跡を残す柱穴が存在する（P05・15）。また、両柱穴を結ぶ線上に同じく柱痕跡を有するP03がある。柱掘方の大きさは異なるものの、柱痕跡（幅20cm前後）と位置は、棟持ち柱の掘方として本建物を構成する柱穴と見てよいだろう。

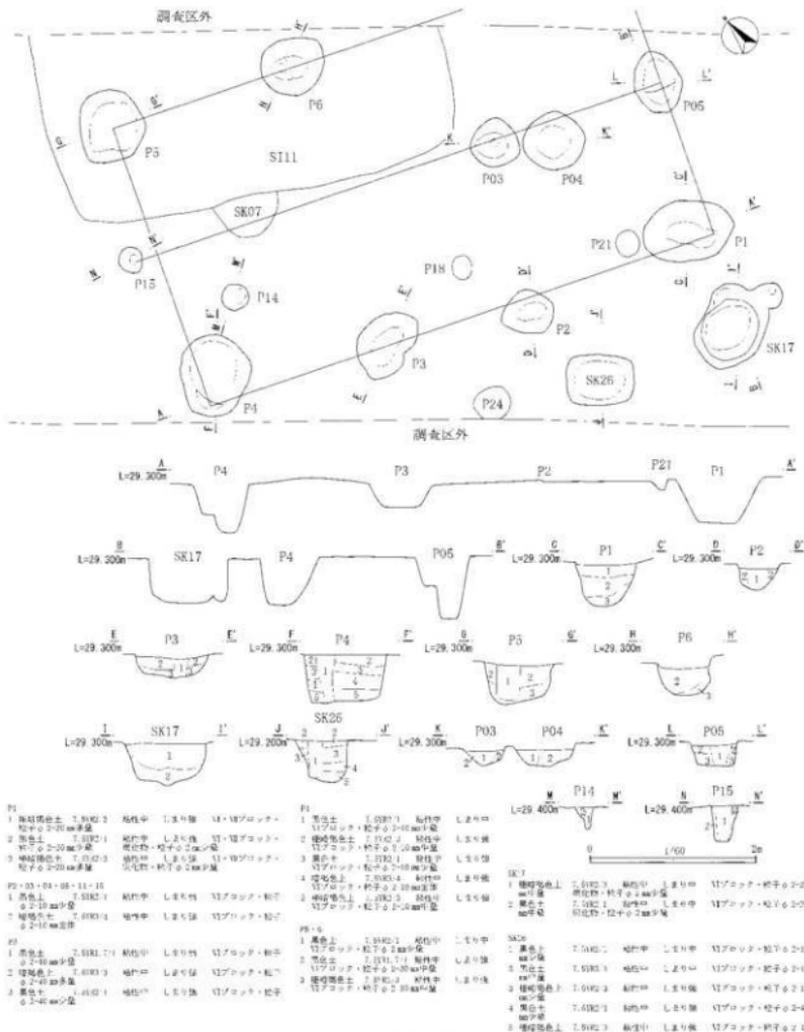
遺物は重複するSI11出土として取り上げられたもので、土師器155.7g、須恵器377.6gがある。04はやや大振りの腰部有種の須恵器有台で、9世紀前半までのものである。03の同無台は底径が大きく、体部下端手持ちケズリ、底面回転ケズリであることから9世紀前半、01の内面黒色処理の土師器有台は9世紀後半に位置づけられるものであろう。したがって、本遺構の帰属時期は9世紀前半から後半の間に求めたい。



第92図 SB03出土遺物

第37表 SB03出土遺物観察表(1)

番号	位置	種類	材質	口径	底径	高	形状	輪郭の特徴	断面の特徴	胎土	色調	構造	内容	備考
01	SI11	土師器	有台	184.8	(14.7)	8.9	7.8	裏面はやや内径先端に「ㄱ」の字の凹みがあり、断面は細やかな内面にしてやま、口縁部はやや内径先端に陥んで凹みがある。	底面から体部下端までには手持ちケズリと底面回転ケズリがあり、内面は黒く塗られる。	黄褐色多い。	内面 100% 2/1 裏面 100% 2/4 内径 100% 2/1	貝片	内面黒色 処理	
02	SI11	土師器	無内径	50.9	—	01.53	8.0	底面は平直で断面はやや内径先端に陥んで凹みがある。断面は口縁部は欠損する。	底面は平直で断面はやや内径先端に陥んで凹みがある。内面は黒く塗られる。外側はセラミック。	黄白・白色腔子多い。	内面 100% 3/1 裏面 100% 2/3 内径 100%	貝片	内面黒色 処理	



第38表 SB03出土遺物観察表(2)

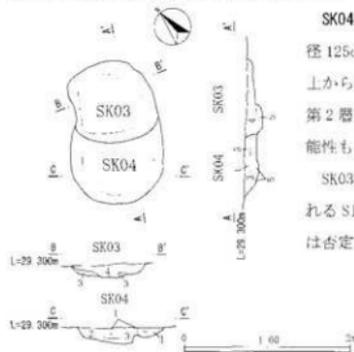
第93圖 SB03

番号	通記	種類	経緯	幅	内径	深さ	西径	観察の概要	観察の概要	出土	出所	現状	備考
03	SK18	竪穴	17.4	113.0	4.1	7.1	7.1	壁面は平直。底部は土層に達する。	底面は平直。土層に達する。内径は内径11.0cm。	土質は黄褐色。土質はやや硬い。土層に達する。	土質	良好	白粉土層
04	SK11	竪穴	43.0	—	42.7	47.0	47.0	壁面は平直。底部は土層に達する。土層の深さは不明。	底面は平直。土層に達する。内径は内径11.0cm。	土質はやや硬い。土層に達する。	土質	良好	黄褐色土層
05	SK11	竪穴	45.3	—	43.1	—	—	高さは測りず。土層に達しては不明。土層の深さは不明。	底面は平直。土層に達する。内径は内径11.0cm。	土質はやや硬い。土層に達する。	土質	良好	黄褐色土層
06	SK11	竪穴	178.0	—	1.8	112.0	112.0	壁面は平直。底部は土層に達する。	底面は平直。土層に達する。内径は内径11.0cm。	土質はやや硬い。土層に達する。	土質	良好	黄褐色土層

第3項 土坑

SK03・04 (第94図・図版22)

SK03 1区C-26に位置しSK04を切っている。長軸方向N-20°-E。長径125cm、短径95cmの平面楕円形で深さ20cmを測る。極暗褐色土～暗褐色土上の3層からなる平行堆積である。



第94図 SK03・04

SK04 1区C-26に位置しSK03に切られる。長軸方向N-12°-E。長径125cm、短径現状83cmの平面長方形で、深さが15cmを測る。黒色土から暗褐色土上の4層からなる、攪拌されたような層位で、このうち第2層は暗赤褐色土をした焼土で、焼土層の状況から扇外カマドの可能性も考えられる。

SK03・04ともに遺物は検出されなかった。9世紀前半に位置づけられるS102の竅穴に接しており、同じ居居の上層構造を考えれば同時存在は否定される。

SK05 (第83図・図版22)

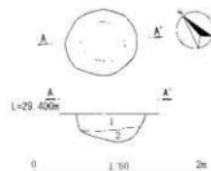
2区I-16に位置する。遺構の南側は調査区外となっており、また遺構の東側をS112に切られている。長軸方向N-48°-W。長径76cm、短径26cmの平面長方形で深さ35cmを測る。覆土は黒色土1層からなる。底部が平坦で壁が垂直に立ち上がっており、住居跡の可能性も考えられる。

遺物は検出されなかった。S112との重複関係から、本遺構の構築時期は9世紀前半を下限とする。

SK08 (第95図・図版22)

2区J-26に位置する。長軸方向N-72°-W。長径85cm、短径75cmの平面円形で深さ33cmを測る。黒色土2層からなるレンズ状堆積である。

遺物は、覆土から土師器30.8g、須志器24.4gを検出した。須志器は薄手で還元不良の焼胴部破片で、外面には平行叩きと格子目叩きが認められる。土師器は厚手の口縁部で端部が薄くなる字壺が見られるが、時期は限定しがたい。前者から、本遺構は平安時代(9世紀代)と思われる。

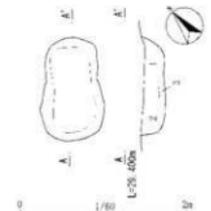


第95図 SK08

SK13 (第96図・図版22)

2区L-26に位置する。長軸方向N-38°-E。長径125cm、短径63cmの平面楕円形で深さ39cmである。覆土は極暗褐色土から黒色土からなり、本来第2・3層で互層状の平行堆積をなしていたものが第1層で乱されたものと判断される。

遺物は、覆土から弥生土器45.2g、土師器17.5g、須志器10.8g、礫15.2gを検出した。土師器は壺の胴部小破片。須志器は薄手の壺の胴部小破片で、還元不良、やや硬質焼成、外面平行叩き、内面には粘土組織み上げ痕を残すものである。平安時代(9世紀代)に位置づけられるか。

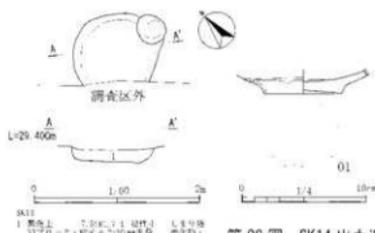


第96図 SK13

SK14 (第97・98図・第39表・図版22・45)

2区J-2Gに位置する。長径113cm、短径97cmの平面門形で深さ19cmを測る。長径37cm、短径34cm、深さ39cmの平面門形ピットに切られる。長軸方向N-77°-E。

遺物は、覆土から土師器89.2g、須恵器17.7gを抽出した。土師器は図示した無台杯の底部破片(01)と甕の胴部小破片。須恵器は薄身の甕の胴部小破片で、還元不良、軟質焼成、外面格子目叩き。平安時代(10世紀前半)に位置づけられ、本遺構の時期もここに求められるだろう。



第97図 SK14

第98図 SK14出土遺物

第39表 SK14出土遺物観察表

品名	図記	種類	材質	用途	形状	色	観察	出所	出土	位置	層	備考
01	SK14	土師器	無台杯	11.1	-	黒色上	2.2	底面中央部、底面内径が小さく、底面に凹凸がある。内径は約10cm、外径は約12cm、高さは約1.5cmである。	古墳時代中・後期の土師器	2区J-2G	1	無台杯の底部破片

SK15 (第89図・図版22)

2区I-2Gに位置する。長軸方向N-76°-E。黒色土から暗褐色土の3層に至る。2層が柱根で柱幅は19cmである。長径150cm、短径90cmの平面楕円形で、深さ32cmを測る。SB01に伴う柱穴の可能性ある。

遺物は、覆土から土師器7.0g、須恵器8.1gを抽出した。土師器は内外面赤彩の杯の口縁部小破片。須恵器は有台杯・盤の体部下端小破片で、白色針状物質(海綿骨針)を粘土に含む。前者は古墳時代中期、後者は奈良・平安時代(8世紀後半～9世紀前半)の所産であろう。

SK16 (第89図・図版23)

2区L-1・2Gに位置し、実際にはA・B・Cの3基が重複し、B・C・Aの順に切っているものである。SK16-Aは直径70cmの平面円形で深さは56cmを測る。黒色土から暗褐色土に至る3層で第1層が柱根で第2・3層が平行堆積となっており、柱幅14cmを測る。SK16-Bは長径65cm、短径55cmの平面円形で、深さは48cm、暗褐色土・黒色土の2層からなる。SK16-Cは長径現状70cm、短径47cmの推定平面楕円形で、深さは17cm。

遺物は、覆土から弥生土器8.8g、土師器14.9gを抽出した。土師器は古墳時代中・後期の杯の体部細片と甕の口縁部小破片である。重複する掘方覆土に含まれていたものか、本遺構は前述のとおり、SB01との関連から平安時代の所産と考えておきたい。

SK17 (第93図・図版23)

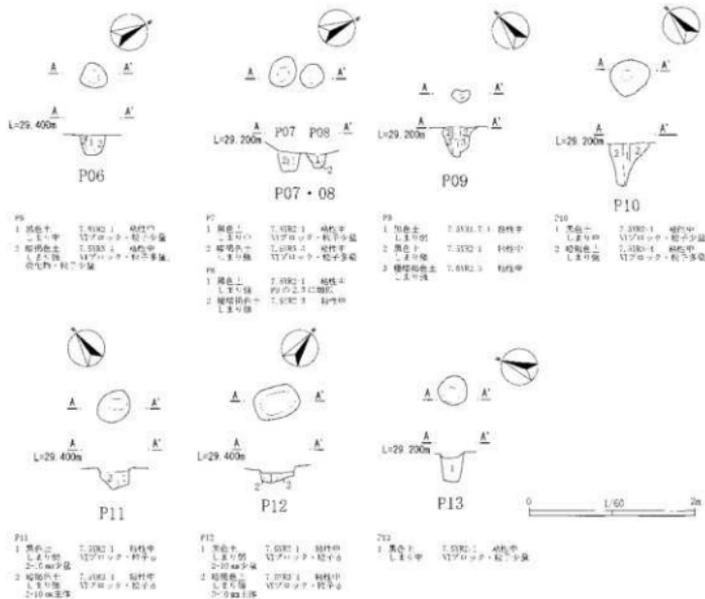
2区K-2Gに位置する。直径36cmの平面円形のピットによって東側を切られているが、概ね長径98cm、短径75cmの平面楕円形となり、深さ54cmを測る。覆土は椶暗褐色土・黒色土の2層となる。規模と掘方形状、周辺状況から、掘立柱建物の柱穴の可能性ある。遺物は検出されなかった。

SK26 (第93図・図版23)

2区M-2Gに位置する。長軸方向N-51°-E。長径83cm、短径61cmの平面両丸長方形で、深さ51cmを測る。覆土は黒色土から椶暗褐色土の5層からなり、第1層が柱痕跡、第2～5層が掘方埋め上で互層状の水平堆積をなしている。柱幅は18cmである。組み合う柱穴が不明であるが、覆土の状況から平安時代の掘立柱建物の柱穴と考えられる。遺物は検出されていない。

第4項 ビット (第99図、第47表、図版23・24)

調査区全体では都合38基のビットが確認された。個々の計測値は第47表に示す通りである。遺物が確実に伴い、時期が判明したものは、古墳時代前期のP16のみである。他はほとんど無遺物で、わずかに検出されたものでも、遺構の時期を確定するに資していない。したがって、覆土の状況から、古代(古墳～平安時代)と中・近世に推定されるものに大別した。古代のものは、覆土が基本上層の第IV-1～5層(黒色土)に類似し、若干縮りがある。



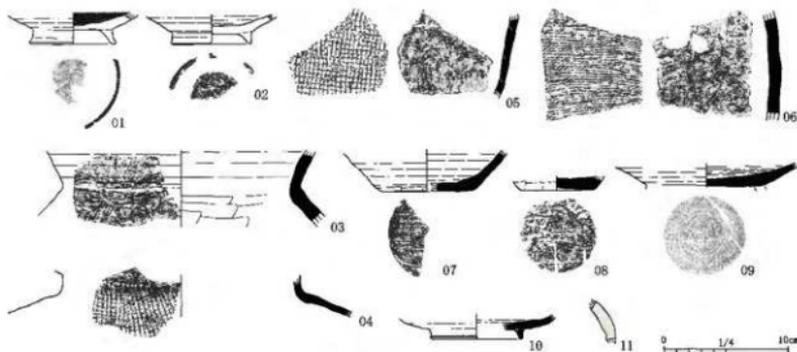
第99図 ビット

第5項 溝跡

SD08 (第45・100図・第40表・図版10・45)

1区F-1・2Gに位置する。S105を切っている。東西に走行する。走行方向N-54°-W。最大幅は2.0m、深さは90cmを測る。覆土は黒色土2層からなるシンス状堆積である。出土遺物は覆土中から古墳時代の土師器が出土している。

重複する古墳時代前期の住居跡S105出土として取り上げられたもののうち、平安時代の上師器・須恵器・灰軸陶器については、本来、本遺構覆土に含まれていたものと判断した。したがって、縄文土器69.8g、弥生土器38.5g、須恵器1,849.3、土師器430.8g(古墳前期88.5g含む)、灰軸陶器8.6g、礫13.5gの出土遺物がある。本遺構に伴うと考えられる平安時代の土師器・須恵器は、いずれも小破片が多く、完形品はない。また、出土状況に特筆すべきこともない。これらは9世紀前半に位置づけられる遺物群である。



第100図 SD08出土遺物

第40表 SD08出土遺物観察表

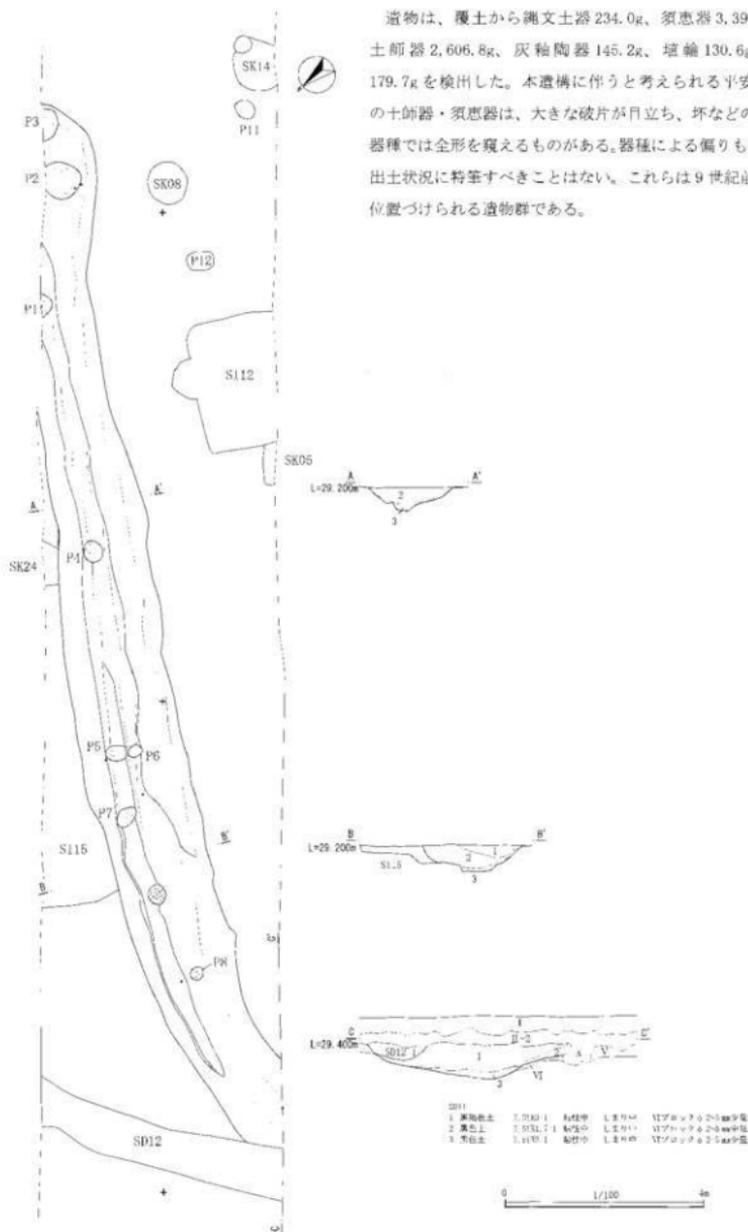
番号	位置	種類	形状	直径	口径	高さ	底径	形状の特徴	壁片の特徴	胎土	色層	地味	存在	備考
01	S106	土師器	有台碗	74.2	—	C1.3	(B.10)	裏面は「P」の字に施き内面は施き。縁部は大きく開く。	外面縁部は凹輪ヘラツボリの遺物が付され、ロクロナデ。内面は開かれる。	黄中や多い、白色粒子少量、白色粒状物少量。	内面 2.8Y 5/1 黒 外面 10YR 5/4 濃い黄	良好	体部下部・底部1/4	内面黒色地帯
02	S105 敷土	土師器	有台碗	42.2	—	C1.4	(B.4)	裏面は「P」の字に施き三角状を呈する。縁部は大きく開く。	裏面に凹輪ヘラツボリの痕に付される。内面黒面にロクロナデ。	黄中多い、白色粒子少量、白色粒状物少量。	内面 2.8Y 5/6 黄 外面 2.8Y 5/6 明赤	良好	体部中部～底部1/2	
03	S104	須恵器	甕	81.8	—	C1.3	—	縁部は破断。「C」の字に施き縁部は幅広く大きく開く。口縁部は反張する。	縁部に施きは施されない。外面縁部に平行な、外縁部から内面迄は平行ナデ。内面縁部からヘラツボリが施される。	白色粒子やや多い。	内面 5.0Y 6/ 灰 外面 5.0Y 5/ 灰	良好	無残破片	
04	S105	須恵器	甕	30.8	—	C1.4	—	縁部上半～唇直下の破片。縁部は中や多い内面にて施き。縁部は「C」の字に施き立立つ。	外面縁部は平行ナデ（破断）。縁部は内外面共にロクロナデ。内面縁部はヘラツボリ。	黄中、白色粒子少量。	内面 10YR 6/4 に近い黄 外面 10YR 6/3 に近い黄	良好	無残破片	
06	S105	須恵器	甕	35.8	—	—	—	無残破片。中や内面する。	内面は縁部小中。外面は黄褐色の土質。	黄中黄。白色粒子少量。	内面 2.5Y 5/1 黄 外面 2.5Y 5/1 黄	良好	体部破片	新物
08	S105	須恵器	甕	51.3	—	—	—	無残破片。中や内面する。	外面は平行ナデ。内面は黄褐色の土質。	黄中や多い、白色粒子少量、小破片。	内面 10YR 6/ 4 灰 外面 10YR 6/ 4 灰	良好	体部破片	新物
07	S106	須恵器	胴台形	45.3	—	C1.4	(7.4)	底面は平輪。縁部は底縁部に立立つ。	内面底面及び体部下部は平行ナデナデ。体部及び内面はロクロナデ。	白色粒子、白色粒状物や黄中や多い。	内面 5YR 5/1 灰 外面 5YR 5/1 灰	良好	体部破片	黄褐色地帯
08	S105	須恵器	胴台形	54.8	—	C1.2	5.8	底面は中や少し底縁部の平輪。	底面及び縁部下部は平行ナデナデ。内面はロクロナデ。底面・底縁部の底縁部がある。	黄中多い、白色粒子、白色粒状物や黄中や多い。	内面 2.5Y 5/1 黄 外面 2.5Y 5/2 黄	良好	底部	新物
09	S105 敷土	須恵器	有台碗	173.2	—	C1.3	—	底面は平輪が大きく、裏面は反張している。	内外面共にロクロナデ。見込みの中及び縁部に施きが見られる。彫刻痕。	黄中多い、白色粒子、小破片。	内面 10YR 1/1 灰白 外面 10YR 1/1 灰白	良好	底部	新物
10	S105 敷土	須恵器	有台碗	18.0	—	C1.2	C1.1	裏面は「P」の字に施き内面は施き。縁部は未だに施き状態である中や内面する。口縁部は反張する。	内外面共にロクロナデ。	黄中、白色粒子多い、小破片。	内面 5Y 5/3 黄 外面 5Y 5/2 灰白	良好	体部中部～底部	遺物前
11	S106	須恵陶片	板	8.6	—	—	—	内面する層部の破片。	外面は反張。	黄中粒子、白色粒子少量。	内面 2.5Y 5/3 黄 外面 2.5Y 5/2 灰白	良好	底部	片断

SD11 (第101・102図・第41表・図版25・45)

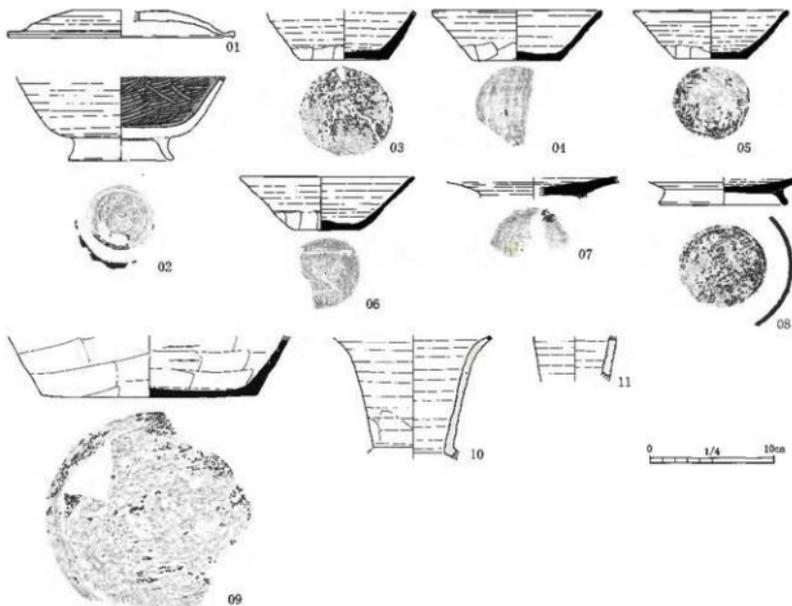
2区H-1・2, I-1・2, J-16に位置し、S115を切り、SD12に切られている。東西に走行している区画溝である。走行方向N-61°-W。上端の幅は、西端で1.50m、東端で2.20mを測り、確認面から底部までの深さは48～70cmである。幅90～130cmのテラス部分を持ち、そこから深さ20cm下がったところを底部とする、細い溝状の筋が穿たれており、幅30cm前後を測る。覆土は黒褐色土から黒色土に至る3層のレンズ状堆積であるが、溝の西に穿ったテラス部分の下層で長径45cm、短径35cm、厚さ5cmの被熱範囲が検出されている。

遺構内にかかる平面円形から楕円形をなすビット8基が検出されている。P1は長径50cm、短径現状21cm、深さ66cm、P2は長径78cm、短径73cm、深さ71cm、P3は長径65cm、短径現状29cm、深さ66cmである。P4は長径38cm、短径35cmの平面円形で深さ34cm、P5は長径40cm、短径35cmの平面円形で深さ47cm、P6は長径26cm、短径25cmの平面円形で深さ43cm、P7は長径49cm、短径25cmの平面楕円形で深さ90cm、P8は長径26cm、短径24cmの平面円形で深さ15cmを測り、それぞれ黒色土7層を充填していた。このうち調査区北壁にかかるP1～3の3基は溝を切った状態で検出されており、他の5基は切り合い不明である。

遺物は、覆土から縄文土器 234.0g、須恵器 3,391.1g、土師器 2,606.8g、灰軸陶器 145.2g、埴輪 130.6g、鏝 179.7g を検出した。本遺構に伴うと考えられる平安時代の土師器・須恵器は、大きな破片が目立ち、坏などの小形器種では全形を窺えるものがある。器種による偏りもなく、出土状況に特筆すべきことはない。これらは9世紀前半に位置づけられる遺物群である。



第101図 SD11



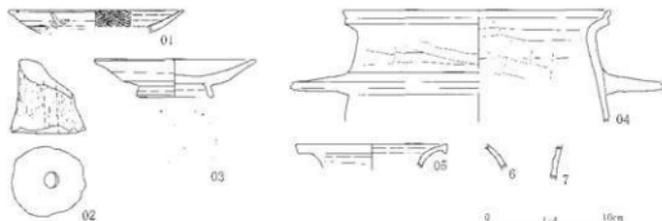
第102図 SD11出土遺物

第41表 SD11出土遺物観察表

番号	形状	種類	寸法	重量	口径	断面	底径	基部の形状	基部の特徴	粘土	色調	線径	保存	備考
01	一柄	土製鏃	鏃	72.8	(18.0)	CS.30	—	尖部より基部は緩やかに内廣し、基部は外反した後に急激に急下する。基部内径は持ちたい。基部部分は欠損している。	外縁尖部から基部にかけては緩いヘラズブ。但し内外は共にロケナツ。	黄白・白色粘土が多い。小礫や中礫。	内外径 7.5/8 1/4 に近い溝	良好	1/4	
02	一柄	土製鏃	有台鏃	264.0	—	CS.83	5.2	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は内側面に大きく張り出し、基部部分は欠損している。	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は内側面に大きく張り出し、基部部分は欠損している。	黄白・白色粘土が多い。小礫や中礫。	内外径 3.0/3.1 溝 1.0/1.5 5/3 に近い溝	良好	基部 1/2 ~ 基部	内縁部色地帯
03	一柄	銅製鏃	無台鏃	156.1	—	CS.90	7.0	基部は平直。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	基部は一方のヘラズブ。基部下縁は緩いヘラズブ。その他はロケナツ。	黄白・白色粘土・小礫や中礫。	内外径 2.5/2.6 5/2 程度の溝	良好	白線跡 1/3	新出土
04	一柄	銅製鏃	無台鏃	85.9	(11.4)	CS.88	7.0	基部は平直。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	基部は一方のヘラズブ。基部下縁は緩いヘラズブ。その他はロケナツ。	黄白・白色粘土・小礫。	内外径 2.5/2.6 5/2 程度の溝	良好	白線跡 1/3	新出土
05	一柄	銅製鏃	有台鏃	106.3	(12.3)	CS.9	5.6	基部は平直。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	基部は一方のヘラズブ。基部下縁は緩いヘラズブ。その他はロケナツ。	白色粘土や中礫。小礫少量。	内外径 2.5/2.6 5/2 程度の溝	良好	白線跡 1/3	常設品A
06	一柄	銅製鏃	無台鏃	60.5	(11.9)	CS.2	4.5	基部は平直。基部は中央外反後に削り、基部は欠損している。	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は内側面に大きく張り出し、基部部分は欠損している。	黄白・白色粘土。小礫少量。	内外径 2.5/2.6 5/2 程度の溝	良好	白線跡 1/16 ~ 基部 5/3	新出土
07	一柄	銅製鏃	有台鏃	74.9	—	CS.83	—	基部は平直。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	基部は一方のヘラズブの後に急激に急下する。基部は内径に持ちたい。基部は内径に持ちたい。基部は内径に持ちたい。	黄白・白色粘土。小礫少量。	内外径 2.5/2.6 5/2 程度の溝	良好	基部 2/3	常設品B
08	一柄	銅製鏃	有台鏃	133.2	—	CS.30	10.0	基部は「ハ」の字に似る。基部は水平に急下する。	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は内側面に大きく張り出し、基部部分は欠損している。	黄白・白色粘土。小礫少量。	内外径 3.0/3.1 溝 1.0/1.5	良好	基部下縁 ~ 基部 1/2	
09	一柄	銅製鏃	鏃	292.2	—	CS.03	17.2	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	黄白・白色粘土。小礫少量。	内外径 2.5/2.6 5/2 程度の溝	良好	基部下縁 ~ 基部	
10	一柄	銅製鏃	長柄鏃	136.1	—	CS.03	—	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	黄白・白色粘土。小礫少量。	内外径 3.0/3.1 溝 1.0/1.5	良好	白線跡 1/3	常設品C
11	一柄	銅製鏃	長柄鏃	9.1	—	CS.03	—	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	基部は緩やかに外反して「ハ」の字に似る。基部は直線的に削り、基部は欠損している。	黄白・白色粘土。小礫少量。	内外径 3.0/3.1 溝 1.0/1.5	良好	基部跡	常設品

第6項 遺構外出土遺物

9世紀代の土師器、灰釉陶器が確認できる。04は常総型葉に鏝を付けた形の羽釜であり、希少例である。灰釉陶器は前記の遺構出土のものと同様、胎上に黒色粒子を含むもので、尾張産、黒笹90号窯式を中心とした所産と考えられる。その他、個別の詳細は観察表を参照されたい。



第103図 遺構外出土遺物（平安）

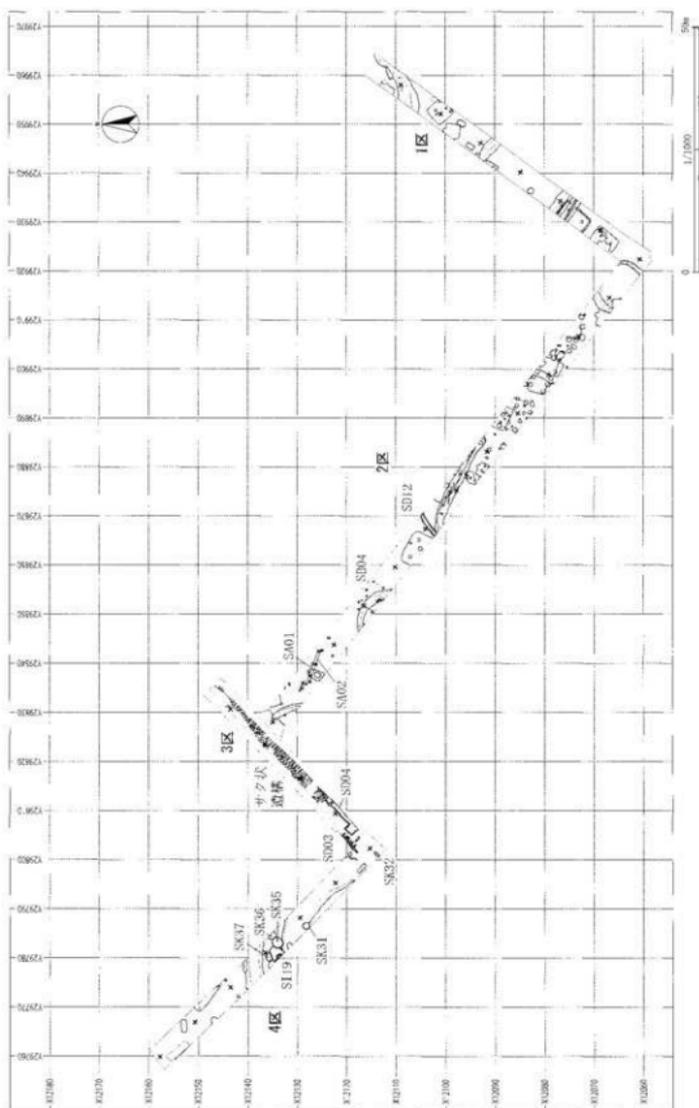
第42表 遺構外出土遺物観察表（平安）

番号	所在地	遺物	形状	用途	長さ	幅	高さ	厚さ	重量	観察の特徴	定号	数量	出土	年代	備考	
01	4区	土師器	1.66部	皿	7.9	114.77	1.30	—	—	縁から内縁に至る縁には黒色粒子の付着が認められ、内縁にはワタシテ模様が大きく残る。	外側はワタシテ、内側は黒色粒子の付着が認められる。	1区1-1区 約7点量	1区 約50点	1区 約50点	1区 約50点	1区 約50点
02	1区	灰釉陶器	1個	鉢	117.9	9.9	8.9	5.5	—	同様に形多変した遺物群に属している。平縁に縁沿い2本の黒色粒を施すなど、胎上に黒色粒子を含む。口縁の可動性を考慮して、丸の字裏に黒色粒を施すことが、丸の字裏に施すことが確認された。	内縁は縁沿いのワタシテ、外縁は黒色粒子の付着が認められる。	1区1-1区 約1点量	1区 約1点	1区 約1点	1区 約1点	1区 約1点
03	2区	1区	土師器	有文皿	106.9	112.47	3.1	5.9	—	内縁は縁沿いのワタシテ、外縁は黒色粒子の付着が認められる。	内縁は縁沿いのワタシテ、外縁は黒色粒子の付着が認められる。	1区1-1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点
04	2区	1区	土師器	羽釜	227.2	129.77	3.1	—	—	縁沿いのワタシテ、内縁には黒色粒を施すなど、胎上に黒色粒子を含む。口縁の可動性を考慮して、丸の字裏に黒色粒を施すことが、丸の字裏に施すことが確認された。	内縁は縁沿いのワタシテ、外縁は黒色粒子の付着が認められる。	1区1-1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点
05	2区	1区	灰釉陶器	羽釜	11.1	112.36	1.05	—	—	口縁は縁沿いのワタシテ、内縁には黒色粒を施すなど、胎上に黒色粒子を含む。口縁の可動性を考慮して、丸の字裏に黒色粒を施すことが、丸の字裏に施すことが確認された。	内縁は縁沿いのワタシテ、外縁は黒色粒子の付着が認められる。	1区1-1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点
06	2区	1区	灰釉陶器	皿	3.7	—	—	—	—	縁沿いのワタシテ、内縁には黒色粒を施すなど、胎上に黒色粒子を含む。口縁の可動性を考慮して、丸の字裏に黒色粒を施すことが、丸の字裏に施すことが確認された。	内縁は縁沿いのワタシテ、外縁は黒色粒子の付着が認められる。	1区1-1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点
07	1区	1区	灰釉陶器	皿	4.7	—	—	—	—	縁沿いのワタシテ、内縁には黒色粒を施すなど、胎上に黒色粒子を含む。口縁の可動性を考慮して、丸の字裏に黒色粒を施すことが、丸の字裏に施すことが確認された。	内縁は縁沿いのワタシテ、外縁は黒色粒子の付着が認められる。	1区1-1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点	1区 約100点

【注】

1. 開尺については、30 cm＝1尺とした。

第6節 中・近世



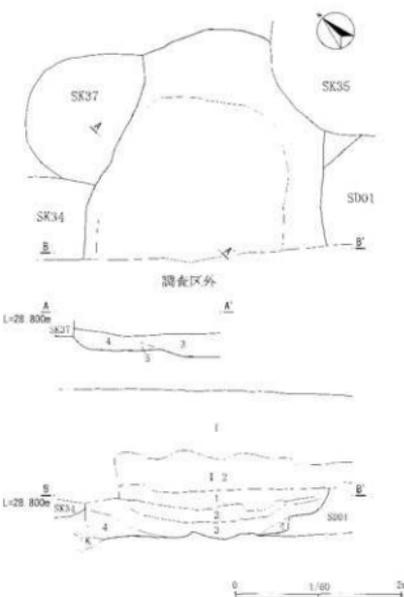
第104図 中・近世遺構分布図

第1項 方形竪穴遺構

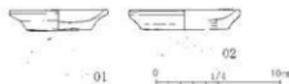
SI19 (第105・106図・第43表・図版25・46)

4区E-2・3Cに位置し、調査区内においては遺構の北側が検出され、南側は調査区外となる。SD01とSK34・37を切り、SK35に切られる。調査区内においては竪穴・カマドが検出されなかったため、仮に北方向を主軸とした。主軸方向N-37°-E。規模は現状で南北2.90m、東西2.93mの隅丸長方形で、深さ28cmを測る。覆土は黒色土から暗棕褐色土に至る5層のレンズ状堆積である。床面は地山(VI層)を直接掘削したもので、そこから壁は比較的垂直に立ち上がっている。南から東側の壁(上半部)は崩落のためか、緩やかな傾斜となっている。

遺物は、覆土から弥生土器7.6g、土師器209.2g、須恵器53.3g、礫581.9gを検出した。土師器は図示した土師質土器小皿と同様の破片が主体を占める。中世の所産と思われる。竪は被熱破砕の小礫2点のほかは網罟母片岩の破片(6~9cm大)である。やや被熱痕跡・赤変化が見られる。近接する8号墳に由来するものか、本遺構で使用されたものかは判断できない。硬質で砂質の特徴を有し、筑波寄りの礫山が推定される。



第105図 SI19



第106図 SI19出土遺物

第43表 SI19出土遺物観察表

番号	位置	種類	素材	長さ	口径	高さ	重量	器底の形状	器底の特徴	出土	地層	検定	保存	分類
01	北壁	土師質土器	小皿	30.3	7.5	1.85	4.2	器底は平坦で、内面は被熱痕跡が強く認められる。	器底は平坦で、内面は被熱痕跡が強く認められる。また、器底の中央部に小礫が埋め込まれている。	黒色土から暗棕褐色土まで	内外面とも被熱痕跡が認められる。	良好	1/2	土師
02	北壁	土師質土器	小皿	19.6	8.8	1.85	16.8	器底は平坦で、内面は被熱痕跡が強く認められる。	器底は平坦で、内面は被熱痕跡が強く認められる。また、器底の中央部に小礫が埋め込まれている。	黒色土から暗棕褐色土まで	内外面とも被熱痕跡が認められる。	良好	1/4	土師

第3項 柵・掘立柱跡

SA01 (第108図・図版26)

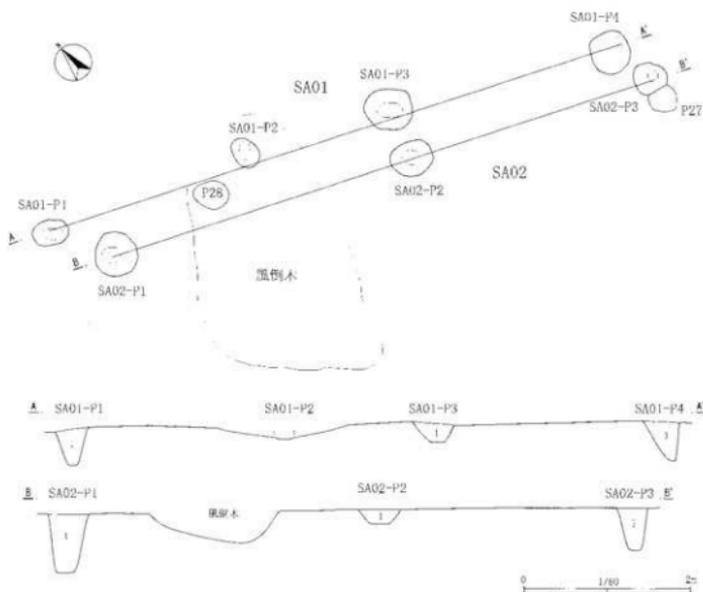
2区D-1・2Gに位置し、P1～4の4基が、南に位置するSA02と並行して東西に3間並んで配置されている。長軸方向N-68°-W。規模は、P1-2間2.50m、P2-3間2.15m、P3-4間が2.60mとなり、全体で7.25mを測る。各ピットの形状規模は次の通りである。P1は長径34cm、短径30cmの平面円形で深さ43cm。P2は長径40cm、短径30cmの平面楕円形で深さ19cm。P3は長径60cm、短径49cmの平面楕円形で深さ20cm。P4は長径52cm、短径49cmの平面円形で深さ49cmを測り、いずれも第II-2層に類似した覆土を充填している。

遺物は検出されなかった。

SA02 (第108図・図版26)

2区D-1・2Gに位置し、P1～3の3基が、北に位置するSA01と並行して東西に2間並んで配置されている。円形ピットP27に切られる。長軸方向N-68°-W。P1-2間が3.80m、P2-3間が3.10m、全体で6.90mを測る。各ピットの形状規模は次の通りである。P1は長径54cm、短径51cmの平面円形で深さ72cm。P2は長径52cm、短径42cmの平面楕円形で深さ20cm。P3は長径42cm、短径34cmの平面楕円形で深さ52cmを測る。各ピットとも第II-2層に類似した覆土を充填している。

遺物は検出されなかった。



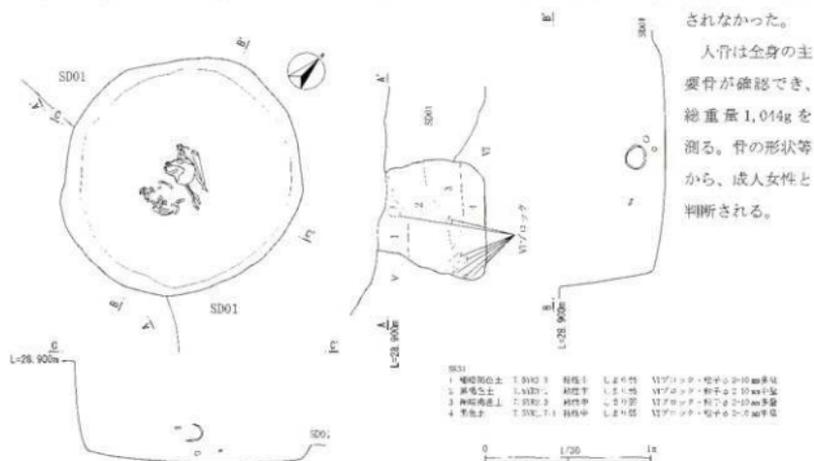
第108図 SA01・02

SA01・02
1 敷土 2 土壌 3 砂層 4 土盛り層 5 Pピット・柱礎の土盛り層 6 倒樹木の根層 7 砂層 8 土盛り層

第4項 土坑

SK31 (第109図・図版27・48)

4区E・F-2Gに位置し、8号墳の高溝であるSD01を切る。長径152cm、短径142cmの平面円形で、深さ40cmを測る。覆土は極暗褐色土から黒色土に至る4層からなる。人骨が出土しており、発掘時の状態では崩れていたが、土坑の形状から埋葬時において座位であったと推定され、そこから近世の土坑墓と判断される。副葬遺物などは検出



第109図 SK31

SK32 (第110図・図版27)

4区G・H-1Gに位置する。北西側を南北方向に攪乱が走り、検出された人骨も破損していた。長軸方向N-42°E。長径123cm、短径49cmの平面長方形で深さ24cmである。覆土は黒色土の単層である。人骨は残存状態が悪く、明確に把握できたのは歯と下肢骨(脛骨ほか)であった。図・写真で十分に記録ができなかったが、北頭位で西を向いた横臥屈葬の状態と判断された。墓壇の形状から中世の上坑墓と判断される。副葬遺物などは検出されなかった。



第110図 SK32

SK35 (第111図・図版27)

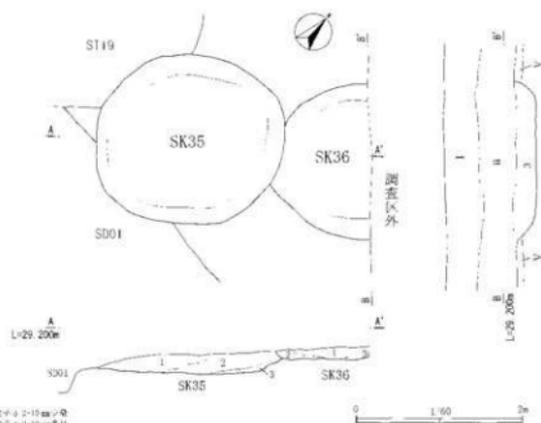
4区E・F-1Gに位置し、SI19を切り、SK36に切られる。長軸方向N-10°E。長径237cm、短径213cmの平面円形で深さ25cmを測る。覆土は黒褐色土から暗褐色土に至る3層の堆積で、南に向かって下降する形である。

遺物は、覆土から土師器9.9g、須臾器4.7gを検出した。中世のSI19を切ることから、本遺構はそれ以降の所産となる。

SK36 (第111図・図版27)

4区E-1Gに位置し、遺構の北側は調査区外である。SK35を切る。長軸方向N-49°-E。長径188cm、短径現状180cmの推定円形で、深さ24cmを測る。覆土は黒褐色土から暗褐色土にせる3層のレンズ状堆積である。

遺物は、覆土から土師器12.6gを検出した。遺構の重複関係から、本遺構は中世以降のものと考えられる。



SK35・36 Aセクション
1 黒褐色土 7.533 1 粘性土 L.800 13プロット・12平口 210cm×9
2 暗褐色土 7.582 3 粘性土 L.800 13プロット・12平口 210cm×9
3 暗褐色土 7.632 4 粘性土 L.800 13プロット・12平口 210cm×9

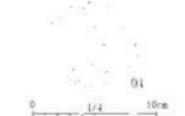
SK36 Bセクション
1 暗褐色土 7.533 4 粘性土 L.800 13プロット・12平口 210cm×9

第111図 SK35・36

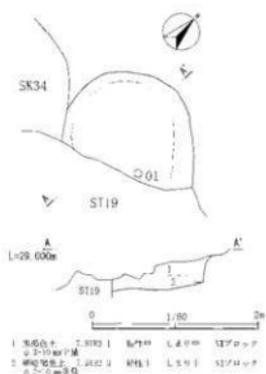
SK37 (第112・113図・第44表・図版25・46)

4区E-F-2Gに位置する。S119及びSK34に切られている。長軸方向N-27°-W。長径162cm、短径120cmの平面長方形で深さ30cmを測る。覆土は黒褐色土・極暗褐色土の2層からなる堆積である。

遺物は、覆土第1層から光形の土師質土器小皿(01)が1点検出された。重複するS119出土の小皿と類似し、互いに切り合う位置で検出されていることから、本来はS119に帰属する遺物の可能性がある。



第112図 SK37出土遺物



1 黒褐色土 7.533 1 粘性土 L.800 13プロット
2 210cm×9
2 暗褐色土 7.582 1 粘性土 L.800 13プロット
3 暗褐色土 7.632 4 粘性土 L.800 13プロット
4 210cm×9

第113図 SK37

第44表 遺構外出土遺物観察表

番号	注記	種別	形状	重量	寸法	測定	産出	産出の状況	産出の地点	材質	用途	備考	写真	備考
1	5a-01	土師質土器	小皿	15.1	9.1	1.4	7.1	覆土1層、深さ12cmに互いに切り合う位置で検出	内蔵遺跡は黒褐色土・極暗褐色土、両面赤みツグ	光沢	内蔵層2層(815.8-4)	黒褐色土、黒褐色土、黒褐色土	01	中世

第5項 ビット

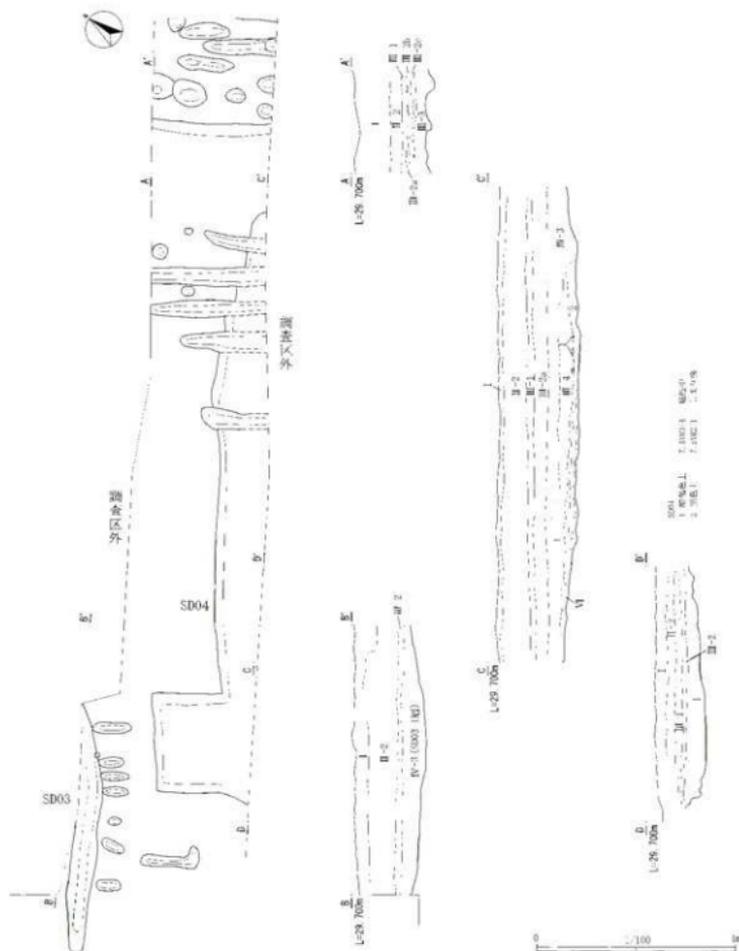
前節で記したとおり、覆土の特徴から、帰属時期を推定した。個々の計測値は第47表に示す通りである。中・近世と推定したビットの覆土は、基本1層II-2層(黒色土)に類似したもので、古代と推定したものよりもやや明るい色調で締りが弱い。SB04やSA01・02を構成する柱穴に類似している。

第6項 溝跡

SD03 (第114図・図版27)

3区F-1Gに位置し、幅33～50cm、深さ15cmで南北に走行する。走行方向N-55°-E。SD04やサク状遺構と同様に、遺構確認を行った第VI層上面で検出された。第1層は基本土層のIV層と同じものである。中近世の構築である可能性がある。

遺物は検出されなかった。



第114図 SD03・SD04・サク状遺構(南半部)

SD04 (第114図・図版27)

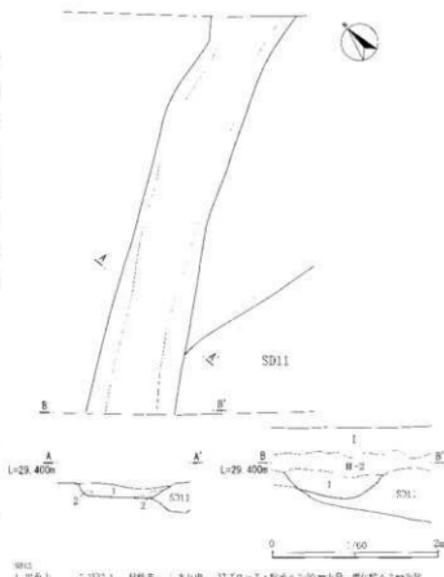
3区D・E-2Gに位置する。調査区内で確認できる幅は、現状で70cm、深さ10cm前後を測る。南北に走行し、東西方向に走行するサク状遺構の東西溝群に切られる。走行方向N-56°-E。SD03やサク状遺構と同一の遺構確認面第VI層上面で検出された。覆上は暗褐色土から黒色土に至る2層からなっている。基本土層の第IV-1・2層として処理した。中近世の構築である可能性がある。

遺物は検出されなかった。

SD12 (第115図・図版27)

2区G-2, H-1・2Gに位置する。南北に走行してSD11を切っている。走行方向N-56°-E。幅0.73~0.97m、深さ7~34cmを測る。覆土は黒色土から暗褐色土の2層からなる。

遺物は検出されなかった。



第115図 SD12

第115図 SD12

第7項 サク状遺構(細跡) (第8図)

サク(溝)の覆上からの出土遺物はない。間接的ではあるが、遺構外出土遺物(3区一括遺物、第116図)に図示した土師質土器小皿(灯明皿)と鉄滓のほかに、縄文土器51.7g、土師器71.0g、須恵器52.3g、埴輪446.0g、陶器30.0g、瓦96.6g、礎81.0gがある。陶器には中世焼締陶器と近世施釉陶器がある。瓦は近世の焼し瓦で、本遺構を覆う第III-3層に包含されていたものである。また、この第III-3層の上には近世以降、現代に至る道路の客土が載っている。遺物の詳細な時期は細片のために明確にできないが、本遺構は近世の畑作によるものと判断される。

第8項 遺構外出土遺物



第116図 遺構外出土遺物(中・近世)

第45表 遺構外出土遺物(中・近世)

番号	内径	径	高さ	形状	重量	材質	用途	出土の状況	発掘の状況	出土	用途	出土	用途
01	2.0	3.0	1.0	小皿	13.0	土師質土	灯明皿	遺構外出土(中・近世)	遺構外出土(中・近世)	遺構外出土	遺構外出土	遺構外出土	遺構外出土
02	2.0	3.0	1.0	小皿	13.0	土師質土	灯明皿	遺構外出土(中・近世)	遺構外出土(中・近世)	遺構外出土	遺構外出土	遺構外出土	遺構外出土

第7節 時期不明の遺構

第1項 土 坑

SK06 (第117図・図版27)

2区L-1Gに位置し、S109に切られている。長軸方向N-79°-E。長径200cm、短径95cmの隅丸円形、深さ36cmで、覆土は黒色土から暗褐色土の2層からなり、南に傾いた状態で堆積している。

遺物は検出されていない。

SK07 (第118図・図版27)

2区J-1-2Gに位置する。長軸方向N-79°-E。長径78cm、短径70cmの平面円形、深さ21cmである。覆土は黒色土・黒褐色土2層からなるレンズ状堆積である。

遺物は検出されていない。

SK24 (第36図・図版28)

2区1-1Gに位置し遺構の北側が調査区外で、S115を切る。長軸方向N-64°-W。長径91cm、短径現状56cmの推定平面円形で、深さ25cmを測る。覆土は黒色土・極暗褐色土の2層で、東に偏って傾斜した堆積である。

遺物は検出されていない。

SK25 (第119図・図版28)

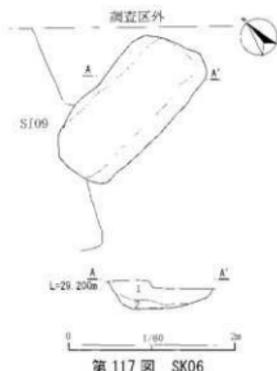
2区K-1Gに位置し、遺構の北側は調査区外である。長軸方向N-37°-E。長径81cm、短径62cmの平面楕円形で深さ48cmを測る。覆土は黒褐色土1層からなる。

遺物は縄文土器33.1g、竊21.0gが検出された。縄文土器は細片のため、型式不明。

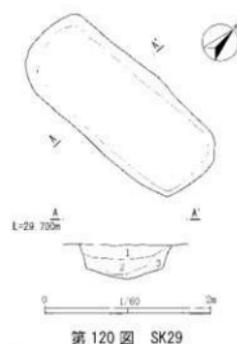
SK29 (第120図・図版28)

4区B-1-2Gに位置する。主軸方向N-88°-E。長径257cm、短径112cmの平面長方形で、深さ42cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなり、レンズ状堆積となっている。

遺物は、覆土から縄文土器156.1g、弥生土器8.2gを検出したが、遺構の時期を判断するに至らない。



SK06	1 覆土上	2.25(2) 1	黒色土	1.5×4	35/300g	細片
	2 暗褐色土	1.75(2) 1	黒褐色土	1.5×4	33/300g	細片



SK29	1 覆土上	2.30(2) 1	黒色土	1.5×4	33/300g	細片
	2 暗褐色土 <td>1.75(2) 1 <th>黒褐色土</th> <td>1.5×4 <td>33/300g <th>細片</th> </td></td></td>	1.75(2) 1 <th>黒褐色土</th> <td>1.5×4 <td>33/300g <th>細片</th> </td></td>	黒褐色土	1.5×4 <td>33/300g <th>細片</th> </td>	33/300g <th>細片</th>	細片
	3 極暗褐色土 <td>1.27(2) 3 <th>極暗褐色土</th> <td>1.5×4 <td>33/300g <th>細片</th> </td></td></td>	1.27(2) 3 <th>極暗褐色土</th> <td>1.5×4 <td>33/300g <th>細片</th> </td></td>	極暗褐色土	1.5×4 <td>33/300g <th>細片</th> </td>	33/300g <th>細片</th>	細片

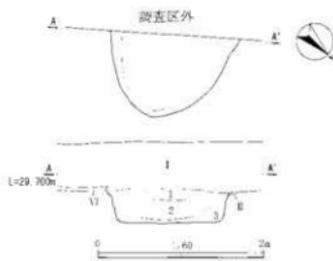
SK30 (第121図・図版28)

4区C-26に位置し、遺構の南側は調査区外である。長軸方向N-57°-E。長径現状155cm、短径現状102cmの平面円形で深さ43cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなるレンズ状堆積である。

遺物は検出されていない。

SK30

- | | | | | | |
|----------|----------|-----|-----|-------------------|----------|
| 1. 黒色土 | T.5181.7 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | 高粘性・粘平少量 |
| 2. 暗褐色土 | T.5182.2 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | |
| 3. 極暗褐色土 | T.5182.2 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | |



第121図 SK30

SK33 (第122図・図版28)

4区G-16に位置し、北西隅付近において擾乱を受けている。長軸方向N-15°-W。長径224cm、短径70cmの平面長方形で、深さが24cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなる。

遺物は検出されていない。

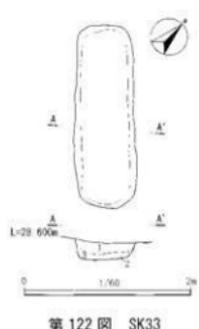
SK34 (第123図・図版25)

4区D-26に位置し、遺構の南側は調査区外で、ST19とSK37に切られる。長軸方向N-45°-W。長径168cm、短径100cmの推定平面円形で深さが28cmを測る。覆土は黒色土・黒褐色土の2層からなるレンズ状堆積である。遺物は、須臾器28.8g、籾(砂岩山礫)809.7gを検出した。須臾器は奈良・平安時代のもと思われるが、小片でもあり、時期を明確にし得ない。また、ST19の覆土からも同一個体と見られる破片が検出されている。

SK39 (第124図・図版28)

4区E-26に位置し、遺構の南側が調査区外である。8号墳の周溝であるSD01に切られる。長軸方向N-64°-E。長径102cm、短径94cmの推定楕円形で、深さが12cmを測る。覆土は暗褐色土1層からなる。

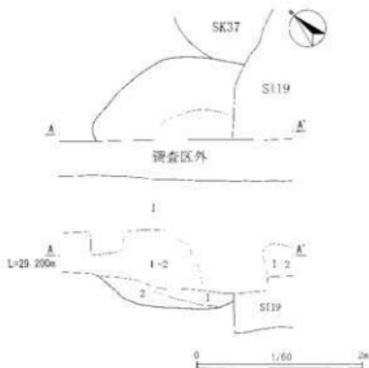
遺物は検出されていない。



第122図 SK33

SK33

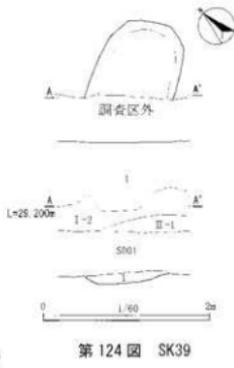
- | | | | | | |
|----------|----------|-----|-----|-------------------|----------|
| 1. 黒色土 | T.5181.7 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | 高粘性・粘平少量 |
| 2. 暗褐色土 | T.5182.2 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | |
| 3. 極暗褐色土 | T.5182.2 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | |



第123図 SK34

SK34

- | | | | | | |
|---------|----------|-----|-----|-------------------|--|
| 1. 黒色土 | T.5181.7 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | |
| 2. 暗褐色土 | T.5182.2 | 粘性中 | 土量中 | 1/3フロック・粘平0.2mm中粒 | |



第124図 SK39

SK39

- | | | | | | |
|---------|----------|-----|-----|--|--|
| 1. 暗褐色土 | T.5182.2 | 粘性中 | 土量中 | | |
|---------|----------|-----|-----|--|--|

第5章 まとめ

第1節 下坂田塙台遺跡の変遷と歴史的位置

今回の調査は、本遺跡において初めての発掘調査となった。その成果は前章までに報告したとおり、縄文・弥生・古墳・平安・中・近世の各時代の住居跡・建物跡が確認され、長期にわたる複合遺跡であることが判明した。周辺では近年、第2章に記したとおり、東隣の下坂田中台遺跡、さらに東側の赤弥堂遺跡において発掘調査が実施されている。桜川下流域左岸の当地域の歴史が明らかにされつつある。ここでは今回の調査成果をまとめ、今後の課題を提示するとともに、地域史解明の一助たらしとするものである。なお、周辺各遺跡の典拠は第2章を参照されたい。

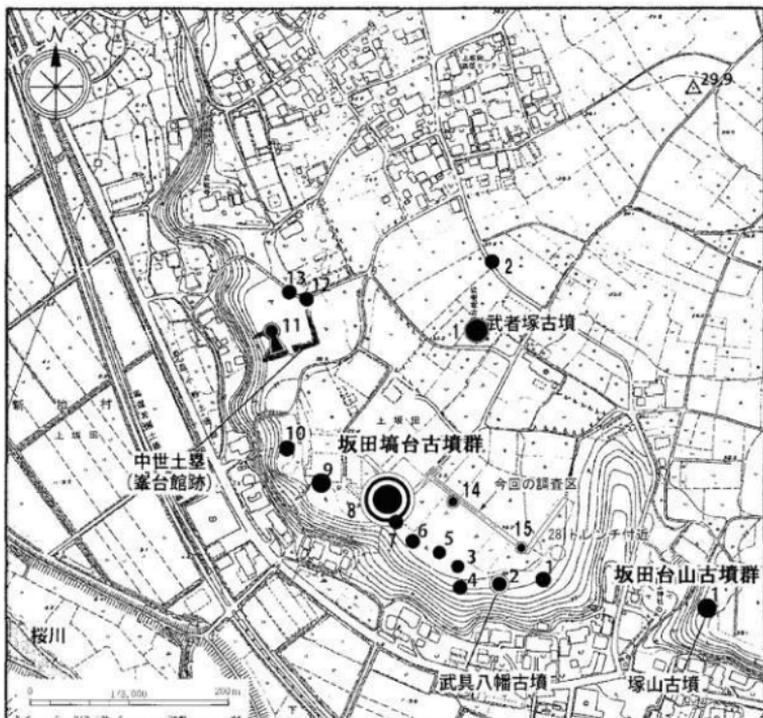
縄文時代 調査区東側の1区で中期・阿玉台式期の住居跡が1軒確認された。一部の把握にとどまったが、東方の赤弥堂遺跡の当該期集落との係わりが注意される。この住居跡の南側では、只脛を包含する土坑を1基確認した。下部のピット状部分にはハイガイとマガキを主体とする鹹水性の貝類からなる混土貝層が充填され、上部の皿状部分の覆土からは早期木葉～前期中葉を主体とする土器小片が検出されている。地点貝塚は赤弥堂遺跡（下坂田馬場先貝塚）では前期・関山式と中期・阿玉台式のもの、東隣の中台遺跡（下坂田貝塚）では後期・加賀利B式ものが明らかにされている。赤弥堂前期貝塚はハイガイとカキを主体とし、同中期貝塚はマガキとサルボウ、中台後期貝塚はヤマトシジミ、さらに北方の上坂田寺裏前期貝塚はハイガイ、同中期貝塚はサルボウとハマグリ、上坂田北部前期貝塚はハイガイを主体としており、坂田地区における貝塚の時期組成の傾向を示している。また、遺構外出土の縄文土器は早期～後期にわたるが、やはり、東側の1区に濃密に分布する。本遺跡における縄文時代の集落は、東に入り込む小支谷寄りにその中心があるものと推定される。

弥生時代 調査区東側の1区と2区東端で各1軒ずつ住居跡を確認した。両者に帰属する土器は不安定な状況であるが、遺構外出土の弥生土器はほとんどが後期のものであり、十干台式より前に主体があるものと判断された。2軒の住居も当該時期に営まれたものと考えておきたい。また、遺構外出土の弥生土器は2区に多く分布している。縄文時代と同様、遺跡範囲東側に集落の中心があるものと考えられる。周辺の遺跡における弥生時代の遺物・遺構の検出は、現時点では皆無に等しく、西方の常名地区の山川古墳群下層遺構に確認されているのみである。

古墳時代 本遺跡の中核の一つをなす時代である。前期から後期に至る各種の遺構が調査区全体に分布する。前期は、住居跡6軒が調査区全体に分布する。うち1軒（S103）は焼失家屋であった。いずれの住居跡出土土器とも、概ね前期前半、庄内式後半に並行する時期に位置づけられるものであろう。その他の遺構では、調査区西寄りの2区西端で平面弧状・断面逆台形の溝が確認され、底面付近で高環が検出された。ほとんどの部分が調査区外と3区の擾乱によって全体形を把握し得ないが、内側の直線的な形状から、低墳丘の方墳（方形周溝墓）の可能性がある。彌生時期は住居跡と同じ前期前半の範疇でよいだろう。また、東側の1区中央では断面U字形の溝2状が相対するように存在し、やはり低墳丘の方墳の周溝の可能性もある。明確な時期は判然としないものの、前期の住居（S105）を切ることから、前期後半を中心とするものと推定される。このように古墳時代前期に入って、本遺跡における居住域が全体に拡大する。その中で、可能性ではあるが墳墓が混在する状況が推定される。同時期の墳墓は、赤弥堂遺跡（東地区）において方墳（方形周溝墓）が1基、北方の上坂田北部貝塚で同じく1基確認されており、常名地区の山川古墳群では前期の方墳群が明らかとなっている。

後期は、後期初頭の中規模円墳である坂田塙台8号墳が築造される。墳丘径約30m、残存高6.2m、二重周溝（注1）を有する。外側周溝の外径は直径約55mを測り、大型円墳に匹敵する「兆域」を占有する。外面二次B様式

コハケ調整を含む円筒埜輪（本章第2節参照）が検出され、形象埜輪は調査区外に埋没しているものと思われる。また、地元の言い伝えから、埋葬施設は箱式石棺と考えられる。本古墳群では、武具八幡古墳（2号墳、増田編1986）がほぼ同時期の古墳として明らかとなっている。安政元年（1854年）に地元の百姓によって甲冑（短・短甲・札甲・頸甲・肩甲・籠手）や鉄鎧が掘り出された。埜丘は直径15mほどの円墳であるが、付属具を伴う複数セットの甲冑を副葬されていることから、8号墳とともに畿内中核との連携を有する、当地域社会において中核を担った人物の墳墓と考えられる。両者ともに、現状では本古墳群の先駆けとして造営された盟主墳と評価できよう。本古墳群ではその後、6世紀中葉に全長28mの前方後円墳、11号墳（小野塚2010）が築造される。また、岩崎卓也氏によって報告された女子埜輪の頭部（岩崎1986）は、6世紀中葉の高崎山2号墳（平岡編2001）以上の人物埜輪と同じ作風のもので、8号墳の埜輪とは大きく時期が異なるものであることが判明した。岩崎氏が指摘するもう一つの9号墳に帰属する可能性を考えておきたい。今回、新規発見された14・15号墳の小規模円墳や、試掘確認調査28トレンチに想定される古墳も6世紀代の埜輪を有するもので、平地内側にも削平された埋没古墳が展開することが明らかとなった。さらに内陸に位置する7世紀後葉の武者塚古墳（武者塚1号墳）は、銀製冠や銀装と青銅装の飾大刀、青銅製柄杓などを副葬する。以上、本古墳群とその周辺の墳墓は、6世紀から7世紀にかけて、有力な人物の墳墓が点在することが明らかになりつつある。今後、対岸の突塚・つくば市吉瀬地区の古墳との比較・検証をする必要はあるが、本古墳群の規模が拡大する可能性も含め、桜川下流域における中心



第125図 坂田埜台古墳群（小野塚2010第2図に加筆）

的な墳墓群と位置付けることが可能となろう。

後期の集落は、今回、調査区東側1区の南端にS106の1軒が確認されたのみである。時期は5世紀末葉である。集落規模が縮小すると言うよりは、古墳群の形成に伴って墓域と居住域が区分された状況と見たい。さらに古墳の造営が継続されていくと推定される6世紀代以降の遺物はほとんど見られなくなる。徐々に本遺跡は墓域に転換していくのかも知れない。東方の赤弥堂遺跡では周辺の墳墓の造営は低調で、前期19軒、中期5軒、後期4軒と前期にピークがあるものの、継続的な居住域として展開するようである。

平安時代 7～8世紀の遺構・遺物分布のブランクを挟んで、9世紀になると再び集落の痕跡が明確となり、古墳時代とともに本遺跡の中核をなす。概ね、9世紀前半と同後半に2分される。9世紀前半は、1区南側のSD08と2区中央のSD11が二段掘りの特徴的な溝で、一連のものと考えられる。4軒の住居跡と2棟の掘立柱建物はこの溝の南側に存在し、前章までに指摘してきたとおり、建物群を区画する溝として機能していたと推定される。SD11の溝底にはピットが点在し、区画の機能を担う構造の可能性もある。2棟の掘立柱建物(SB02・03)は主軸を溝の走行方向に合わせる傾向が指摘できる。出土遺物には尾張産の灰釉陶器が散見される。9世紀後半にはこの区画溝も埋没し、住居跡の分布も溝の北側(想定される区画範囲の外)に広がる。4軒の住居跡と1棟の掘立柱建物跡が確認されている。S109 山上の鉄製品は馬具(鍔出金具)の可能性もある。掘立柱建物(SB01)は9世紀前半のものとは異なり、主軸はほぼ東西に向いている。現状では、建物構造や出土遺物に官・公・寺的な様相は確認できない。

周辺では、赤弥堂遺跡で転用硯や墨書土器が検出されており、さらに東方の常名地区の才牙天遺跡では8世紀後半～9世紀の方形区画溝を伴う住居・掘立柱建物群が調査されている。後者では螺旋状暗文のある土師器環、東濃摩利軸陶器、尾張産灰釉陶器、転用硯、墨書土器、刻書のある磁石、和同開珎、金銅製密金具あるいは馬具、銅製丸駒といった、一般集落では見られない多様な文物が住居跡から検出されており、中央政府との係わりを持つ人々の集落であったことが特筆される。

中・近世 中世では調査区西側の4区における土坑群を主体とし、中世前半の土師質土器小皿(かわらけ)が一部で出土している。平面長方形の土坑で人骨が検出され、時期不明のものを合わせ土坑墓を含む遺構群であることが推定される。近世でも座棺と考えられる円形土坑から人骨が検出されている。また、掘立柱建物や櫓・塼塼や溝跡は覆上の状況から中・近世と推定され、3区のサク状遺構は近世陶器・瓦の出土から近世の畑作痕跡と推定された。

以上、下坂出岡台遺跡・坂出岡台古墳群における今回の調査は、農道建設部分の狭小な調査となったが、遺跡全体にトレンチを入れた状況でもあり、本遺跡の状況を窺うに足る成果を取ることができた。それは、本遺跡が縄文時代に始まり、弥生・古墳・平安・中・近世と連続と続いた当地域の人々の営みであり、地域社会の一翼を担う活動の依拠であった。今後、周辺における調査が進展した際には、今回の調査成果も地域の歴史を考査するうえで基礎史料となるものと信ずる。

【注】

1 周辺地域において、二重河溝を有する田圃を探索したところ、灰城原城で確認することができなかった。ただ、隣接する千葉原城の下部・北端北端において、若干の事例を確認することができた。最も場合8号墳の築造時期に近いものでは、成田市の観音寺101号墳(墳径24.1m、高さ3.6m、外周周溝外径約42m、安藤ほか1988)が挙げられる。同墳の北方には南羽鳥正通寺1号墳(墳径20.6m、高さ2.3m、外周周溝径38.6m、平田福1990)があり、近在の西野鳥高野1号墳(同文献)は二重河溝を有する全長44mの前方後円墳である。二者ともに6世紀前半の円筒塼塼と豊富な形象埴輪群を樹立し、特に観音寺101号墳は雲母粒子を多量に含む粘土を使用するもので、筑成に糸の埴輪との関連が指摘されるものである(石橋2004)。千葉原城では他に、6世紀後半以降、いわゆる「変則的占墳」に二重河溝の事例(下記)が散見され(沼澤2006・2010)、その意味が問われるところでもある。

千葉市稲名町A-3号墳・神明社裏1号墳(送り出し付円墳)、佐倉市油刈3号墳・石川1号墳、山武市松尾1号墳・経塚岡古墳、香取郡東庄町今部カチ内遺跡(3基確認、千葉県2010)。

第2節 坂田塚台8号墳出土埴輪について

今回の調査によって、8号墳の周溝からまとまった量の埴輪が採取された。いずれも破片資料で全形を知る事ができるものはないが、同工品分析の視点から分類を行い、本古墳に設置・使用された円筒埴輪の型式の把握に努めた。以下、同工品分類結果のまとめ・確認を行い、その中の特徴的な属性を既出資料との比較を通して、本古墳出土埴輪の位置づけをしておく。

1 坂田塚台8号墳の円筒埴輪

いずれも白雲母の細片を多量に含む粘土で、筑波山地南麓、桜川流域を中心に分布する「筑波山系の埴輪」（塩谷1997・石橋2004）の例に漏れない。基部粘土帯を用いた紐づくり、外面タテハケ調整を基調とし、黒無斑であることから窯焼成と考えられる。全体形は3突帯4段構成と推定される。しかし、各個体の製作法は一様ではなく、前章で報告したとおり、7類型の同工品を確認した。各類型の属性をまとめたものが第46表である。また、I群埴輪（後述）は突帯間隔の設定がされており、各段の高さは一定の規格による製作が想定されるので、各段の高さが確認できる資料を基に全形を推定した状況が第126図である。

7類型の同工品は、突帯間隔設定技法を用いたI群（6類型）と、「断続ナデ」手法によって突帯貼付を行ったII群（1類型）に大別された。I群は突帯間隔設定技法の適用から、鍾方正樹氏が定義（鍾方1997・99、注1）した「IV群系埴輪」に該当し、川西幸宏分類（川西1978）のIV群埴輪の系列にあるものと評価できる。A類の一部（25・26）に確認できた外面二次Bd種ヨコハケ調整（一瀬1988）の存在はこれを支持するものである。II群は断続ナデ手法の適用から、「V群系埴輪」に該当し、川西分類のV群埴輪の系列ということになる。

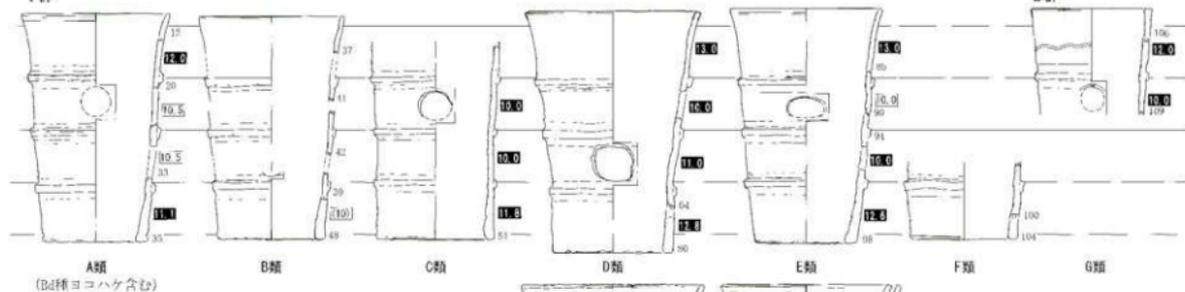
埴輪I群埴輪 各類型間でばらつきを見せている属性は、成・整形手法である。最たるものは突帯・口縁部と内面調整で、同工品の分類作業で第一の指標とした突帯の調整（ヨコナデ）と形状は、口縁部とともに6類型それぞれの状態を示している。それ故に同工品分類の指標となる訳である。内面調整（成形）は、A類は左上りのナメ指ナデあるいはタテ指ナデ、B類ではタテ指ナデに加えて板（ハケ）状工具を用いた器壁を掻き取るような特徴的なタテナデが施され、接合痕跡を残さない丁寧な出来である。C類は砂粒の移動が目立ち、ユビケズリ（設案1981）とも称されるタテ指ナデ。D類は平滑面を示すことから板状工具を用いたヨコナデが施されたものと考えられるが、接合痕が顕著に残る粗いものである。E類も接合痕跡が明瞭なナメ指ナデ。F類は接合痕

第46表 坂田塚台古墳群出土円筒埴輪の類型別属性表

分類群	種別	ハケメ	出土層位	利用号	内面調整	内面調整				口縁調整	調整									
						調整	調整	調整	調整											
I A	1	9号墳	右	タテハケ (→板掻きナメ)	なし・タテナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
I B	1	9号墳	右	タテハケ	タテナデ、 タテ指ナデ、 ハケ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
I C	1	9号墳	右	タテハケ	タテナデ、 器壁調整目立つ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
I D	2	8号墳	右	タテハケ	ヨコナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
I E	3	8号墳	右	タテハケ、口縁・ 調整は左側ハケメ、 右側ヨコナデ	左ナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
I F	-	9号墳	右	タテ指ナデ	タテナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
II G	4	9号墳	右	左ナデ	タテナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
III H	8	14号墳	右	タテハケ	タテナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
IV I	8	14号墳	左	タテハケ	なし・タテナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
V J	5	15号墳	右	タテハケ	タテナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
VI K	7	15号墳	右	タテハケ	タテナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整
VII L	-	15号墳 1・4区遺構内	右	タテ指ナデ	タテ・左ナデ	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整	調整

円筒埴輪 同工品類型

I群



朝鮮形埴輪 同工品類型



- *ゴシック自抜き数字：突帯間隔計測値
同 堀み付数字：同推定値
- *単位：cm
- *明朝数字：掲載番号
- *水平ラインは10.5cm間隔。
- 第2突帯上縁をそろえて配置。

0 1/10 20cm

第126図 坂田埴台8号墳 円筒埴輪 同工品各類型の器形

が残らない」率なタテ拵ナデである。外面調整は前述のとおりタテハケを基調とするが、E類は左上りのナメハケ、F類はハケメを記さないいわゆるタテ板ナデ。内面の底部下縁にはB類とD類でヨコズリが施されている。透かし孔の切り取り面の処理は、E類のみナデ仕上げが認められる。ヘラ記号は破片資料の制約のために確認が不十分であるが、D類で左上が開放するC字形、F類で×形が認められた。

このように、各類型とも口縁部・底部の高さや口径・底径のばらつきはあるものの、口径32cm、底径21cm、器高47cm（I群平均値、器高は推定平均値）の逆台形のプロポーシオンは同調するようである。突帯間隔がそろえられていたのは第2段と第3段と見られ、各類型とも10cm前後の値を示している。形態的な近似性、型式的なまとまりをもった一群との印象が強い。また、A・B・C類の3類型の外面調整のハケパターンは一致しており、同一工具の共用あるいは兄弟工具の製作・使用（犬木1995・城倉2009）が考えられる。

塚台II群埴輪 口径26.3cmと細身で寸胴形の器形と直立する口縁部形状は、一見してI群と弁別される。また、突帯は下面の特徴的な凹凸から「断続ナデ」手法が用いられたものと判断され（注2）、その突帯の貼り付けに伴う器壁の歪みが指摘できる。明らかに系列の異なる製作が推察されるものである。しかし、胎土はI群と同じであり、製作地を大きく異にするとは考えられない。突帯間隔（10.0cm）、口縁部高（12.0cm）もI群と同調している。また、当該の特徴の一つに口縁部外面の「波状文」がある（後述）。

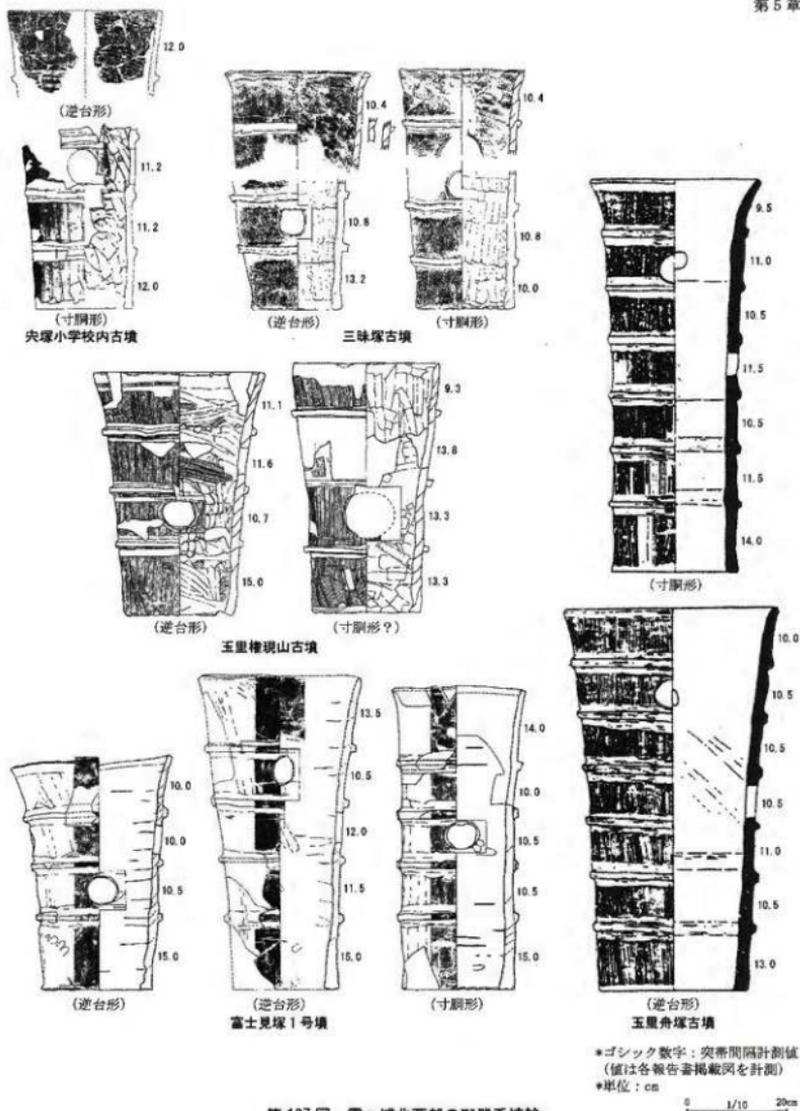
以上、全体の98.6%を占めるI群と、わずか1.4%のII群で構成され、前者は中期の型式を引き継ぐIV群系埴輪、後者は新式の後期・V群系埴輪であり、両者は全く異系統の型式である。主体をなすI群の各類型は製作技法、形態、法量ともに等価な型式群であった。今回、各類型の数量比を示すまでに至らなかったが、外面ナデ調整のF類は707.2g（0.6%）と1%に満たない。本書掲載量を見ていただいても、他の類型はおおよそA群が最も多く、B～F類はほぼ同量を示す感じである。本古墳の埴輪製作は、A群の製作者を中心として行われていたものと思われ、わずかに認められたBc種ヨコハケ調整のものも、このA群製作者によってなされたものと考えている。

2 既出資料との比較

次に、8号墳の埴輪で把握された属性の中で、「IV群系埴輪」（B種ヨコハケ調整・突帯間隔の設定）と「波状文を施す円筒埴輪」に着目する。本古墳が立地する桜川流域を始め、設ヶ浦北西部（高浜入り及び土浦入り地域）及び茨城県域の調査資料と比較しておく。

設ヶ浦北西部におけるIV群系埴輪 茨城県域におけるIV群系埴輪は、密窯焼成の導入を一つの定点とすると、5世紀中葉～後葉の石岡市の府中愛宕山古墳や小美玉市（旧 新治郡玉里村）の妙見山古墳を初現とするが（塩谷1997、日高2001）、資料の状況が今一つ十分ではない。その後、定形化した埴輪として、5世紀後葉のひたちなか市の川子塚古墳（斉藤2000b、田中・高橋2002）が挙げられる。馬渡空跡C地区から供給されたものと見られており、Bc種ヨコハケが施されている。未発掘調査であるが、現状で把握できる資料は寸胴形（筒形）の器形で、突帯間隔と底部高をそろえる（高さ12cm）ものが知られている（斉藤2000a・b）。その他、密窯焼成品と考えられるB種ヨコハケ調整の断片的な資料は、桜川市（旧 真壁郡大和村）の高森1号墳（斉藤ほか2003）や筑西市（旧 同郡明野町）の宮山観音古墳（日高2001）において確認されている。そのような状況下で今回、塚台8号墳で検出されたB種ヨコハケ調整の埴輪は、県城南部の設ヶ浦周辺地域では初見例となった（注3）。しかし、外面調整にB種ヨコハケが施されないと言えども、5世紀末葉から6世紀前葉に位置づけられる当地域の埴輪には、突帯間隔設定の明線（沈線）が見られ、「IV群系埴輪」と評価することができる。これらの資料を概観することによって、塚台I群埴輪の位置づけを考えておきたい。

設ヶ浦北西部のIV群系埴輪は、土浦市の穴塚小学校内古墳（5世紀末葉、塩谷編1987）、かすみがうら市の富士見塚1号墳（旧 富士見塚古墳、TK-47～MT-15型式期、杉山ほか2006）、小美玉市の玉里権現山古墳（権現平



第 127 図 霞ヶ浦北西部のIV群系土輪

5号墳、TK-47～MI-15型式期、小林編 2000) に見られる。また、突帯間隔設定痕跡は確認されていないが、同時期の資料として行方市(旧 行方郡玉造町)の三味塚古墳(TK-47型式期、大塚・小林編 1996、小林編 2001)も検討に加える(第127図)。

形態は3突帯4段を基本形とし、富士見塚1号墳のみ4突帯5段との組み合わせとなる。いずれの古墳においても寸胴形(筒形)と逆台形の二者が認められる。富士見塚1号墳では鼓形を呈するものの存在が指摘されてい

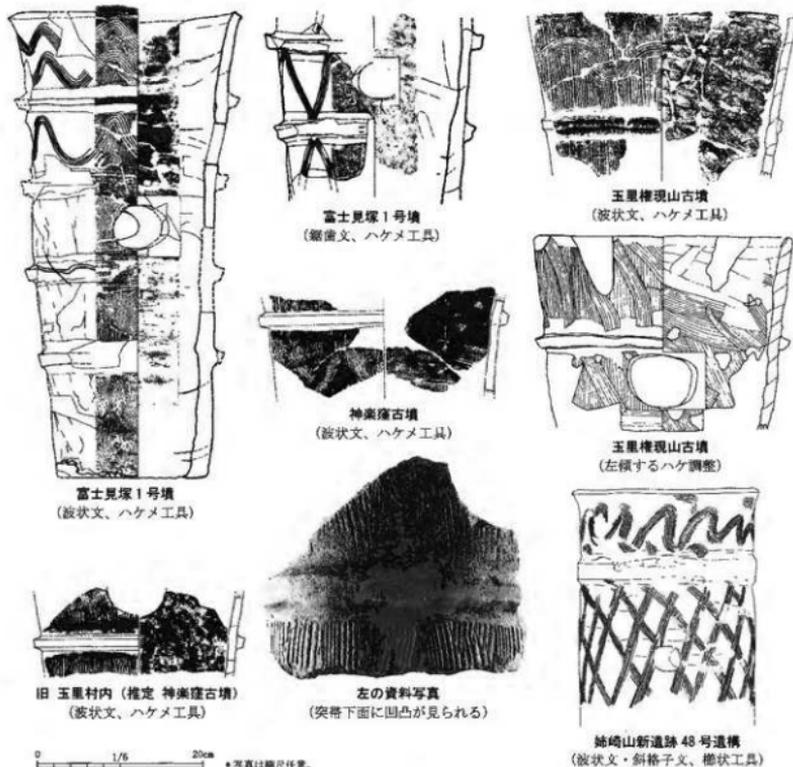
るが、安定した型式とは思われない。穴塚小学校内古墳では概要報告書に図示された資料が寸胴形であるが、米報告資料には逆台形のものもあるようである。各古墳とも全形が把握できる資料が少なく、二者の比率を分析することは難しいが、富士見塚1号墳では寸胴形が多く、権現山古墳と埼玉8号墳では寸胴形が少ないように見える。成形法については基部粘土帯を用いるものと底部から粘土紐積み上げのものがあり、後者は富士見塚1号墳の一部と三味塚古墳で認められる。前山の妙見山古墳は後者である(口高2001)。埼玉8号墳のB類とF類に認められた底部内面のヨコケズリは、権現山古墳の一部に確認できる。

突帯間隔の設定はいずれの古墳においても、中間段(第2・3段)を規定する(そろえる)かたちで機能している。その間隔はいずれも10~12cmの間を示しており、権現山古墳の13.5cmのもの以外は差異を強調することはできない。底部(第1段)高はほとんどがこの突帯間隔を1~5cm上回る値を示しており、三味塚古墳と権現山古墳では突帯間隔とそろえるものもある。一方、口縁部(第4段)高は突帯間隔とほぼそろえる傾向であり、1~3cmほど高いものも認められる。こうした各段の設定傾向は、IV群系埴輪と評価できる6世紀前半の玉里舟塚古墳(忽那2010)にも指摘できる。

こうして見ると、埼玉8号墳を含めた畿々浦北西部の5世紀末葉~6世紀前半のIV群系埴輪は、個々のばらつき・個性を指摘されるものの、ある程度の(あるいは、緩やかか)まとまりをもった埴輪群と捉えることもできるだろう。そして、舟塚古墳の造営に伴い確立する小幡北山窯の埴輪製作へと引き継がれていく。ただ、基部の積み上げ手法や底部内面のヨコケズリの存在は、成形技術の根本的な相違であり、今後、その技術系列の追究をすべき課題である。

波状文を施す円筒埴輪 高浜入り地域で多く認められ、これまでに、かすみがうら市の富士見塚1号墳、風返9号墳、小美玉市(旧 玉里村)の神楽塚古墳、玉里権現山古墳、石岡市の府中愛宕山古墳で確認されている(本田2002)(第128図)。風返9号墳と愛宕山古墳例は状態を確認していないが、他例はいずれも明確な縦引き波状文を示している。今回、土浦入り地域に位置する埼玉8号墳のG類を新たに加えることになったが、注意されるのはその製作法の系列である。埼玉8号墳は突帯の貼付手法に断続ナゲが想定される「V群系埴輪」であった。上記の既出例のうち、富士見塚1号墳例は、突帯間隔設定が行われた「IV群系埴輪」である。一方、神楽塚古墳出土の可能性が指摘されている旧 玉里村内山土資料は、霞ヶ浦町郷土資料館第19回特別展展示解説書(千葉編1997)に掲載の写真(第128図下段中)を見ると、突帯下面に凹凸が認められ、埼玉8号墳の状態と酷似している。本田信之氏の報告ではその点の指摘はないものの、断続ナゲによる突帯貼付がなされたものと思われる。想定されるプロポーシヨンや法量(胴径)も近似しており、両者の製作事情の近さを強く感じる。また、権現山古墳の資料(第128図上段右)は法量(口径)が大きいものの、直線的に開く形状やI様端部に明瞭な平州面を持つところは、埼玉8号とよく似ている。

ところで、波状文を記す円筒埴輪は、千葉県市原市の姉崎^{姉崎}子塚古墳(小橋2010、施文具[以下同じ]櫛状工具)、姉崎山新遺跡48号遺構(小橋2008、同、有黒炭)、同富津市の内裏塚古墳(小橋2011、ハケメ工具、TK-216型式期)、同木更津市の清見台A-4号墳(木川2001、ハケメ工具、IV期・5世紀後半)等、東京湾東岸地域にも見られる。また、姉崎^{姉崎}子塚古墳、山新遺跡、内裏塚古墳では斜格子文も共存し、市原市の五^五蓋台遺跡(高橋1998、櫛状工具)と富津市の富士見台2号墳(ハケメ工具、IV期)では斜格子文が見られる。一方、茨城県域では前述の波状文の事例の他に、斜格子文あるいは斜格子状のハケメが常陸太田市の梵天山3号墳(高山塚古墳、白井2002、有黒炭・2次ヨコハケ調整)や川子塚古墳(田中・高橋2002)でも確認されている。また、高浜入り地域の富士見塚1号墳の鋸歯文(ハケメ工具)や鋸歯状のハケメ、権現山古墳の「左傾するハケ調整」は文様効果が指摘・報告されており、これらの有文埴輪の系列に属するものと評価できるだろう。東京湾東岸と高浜入りの事例とは型式的な距離があり直接的な対比は難しいものの、早くに白井久美子氏が指摘し(白井2002)、小橋健司氏



第128図 「有文埴輪」の類例

が想定する(小橋 2011)ように、古墳時代中期から後期初頭の常陸地域内における各埴輪製作者の関係・製作事情を表すものと思われる。さらに、富士見塚1号墳で共伴している縦歯文や有軸絞杉文、斜格子文などのヘラ描き線刻文様は、既に塩谷 修氏が指摘(塩谷 1997)している群馬県高崎市の三島塚古墳(車輪 1998)や長野県長野市の土口將軍塚古墳(大塚ほか 1987、TK-73 型式期)で良く似ているものが存在している。

3 資料の位置づけ

V 群系埴輪は「中期の末頃に」「出現し、後期に主体化する」(鎌方 1997)。具体的には TK-208 型式期(5 世紀中～後葉)に河内地域で認められるようであるが、V 群埴輪の成立は TK-23・47 型式期(後期、5 世紀末葉)である。また現状では、6 世紀の茨城県域における IV 群系埴輪は「小幡北山型」埴輪(稲村 2002)にも指摘され、同型埴輪は 6 世紀初頭～前葉に成立し、同前～中葉の玉里舟塚古墳の築造に伴い確立するとされる。すなわち、同県域では IV 群系埴輪が 6 世紀後半まで残ることが明らかであるから、IV 群系埴輪の存在は下限を示し得ない。一方、前述の霞ヶ浦北西部の 5 世紀末葉～6 世紀前葉の諸例と比較しても同時期のものと見て誤りない。さらに、埴台 8 号墳では Bd 種ヨコハケが存在することから、「TK-23・47 型式期、5 世紀末葉」に位置づけるのが現在の所見では妥当なところと考えられる。

小 結

坂田端台8号墳の円筒埴輪は、I群は霞ヶ浦北西部の「IV群系埴輪」に類似するものであり、II群は高浜入り地域に認められている「有文埴輪」の土浦入り地域における初例を追加することとなった。今後、土浦入り地域においても顕例が発見されるものと思われる。現在認識されている古墳の分布を見ても、両地域の古墳の「格・質」と分布密度は高浜入り地域の優位が動かないものと思われるが、今回の調査事例によって、両地域の埴輪製作環境の親縁性を窺うことができた。両地域は地形的にも、埴輪古墳群の西側が立地する上坂田地区の北西には大きな谷津が入り込み、高浜入りの河川・恋瀬川の支流・天の川上流域に近い。山島半島を大きく迂回せずとも、河川（内水面）を利用した水上交通とわずかな陸交によっても、地域（人や文物）の交通は頻繁であったと思われるのである。土浦入り・高浜入り両地域に分布する埴輪は、胎土の含有物を手掛かりとして異なる製作地（窯）が推定される訳であるが、今回、検討の対象とした後期初頭・6世紀末葉～6世紀前半では製作環境の緊密な交流があったものと思われる。

さて、8号墳の埴輪は上記のとおり、大多数、6類型からなるIV群系埴輪（埴台I群）と、全体の1.4%に過ぎないI類型のみのV群系埴輪（埴台II群）で構成されていることが判明し、最大の特徴である。畿内地域の円筒埴輪の系統を明確に示した鐘方氏は、「後期の円筒埴輪を考える上で重要となるのは、それぞれの埴輪がどの系統に属して製作されてきたかを追求することであり（鐘方1997）、「関東におけるV期の埴輪展開（中略）を読み解くには、やはりV群系とIV群系の存在を指摘しなければならない。」（鐘方1999）と提言している。

今回、同工品分析の視点から出土埴輪の分類を行い、系統の把握をすることができた。何分、破片資料からのアプローチであるので、同工品各類型の構造（数量比や詳細な型式）とその意義を整理・把握するには至っていないが、霞ヶ浦西部地域における後期初頭の埴輪型式の一端を提示することができたのではないかと思う。今後は、新規資料の展開を期待するとともに、既出資料の再分析を進める必要があるように思う。繰り返しとなるが、わかりにくいとされる茨城県域の埴輪も、「工人集団、技法といったもの、あるいは組別・系譜といったようなものをきちんと把握していかなければならないだろう（車崎ほか2002）。前述の茨城県域における6世紀代の「IV群系埴輪の残存」は注意しなければならない点であり、これとV群系埴輪との係わりを読み解く必要がある。また、V群埴輪が「製作期間がほぼ100年に及ぶにもかかわらず、明確な型式変遷の追究が困難となっている」のは、「それまでに保持してきた埴輪製作上の規格性を放棄し、極限的に効率化させた製作工程によって、非常に合理的な量産体制」のもとに製作されたためである（鐘方2003）のなら、効率化・合理化の方向性、それを達成するための手法の創意・工夫、そして進歩の足跡があるはずである。今後、これをいかに見出し、整理するかに懸かっていると見えよう。

【注】

1 IV群とV群の分類は川西宏幸氏による円筒埴輪の5群大別（川西1978）に準拠し、各系統の定義は鐘方正樹氏が示したもの（下記、鐘方1997）に拠る。

IV群系埴輪：突帯間隔設定技法が用いられており、突帯間隔は均等幅である。（中略）断続ナゲ技法を用いない。外面調整にはヨコハケを用いる。

V群系埴輪：突帯間隔設定技法を放棄し、粘土組成目分量で堅硬にならなげつて突帯を成形する断続ナゲ技法を採用する。このために突帯間隔や底部高・口縁部高はばらついて一定しない。外面はヨコハケ調整が省略されてタテハケのみとなる。

2 「断続ナゲ」手法の評価については、日高 慎氏による慎重な判断が示されている（日高2001）。確かに、3高氏が報告された砂見土古墳例（突帯間隔設定法確あり、無黒曜）や、鐘方氏がIV群系と位置付けた尾張型埴輪（愛知県春日市の上向イ田原第1群の一部、鈴木編2009）などにも確認され、V群系埴輪以外にも似る事実がある。本稿では系列の違い（IV群系とV群系）を指摘する観点から、埴台I群に認められる突帯下出の凹凸を「断続ナゲ」の痕跡として、あえて積極的に評価したが、そもそも、「断続ナゲ」手法は単なる突帯貼付手法であり、今後、藤井正司氏が定義（藤井2003）するIV群系埴輪以前に認められる「突帯貼付技法A類」との鑑別が必要となる。

3 行方市（旧 行方西玉造町）の死原古墳でB種ヨコハケ調整が確認されているようであるが、焼成法は不明確なようである（日高2001）。また、これまでに発掘調査が行われていない砂見土古墳で、今後、B種ヨコハケが発見される潜在的な可能性はある。

第3節 叩き手法を用いる「常総型甕」についての一考察

「常総型甕」の呼称については、下野地域では「下野型甕」、茨城県内では「常陸型甕」とも称される。これらの甕は基本的に同様のもので理解される。形状的には口縁部が「く」の字に開き、口唇部が傾み上げられる。胴部はナデ形またはヘラケズリ整形され、胴部下半に粗い縦方向のミガキが施されるものが多い。全体に薄手のつくりとなっている。

その分布範囲は千葉県下総地域・茨城県全域・栃木県東部に限定されている。隣接する福島県・群馬県・東京湾沿岸から千葉県下総西部では、基本的に煮沸具として一般的な使用は行われていない。千葉県北部の印旛沼周辺では「常総型甕」が優位を占める傾向が見られるのに対して、南関東では「武蔵型甕」が中心となり、東京湾岸の千葉市から東葛地域では一部誌在が認められるものの「武蔵型甕」が優位になる。

「常総型甕」についてはその出自、製作技法またはその製作工人などについては不明な点が多く、一概に「常総型甕」が須恵器生産技法と同技法によるものとは限定することはできないが、本遺跡出土資料を基に、9世紀代の「常総型甕」の製作技法として叩き手法の存在について考察してみたい。

1 「常総型甕」の整形手法別分類

「常総型甕」の初原は6世紀代に遡り、9世紀末～10世紀初頭頃には姿を消す。その器形及び整形手法は、以下の種類に分類することができる。

器形

- A類 やや厚手で、胴部の最大径を中位から下位に有するもの（6～8世紀）
- B類 やや厚手で、肩部から口縁にかけてやや頸部が立つもの（6～8世紀）
- C類 薄手で、頸部が短く胴部から直接口縁が外反し、胴部の最大径が中位よりも上位に位置するもの（8世紀末～9世紀代）
- D類 小形化するもの（9世紀後半代）
- E類 薄手で、胴部がやや直線的な胴または円筒状になるもの（9世紀後半代）
- F類 薄手で、羽釜状に鈎が付され、ナデ整形が行われるもの（10世紀前半代）

整形

- ① 外面にナデ整形を施し、胴部中位から下半にかけて粗い縦方向から斜め方向のミガキを施し、内面はヘラナデ及びナデ整形が行われているもの。
- ② 外面全体にヘラケズリを行った後に、胴部下半に粗いミガキを施し、内面はヘラナデ及びナデ整形を行うもの。
- ③ 外面胴部上半はナデ整形され、底部付近にヘラケズリが行われているが、内外面に円形の凹凸（指頭痕もしくは当具痕）を残すもの。
- ④ 叩き整形を行った後にナデ整形を行い、外面の叩き目痕をナデにより消しているが、内外面にわずかながら叩き目が残るもの。
- ⑤ 叩き整形を行った後に、全体にヘラケズリを行い、内面に円形の凹凸が残るもの。
- ⑥ 全体にヘラケズリのみで整形され、内面はヘラナデ及びナデ整形を施すもの。
- ⑦ 外面上半に叩き目痕が明確に残り、内面はナデ整形を施すもの。

器形では、A・B類は古墳時代後期に見られるもので、C・D・E・F類は8世紀以降、9世紀から10世紀初頭に

通有に見られるものである。

整形の特徴では、外面に磨きを施すものが6世紀代に出現し、ヘラケズリを全面に施すものが新しくなる傾向がある。さらに、叩き月痕を有するものはヘラケズリの段階に増加する傾向があり、底部に砂目を有する例も出現する。

2 下坂田埴台遺跡出土の「常総型甕」

今回調査を実施した下坂田埴台遺跡は茨城県ものほば中央に位置し、筑波山麓から霞ヶ浦北西岸に位置する。平安時代・9世紀代の住居跡は8軒確認され、そのうち、叩き手法による「常総型甕」を検出したのはS108・S109の2軒である。

S102 01・02・03の甕はヘラケズリ手法により整形されているが、口縁及び口唇部の積み上げの形状より「常総型甕」C類⑥と判断した。相伴する遺物としては、ロクロ整形による有台皿05・有台皿06・新治窯跡群産須恵器無台杯07がある。05は内面黒色処理・ミガキが施されている。07は体部下端に手持ちヘラケズリが行われている。いずれも長石・石英・雲母を多量に含む。この遺構については9世紀中葉から後葉にかけてと判断される。

S107 甕02は外面胴部に僅かに凹凸が確認出来るが、ナデにより完全に消し去られている。内面には小口痕が観察されヘラナデが行われていることからC類①とした。相伴する遺物としてはいずれもロクロ整形による新治窯跡群産須恵器の無台杯07・09、有台皿08があり、長石・石英・雲母を多量に含む。この遺構については9世紀前葉と判断した。

S108 甕01の特徴としては、叩き整形の後ヘラケズリにより整形するもので、内面には当て具痕がわずかに確認できるものの、そのほとんどがナデ整形により擦り消されている。C類⑤に相当する。甕02・03は、胴部上位寄りのミガキが観察されることからC類①に相当する。04は胴部上位に斜方向の平行叩きが明瞭に確認されることからC類⑦に相当する。相伴する遺物として新治窯跡群産の須恵器杯・皿・盤・甕があり、長石・石英・雲母を多量に含む。これらの遺物から9世紀前葉と判断される。

S109 甕01は胴部の張りや弱くやや円筒形を見守るが、口縁及び口唇部の積み上げの形状より「常総型甕」と判断した。胴部上半には横方向の平行叩きが明瞭に施され、内面には当て具痕が確認できることからF類⑦と判断した。相伴する遺物としては、内面黒色処理・ミガキが施されている土師器無台杯03・有台皿04があり、いずれもロクロ整形である。この遺構については9世紀後葉と思われる。

S112 甕03は小形の新治窯跡群産須恵器である。形状的には「常総型甕」と言えるであろう。外面はヘラケズリにより整形されており、内面はナデが施されていることからD類⑥と判断した。相伴する遺物としては内面黒色処理・ミガキが施されている土師器無台杯01・02があり、01には外面に刻割が見られ、体部下端は手持ちヘラケズリが行われている。この遺構については9世紀前葉と判断した。

遺構外山上04の羽釜は口唇部の形態が「常総型甕」と類似するためにF類とした。

以上の分類から、叩き手法による「常総型甕」の出現は9世紀におけるものと判断され、胎土中に多量の雲母を混入する点から新治窯跡群産の須恵器との関連性を強く感じさせる。

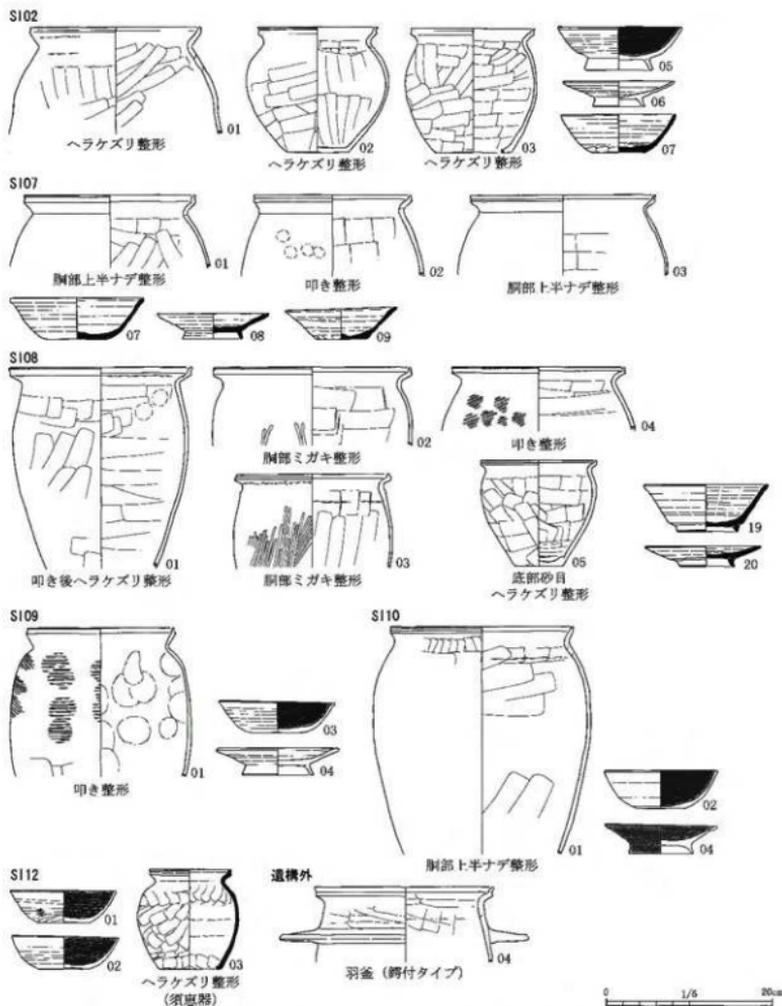
3 過去の調査によって得られた叩き手法を用いる「常総型甕」の再検討

紙幅の都合及び時間的な制約により悉皆的な調査を行っていないが、管見に触れた資料について提示しておく。

千葉県成田市南羽鳥正福寺遺跡（宇田1996） 第2地点において火葬墓が18基検出され、1・3・8～12・15・16・18号の10基の火葬墓において「常総型甕」が蔵骨器として用いられている。このうち、1号火葬墓から叩き手法を用いる「常総型甕」が2点出土している。詳細な遺物の観察がなされていないために明瞭ではない

が、掲載図から判断すると1は格子日叩きが胴部上半に施され、下位はナダ整形が行われる。内面には円形の当具痕を残す。2は胴部上半に平行叩きが施され、下半にはヘラケズリが施される。内面には楕円形の当具痕が残されている。分類ではいずれもC類⑦に相当するが、1の格子日叩きは他に類例を見ない。遺構の時期は明瞭ではないが、供伴する灰軸陶器瓶類から9世紀後半代が想定できる。

土浦市栗山窯跡(吉沢・日高1997) 灰原から出土している105は、外面胴部上半はナダ整形、中位から下半にかけては縦方向の粗いミガキが施される。内面は底部付近でヘラナダが見られるが、中位付近では楕円形の



第129図 下坂田埴台遺跡出土の「常総型壺」と供伴遺物

凹凸が残されている。報告書では指頭圧痕としているが、当具痕の可能性が高い。本窯は新治窯跡群産の一群に含まれる。報告者も指摘しているが、栗山窯の灰原から出土した点は須志器製作工と「常総型甕」の関連性を考える上で重要な資料と考える。この「常総型甕」は形状からC類④と判断される。また、灰原出土遺物から窯の操業時期は7世紀末～8世紀初頭と判断され、遺物も8世紀の遺物の可能性がある。一方、近接する根鹿北遺跡（後述）では、粘土採掘坑から9世紀代のほぼ同様の形状をした「常総型甕」が出土しており、栗山窯を7世紀末～8世紀初頭のみで操業と限定するにはやや齟齬を感じる。

日立市湯下遺跡（佐藤・大平1975） 31号住居跡から指頭圧痕が残された「常総型甕」が出土している。時期はⅢ期・9世紀以降としている。また、F類羽釜が1点出土しているが、境台遺跡で出土した羽釜とは形状が異なるものの、羽釜が混在する時期としては9世紀後半～10世紀前半と判断される。

笠間市長峰西遺跡（大賀ほか2010） CUT5-12号住居跡及びCUT6-4号住居跡で叩き目が残る「常総型甕」が出土している。CUT5-12号住居跡1は外面上半に平行叩きの痕跡が残り、下端ではヘラケズリが行われる。内面は横方向のヘラナデが施され、明瞭な当具痕は擦り消されたものが観察できない。C類⑦。CUT6-4号住居跡1は外面全体がヘラケズリされるものの、内面に円形の凹凸が残り当具痕と想定される。C類⑧。前者は9世紀前半、後者は9世紀後半の所産である。

千葉県柏市花前Ⅱ-1・2遺跡（鈴木・郷州・田井1985） 常磐自動車道路の建設に伴い実施された調査である。Ⅱ-1遺跡013・031・032号住居跡より出土した43は、外面胴部上半はナデ整形。下半は縦方向の粗いミガキ。内面に弧状の（ナデと報告されている）痕跡が凹凸化されている。これは内面の当具痕の可能性が高い。C類⑤の可能性が高い。Ⅱ-2遺跡012号住居跡3の遺物には外面胴部に平行沈線状の痕跡が凹凸化されており、ナデにより叩きの痕跡を消す時に残された可能性がある。C類⑤か。Ⅱ-2遺跡056号土坑24は平行叩きを行った後に、内外面共にナデを行い叩き目を消している。C類⑤に相当する。

土浦市原ノ台遺跡（平岡1999） 27号住居跡4の遺物がある。外面胴部はナデ整形されるが器面には凹凸が残る。E類⑥である。供伴遺物では須志器有台坏・無台坏・高坏があり、9世紀前葉の遺構と判断される。33号住居跡6は外面上半がナデ整形され、報告では指頭圧痕とされるが、器面に凹凸が全面に残される。下半はヘラケズリ、内面はヘラナデされている。C類⑤に当る。供伴遺物では内面黒色処理される無台坏が出土しており、9世紀中葉以降と判断される。

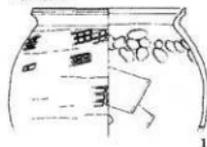
千葉県柏市天神向原遺跡（渡辺1990） 18号住居跡4の遺物がある。カマドからの出土で、外面胴部上半はナデ整形、下半はヘラケズリ。内面は指による圧痕が見られる。C類⑧。供伴遺物から9世紀前半と判断される。さらに、26号住居跡では土師器甕で13の平行叩き、14の平行叩きの後ヘラケズリ、15の底部妙目で、胴部下端にはヘラケズリの後縦方向のミガキが施されている。いずれも破片で器形を知り得ないが、「常総型甕」と須志器の関係を見る上で重要な遺物である。同住居跡からは9世紀後半から10世紀に近い遺物が出土している。

筑西市炭焼戸東遺跡（伊藤・田中2009） 18号住居跡92は外面がナデ整形され、内面には円形の当具痕が残される。F類⑤。供伴遺物の内面黒色処理の無台坏から9世紀後半と判断される。

土浦市長峰遺跡（黒澤・関1997） 4号住居跡2は胴部上半にナデ整形を行い、輪積部分の内外面に指頭圧痕が施され、下半には粗いミガキが施される。C類⑧。同住居跡は出土遺物から8世紀末頃と想定される。6号住居跡14は内外面に円形の凹凸が見られるもので、下半はヘラケズリが行われる。D類⑦。供伴遺物から住居跡は9世紀後半と判断される。8号住居跡出土16・18は胴部上半の資料であり、全容は不明であるが内外面共に指頭による圧痕が観察される。

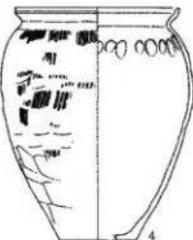
土浦市根鹿北遺跡（関ほか1997） 栗山窯と近接する遺跡である。集落の他に粘土採掘坑が検出されており、同採掘坑からも多量の「常総型甕」がまとめて出土している。33号住居跡5は外面に円形の凹凸が多く

千葉県成田市南羽鳥正福寺遺跡第2地点
1号火葬墓

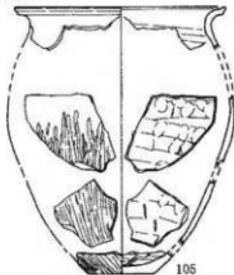


1

土浦市栗山窯跡
灰 塚

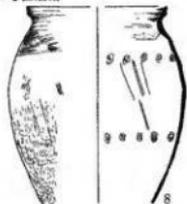


4



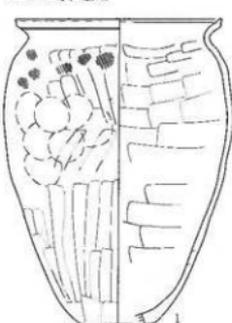
105

日上市道下遺跡
31号住居跡



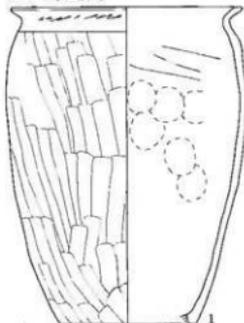
8

土浦市長崎西遺跡
CUT5 12号住居跡



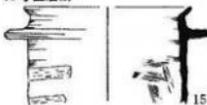
1

CUT6 4号住居跡



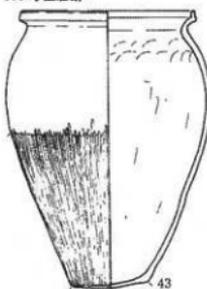
1

33号住居跡



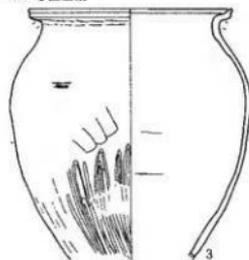
15

千葉県柏市花前II-1遺跡
013号住居跡



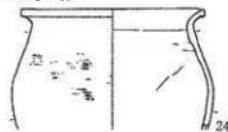
43

花前II-2遺跡
012号住居跡



3

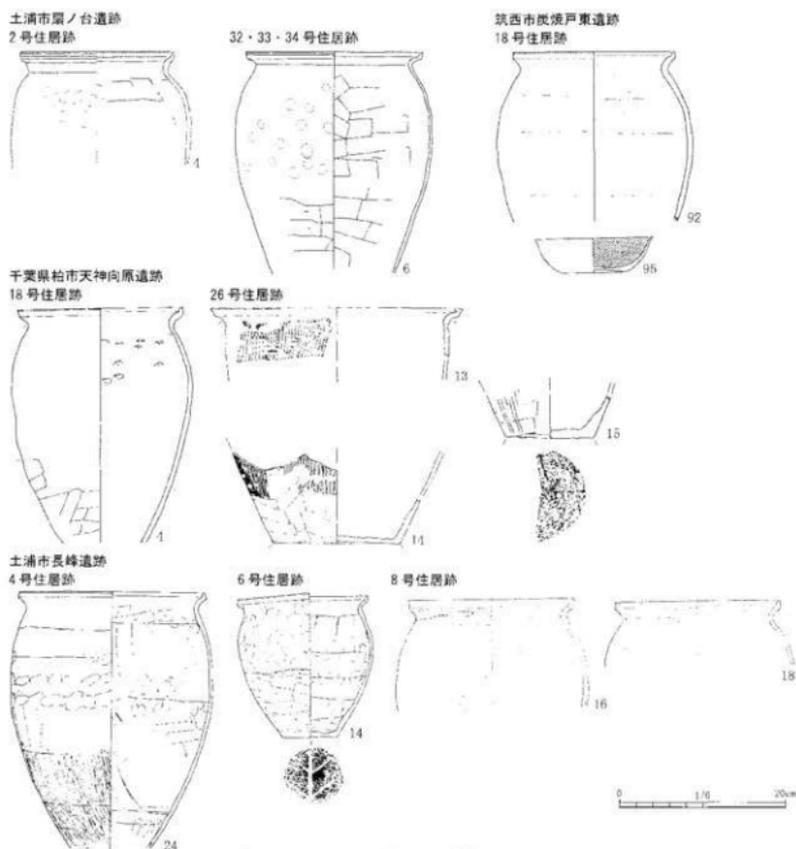
056号土坑



24



第130図 叩き手法を用いる「常総型甕」(1)

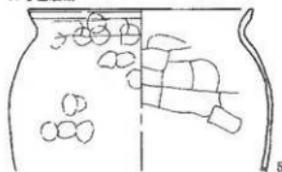


第131図 叩き手法を用いる「常総型甕」(2)

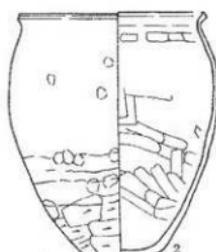
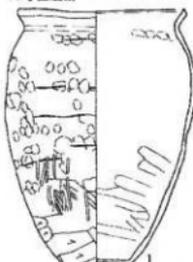
残されている。内面は横方向のヘラナデ。障手でやや小胴に近いタイプで、E類に含まれるものであろうか。整形は④。報告では供伴遺物から10世紀代のもので想定している。図は提示しなかったが、F類とした羽釜の鏝部分が本住居並びに35号住居跡から出土している。36号住居跡1・2・3・4の4点を示した。いずれも底部が砂目となる資料で、外面に円形の凹凸が残され、報告では指頭圧痕と報告されている。内面はヘラナデされる。概ねC類④に含まれるものと判断される。39号住居跡は8・9のC類④。11はE類④で胴部がやや小胴になる。12は外面にナデ整形を行うが円形の凹凸が残り、下半はナデ整形の後にヘラケズリされている。内面はナデ整形。外面胴部に「大部真磨」の墨書が記されている。C類④か。同住居からは瓦格の山上があり、遺構は9世紀前葉から中葉頃と判断されている。7号土坑1は口縁部・底部ともに欠損する資料であるが、外面上半に平行叩きの痕が残され、下半はヘラケズリが施される。内面はナデ整形され、輪積痕が残る。蜜母の混入は記載されていない。11号土坑9はやや小胴になり、外面は上半でナデ整形が行われるが円形の凹凸が見られる。下半はヘラケズリが施される。内面はヘラナデ、円形凹凸、輪積痕が残される。E類④。粘土探掘坑16はやや小形の「常総型甕」

土浦市根鹿北遺跡

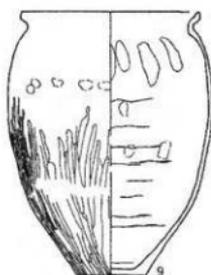
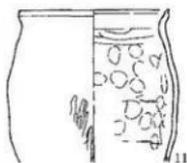
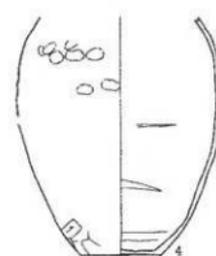
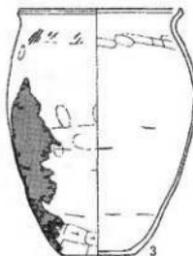
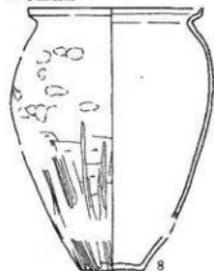
33号住居跡



36号住居跡



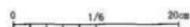
39号住居跡



7号土坑

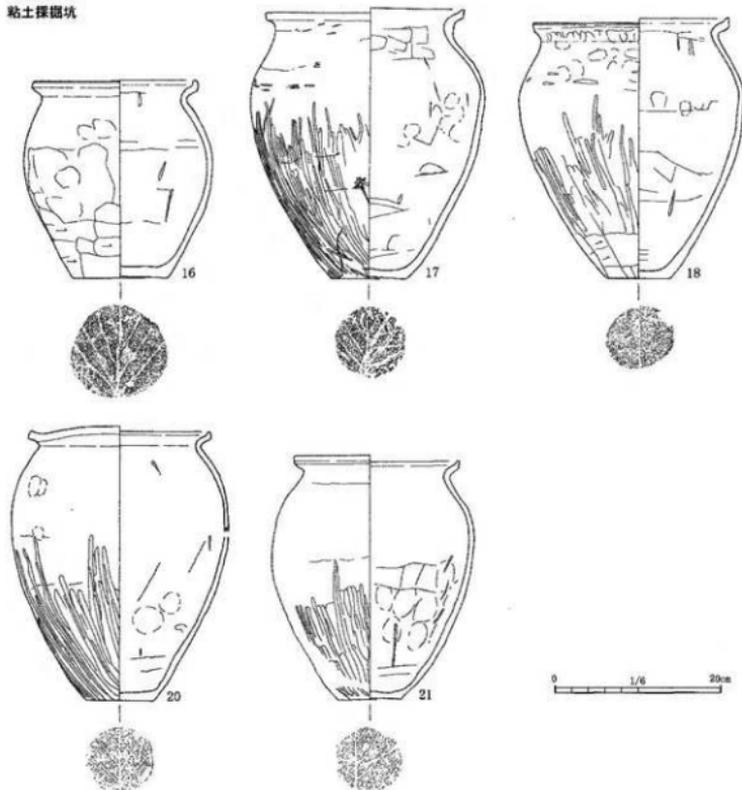


11号土坑



第132図 叩き手法を用いる「常総型壺」(3)

根拠北遺跡
粘土探掘坑



第 133 図 叩き手法を用いる「常総型甕」(4)

で外面上半部はナデを行うが円形の凹凸が残る。胴部下半は横方向のヘラケズリが施される。内面はヘラナデ。底部は木葉痕。D 類⑥。17・18・20・21 は大形で上位に最大径を有する「常総型甕」である。いずれも外面上半部にナデを施した後、胴部下半には粗い縦方向のミガキが施されている。17・21 では内面のみに円形の凹凸が、18・20 では内外面に円形の凹凸が見られる。

小 結

「常総型甕」の定義としては、前述したとおり、土師器の甕で口縁部が「く」の字に開いた後に口唇端部が S 字状に積み上げられるものを条件として資料を集成した。

叩き手法を用いて制作されている「常総型甕」の例は、茨城県空間市長峰西遺跡 CUT5-12 号住居跡 1・CUT6-4 号住居跡 1、筑西市炭焼戸東遺跡 SI8-92、本遺跡、土浦市扇ノ台遺跡 33・34 号住居跡 6、千葉県印旛沼周辺の成田市南羽鳥正福寺遺跡第 2 地点 1 号火葬墓 1・2 がある。茨城県中西部域から千葉県の印旛沼周辺域にわたる

ことが確認できる。東京湾岸の市原市や市川市の国府域では「常総型甕」自体出土量は少なく、「武蔵型甕」が主流となる。

カマドに煮沸具として用いるには、通常、須恵器は適さない。土師器がカマドに掛けられて出土する例が大半で、須恵器が煮沸具として出しする例は少ない。これは、焼き締められた須恵器では、火に当たると器面が剥落（破損）するため、おのずと煮沸具としては炭焼きの土師器の使用が土体となり、中世・近世の焙烙・内耳鍋にも通ずる。さらにカマドに掛ける土器としては熱効率の高い薄手の土器が必要になり、「常総型甕」、「武蔵型甕」いずれの器壁も薄く仕上げられている。薄手の器壁を製作するために「武蔵型甕」ではヘラケズリ手法が用いられるが、「常総型甕」では器面がナデ整形により大半が滅失しており、明瞭な製作技法として確認できないものが多い。しかし本遺跡において検出されたものの器面には偶然にも、あるいは意識的に叩き目痕が残されていた。今回、叩き手法が採用される「常総型甕」を近隣の遺跡を中心に報告書を見直したところ、複数の遺跡で明瞭に叩き目痕が残る遺物が確認できた。これらは、9世紀代の須恵器甕の製作技法に類似するもので、須恵器製作工人による製作の可能性が高い。「常総型甕」で叩き手法が確認された遺物の時期は8世紀から9世紀に集中する。「常総型甕」の胎土中に雲母を多量に混入する点も含めて、新治窯跡群産の須恵器の胎土・操業時期と同様である。新治窯跡群産須恵器は、その生産が終焉を迎えるのは9世紀後半で、8世紀から9世紀前半にかけては伊藤沼・手賀沼周辺域にも多量に搬入されている。また、底面にはほとんどの場合木炭痕が観察されるが、少数ではあるものの砂目が残されているものもある。一方で、「常総型甕」の内面に残されている凹凸を、指頭圧痕とする報告が多いが、外面を叩き整形する際の当具痕の可能性が想定される。今回は、このような指頭圧痕とされる遺物についても叩き整形による当具痕、もしくはナデによって擦り消された当具または叩き目の痕跡の可能性があると見て集めた。なお、管見に触れるものでは青海波文様は確認されていない。

ところで、外面にヘラケズリを多用する「常総型甕」については茨城県北部域に比較的多く、中部～南部域では下半にミガキを施すものが増える傾向を示すが、この胴部下半にミガキを施す手法については、6世紀段階ですでに出現しており、叩き手法の出現とは別系統と判断される。叩き手法を用いる「常総型甕」は、カマド構造の変化によって甕の形状が変化し、より熱効率の良い土器を製作するにあたり生みだされたものと思われる。ケズリ手法が主流となる9世紀代を中心とする時期、叩き手法を有する須恵器製作集団の中で、新治窯跡群を中心として製作されたものと考えられる。

【参考文献】

- 安藤隆雄 1979 「陶器輪軸製作書」『古代学研究』第90号 古代学研究会
- 安藤隆雄ほか 1988 『千葉県成田市所在 竜舟寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』千葉県立羽曳島土記の刊行・千葉県教育委員会
- 石井 功雄 2008 『高槻(1)2号墳と桜川流域の後古墳』第13回企画展 土師の遺跡13 展示解説パンフレット 上野国員塚ふるさと歴史の広場
- 石橋 充 1995 『常陸地区における丹波式土師器の埋蔵状況について』『筑波人学 先史学・考古学研究』第6号 筑波大学歴史・人類学系
- 石橋 充 2001 『筑波山系の埴輪』の分布について』『埴輪研究会誌』第8号 埴輪研究会
- 瀬和久 1988 『古市古墳群における大型古墳埴輪発掘』一編『大久川改修にともなう発掘調査概要』V 防務庁古墳外堀I・古事遺跡III 大阪府教育委員会
- 松村 繁 1999 『人物埴輪の研究』成成社
- 松村 繁 2002 『常陸における埴輪の変遷—常陸中・北部を中心に—』茂木博博ほか編『常陸の陶器埴輪—茨城大学人文学部考古学研究所報告第5冊— 茨城大学人文学部考古学研究室
- 大木 芳 1995 『下総型埴輪基礎考—埴輪系工品論序説—』『埴輪研究会誌』第1号 埴輪研究会
- 岩崎卓也 1986 『常陸の埴輪—版土古墳群』埴田精一編『武者塚古墳・塚2号墳・武具八幡古墳の調査 武者塚古墳調査団編、新井村教育委員会
- 宇田敦司編 1996 『南河内造跡群 I 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埴輪文化財調査報告書(1) 新井郡都市文化財センター・発掘調査報告書第112集 66号 新井郡都市文化財センター編、成田スポーツ開発株式会社
- 大賀 健 2011 『まとも—出土遺物の年代観』大賀健『杉ノ井遺跡(旧東山遺跡)』石岡市埋蔵文化財調査報告書 石岡市教育委員会・有限会社匂玉工房 Mogi
- 大賀 健ほか 2009 『赤井堂遺跡(東地区)—黒雲畑地帯総合整備事業(供い手支保型) 坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書— 土師市教育委員会・有限会社匂玉工房 Mogi
- 大賀 健ほか 2011 『赤井堂遺跡(西地区)—黒雲畑地帯総合整備事業(供い手支保型) 坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書— 土師市教育委員会・有限会社匂玉工房 Mogi
- 大塚初彦・小林三郎編 1995 『三塚古墳発掘調査報告書』明治大学編、玉造町教育委員会・玉造町遺跡調査会
- 大塚初彦ほか 1987 『長野新史跡 土師付塚塚古墳—重要発掘調査報告書—』上野国員塚古墳調査会編、長野市教育委員会・東信市教育委員会
- 小塚城拓造 2010 『茨城県土師市赤井堂古墳群11号墳の測量調査報告書』『筑波人学 先史学・考古学研究』第21号 筑波大学人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻
- 加藤一郎 2003 『関東における中野古墳の陶器埴輪』『埴輪—陶器埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52号埋蔵文化財研究会誌発表要目集 埋蔵文化財研究会
- 樋方正幸 1997 『二期古墳の陶器埴輪』樋方編『史跡大安寺口境内 I—杉ノ井古墳地区の発掘調査・整備事業報告— 奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊 奈良市教育委員会
- 樋方正幸 1999 『2号突帯の陶器埴輪』『埴輪研究』第1号 埴輪検討会
- 樋方正幸 2003 『陶器埴輪の地域性と土人の動向』『埴輪—陶器埴輪製作技法の観察・認識・分析—』(前掲)
- 川田茂幸 1978 『陶器埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会(川田1988『古墳時代政治史序論』筑書房(二再録))
- 木川浩司 2001 『岩波・市原地域の陶器埴輪発掘—千葉県立陶器埴輪館①—』『埴輪研究会誌』第5号 埴輪研究会
- 志原敬二 2010 『土の埴輪—玉立舟塚古墳の埴輪群—』2010年度特別展興行同録 明治大学博物館
- 車崎正彦 1998 『埴輪からみた前期古墳から中期古墳へ』『前期古墳から中期古墳へ』第3号東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム報告集 資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 車崎正彦ほか 2002 『第2回研究発表会討議の記録』『埴輪研究会誌』第6号 埴輪研究会
- 小玉秀成 2004 『竇ヶ浦の弥生土師』平成16年度特別展展示同録 玉草村立史跡館
- 小橋健司 2008 『千葉県市原市城崎町新遺跡の掘削土埴輪』『埴輪研究会誌』第12号 埴輪研究会
- 小橋健司 2010 『千葉県市原市城崎町2号古墳の掘削土埴輪』『埴輪研究会誌』第14号 埴輪研究会
- 小橋健司 2011 『内裏塚古墳と御沢埴輪生産遺跡』『埴輪研究会誌』第13号 杉山晋作先生追悼記念 埴輪研究会
- 小浜 成 2003 『陶器埴輪の観察視点と編年方法—茨城県埴輪発掘の提示に向けて—』『埴輪研究』第4号 埴輪検討会
- 小林三郎編 2000 『玉立村埴輪山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
- 小林三郎編 2001 『三塚古墳第3基発掘調査報告書』明治大学編、玉造町遺跡調査会・玉造町教育委員会
- 齊藤 新 2006a 『古墳を歩く—古墳の記録』『フィールドノート』vol.12 ふんかさいほごねんぼ1999 郷むちちなか市文化・スポーツ振興公社
- 齊藤 新 2006b 『むたもなが市川子塚出土の陶器埴輪について(1)』『埴輪研究会誌』第4号 埴輪研究会
- 齊藤 新 2001 『茨城県北部の民衆埴輪』『埴輪研究会誌』第3号 埴輪研究会
- 齊藤 新ほか 2003 『大和村発掘古墳群 全録1号出土集の埴輪について』『館蔵の研究—何久津久先生追悼記念論集— 何久津久先生追悼記念事業実行委員会・編集室
- 塩谷 修 1997 『竇ヶ浦沿岸の埴輪—5・6世紀の埴輪生産と埴輪発掘—』千葉県司馬『竇ヶ浦の首長—古墳にみる水辺の権力者たち—』第19回特別展展示解説書 竇ヶ浦町史資料科
- 塩谷 修 2010 『上野地域の古墳群』佐々木憲一・田中 裕編『常陸の古墳群』六 書房
- 塩谷 修編 1987 『取手遺跡(内野敷池内)・竜王山古墳 取手遺跡(穴塚小字池内) 発掘調査概報』土師市遺跡調査会編、土師市教育委員会
- 鈴木光也 1981 『調査成果の概観—根木古墳、埴田精一編『筑波古代史Ⅱの研究』昭和54〜56年度茨城県特定研究費による調査研究概要』筑波大学
- 山口久美子 2002 『古墳から見た利根川流域の形成』千葉県考古学研究会叢書2 千葉(印刷所)

- 杉山晋作ほか 2006『茨城県かすみがうら市 富士見塚古墳群』考古学研究会報告乙種 18冊 富士宮人考古学研究会編集・かすみがうら市教育委員会
- 鈴木 徹編 2009『上向イ臣塚』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集 豊田市教育委員会
- 成谷正邦 2009『埴輪生産と地域社会』 学芸社
- 高橋康夫 1998『新原市丸森古墳群』新原市文化財センター調査報告書第64集 細田哲平・東日本建設・新原市文化財センター
- 田中裕貴・高橋和成 2002『ひたちなか市下川原古墳群』茂木弘之編『古墳の円筒埴輪』(前掲)
- 田中 裕 2012『古墳と水上交通—茨城県城とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して—』『東日本における前期古墳の立地、展開、ネットワーク』第17回東北・関東東北方後墳研究会大会シンポジウム発表要旨資料 東北・関東東北方後墳研究会
- 埼玉県教育振興財団文化財センター 2010『文化財センター速報』平成22年12月
- 千葉陽子編 1997『霞ヶ浦の青良一古墳にみる水辺の権力者たち—』第19回特別展開解説書 霞ヶ浦県立資料館
- 辻川哲郎 2003『斎藤—突帯間制設定技法を中心として—』『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』(前掲)
- 佐田郁夫 2001『霞ヶ浦北西部の埴輪に関する2,3の考察』『埴輪研究会誌』第6号 埴輪研究会
- 中島和彦 1992『千葉県東総埴輪群とまぐら諸遺跡—埴輪の生産と供給—』『新編ナツ技法』の再評価』『奈良市埋蔵文化財調査センター—紀要—』1991 奈良市教育委員会
- 沼津 量 2006『前方後円墳と筑土貝古墳』考古学選書52 雄山閣
- 沼津 量 2010『中小古墳における形態と規模の相関性』『研究報告』第71号 98千葉県教育振興財団文化財センター
- 新原正一 1994『両池における埴輪の生産と分布』『千葉県文化財センター研究紀要』16 千葉県文化財センター
- 日高 信 2001『妙見古墳群の埴輪—その位置づけと高浜入り周辺の埴輪生産—』『三井村立史料館』第6号 玉田村立史料館
- 田島 慎 2003『霞ヶ浦周辺の円筒埴輪—福年研究をおこなうための前提作業—』『埴輪研究会誌』第7号 埴輪研究会
- 新ひたちなか市文化・スポーツ振興文化部 2005・2006『ワールドノート』vol.17・18 本かさがまねこねんぼう2004・2005
- 平岡和夫編 2001『高崎古墳群調査資料第2号遺・第3号遺』山武考古学研究所・新治村教育委員会
- 藤井幸司 2003『円筒埴輪製作技法の復元の研究—斎藤成道人以降を中心に—』『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』(前掲)
- 本田信之 2002『三里村神楽岡古墳出土の破片状を施す円筒埴輪—霞ヶ浦高浜入りを中心として—』『玉里村立史料館』第7号 三里村立史料館
- 埋蔵文化財研究会 2003『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究会発表要旨要項
- 津田清一編 1981『筑後古墳時代の研究』昭和54〜56年度文部省特別研究費による調査研究報告 筑波大学
- 増田精一編 1980『武骨塚古墳』武骨塚古墳・塚2号墳・武具八幡古墳の調査 武骨塚古墳調査記録・新治村教育委員会
- 山田俊輔 2008『上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開』『古代文化』第60巻第1号 (財) 古代学協会
- 滝田 誠 1984『縄文時代の漁業』考古学選書7 雄山閣出版
- 第5章第3節埴輪**
- 伊藤康彦・田中穂穂 2009『茨城戸塚遺跡』——ついでに明石野工業団地埋入跡埋蔵文化財発掘調査報告3 茨城県茨西市教育委員会 有限会社勾玉工房 Mogi
- 宇田敦司 1996『南村烏道跡群』I 成田スポーツ開発株式会社・新田藤村市文化財センター
- 大賀 健 1999『秋平遺跡・池津遺跡・中塚古墳』ザ・インベリアル・ゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘報告書 山田町教育委員会
- 大賀 健・大賀さつき・大越直樹 2010『長峰古墳跡』茨城県教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
- 大賀 健・大賀さつき・長谷川秀夫・大越直樹 2010『赤沢遺跡(中央区)』有限会社勾玉工房 Mogi・浦市教育委員会
- 大賀 健・長谷川秀夫・大越直樹・大賀さつき 2011『赤沢遺跡(西区)』有限会社勾玉工房 Mogi・浦市教育委員会
- 大賀 健・鈴木 徹・大賀さつき 2012『井ノ井遺跡』石岡市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
- 大川 清・鈴木公男・工藤善徳 1996『日本土器辞典』 雄山閣
- 櫻村寛行 1998『常陸型埴輪年小考—茨城県南部を中心として—』『列島の考古学』筑波大学歴史学部記念論叢 西川誠先生追悼記念論集刊行会
- 黒澤泰彦・関口 満 1997『長峰遺跡』一田村・沖宮上地区埋入跡事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—第3集— 浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会
- 調査会・田村・沖宮上地区埋入跡調査
- 古代学発掘研究会 1997『東国の歴史—関東地方における歴史時代遺跡の系図—』97 シンポジウム発表要旨・資料
- 佐々木寛児 2007『常陸史の生産と流通 奈良時代以前の権柄』『奈良考古学』第29号 奈良考古学同人会
- 佐藤敏樹・大平達雄 1975『日立市遺下遺跡調査報告書』日立市教育委員会
- 鈴木定明・鶴岡英司・田井39. 1985『常陸自動車道埋蔵文化財調査報告書』田一花館目1・花館目2・美船—日本道路公団東京第一建設局・埼玉県文化財センター
- 鈴木 徹・長谷川秀夫 2012『府中城跡』石岡市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
- 関口 満ほか 1997『筑後北道跡』関口編『筑後北道跡・粟山遺跡』土浦市今泉産物部張工事業地内埋蔵文化財調査報告書 土浦市遺跡調査会編・土浦市教育委員会
- 高橋一夫 2010『常陸型埴輪と武蔵型埴輪』『埼玉考古学』第45号 埼玉考古学
- 中村哲也 2003『常陸型埴輪』以前—原川流域における古墳時代型型土器の型式学的検討、『埴輪の研究』阿久津久先生追悼記念論集刊行会
- 西川 修 1996『南栗東の埴輪』『埴と壺 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 河和夫 1999『堀ノ宮遺跡』—一宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 土浦市教育委員会・山武考古学研究所
- 吉沢 祐・田島 慎 1997『黒山遺跡』関口編『筑後北道跡・粟山遺跡』(前掲)
- 渡辺健二 2007『天神向黒山遺跡』『大井東部地区遺跡群』—大井東部地区埋入跡事業に伴う埋蔵文化財発掘調査— 大井東部地区遺跡群発掘調査会・沼南町教育委員会

第47表 ヒット計測表

遺構名	グリッド	平面形	規模 (cm)			柱頭跡	時期	採掘No.	備考
			長さ	幅	高さ				
P01			欠番 (SB03-P2 に張り替え)						
P02			欠番 (SB03-P3 に張り替え)						
P03	2区 K1	円形	60	60	24	有 (幅 40cm)	古代	第93図	
P04	2区 K1	円形	76	72	27	有 (幅 30cm)	古代	第93図	
P05	2区 K1	楕円形	76	57	78	有 (幅 22cm)	古代	第93図	SB03 柱穴カ
P06	2区 L4	円形	30	30	26	有 (幅 16cm)	古代	第99図	
P07	2区 L1	楕円形	42	30	25	有 (幅 12cm)	古代	第99図	
P08	2区 L1	円形	30	30	15	無	古代	第99図	
P09	2区 L1	楕円形	24	18	11	有 (幅 10cm)	古代	第99図	土師器 (古墳前期) 12.5g
P10	2区 L1	円形	18	42	41	有 (幅 10cm)	古代	第99図	
P11	2区 J2	楕円形	42	38	25	有 (幅 20cm)	古代	第99図	
P12	2区 I2	楕円形	54	36	18	有 (幅 18cm)	古代	第99図	
P13	2区 Y1	円形	36	36	35	無	古代	第99図	
P14	2区 J1	円形	30	30	29	有 (幅 8cm)	古代	第93図	
P15	2区 J2	楕円形	36	60	19	有 (幅 20cm)	古代	第93図	SB03 柱穴カ
P16	2区 C1	円形	42	42	42	無	古墳前期	第39図	S117 に切られる
P17	2区 C2	楕円形	72	60	44	無	中・近世	第7図	土師器 (古墳) 5.1g、埴輪 94.7g、石器 (刺片) 10.4g
P18	2区 J2・K2	楕円形	30	24	29	無	中・近世	第7図	
P19	2区 K2	円形	36	30	27	無	中・近世	第7図	
P20	2区 K2	楕円形	30	24	39	無	中・近世	第7図	
P21	2区 K2	円形	33	30	15	無	中・近世	第7図	
P22	2区 F1	円形	24	24	37	無	中・近世	第7図	
P23	2区 E1	円形	30	30	26	無	中・近世	第7図	
P24	2区 K2	推定円形	46	(39)	47	無	中・近世	第7図	
P25	2区 L2	推定円形	46	(42)	45	無	中・近世	第7図	
P26	2区 D2	円形	48	42	25	無	中・近世	第7図	
P27	2区 D1	円形	(30)	33	62	無	中・近世	第7図	SB02-P9 に切られる
P28	2区 D2	楕円形	42	34	39	無	中・近世	第7図	
P29	2区 C1	楕円形	54	36	56	無	中・近世	第7図	
P30	2区 C1	楕円形	28	16	15	無	中・近世	第7図	
P31	2区 C2	楕円形	48	36	46	無	中・近世	第7図	
P32	2区 C2	円形	30	26	20	無	中・近世	第7図	
P33	4区 G1	楕円形	72	60	36	有 (幅 20cm)	古代	第9区	縄文 (早・前期) 22.4g
P34	4区 C2	楕円形	60	45	15	無	中・近世	第9図	
P35	4区 D1	円形	42	39	38	無	中・近世	第9図	
P36	2区 L1	円形	36	30	36	無	中・近世	第7図	SB02 を切る
P37	2区 L2	円形	39	33	27	無	中・近世	第7図	
P38	4区 D2	推定楕円形	(42)	(18)	25	有 (幅 10cm)	古代	第9図	SB02 を切る
P39	2区 L1	円形	30	30	21	無	中・近世	第7図	
P40	2区 J1	円形	39	36	55	無	中・近世	第7図	
P41	2区 F1	円形	36	33	11	無	中・近世	第7図	
P42	2区 E1	楕円形	60	36	37	無	中・近世	第7図	

写 真 图 版



1 武者塚古墳から坂田墳台8号墳を望む



2 1区調査前状況 南から

調査区（調査前状況）



1 2区調査前状況 西から



2 4区調査前状況 東から



1 1区北側全景 北から



2 1区南側全景 南から

調査区 (2区)



1 2区西側全景 西から



2 2区東側全景 東から



1 3区北側全景 北から



2 3区南側全景 南から

調査区 (4区)



1 4区西側全景 西から



2 4区東側全景 東から



1 1区標準堆積土層 東から



2 2区標準堆積土層 南から



3 3区標準堆積土層 東から



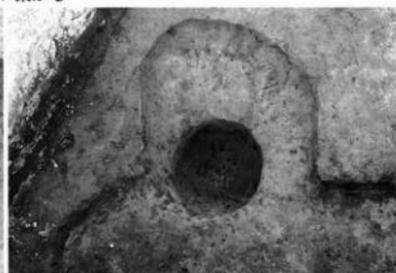
4 4区標準堆積土層 南から



5 SI04 東から



6 SK02 北から



7 SK02 南から

弥生時代（住居跡）



1 SI01 南から



2 SI16 東から



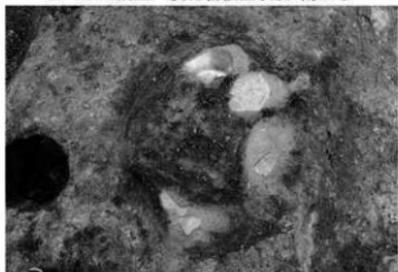
1 S103 西から



2 S103 焼土・炭化物検出状況 南から



3 S103 炉 南から



4 S105 遺物出土状況 西から



5 S105・SD07・08 南から

古墳時代（住居跡）



1 S105・SD08 東から



2 S106(中央)・07(左) 南から



1 S106 遺物出土状況 南から



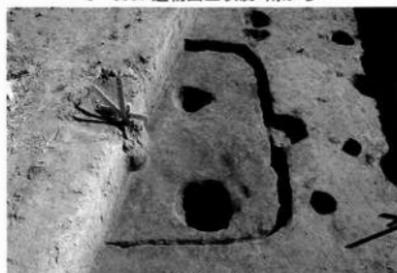
2 S106 カマド 南から



3 S107 遺物出土状況 南から



4 S107 カマド 西から



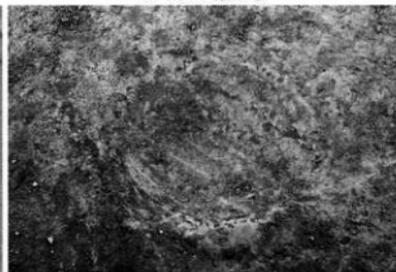
5 S111 西から



6 S114 東から



7 S114 遺物出土状況 東から



8 S114 炉 南から

古墳時代（住居跡・土坑・ピット・溝跡）



1 S115 西から



2 S115 掘方 西から



3 S118 北から



4 P16 遺物出土状況 東から



5 SD05 北から



6 SD06 東から



7 SD07 東から



8 SD14 西から



1 8号墳 北から



2 8号墳 SD01 Dセクション（西側）北から



3 8号墳 SD01 Dセクション（東側）北から



4 8号墳 SD01 遺物出土状況 北から



5 8号墳 SD02 西から

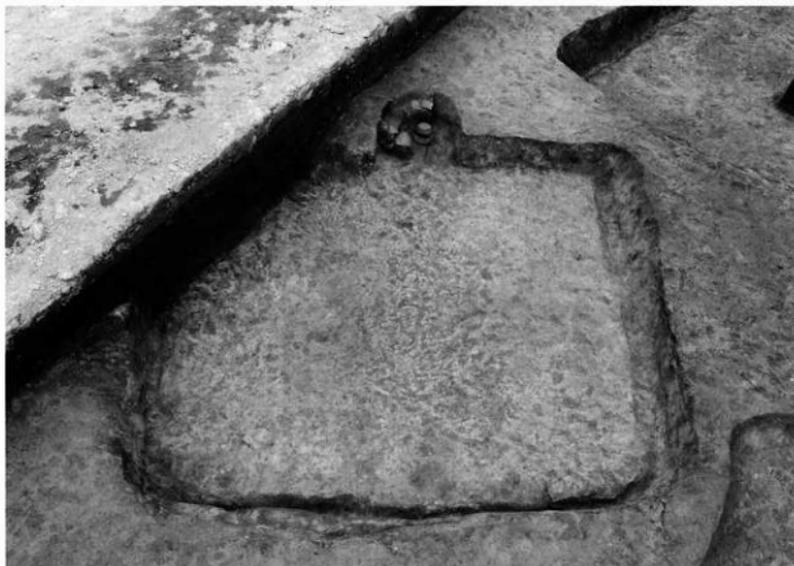
古墳時代（古墳）



1 14号墳 SD13 北から



2 15号墳 SD09(手前)・SD10(奥) 東から



1 S102 南から



2 S102 遺物出土状況 西から



3 S102 カマド 南から

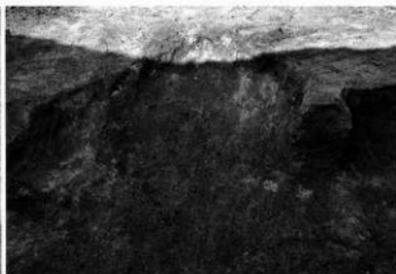


4 S108 遺物出土状況 南から

平安時代（住居跡）



1 S108 東から



2 S108 カマド 南から



3 S109 遺物出土状況 南から



4 S109 Bセクション 東から



5 S109(左)・13(右) 西から



1 SI09 カマド 西から



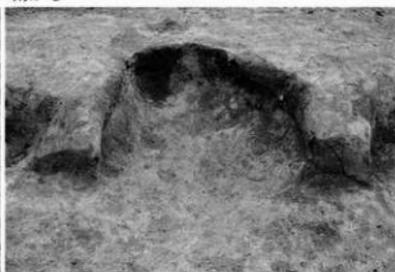
2 SI10 カマド 南から



3 SI10 南から



4 SI12 カマド遺物出土状況 東から



5 SI12 カマド 南から

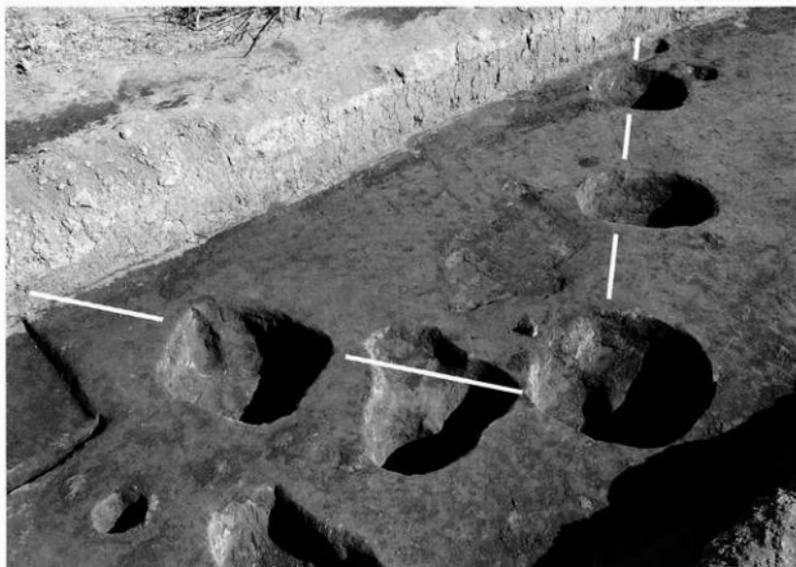
平安時代（住居跡）



1 SI12(手前)・SK05(奥) 東から



2 SI17 東から



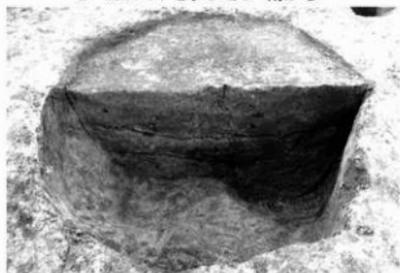
1 SB01 西から



2 SB01-P1 セクション 南から



3 SB01-P2 セクション 東から

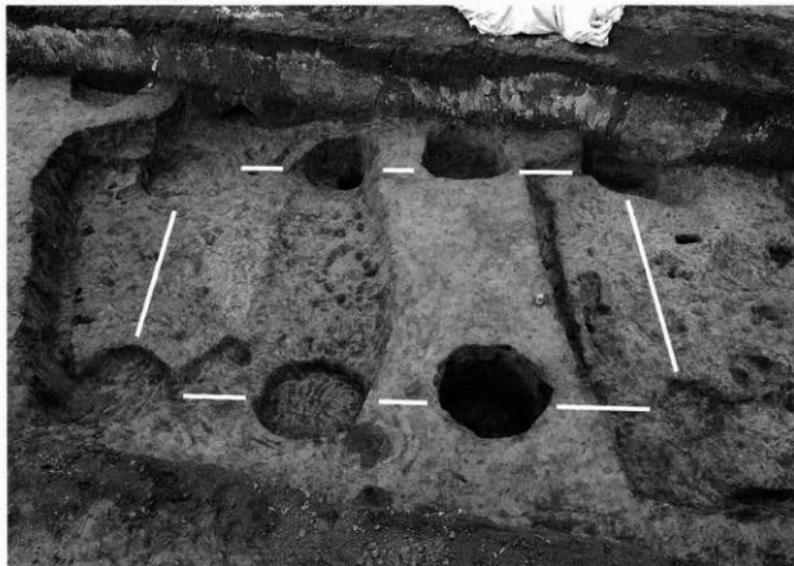


4 SB01-P3 セクション 東から



5 SB01-P4 セクション 東から

平安時代（掘立柱建物跡）



1 SB02 南から



2 SB02-P3 セクション 南から



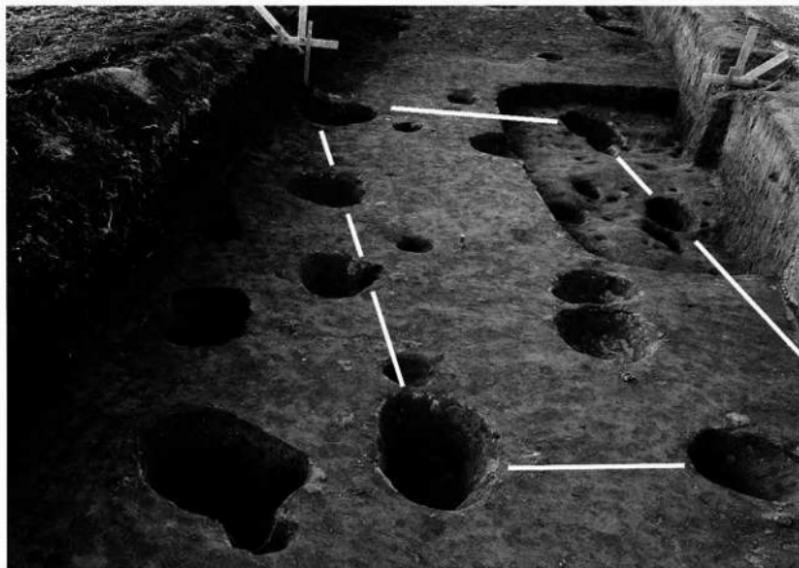
3 SB02-P6 セクション 南から



4 SB02-P7 セクション 北から



5 SB02-P8 セクション 東から



1 SB03 東から



2 SB03-P1 セクション 東から



3 SB03-P2 セクション 東から



4 SB03-P3 セクション 東から

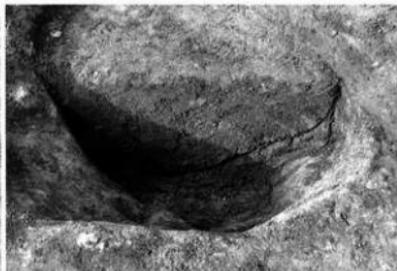


5 SB03-P4 セクション 東から

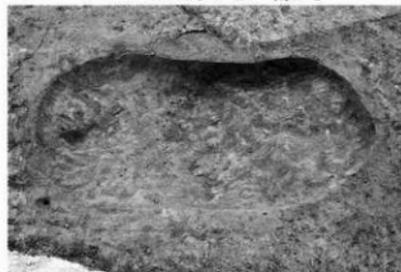
平安時代（掘立柱建物跡・土坑）



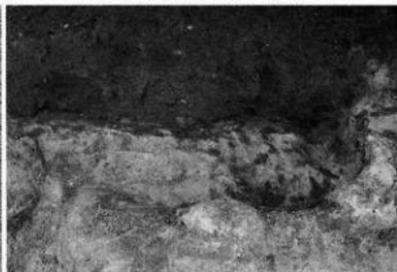
1 SB03-P5 セクション 南から



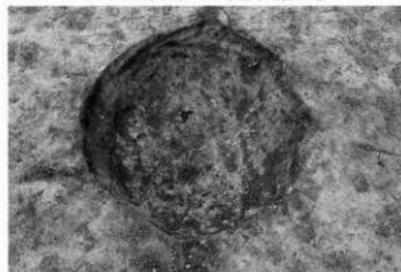
2 SB03-P6 セクション 東から



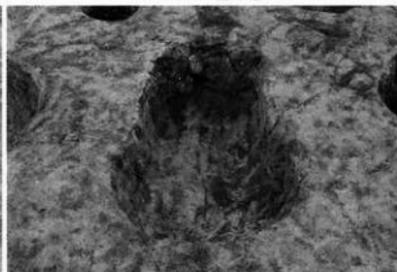
3 SK03(右)・04(左) 東から



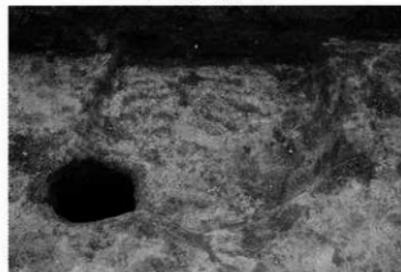
4 SK05 北から



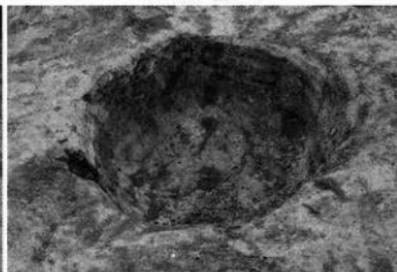
5 SK08 東から



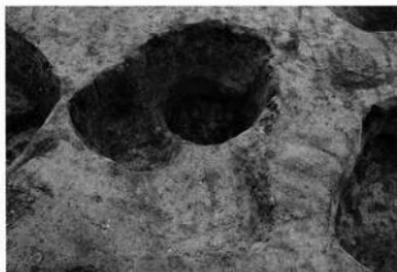
6 SK13 南から



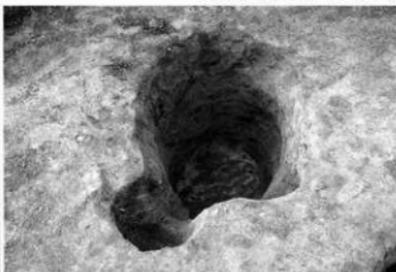
7 SK14 南から



8 SK15 南から



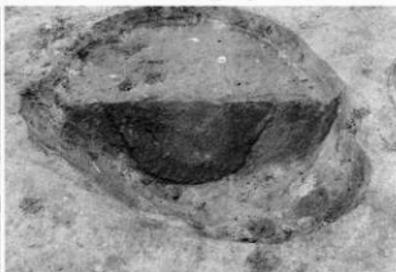
1 SK16 北から



2 SK17 北から



3 SK26 北から



4 P03 セクション 南から



5 P04 セクション 南から



6 P05 セクション 南から



7 P06 セクション 東から



8 P07 セクション 東から

平安時代（ピット）



1 P08 セクション 東から



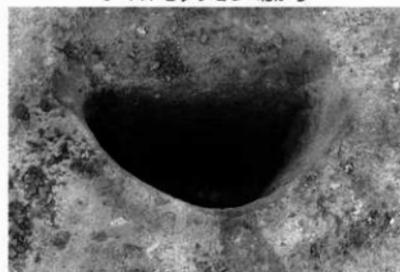
2 P10 セクション 南から



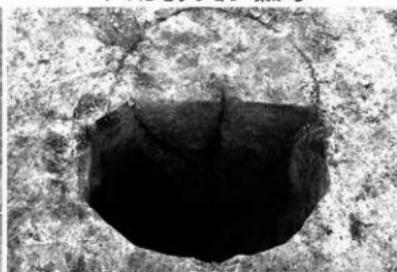
3 P11 セクション 北から



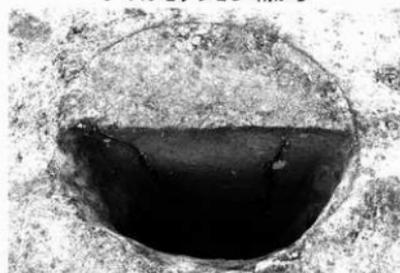
4 P12 セクション 東から



5 P13 セクション 南から



6 P14 セクション 東から



7 P15 セクション 南から



8 P33 セクション 南から



1 SD11 西から

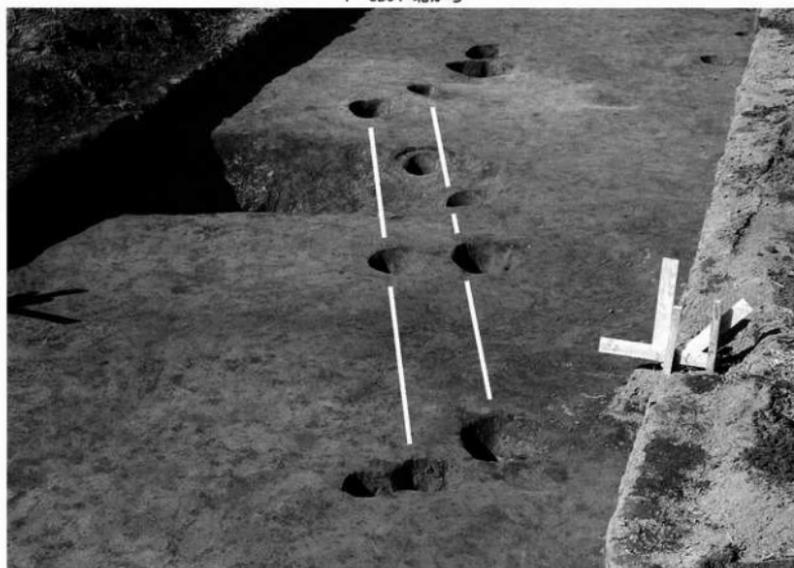


2 SI19(中央)・SK34(右奥)・37(右手前)北から

中・近世（掘立柱建物跡・柵・掘立柱塀跡）



1 SB04 北から



2 SA01(右)・02(左) 東から



1 SK31 北から



2 SK32 北から



3 SK35(左)・36(右) 東から



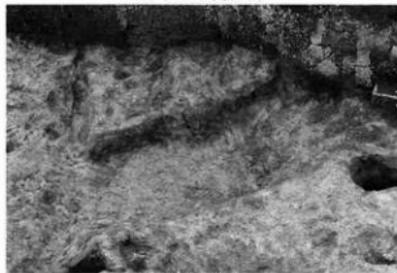
4 SD03 南から



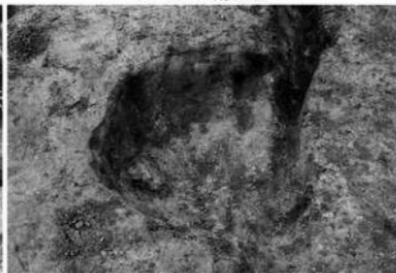
5 SD04 南から



6 SD12 南から



7 SK06 南から

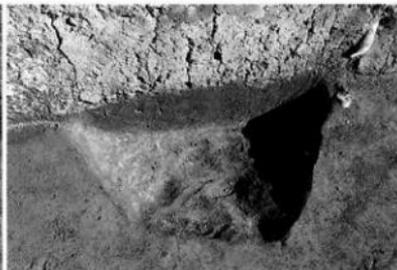


8 SK07 東から

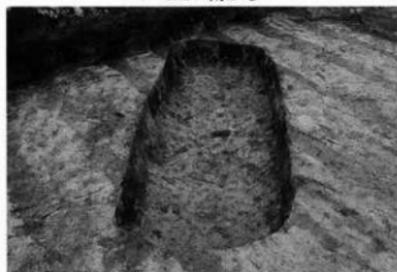
時期不明（土坑）・調査風景



1 SK24 南から



2 SK25 南から



3 SK29 西から



4 SK30 東から



5 SK33 北から



6 SK39 北から

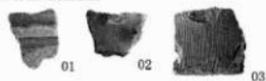


7 8号墳小グリッド設置状況 東から

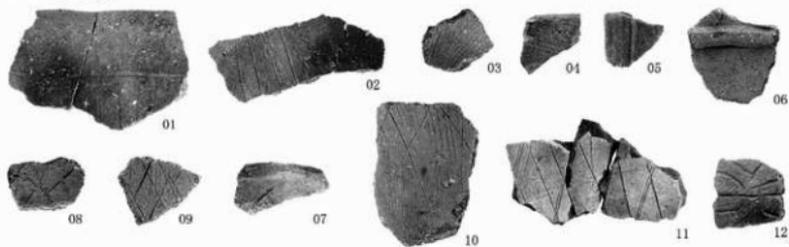


8 8号墳調査風景 東から

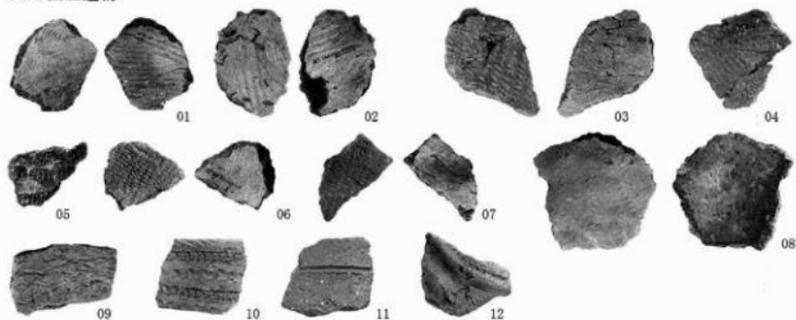
試掘確認調査



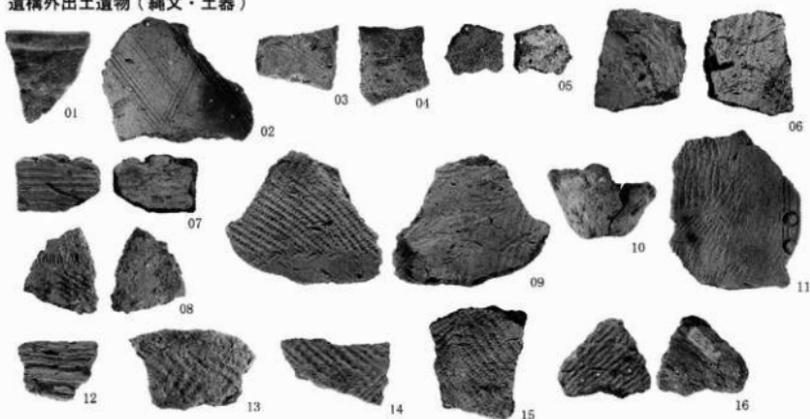
S104 出土遺物



SK02 出土遺物

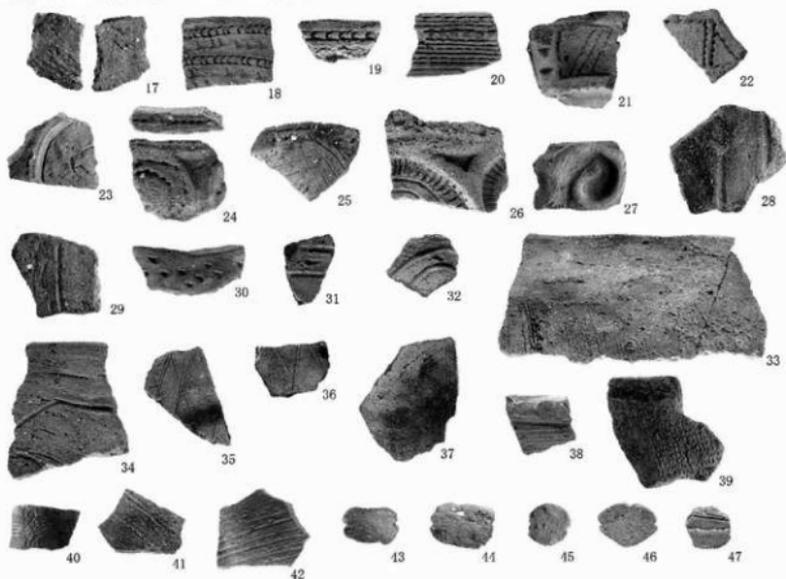


遺構外出土遺物 (縄文・土器)

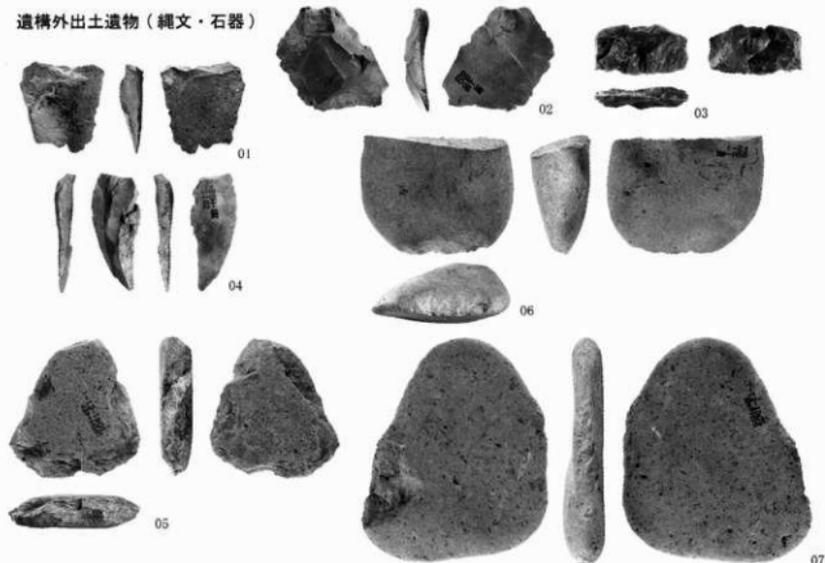


縄文時代 (2)

遺構外出土遺物 (縄文・土器・土製品)



遺構外出土遺物 (縄文・石器)



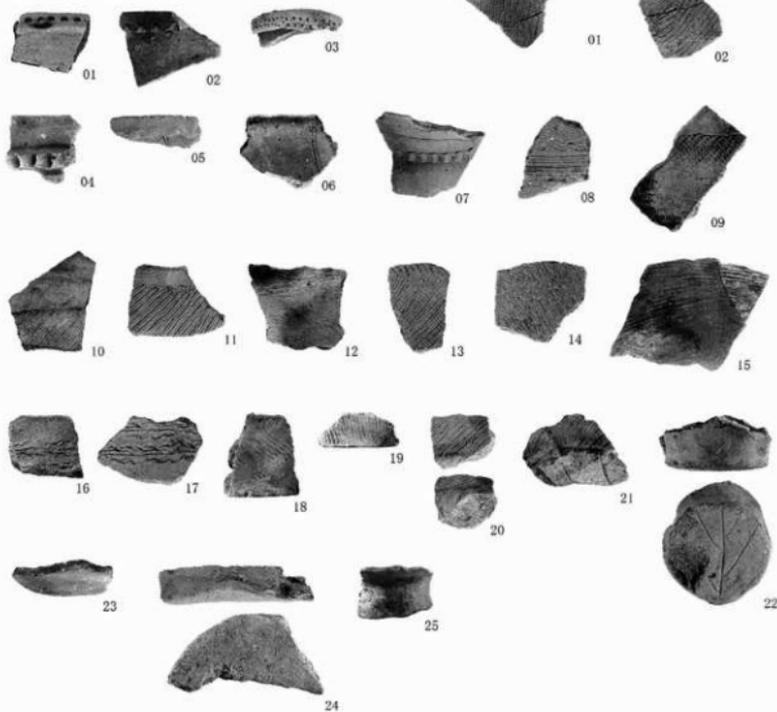
SI01 出土遺物



SI16 出土遺物

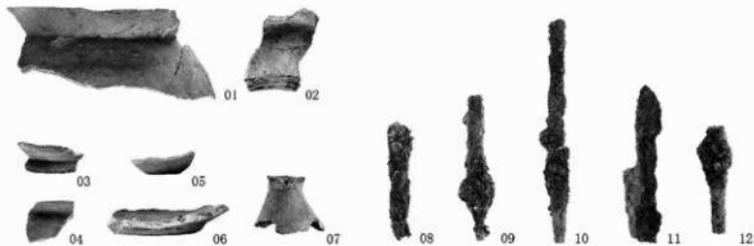


遺構外出土遺物（弥生）

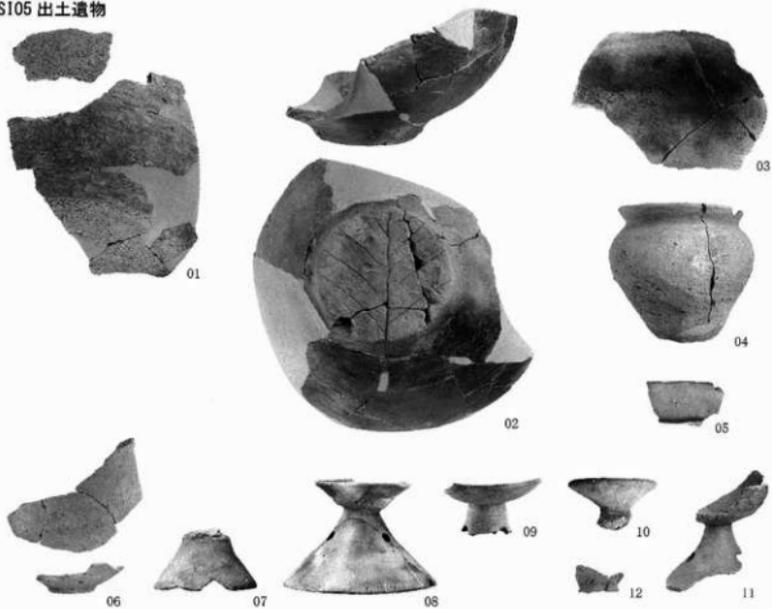


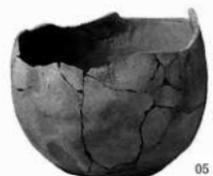
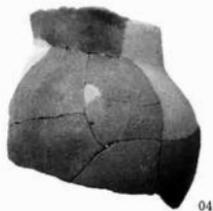
古墳時代 (1)

S103 出土遺物



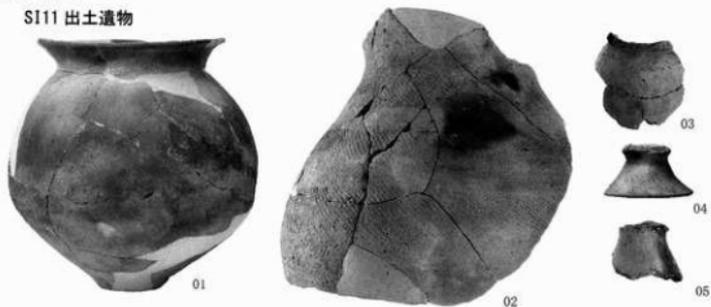
S105 出土遺物





古墳時代 (3)

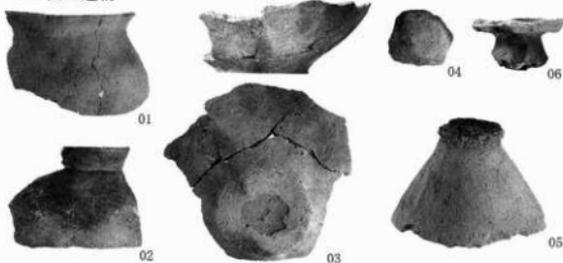
S111 出土遺物



S114 出土遺物



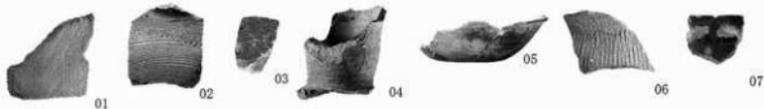
S115 出土遺物



P16 出土遺物



SD05 出土遺物



SD06 出土遺物



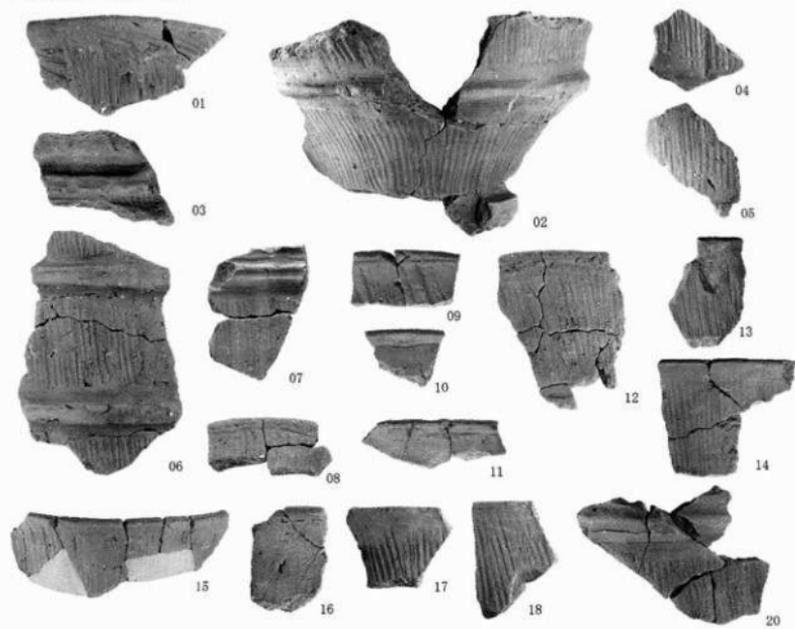
SD07 出土遺物



SD14 出土遺物

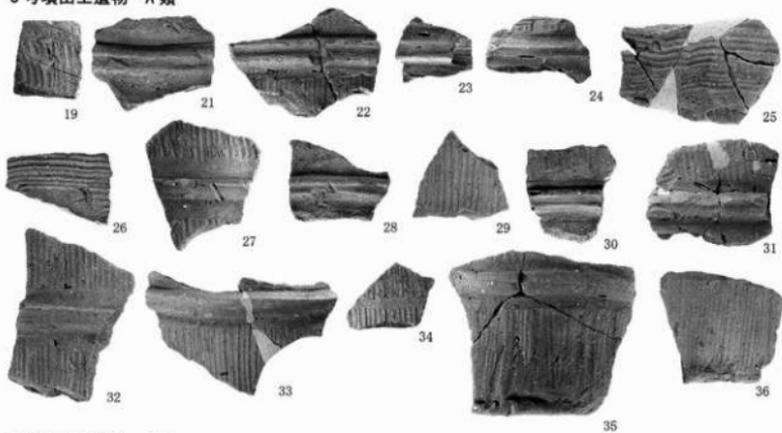


8号墳出土遺物・A類

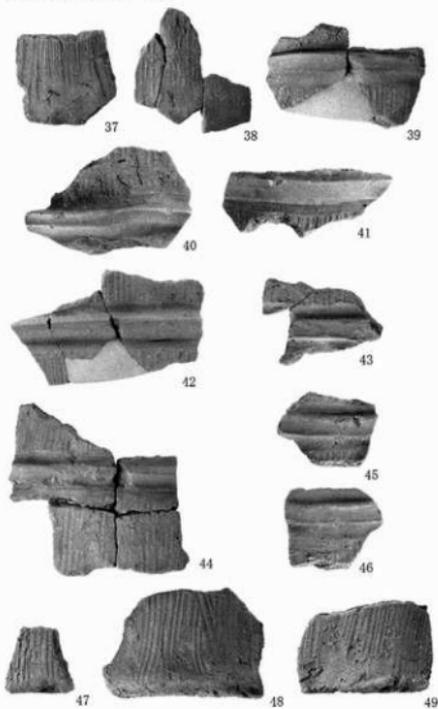


古墳時代 (5)

8号墳出土遺物・A類



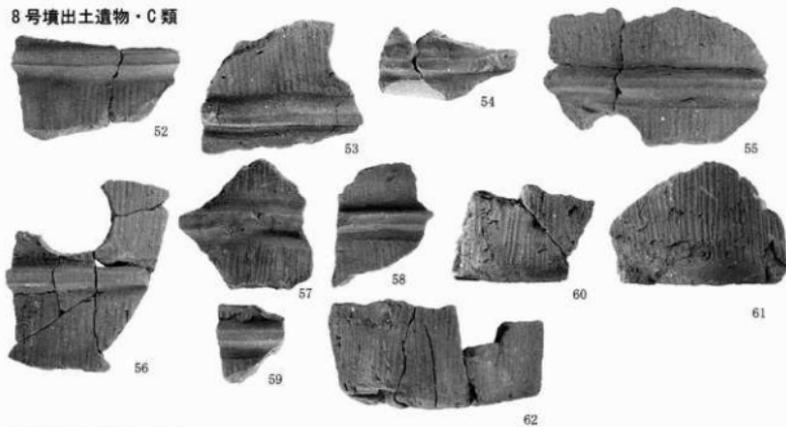
8号墳出土遺物・B類



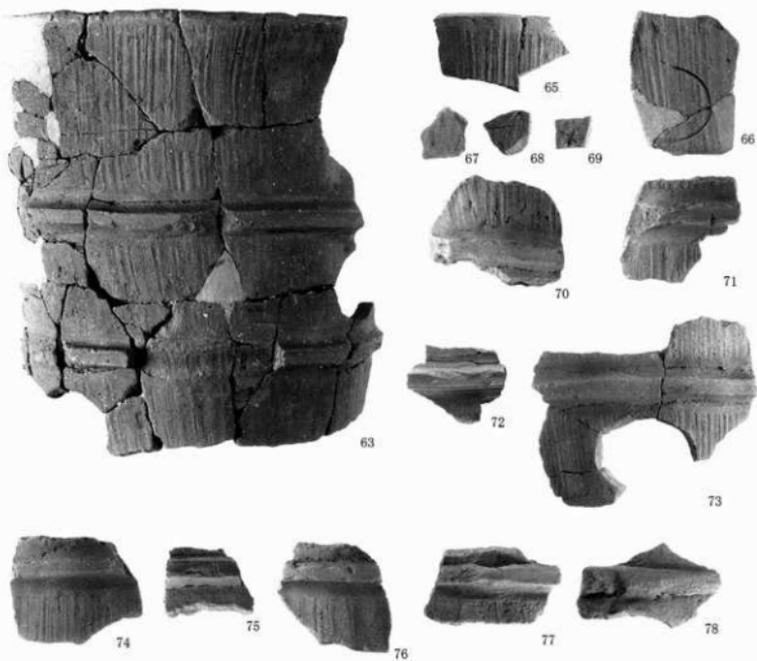
8号墳出土遺物・C類



8号墳出土遺物・C類



8号墳出土遺物・D類



古墳時代 (7)

8号墳出土遺物・D類



61



79



80



81



82

8号墳出土遺物・E類



84



83



84



85



86



87



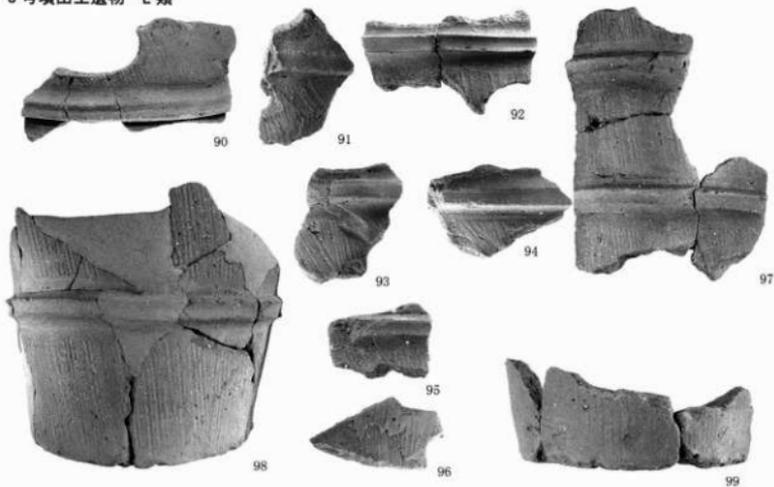
88



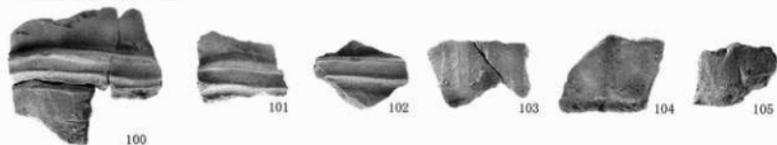
89

古墳時代 (8)

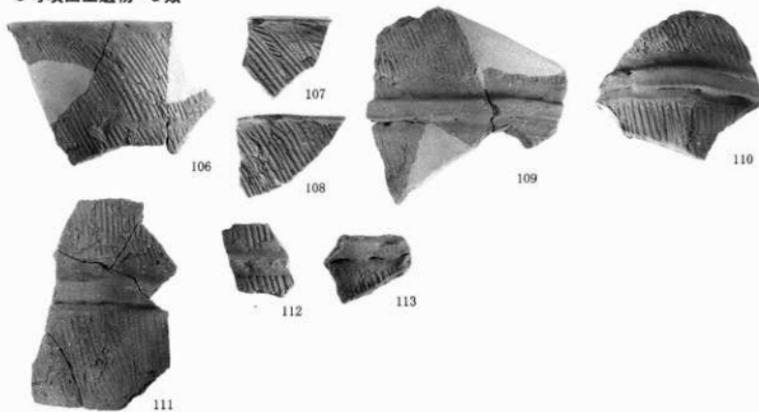
8号墳出土遺物・E類



8号墳出土遺物・F類



8号墳出土遺物・G類



縄文

弥生

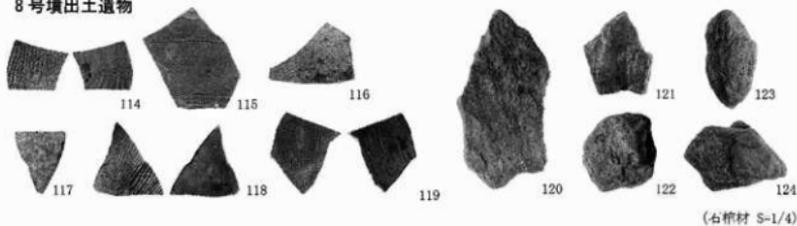
古墳

平安

近中世

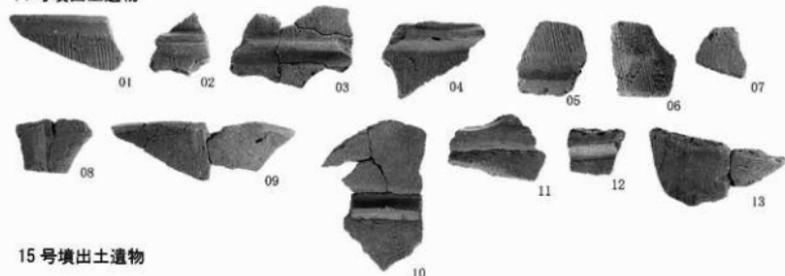
古墳時代(9)

8号墳出土遺物

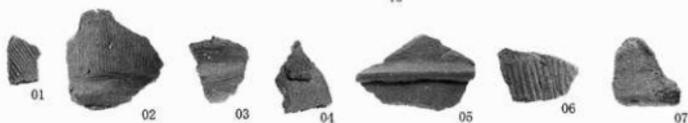


(右棺材 S-1/4)

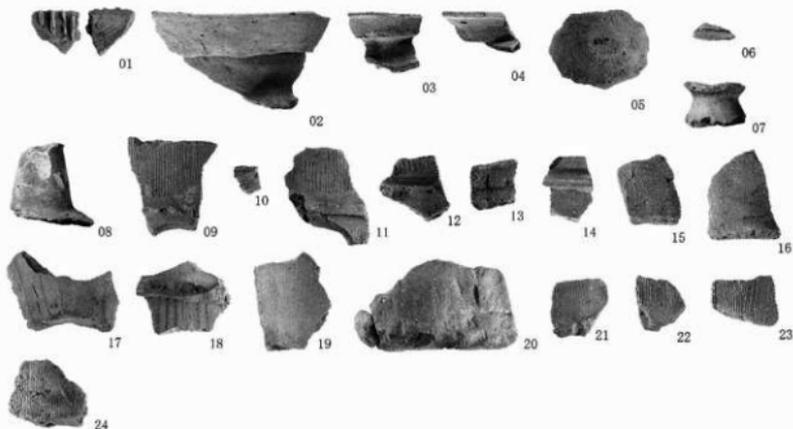
14号墳出土遺物



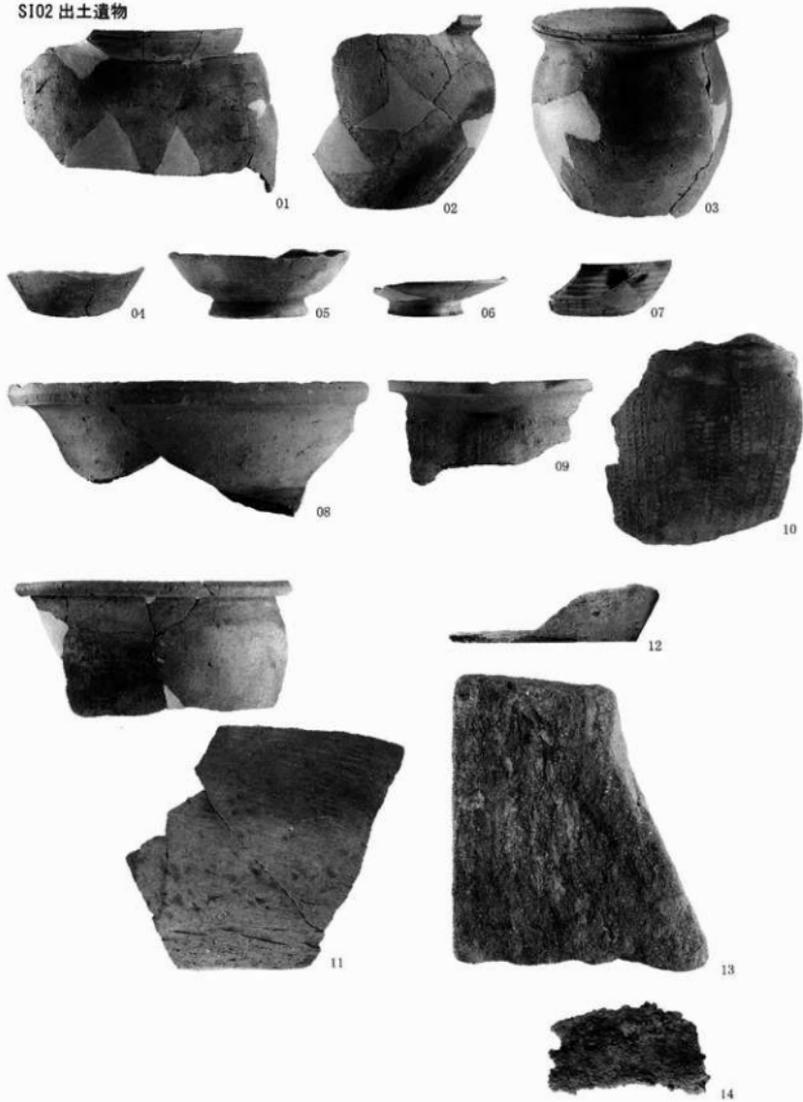
15号墳出土遺物



遺構外出土遺物(古墳)

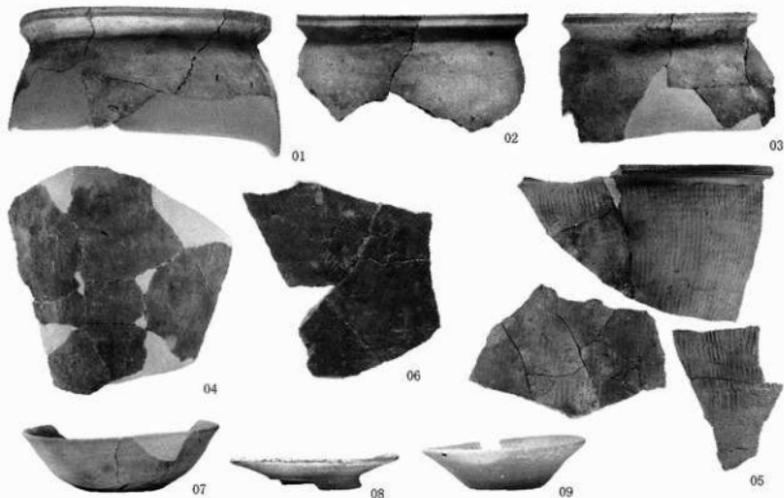


S102 出土遺物

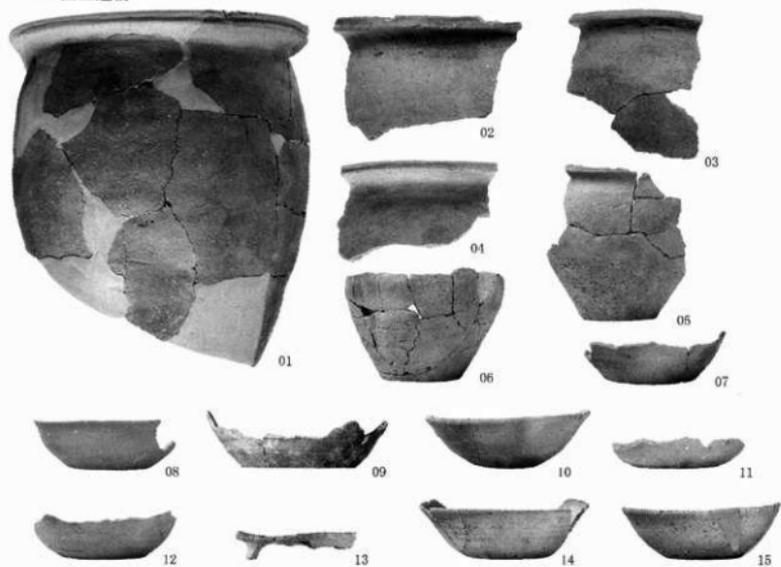


平安時代 (2)

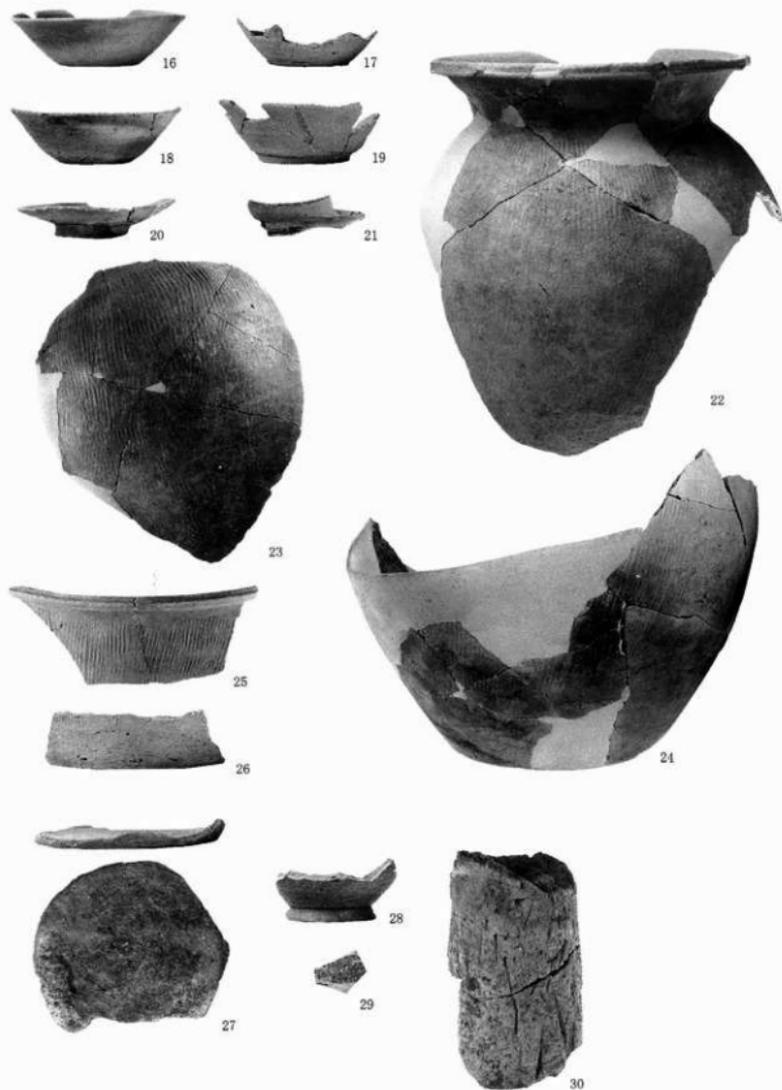
S107 出土遺物



S108 出土遺物

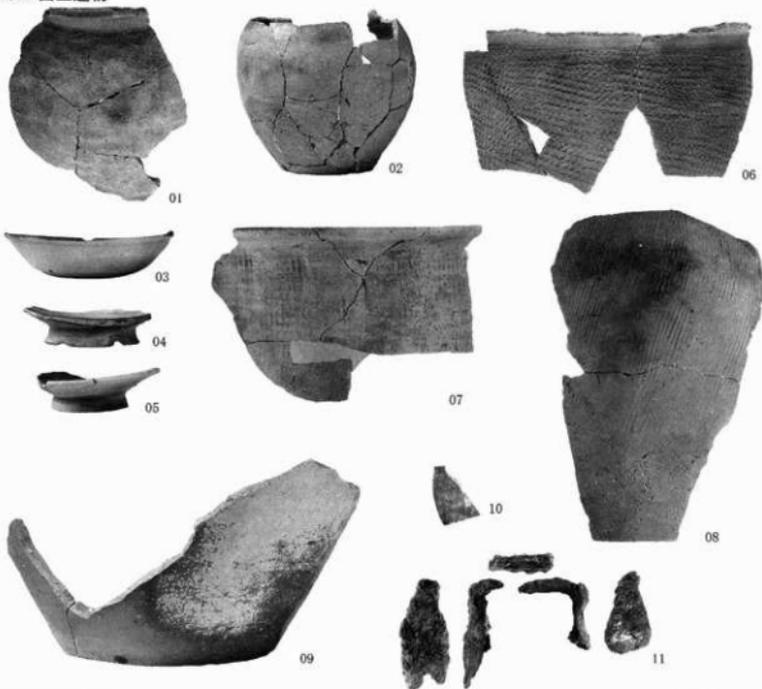


S108 出土遺物

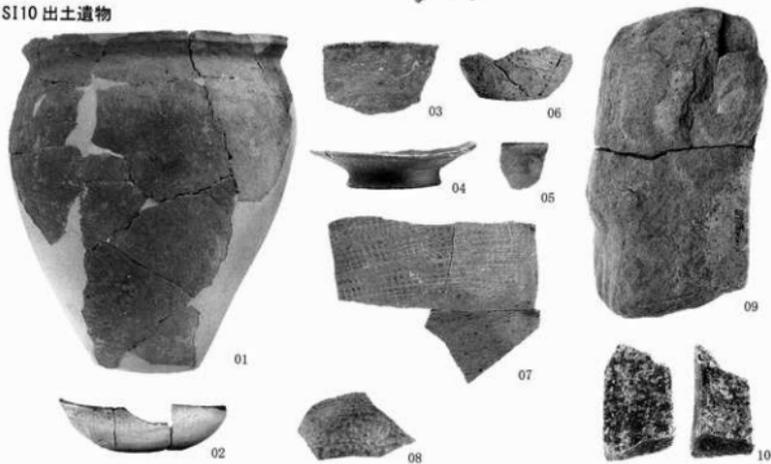


平安時代(4)

SI09 出土遺物



SI10 出土遺物



縄文

弥生

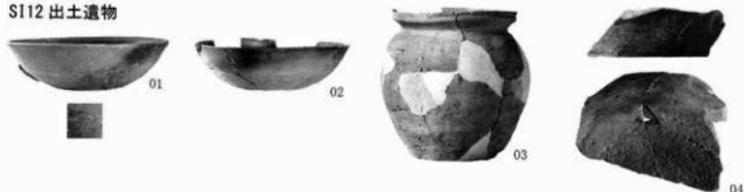
古墳

平安

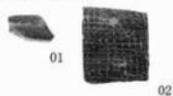
中世

平安時代 (5)

SI12 出土遺物



SI13 出土遺物



SI17 出土遺物



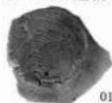
SB01 出土遺物



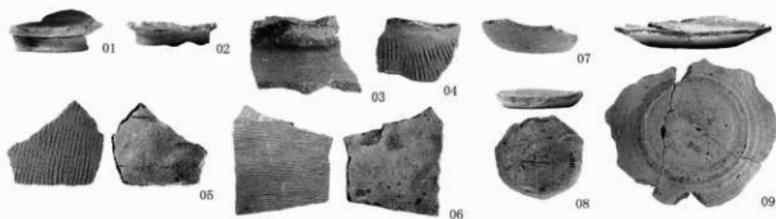
SB03 出土遺物



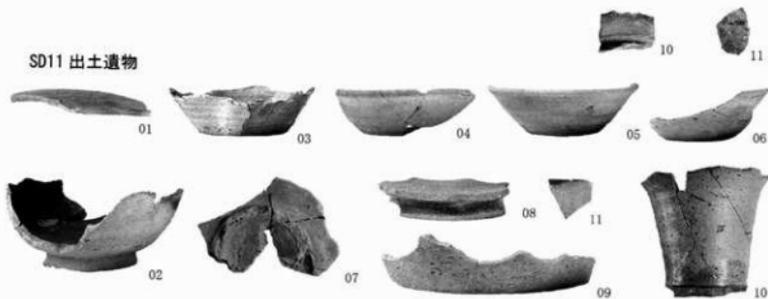
SK14 出土遺物



SD08 出土遺物



SD11 出土遺物



縄文

弥生

古墳

平安

近中世

平安時代(6)・中・近世
遺構外出土遺物(平安)



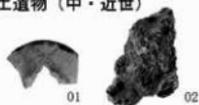
SI19 出土遺物



SK37 出土遺物



遺構外出土遺物(中・近世)



SK02 出土貝類



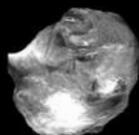
アカニシガイ



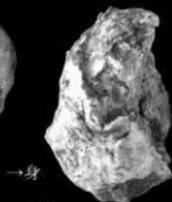
オオノガイ



オキシジミ

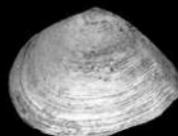
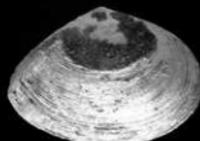


↑ふた

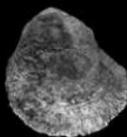


→身

マガキ



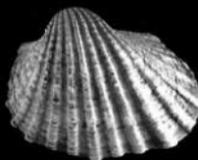
サラガイ



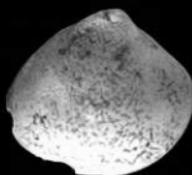
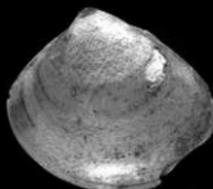
ナミマガシワ



ニナ類



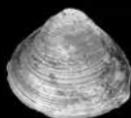
ハイガイ



ハマグリ



フジツボ



ヤマトシジミ



マテガイ



ムシロガイ



SK31 出土人骨



抄録

ふりがな	しもさかたはなわだいいせき・さかたはなわだいいふんぐん							
書名	下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群							
副書名	県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	比毛君男 大越直樹 大賀 健 大賀さつき 鈴木 徹							
編集機関	有限会社 勾玉工房Mogi 〒286-0203 千葉県富里市久能238番地100 Tel.0476(92)0658							
発行機関	土浦市教育委員会							
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月8日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
しもさかたはなわだいいせき 下坂田塙台遺跡 ・ さかたはなわだいいふんぐん 坂田塙台古墳群	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 しもさかた 下坂田 1050番地外	465	104 ・ 007	36° 06′ 31″	140° 09′ 54″	20111213 ～ 20120228	1,800㎡	県営畑地帯 総合整備事業 (担い手支援型)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
下坂田塙台遺跡 ・ 坂田塙台古墳群	集落跡 古墳 墳墓	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中・近世	住居跡 上坑(貝塚) 住居跡 住居跡 溝跡 住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝跡 掘立柱建物跡 櫓・掘立柱建物跡 土坑 溝跡	1軒 1基 1軒 8軒 4条 7軒 3棟 13基 2条 1棟 2基 12基 2条 3基 2基	縄文土器・石器・貝殻 弥生土器 土師器 土師器・須恵器・灰釉陶器 土師質土器	本遺跡における初めての調査。縄文時代から平安時代の集落を確認。古墳群としては、周知の8号墳が直径30mの二重周溝を有する円墳であることが判明。周溝からはB種ヨコハゲ調整を含む5世紀末葉の円筒埴輪が出土。また、台地内側にも古墳が分布することが判明。		

茨城県土浦市

下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群

— 県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型） —

— 坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書 —

刊行 2013(平成25)年3月8日

発行 土浦市教育委員会
〒500-4115 茨城県土浦市藤沢975番地
Tel. 029(826)1111(代表)編集 有限会社 勾玉工房Mogi
〒286-0203 千葉県富里市久能238番地100
Tel. 0476(92)0658印刷 株式会社 エイティー
〒289-1116 千葉県八街市八街1211
Tel. 043(444)2024